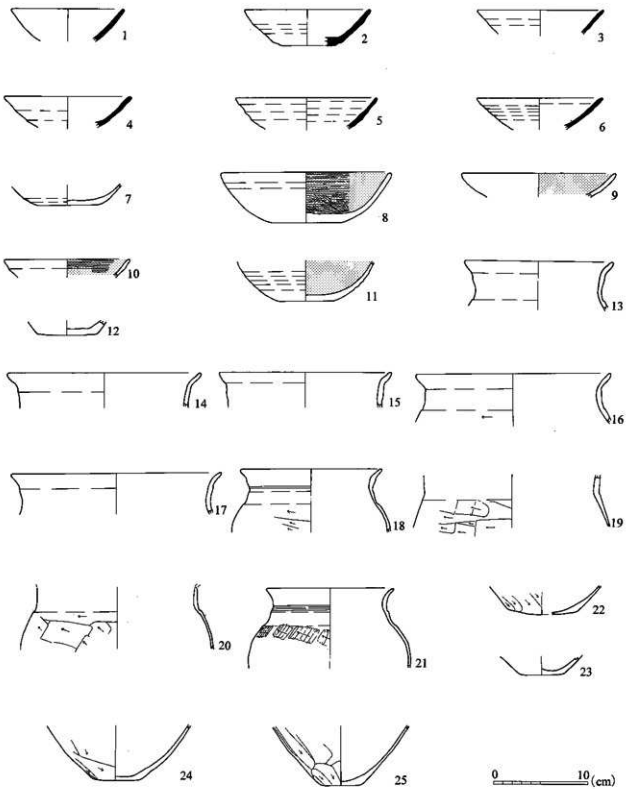
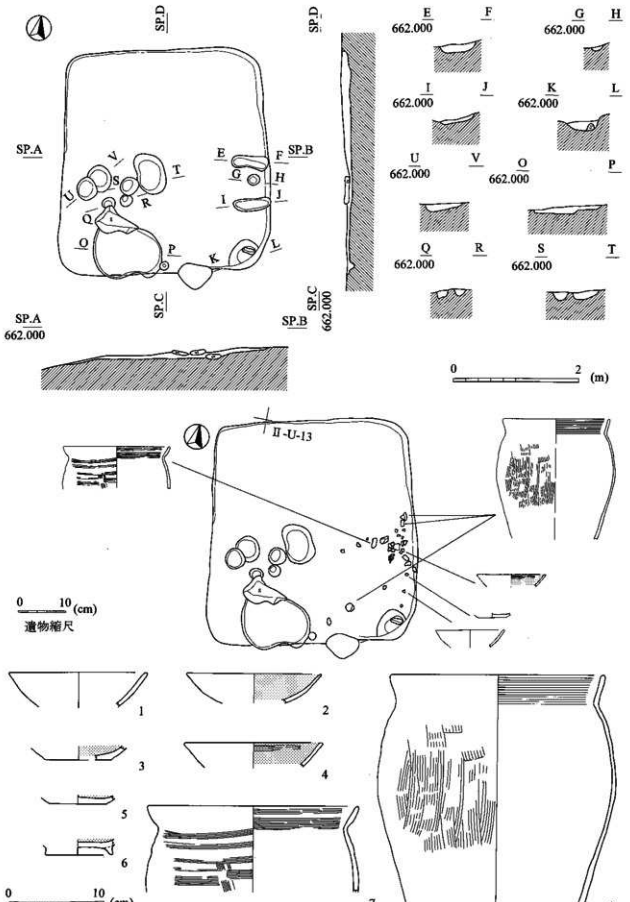
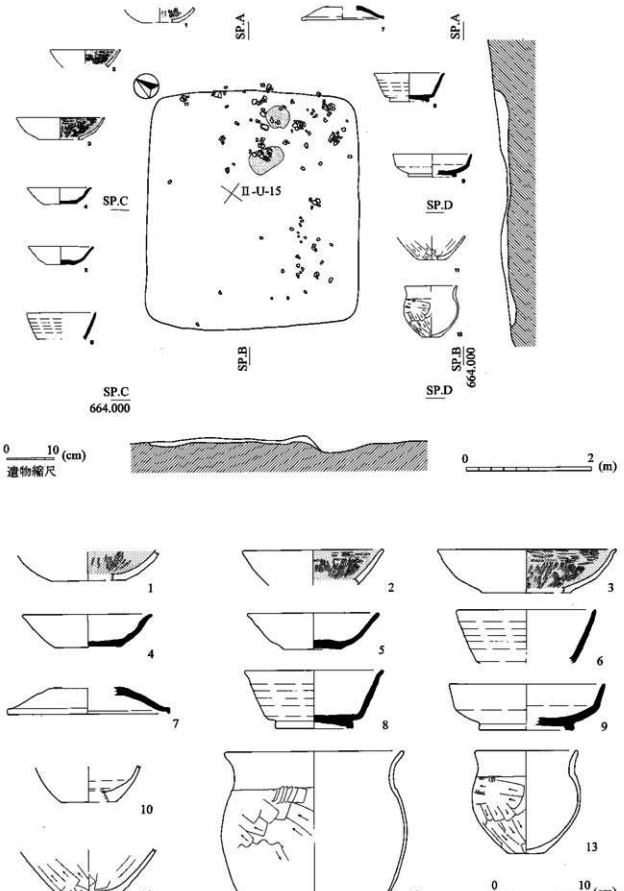


第321図　竪穴住居跡　ＳＢ106出土土器



第322図　竪穴住居跡　ＳＢ107・土器出土状況・出土土器



第323図　竪穴住居跡　ＳＢ108・土器出土状況・出土土器

ＳＢ106（第319～321図）　　位置　Ⅱ－Ｕ－13・18

検　出　表土除去後、ローム層直上での精査で、方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ堅緻な平坦面が検出された。しかし全体に耕作による削平が著しい。

構　造　ほぼ東西に長軸をもつ現存(3.5)×3.1ｍの略方形。南辺、北辺の立ち上がりと住居中央の堅緻な貼床が検出された。しかし、削平著しく全体形は不明瞭。小土坑も５基検出されたが、柱穴かどうかは分からない。カマドも検出されなかった。また住居東隅に土器が集中して出土した土坑がある。

遺　物　１～６須恵器坏。７土師器坏。８～11黒色土器坏。12～25土師器甕。12ロクロ成形の小型甕の底部。13～25口縁部は回転ナデ調整で断面形がコ字状を呈す。胴部から底部は縦位ケズリ調整を施すいわゆる武蔵型甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年７段階前後

ＳＢ107（第322図）　　位置　Ⅱ－Ｕ－８ほか

検　出　表土除去後、精査中に方形の黒色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定して掘り下げたところ北辺と東辺に立ち上がりと平坦面が検出された。

構　造　ほぼ南北に長軸をもつ3.5×3.2ｍの長方形。南辺は削平が著しい。７基小土坑が検出されているが柱穴と特定はできない。

カマド　東辺中央にカマド構築材と土器の集中が見られる。

遺　物　１土師器坏。２～６黒色土器坏ないし椀。７・８土師器甕。７外面および口縁部内面回転ハケ目調整。８外面縦位ハケ目調整。口縁部内面回転ハケ目調整。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後

ＳＢ108（第323図）　　位置　Ⅱ－Ｕ－９ほか

検　出　表土除去後、精査中に方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定して掘り下げたところ土器片が出土したが、はっきりした床面は無く、土壌化した部分（掘り方？）だけが残存しているものと考えられる。

構　造　北東―南西に軸を持つ3.8×3.4ｍの方形。削平著しく、立ち上がり、床面は判然としない。しかし、方形に土壌化が著しい部分が認められたので、これを住居跡の平面形と考えた。

カマド　構築材や煙道などはわからないが、径40㎝の円形と56㎝×34㎝の楕円形の焼土の広がりが住居北東辺中央に検出されていて、カマドの痕跡と考えられる。

遺　物　１～３黒色土器坏。４～６・８・９須恵器坏、８・９高台が付く。７蓋。10～13土師器甕。10ロクロ成形の小型甕。

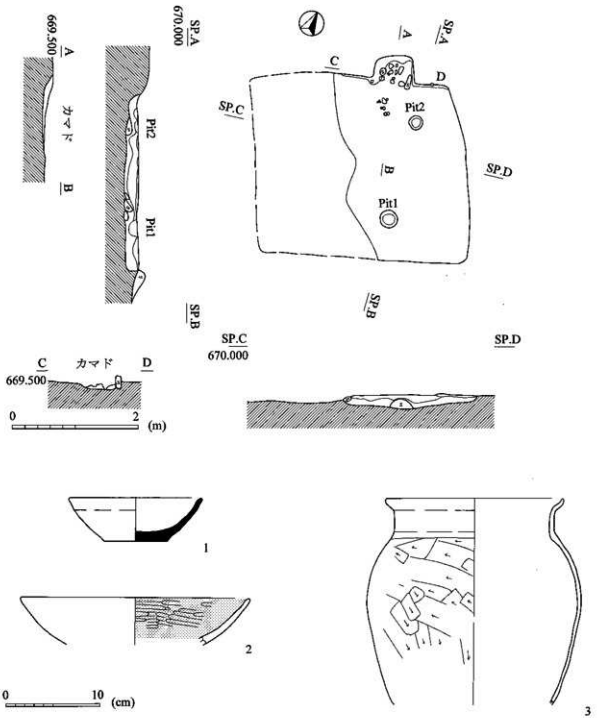
時　期　奈良時代末から平安時代初め　佐久編年５段階前後

ＳＢ111（第324図）　　位置　Ⅱ－Ｑ－15・Ｒ－11

検　出　ＳＤ101・102に挟まれた微高地上の表土を除去し、Ｖ層（ローム層）上面を精査。方形の黒色土の落ち込みが見られた。焼土が集中する部分と土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ、立ち上がりと堅緻な平坦面が検出された。

構　造　北西―南東に軸をもつ現存2.8×3.4ｍの方形。削平著しく、住居跡西半分の平面形や床面は判然としない。

カマド　北辺の東よりに１基。左右の袖石と支脚石が立った状態で検出されている。焼土は認められなか

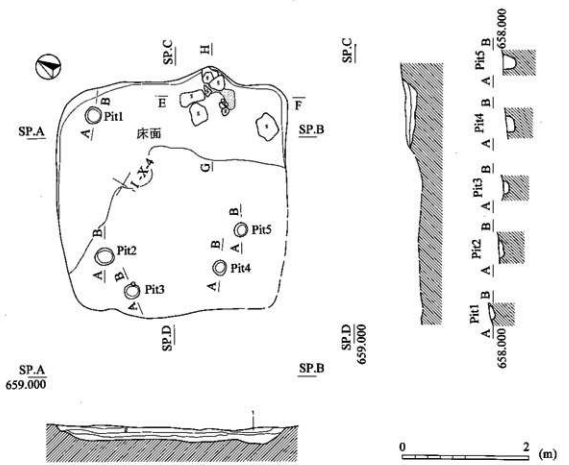


第324図　竪穴住居跡　ＳＢ111・出土土器

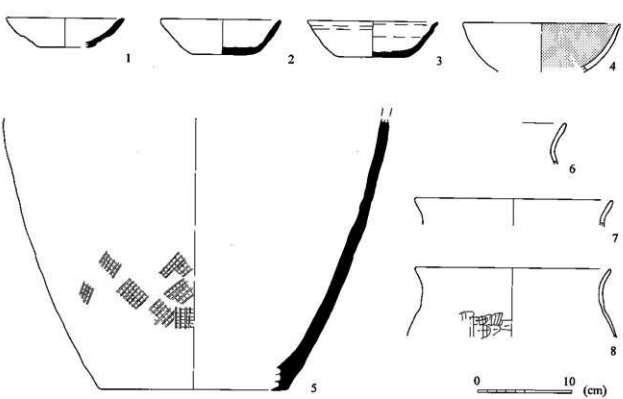
ったが、袖石内側と支脚石に赤化した部分が見られ、周辺に土師器片が散乱する。

遺　物　1須恵器坏。2黒色土器坏。3「武蔵型」の土師器甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年７段階前後



第325図　竪穴住居跡　ＳＢ112



第326図　竪穴住居跡　ＳＢ112出土土器

ＳＢ112（第325～327図）　　位置　Ⅰ－Ｓ－23ほか

検　出　ＳＤ102北の微高地上の表土を除去後、Ⅴ層（ローム層）上面で方形の黒色土の落ち込みが見られた。東半分は明瞭だったが西半分が不明瞭だったので、土層観察用のトレンチを軸にそって設定し掘り下げたところ、東半分からは堅緻な平坦面が検出された。

構　造　北東―南西に軸をもつ現存3.8×3.6ｍの方形。東半分からは立ち上がりや床面が検出されたが、西側はＳＤ102に削平される。かすかに土壌化が進んでいる部分がこの住居跡の範囲と考えられる。

カマド　東北辺の東よりに１基。カマド構築材の石材と土器が散乱。これらの下位にわずかに焼土が分布。

遺　物　１～３須恵器坏。４黒色土器坏。５須恵器甕。６～８土師器甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年７段階前後

ＳＢ113（第328図）　　位置　Ⅰ－Ｘ－２

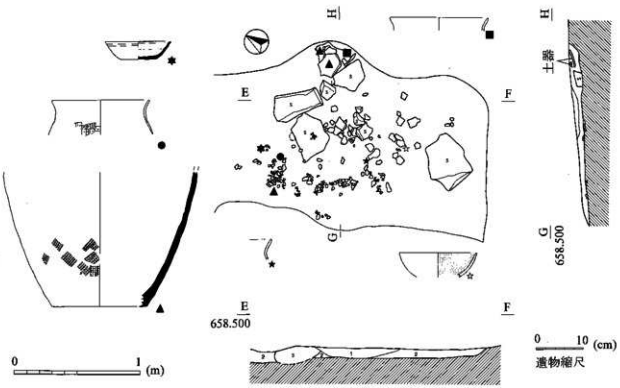
検　出　表土およびＳＤ102覆土を除去したあと、Ⅴ層（ローム層）上面に黒色土の広がりと焼土を検出。さらに精査したところわずかに堅緻な平坦面が認められた。

構　造　軸や平面形は不明。堅緻な平坦面あり。

カマド　焼土集中部があり、カマドの痕跡か。

遺　物　図化できないが、土師器片が出土。

時　期　ＳＤ102に切られていることや土師器片から古代か



第327図　竪穴住居跡　ＳＢ112カマド・土器出土状況

ＳＢ114（第329図）　　位置　Ⅱ－Ｐ－24ほか

構　造　北西―南東に軸をもつ方形か。削平著しい。わずかに東北辺と床面が一部検出された。

遺　物　１～４土師器。１皿ないし盤。２～４坏。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階以降か

ＳＢ115（第330～334図）　　位置　Ⅴ－Ｇ－９

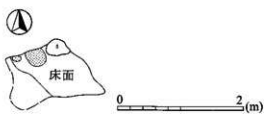
検　出　ＳＤ103・104に挟まれた微高地上で表土除去後、ＳＤ104の縁辺を精査したところ、Ⅴ層（ローム層）上面で方形の黒色土の落ち込みが見られた。

構　造　ほぼ南北に軸をもつ現存4.1×3.7ｍの方形。住居跡北半に床面および２基の柱穴が検出される。

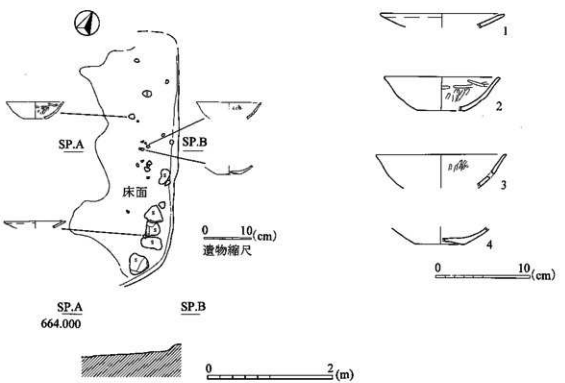
カマド　東辺中央にカマド構築材の両袖石と粘土、焼土の集中（火床）が残存。

遺　物　１土師器坏。底部ヘラケズリ調整。２～４・８・９須恵器坏、８・９高台付坏。５・６須恵器壺。７黒色土器坏。10・11土師器甕。口縁部断面コ字状。12須恵器甕か。

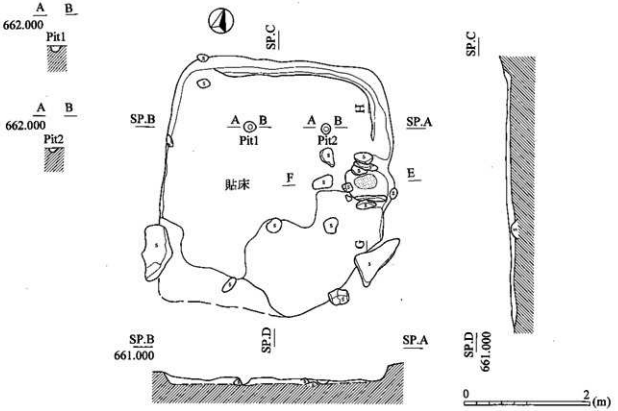
時　期　奈良時代末から平安時代初頭　佐久編年５段階前後



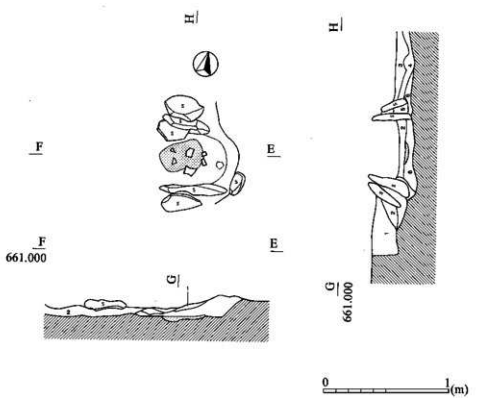
第328図　竪穴住居跡　ＳＢ113



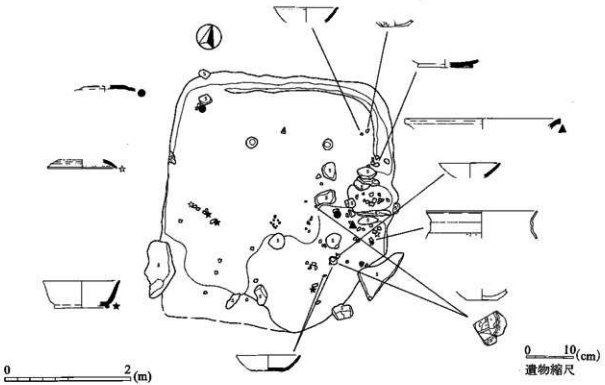
第329図　竪穴住居跡　ＳＢ114・土器出土状況・出土土器



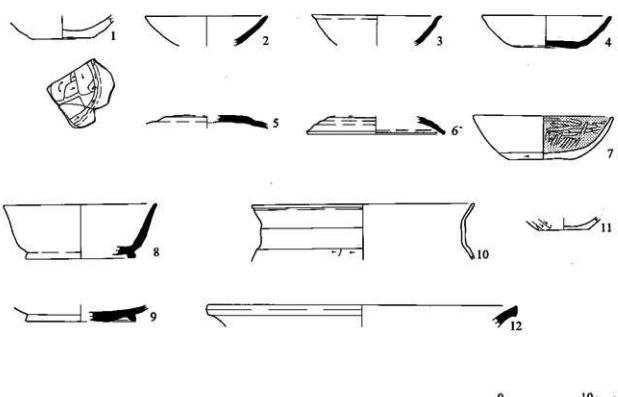
第330図　竪穴住居跡　ＳＢ115



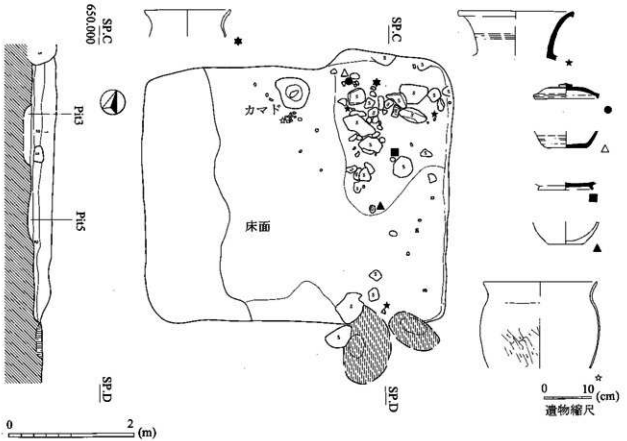
第331図　竪穴住居跡　ＳＢ115カマド



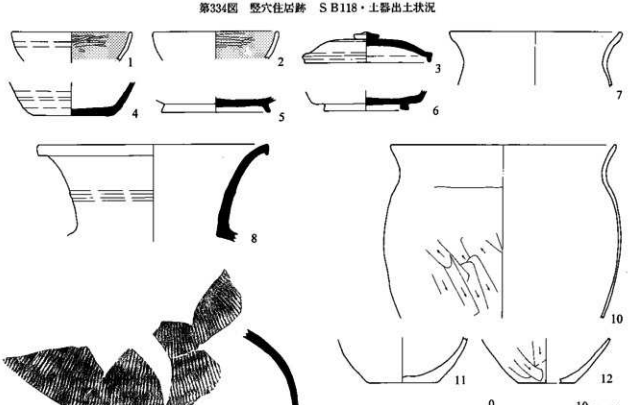
第332図　竪穴住居跡　ＳＢ115土器出土状況



第333図　竪穴住居跡　ＳＢ115出土土器



第334図　竪穴住居跡　ＳＢ118・土器出土状況



第335図　竪穴住居跡　ＳＢ118出土土器

ＳＢ118（第334～336図）　　位置　Ⅳ－Ｂ－８

構　造　ほぼ南北に軸をもつ現存4.8×4.3ｍの方形。北東隅を中心に堅緻な貼床が検出されたが、住居跡西側の床面は残存せず。小土坑は住居跡内から６基検出されたが、うちPit４・６・７が柱穴か。

カマド　北辺中央に落ち込みが見られ、カマドの痕跡か。この小土坑の縁から10土師器甕が出土。

遺　物　1'・２黒色土器坏。３須恵器蓋、４～６坏、５・６高台付。７・10～12土師器甕。８須恵器瓶、９甕。

時　期　奈良時代末から平安時代初頭　佐久編年５段階前後

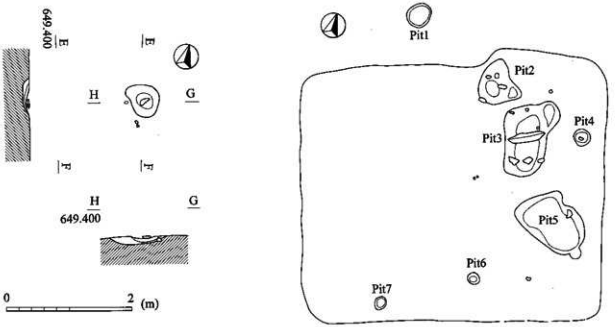
ＳＢ120（第337図）　　位置　Ⅴ－Ａ－13・14

検　出　ＳＤ101・103に挟まれた微高地上で表土除去後、ＳＤ101の縁辺を精査したところ、Ⅴ層（ローム層）上面に黒色土の落ち込みが見られた。さらに掘り下げると東辺の立ち上がりと床面が検出された。

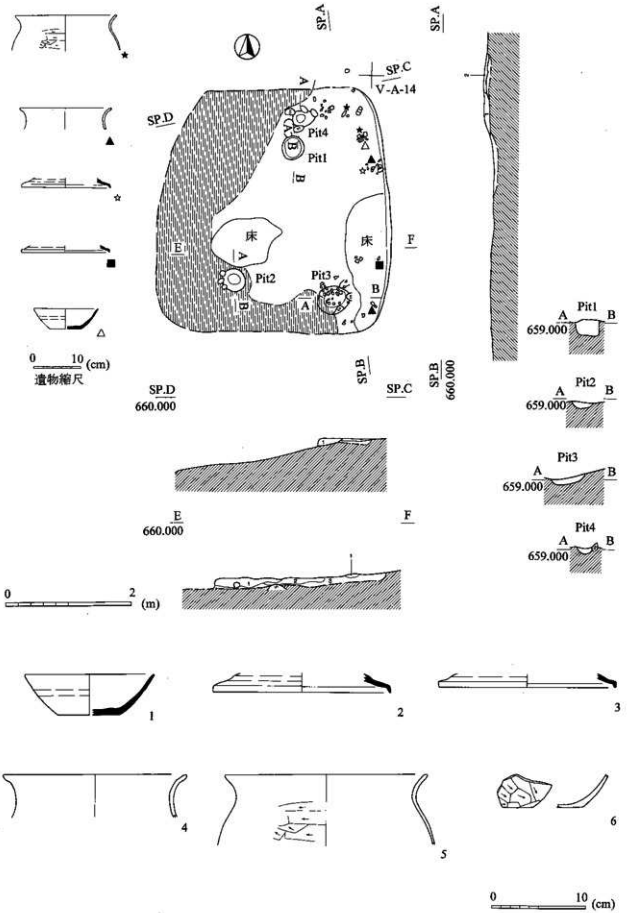
構　造　東辺が現存3.9ｍ、ほぼ南北に軸をもつ方形か。住居跡東半に床面が検出。とくに南東隅は堅緻な床面が残る。４基小土坑が検出されたが、うち３基は小土坑の縁辺に石がめぐり、柱穴とした。カマドは不明。西半はＳＤ101に切られる。

遺　物　１須恵器坏、２・３蓋。４～６土師器甕。胴部から底部にケズリ調整が施される。

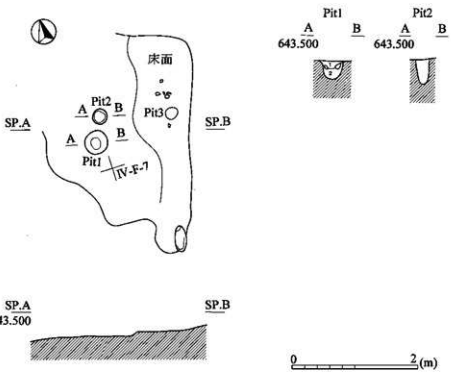
時　期　平安時代前期　佐久編年７段階前後



第336図　竪穴住居跡　ＳＢ118カマド・ピット



第337図　竪穴住居跡　ＳＢ120・出土土器



第338図　竪穴住居跡　ＳＢ121

ＳＢ121（第338図）　　位置　Ⅳ－Ｆ－１ほか

構　造　北東―南西に軸をもつ方形か。東辺、東隅と床面が検出されるが、西半は削平が著しい。３基検出された小土坑は柱穴か。カマドなどはない。

遺　物　図化できなかったが土師器片が出土。

時　期　平安時代か

2　土坑と土器

(1) 縄文時代（遺構図第339図、土器第340・341図）

ＳＫ103　　位置　Ⅱ－Ｖ－2

ほぼ南北に軸をもつ2.6×2.2ｍのやや歪んだ楕円形。１半截竹管による並行沈線文。前期後葉。磨石（第355図83）出土。

ＳＫ112　　位置　Ⅱ－Ｕ－16・17

北西―南東に軸をもつ一辺0.9ｍの隅丸方形。図化できなかったが縄文土器出土。

ＳＫ115　　位置　Ⅰ－Ｒ－24

北東―南西に軸をもつ一辺1.0ｍの隅丸方形。２半截竹管による横位並行沈線文。内湾する緩やかな波状口縁。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ117　　位置　Ⅰ－Ｓ－19

北東―南西に軸をもつ1.4×0.9ｍの歪んだ楕円形。３半截竹管による縦位ないし斜位並行沈線文。底部付近。前期後葉諸磯ｃ式。

ＳＫ119　　位置　Ⅰ－Ｓ－19

北西―南東に軸をもつ1.7×1.5ｍの楕円形。４～６櫛歯状工具による並行沈線文。前期後葉諸磯ｃ式。

ＳＫ120　　位置　Ⅱ－Ｕ－16

北西―南東に軸をもつ2.5×1.5ｍの歪んだ楕円形。７～10横位回転縄文ＲＬ、10隆帯区画内を回転縄文施文。中期後葉加曽利Ｅ式。

ＳＫ124　　位置　Ⅰ－Ｙ－20

北西―南東に軸をもつ2.1×1.4ｍの不整形。14縦位回転縄文ＬＲ、凹線区画、磨消縄文。中期後葉加曽利Ｅ式。

ＳＫ126　　位置　Ⅱ－Ｑ－17

径0.9ｍの円形。15口縁部内面を若干肥厚し連続爪形文の浅鉢。中期前葉。石皿（第356図93）出土。

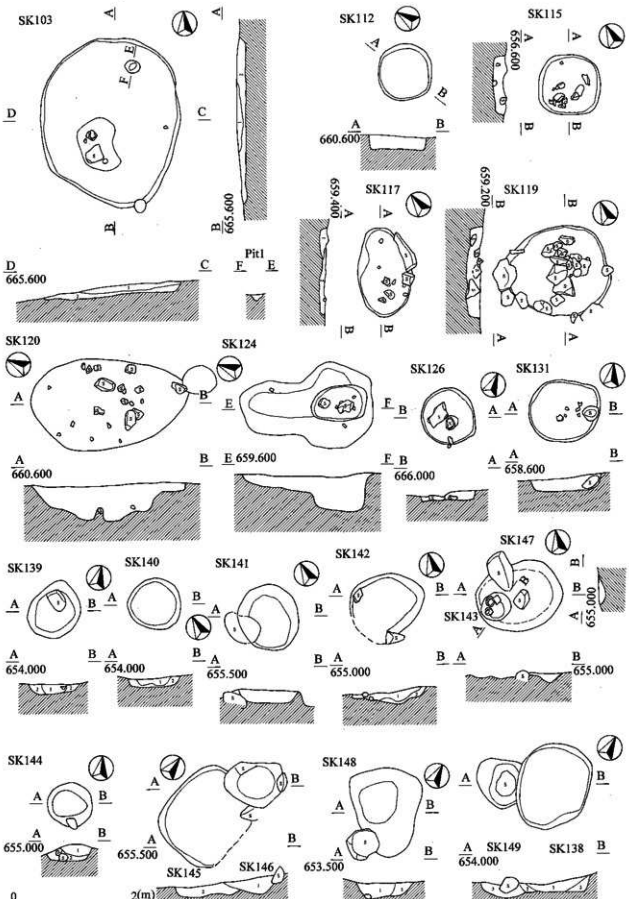
ＳＫ131　　位置　Ⅰ－Ｘ－10

径1.0～1.1ｍの歪んだ略円形。16～29胎土に繊維を含まない。横位回転縄文ＲＬを地文とする。19・25半截竹管状工具による並行沈線施文後、爪形の刺突。21波頂部下に竹管状工具による刺突。22櫛歯状工具による条線。前期後葉諸磯ａ式。

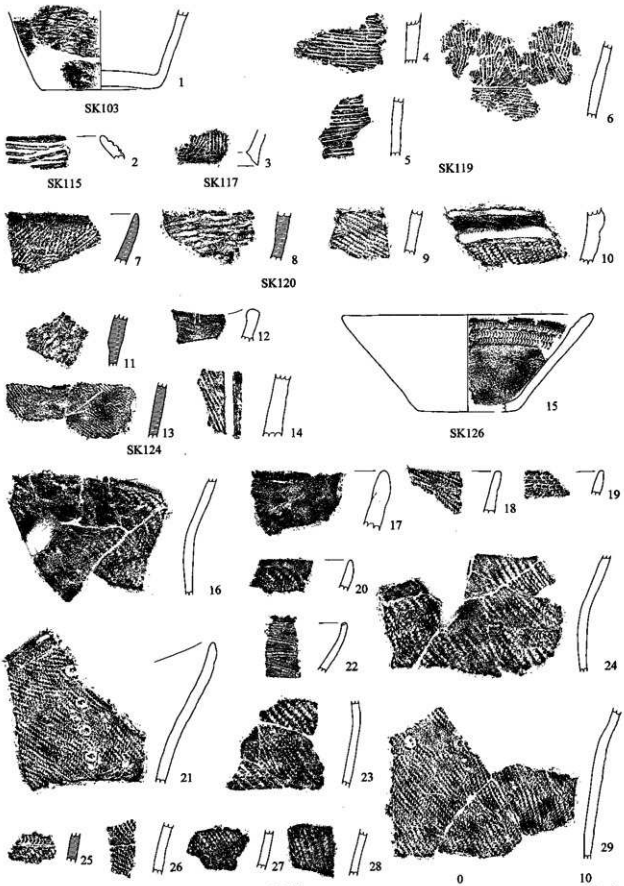
ＳＫ138　　位置　Ⅰ－Ｗ－12

1.4×1.1ｍの不整形。図化できるようなものはなかったが、前期後葉か。ＳＫ149を切る。

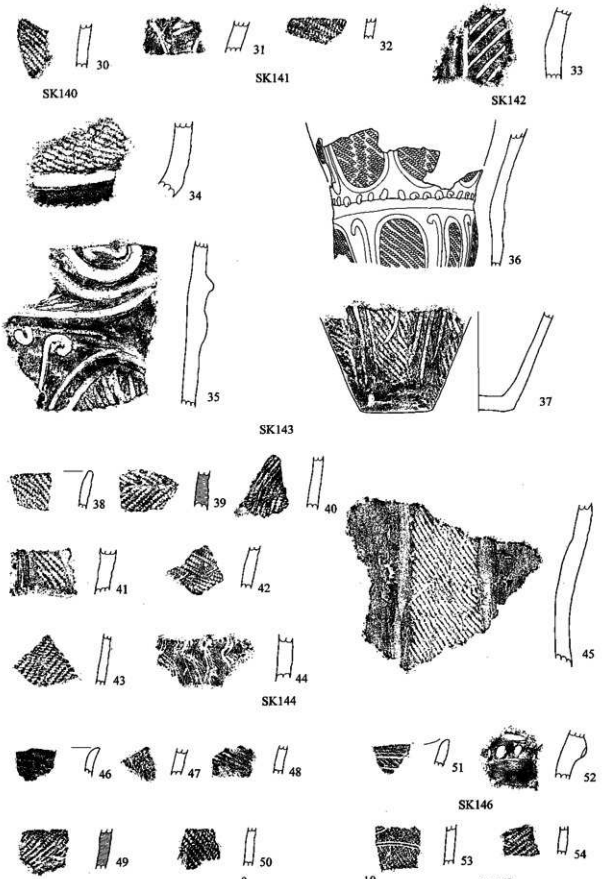
ＳＫ139　　位置　Ⅰ－Ｗ－7・12



第339図　縄文時代の土坑



第340図　縄文時代の土坑出土土器(1)



第341図　縄文時代の土坑出土土器(2)

ほぼ南北に軸をもつ0.9×0.8mの卵形。図化できなかったが縄文土器出土。

SK140　　位置　I－W－7

0.8～0.9mの円形。30横位回転縄文RL。中期。

SK141　　位置　I－W－9

1.0～1.1mの円形。31横位回転縄文L施文後、沈線文を施す。32絡条体圧痕。中期か。

SK142　　位置　I－W－8

1.2×1.0mの不整形。33隆帯区画内斜行沈線を充填後、隆帯脇に沈線施文。中期後葉。

SK143　　位置　I－W－8

径0.5mの円形。34横位回転縄文RL施文後、凹線文を施す。磨消縄文。35隆帯区画、横位ミガキ調整、区画内斜行沈線充填。36縦位回転縄文LR施文後、沈線区画、磨消縄文。頸部に半回転の刺突列を施す。37縦位回転縄文L施文後、沈線区画、磨消縄文。35「鎖状斜行沈線文土器」。34・36・37加曽利E式系。

SK144　　位置　I－W－8

径0.7mの円形。38～43回転縄文のみ施文。44蛇行する櫛歯状工具による条線。45縦位回転縄文L施文後、凹線区画、磨消縄文。中期後葉加曽利E式。

SK145　　位置　I－W－2

0.9×0.7mの不整形。45内外面横位ミガキ調整。47～50回転縄文施文。前期中葉から後葉。SK146を切る。

SK146　　位置　I－W－2

ほぼ南北に軸をもつ1.5×1.2mの長方形。51横位回転縄文RL、磨消縄文。52隆帯上を刻む。後期前葉堀之内式。

SK148　　位置　I－W－12・17

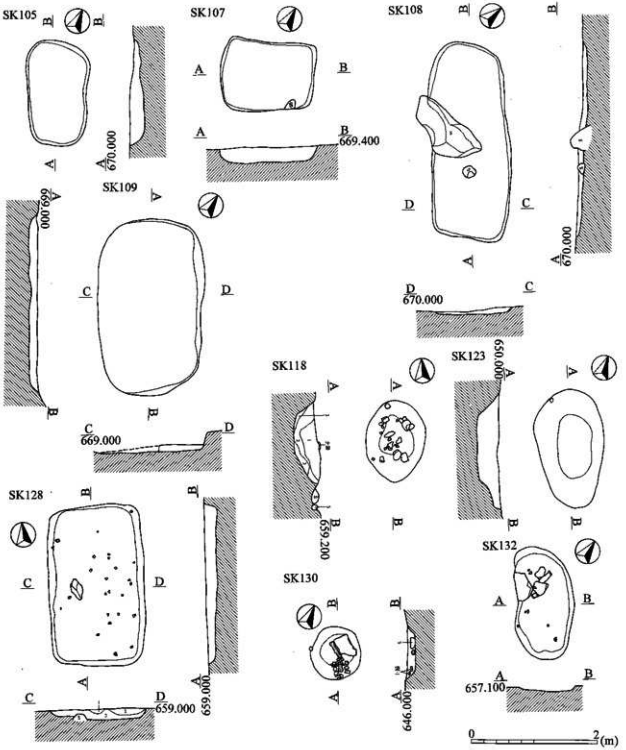
1.4×1.2mの不整形。53・54横位回転縄文RL。53さらに半截竹管状工具による並行沈線文施文。前期後葉諸磯b式か。

SK149　　位置　I－W－12

0.9×0.8mの歪んだ円形。図化できるようなものはなかったが、前期後葉か。SK138に切られる。

(2)　古代（遺構図第342図、土器第343図）

SK118とSK130以外は図化できるような遺物は出土していないが、平面形が長方形で、軸の向きがほぼ北に揃う、位置もII－RないしQグリッドに集中するので、同時代の遺構と考えた。さらに、土層の様相が縄文時代の土坑とは異なることから、時代は古代の所産とした。また、形状から墓壙の可能性も考えられ、SK109などいくつかの土坑で土壌サンプルを採集し、分析した（第5節参照）。



第342図　古代の土坑

第343図　古代の土坑出土土器

ＳＫ105　　位置　Ⅱ－Ｒ－６
北西一南東に軸をもつ1.7×1.1ｍの長方形。

ＳＫ107　　位置　Ⅱ－Ｑ－10
北東一南西に軸をもつ1.5×1.1ｍの長方形。

ＳＫ108　　位置　Ⅱ－Ｑ－５
北西一南東に軸をもつ3.1×1.3ｍの長方形。

ＳＫ109　　位置　Ⅱ－Ｑ－10
北西一南東に軸をもつ2.8×1.6ｍの長方形。リン酸およびカルシウム含量が高く墓坑の可能性が指摘されている。

ＳＫ118　　位置　Ⅰ－Ｓ－19
北一南に軸をもつ1.3×0.9ｍの楕円形。55須恵器坏出土。

ＳＫ123　　位置　Ⅳ－Ｂ－４
北西一南東に軸をもつ1.9×1.1ｍの楕円形。

ＳＫ128　　位置　Ⅰ－Ｘ－７
北一南に軸をもつ2.6×1.4ｍの長方形。

ＳＫ130　　位置　Ⅳ－Ｇ－16
径0.8ｍの略円形。56土師器甕ないし壺出土。

ＳＫ132　　位置　Ⅰ－Ｘ－２
北西一南東に軸をもつ1.8×1.0ｍの楕円形。

3　溝と土器（平面図第291図）

ＳＤ101（第344図）

1～13縄文土器。

1単軸絡条体多段圧痕。草創期。2～5羽状縄文。胎土に繊維含。前期前葉から中葉。6・7回転縄文ＲＬ施文後、微隆線を貼付し刻む。前期後葉諸磯ｂ式。8横位区画沈線施文後、短斜行沈線充塡。胎土に雲母含。中期初頭。9～13中期後葉。9隆帯区画内に回転縄文ＲＬ。加曽利Ｅ式。10沈線区画内を充塡している斜行沈線文か。「佐久系」土器。11縦位回転縄文ＲＬを施文し、凹線で縦位に区画、磨消縄文。加曽利Ｅ式。12櫛歯状工具による条線を施文後、隆帯貼付。曽利式か。13斜位ケズリ調整を施す。

14～16土師器ないしその土製品。

14坏。古代。15台付甕底部。古墳時代。16土師器片の破断面を研磨したもの。

ＳＤ103（第345～347図）

1～37縄文土器。

1・2草創期・早期。1口縁端部に横位撚糸文L、口縁内面に横位撚糸文L、外面は縦位撚糸文Lを施文する表裏撚糸文土器。粗粒の雲母を含む。早期初井草式に並行する資料か。

2～9前期後葉。胎土に繊維を含まない。2櫛歯状工具による条線文。波状口縁。諸磯式。3・4単節縄文。5横位回転縄文RLを施文後、ヘラ刻み微隆線貼付。諸磯b式。6・7横位回転縄文LRを施文し、半截竹管状工具による並行沈線、押引文を施す。諸磯a式か。8回転縄文LRを施し、半截竹管状工具による結節浮線文。下島式（諸磯c式）9ヘラ刻み浮線文。緩い波状口縁。諸磯b式。

10～21中期後葉。10口縁部直下を並行隆帯で区画し渦巻文を単位文様にもつ。隆帯渦巻文下から並行沈線が垂下し、胴部を区画する。胴部沈線区画内には縦位回転縄文充塡か。加曽利E2式並行の在地系。11・13隆帯区画内を縄文で充塡。加曽利E式。15半截竹管状工具による並行沈線文。16口縁に並行する刻み目隆帯。19隆帯の上縁に連続刺突文。20並行隆帯区画内？を半截竹管状工具による条線を施文し、横位区画沈線ないし、縦位蛇行沈線を施す。曽利系か。

22～32後期前葉から中葉。22・23・26屈曲して立ち上がる口縁部文様帯をもつ。堀之内1式。24刻み目隆帯をもつ。25・29口縁端部に山形の突起。無文。27・28並行沈線文間を列点状刺突を施す。30～32注口土器。

33～41晩期前葉から中葉。33・34回転縄文LR。玉抱き三叉文か。内外面ともに横位ミガキ調整。35・36羊歯状文。内外面ともに横位ミガキ調整。36注口土器か。

38～42土製品。38・39・41耳栓。40中空土偶の脚部。42円柱状の土製品。43男根状土製品裏面に斐状の沈線文が施される。両端から棒状ないし竹管状工具で穿孔されるが、貫通はしていない。42・43晩期か。

古代の須恵器44～51

44～49坏。49高台の部分が剥離している。50蓋。51壺ないし甕。奈良時代末から平安時代初め。

SD104（第348図）

1～11縄文土器。

1～4早期。撚糸文土器。1口縁端部がゆるく肥厚し、縦位撚糸文施文。2～4夏島式か。

5～7前期。5口縁部を肥厚。前期初頭中道式か。6回転縄文LR。口縁端部を面取りし、胎土に繊維を含まない。内面ミガキ調整。前期後葉か。7繊維を僅かに含む。半截竹管状工具による沈線文と竹管状工具による刺突文が施される。前期初頭花積下層式。

8～11中期。8回転縄文？を地文に斜行並行沈線を格子状に施す。中期初頭か。9・10回転縄文を地文とする沈線文。中期後葉加曽利E式。11徴隆線文を施し内外面ミガキ調整。ヒサゴ形の壺か。中期末。

12～24古代の土器

12～17須恵器坏、18・22・24甕ないし壺、19蓋。20土師器器台、21甕。23灰釉陶器皿。

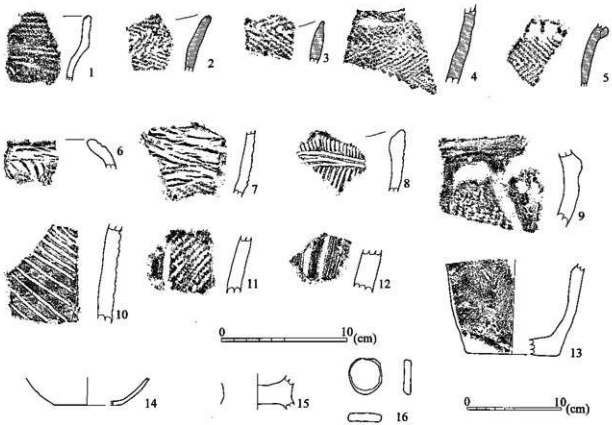
SD105（第349図）

1～11縄文時代前期。1・3・4単節縄文施文後、半截竹管状工具による結節沈線文。前期後葉諸磯a式。5～9・11横位回転単節縄文、胎土に繊維を含む。前期前葉から中葉。

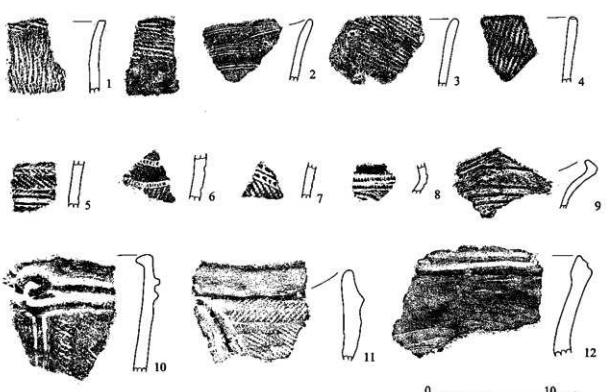
4　遺構に伴わない土器（第350・351図）

1～35縄文土器。

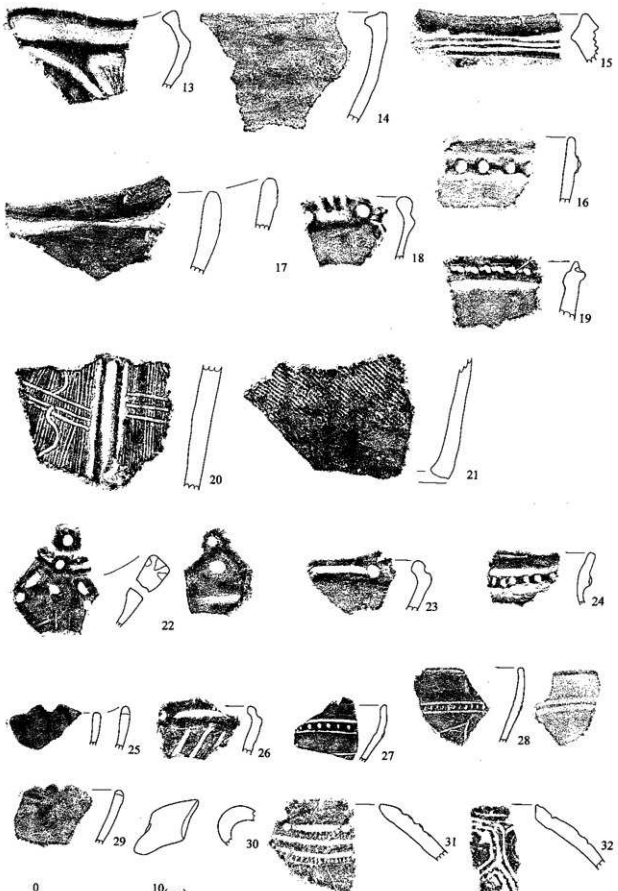
1～3早期。1外面縦位撚糸文施文、内面横位一段撚糸文施文の表裏撚糸文土器。1～3早期初頭の撚



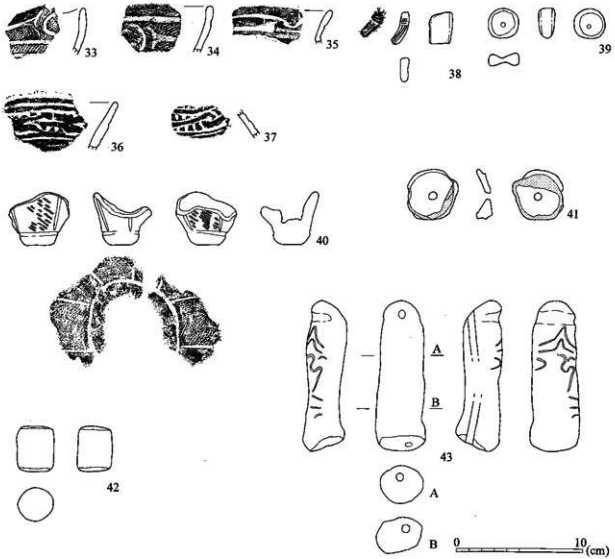
第344図　溝ＳＤ101出土土器

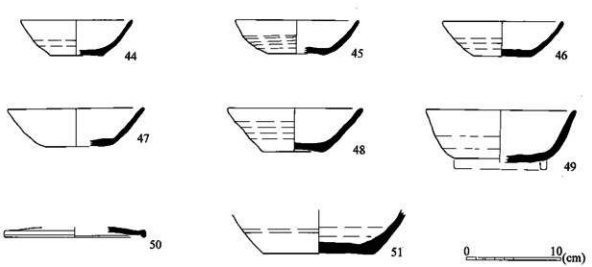


第345図　溝ＳＤ103出土土器(1)

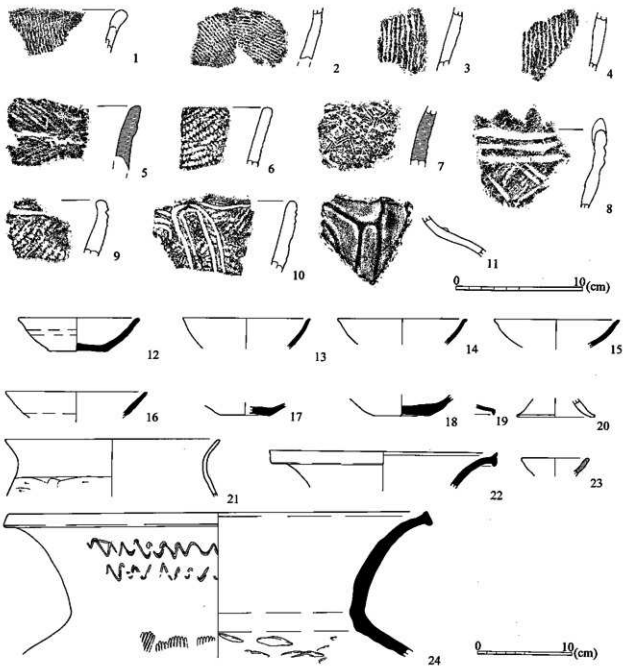


第346図　溝ＳＤ103出土土器(2)

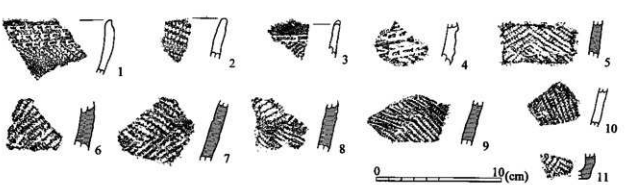




第347図　溝ＳＤ103出土土器(3)・土製品



第348図　溝ＳＤ104出土土器



第349図　溝ＳＤ105出土土器

糸文土器か。

4～18前期。4口唇端部へラ状工具による刻み、内面に指頭圧痕をのこす。薄手で繊維を含まない。前期前葉木島式。5横位回転縄文RL、半截竹管状工具による並行沈線文。前期中葉関山式。6～17前期後葉。6半截竹管状工具による連続刺突文、肋骨文、竹管状工具による刺突文。7・8横位回転縄文RL施文後、半截竹管状工具による連続刺突文で区画。木葉文の鉢。9回転縄文RL施文後、細半截竹管状工具による結節沈線文。6～9前期後葉諸磯a式。10・11半截竹管状工具による並行沈線で横位に区画し、区画内を同工具による波状並行沈線文を充塡。前期後葉諸磯b式。12撚糸状工具（8条）胎土焼成が10・11の土器に似ており出土地点も近接するので、この時期に含めた。13へラ刻み細隆線文。前期後葉。14～18回転縄文。14～17繊維を含まず。18繊維含。

19～33中期。19～22並行沈線で区画し、短斜行沈線で充塡。21格子目文で充塡。中期初頭。23～30中期中葉。28有孔鍔付土器か。29・30隆帯区画内を沈線で充塡。焼町土器か。31～33中期後葉。31・32加曽利E3式。33沈線区画内をハ字状沈線で充塡。八ヶ岳編年でいえば「曽利Ⅳ式」。

34堰之内式注口土器把手。後期前葉。35外面はハケ目調整に近い細密条痕、内面は横位ミガキ調整。晩期末か。

36～58古代以降の土器・陶器

36～49・57・58古代の須恵器、土師器。36～39須恵器坏、40同蓋。41～43黒色土器坏。44土師器椀、高台部分剝離。45同坏ないし椀。46同ロクロ成形の小型甕。47・48同甕。口縁部断面コ字状、胴部ケズリ調整の「武蔵型」甕。49須恵器突帯付壺。外面並行タタキ。

50～54・56・59古代末から中世の土師器・陶器。50～53土師器皿。51非ロクロ成形か。それ以外はロクロ成形。54須恵質擂鉢。内面に蛇行する擂目。55土師器片の破断面を研磨した土製円盤。56土師器内耳鍋の内耳。57・58土師器甕か。57内外面回転ハケ目調整。58縦位ハケ目調整、底部付近ケズリ調整。59施釉陶器平碗。外面灰釉。瀬戸美濃。

5　石器（第352～356図）

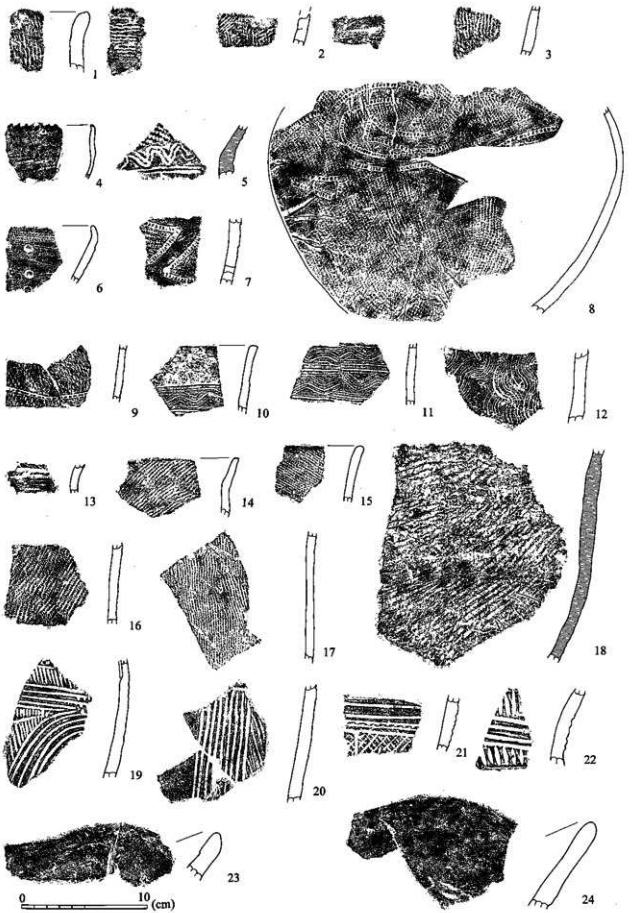
1～65小型の剝片石器。1～48石鏃。29～43・45・46有茎式。大半が黒曜石製。1・18・21・31・40・42チャート製。3・11珪質頁岩製。41黒色頁岩製。29千枚岩質凝灰岩製。32・33・43粘板岩ないし千枚岩質粘板岩製。30・34ガラス質安山岩製。49～51石錐。49黒曜石製。50・51千枚岩質凝灰岩製。52～54石匙。52珪質頁岩製。53チャート製。54千枚岩質凝灰岩製。55～65スクレイパー。56珪質頁岩製。それ以外は黒曜石製。59～65小型の拇指状エンドスクレイパー。これらは早期初頭か。SD104出土。

66～74大型のスクレイパーないし打製石斧。66粘板岩製スクレイパー。67～74打製石斧。千枚岩質粘板岩、凝灰岩、硬砂岩などの先第3系の石材製。71・73・74転石素材。

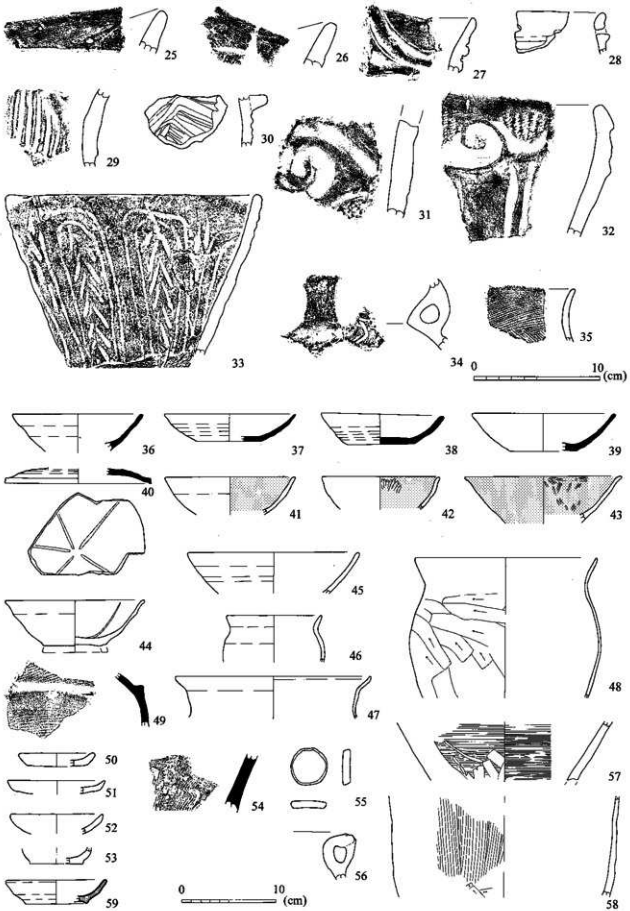
75～94礫素材の石器。75・76磨製石斧。ハンレイ岩製か。75基部に成形時の敲打痕を残す。77凝灰岩製砥石。78～90磨石類。78・80～83・86敲打痕が著しい。85凹石。輝石安山岩が大半を占める。91・92輝石安山岩製石鉢。古代以降か。93・94輝石安山岩製石皿。93縄文時代SK126出土。

6　銭貨（第357図）

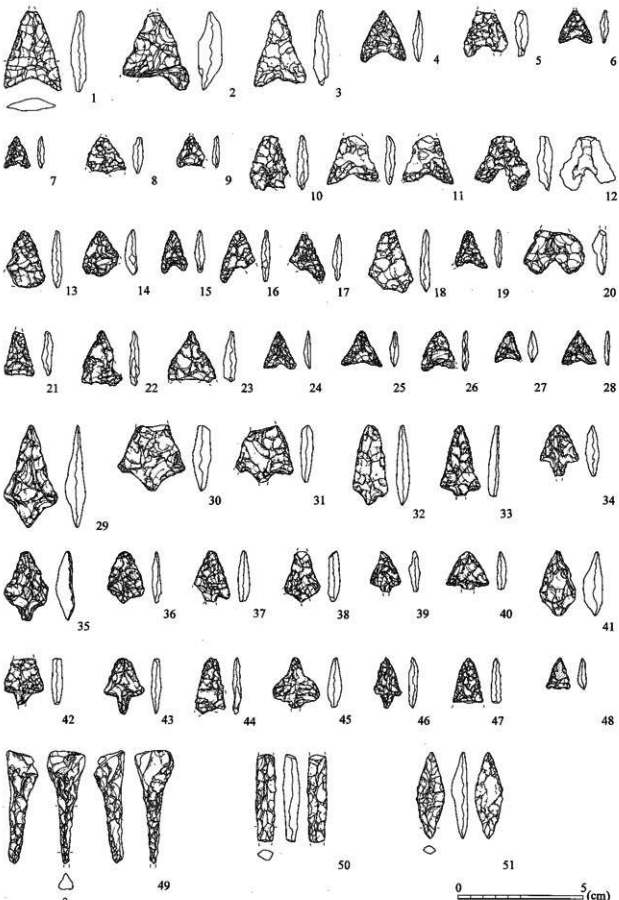
1天聖元宝（篆書）、SD101出土。2至和元宝（篆書）、SD103出土。3聖宋元宝。4～6寛永通宝。3～6遺構外。



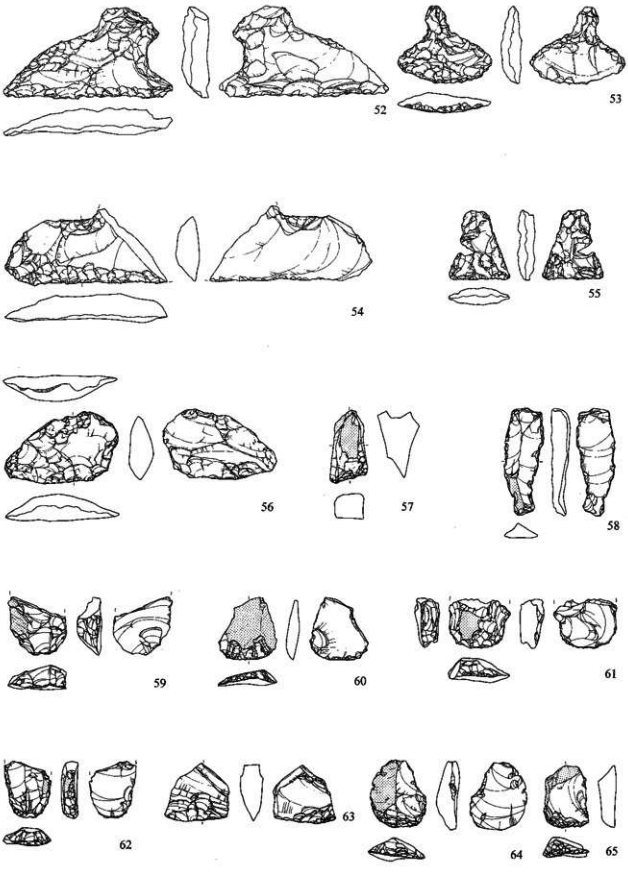
第350図　縄文土器(1)



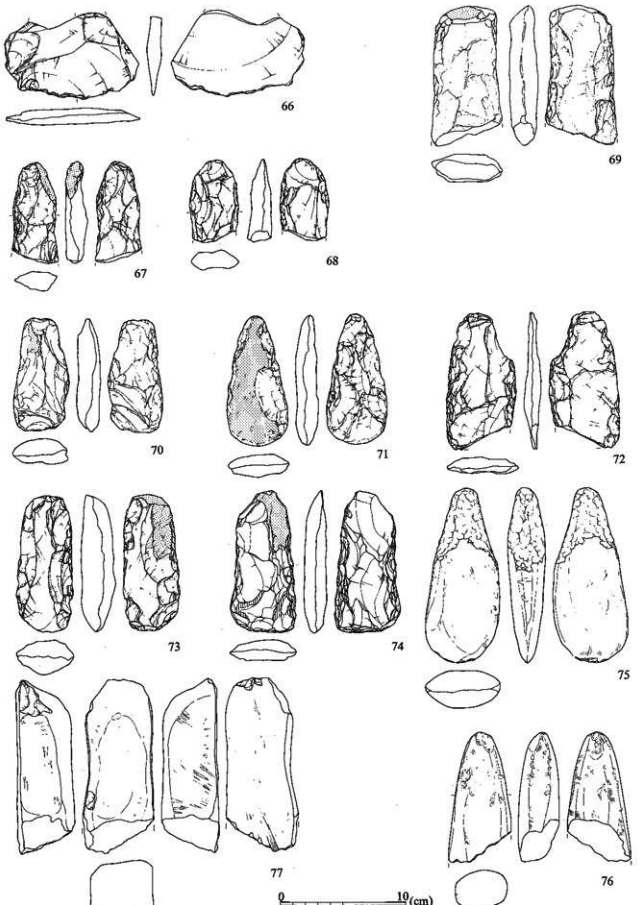
第351図　縄文土器(2)　須恵器・土師器ほか



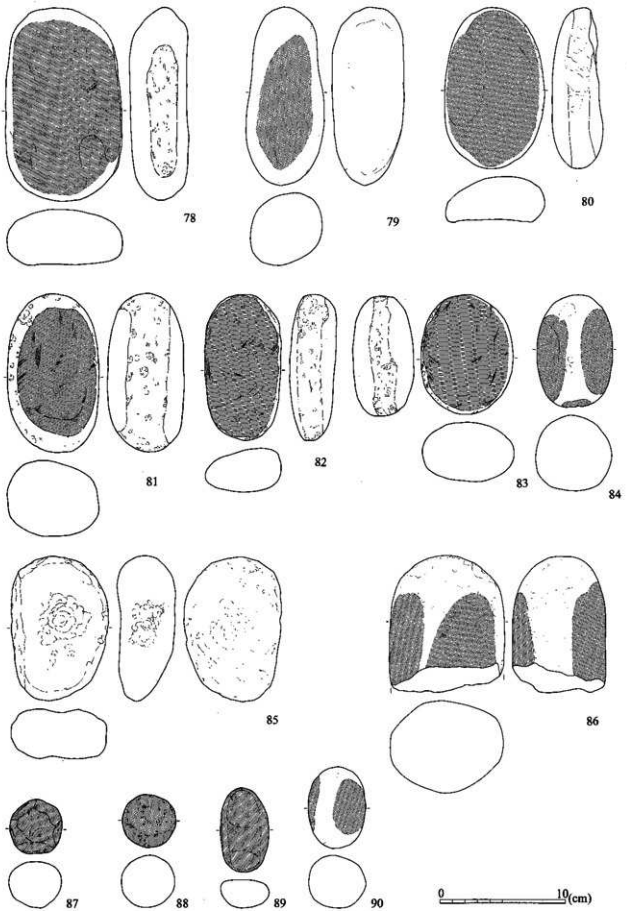
第352図　石器(1)（石鏃・石錐）



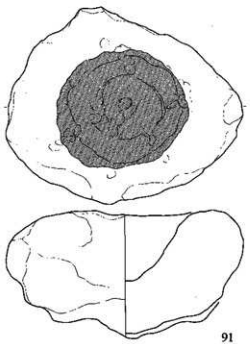
第353図　石器(2)（石匙・スクレイパー）

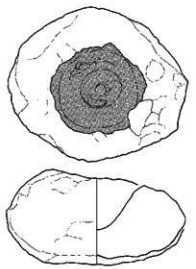


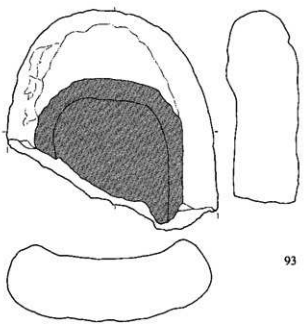
第354図　石器(3)（打製石斧・磨製石斧・砥石・スクレイパー）

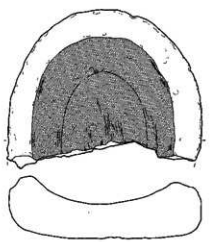


第355図　石器(4)（磨石・凹石）









第356図　石器(5)（石鉢・石皿）

第357図　銭貨

第4節　古墳時代竪穴住居跡ＳＢ116出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

佐久盆地および周辺地域では、これまでにも多くの遺跡で縄文時代から平安時代までの焼失家屋から出土した住居構築材の樹種が明らかにされている。その結果では、縄文時代と古墳時代以降とで使用されている樹種が異なる傾向があることがわかっている。しかし、同時代でも遺跡よっては樹種構成が異なる結果もあり、必ずしも使用樹種が斉一的ではない。このような背景には、遺跡の立地環境による周辺植生の違いなどが考えられているが、その詳細を明らかにするには、さらに資料蓄積が望まれる。

本報告では、森下遺跡から出土した古墳時代の住居構築材について樹種を明らかにする。

2　試料

試料は、古墳時代中期の焼失住居跡（ＳＢ116）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材５点（試料番号１～５）である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第９表に記した。

3　方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する（第358図）。

4　結果

樹種同定結果を第９表に示す。炭化材は４点がコナラ属コナラ亜属クヌギ節に、１点がコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。解剖学的特徴は第５章第５節中田遺跡から出土した炭化材・種実の種類を参照されたい。

- **コナラ属コナラ亜属クヌギ節**（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.*）　**ブナ科**
- **コナラ属コナラ亜属コナラ節**（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus sp.*）　**ブナ科**

第９表　炭化材の樹種同定

番号	遺構名	時代・時期	採取位置	取上番号	試料の種類	樹　種
1	ＳＢ116	古墳時代前期末	床面直上	炭№１	炭化材（住居構築材）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	ＳＢ116	古墳時代前期末	床面直上	炭№２	炭化材（住居構築材）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	ＳＢ116	古墳時代前期末	床面直上	炭№３	炭化材（住居構築材）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	ＳＢ116	古墳時代前期末	床面直上	炭№４	炭化材（住居構築材）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	ＳＢ116	古墳時代前期末	床面直上	炭№５	炭化材（住居構築材）	コナラ属コナラ亜属コナラ節

5　考察

住居構築材と考えられる炭化材はクヌギ節とコナラ節に同定され、クヌギ節が多い。佐久盆地周辺では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材の樹種が明らかにされている。古墳時代の住居構築材では、小諸市和田原遺跡、塚田遺跡、大下原遺跡、竹花遺跡、佐久市下芝宮遺跡および下聖端遺跡などで、比較的多くの試料について樹種が明らかにされている（パリノ・サーヴェイ株式会社1989・1992・1994ａ・1994ｂ）。これらの結果では、いずれもクヌギ節・コナラ節が多く確認されており、古墳時代の本地域では住居構築材にクヌギ節・コナラ節を中心とした木材が使用されていたことが伺える。今回の結果もその一例といえ

る。

住居構築材については、関東地方の調査結果と花粉分析結果などを比較すると、遺跡周辺の植生を反映していることが指摘されている（高橋・植木1994）。このことから、本遺跡周辺ではクヌギ節やコナラ節の比率が異なることがある。こうした違いは、遺跡の立地環境によって植生に多少の違いがあったことを示唆する。しかし、現時点では、その詳細は明らかではない。本地域では火山噴出物が厚く堆積しているために、花粉分析による古植生の復元は困難である。そのため、台地上から出土する炭化材や種実遺体を用いて植生に関する情報をさらに収集したい。今後も継続した調査が望まれる。

引用文献

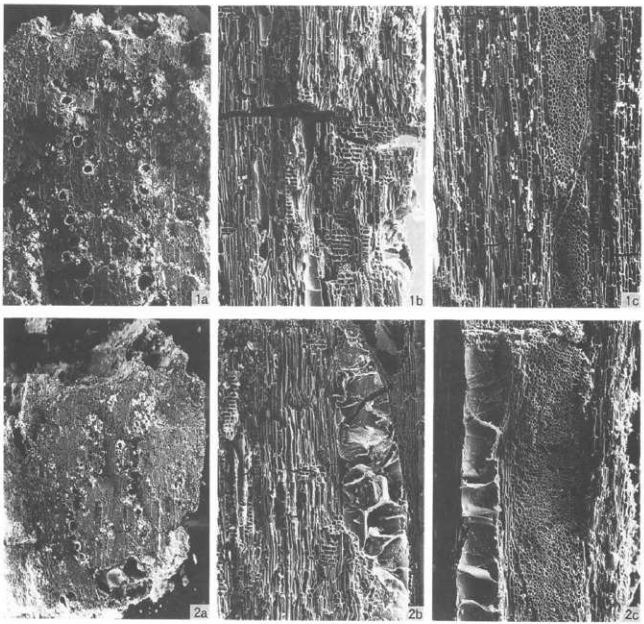
パリノ・サーヴェイ株式会社1989「和出原遺跡出土炭化材同定」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集　和田原・鎌田原―長野県小諸市和出原・鎌田原遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会p.83-88

パリノ・サーヴェイ株式会社1992「下芝宮遺跡・下堅端遺跡炭化材同定報告」『佐久市埋蔵文化財調査発掘報告書第９集　国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）』佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センターp.355-391

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ａ「Ｈ-４号住居址から出土した炭化構築材の樹種」『塩野西遺跡群　塚田遺跡―長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書―』長野県御代田町教育委員会p.344-353

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ｂ「遺生の植物利用について」『小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集　東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原―長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会p.613-624

高橋　敦・植木真吾1994「樹種同定からみた住構築材の用材選択」『PALYNO』２　p.5-18



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号２）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号５）
a：木口，b：柾目，c：板目

第358図　炭化材

第5節　土坑ＳＫ109遺体埋納位置について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

森下遺跡は、大室山南西麓の求女沢川と大星川に挟まれた複合扇状地上に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代、古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が検出されている。この中で、調査区東端の小高い丘状の場所に５基の土坑が集中していた。これらの土坑からは遺物がほとんど認められず、構築時期や用途は明確ではない。

そこで、今回はこれらの土坑のうち土坑墓と想定されたＳＫ109を対象として、遺体埋納の可能性を検証するためにリン・カルシウム分析および炭素含量測定を選択した。

リン酸は、人体特に人骨に多量に含まれ、遺構内での特徴的な濃集状態から遺体の痕跡を定性的に推定できる（竹迫ほか1980など）。分解したリン酸は土壌中に含まれるアルミや鉄と結合して難溶性のリン酸化合物を形成するために、濃集状態が比較的確認しやすい。特に、黒ボク土やローム土のようにリン酸と結合しやすいアルミや鉄が多い土壌では、遺体の痕跡を検証する際の成果が大きい。ＳＫ109の覆土および地山の土壌は、室内での土性や土色の観察、活性アルミニウム反応テストなどの判断から、黒ボク土またはローム土と判別でき、リン酸と結合しやすい土壌と見ることができる。

また、リン酸とともに人骨に多量に含まれるカルシウムについても分析を行い、人骨の痕跡を確認する。なお、分解が進んでいる場合のカルシウムはリン酸よりも土壌中での拡散移動が大きく、特徴的濃集を確認することは難しいことから、リン酸の補助的項目として結果を捉えることにする。

さらに、黒ボク土では土壌形成の過程で混入した植物遺体からリン酸が供給され、その結果により遺体に由来するリン酸の濃集という形として現れなくなることが予想される。そのため、土壌中の炭素含量も測定し、リン酸含量との相関関係を見ることにした。このような調査は、東京都北区の豊島馬場遺跡より出土した古墳時代の方形周溝墓を対象として行われており、遺体埋納位置が推定されている（辻本・小林1995）。以下に、分析結果と考察を述べる。

2　試料

調査対象としたＳＫ109を含む５基の土坑は、楕円形や長方形を呈し、いずれも長軸の方向が北西―南東方向である。

試料は、ＳＫ109覆土断面が良好に観察された南北セクションおよび東西セクションから採取された。採取位置は、リン酸の特徴的濃集状態を明らかにする上で相対比較ができるように、南北セクションで４カ所、東西セクションで１カ所が設定された。それぞれの底部付近（試料番号１～５）と底部付近（試料番号６～10）の土壌が採取された。また、土坑確認面の地山より土壌２点（試料番号11・12）を採取した。

分析では、これら12点を用いた。土質については、各成分の測定結果とともに示した。

3　分析方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペトロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法

(105℃、5時間) により測定する。

リン・カルシウム分析では、風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸 (HNO_3) 5mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 ($HClO_4$) 10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mℓに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸 (P_2O_5) 濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これらの測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5mg/ｇ) とカルシウム含量 (CaOmg/ｇ) を求める。

炭素含量測定は、風乾細土試料の一部を微粉砕し、0.5mm篩を全通させた微粉砕試料を用いる。微粉砕試料1000mg前後を精秤し、助燃剤 (酸化コバルト) 5.0ｇと混合する。混合試料をサンプルボードに乗せ、CNコーダー (柳本製作所製：MT-600) に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス (He) 気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2およびN_2の組成にする。ついで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素および窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたりの炭素量 (T-C%) を求める。

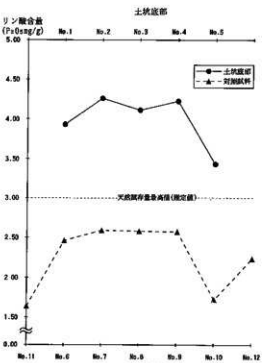
測定値については、次のような行程で統計処理を進めた。まず、炭素量とリン酸含量の相関図を作成した。次に、最小２乗法により回帰直線を求め、正の方向に極端に逸脱する試料の有無を調べる。これは、植物遺体の影響を差し引いてもリン酸含量の高い試料を抽出するためである。

4　リン酸・カルシウム・炭素含量

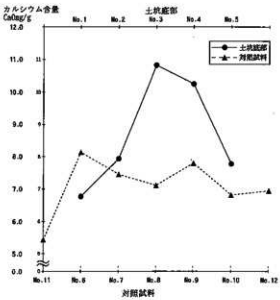
結果を第10表、第359～361図に示す。

リン酸含量は、土坑底部試料の試料番号１～５と対照試料番号６～12であきらかに差異があり、土坑底部試料の方が高い値を示す。また、土坑底部試料間でも試料番号２～４は3.0P_2O_5mg/ｇ以上の値を示し、他の試料より高い含量が認められる。

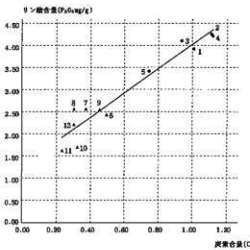
1）リン酸、カルシウムの単位はともに乾土１ｇあたりのmgで表示。
2）土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林水産技術会議監修1967）による。
3）土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペトロジスト懇談会編1984）による。L…壌土（ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。）



第359図　土坑　ＳＫ109のリン酸含量分布



第360図　土坑　ＳＫ109のカルシウム含量分布



第361図　土坑　ＳＫ109の炭素含量とリン酸含量の相関図
直線は、回帰直線を示す。
●は土坑底部、▲は対照試料を示す。

第10表　土坑ＳＫ109のリン・カルシウム分析および炭素含量測定結果

試料番号	試料位置	炭素含量 C%	リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
1	土坑底部	1.00	3.93	6.77	10YR3/2黒褐・L
2	土坑底部	1.10	4.26	7.94	10YR2/2黒褐・L
3	土坑底部	0.93	4.11	10.82	10YR2/1黒・L
4	土坑底部	1.11	4.22	10.25	10YR2/2.5黒褐・L
5	土坑底部	0.74	3.43	7.78	10YR2/2黒褐・L
6（対照試料）	土坑直下	0.49	2.46	8.14	10YR4/4褐・L
7（対照試料）	土坑直下	0.37	2.59	7.45	10YR4/4褐・L
8（対照試料）	土坑直下	0.30	2.58	7.11	10YR4/4褐・L
9（対照試料）	土坑直下	0.45	2.57	7.80	10YR4/4褐・L
10（対照試料）	土坑直下	0.32	1.72	6.82	10YR4/4褐・L
11（対照試料）	土坑確認面南北	0.23	1.64	5.43	10YR3/4暗褐・L
12（対照試料）	土坑確認面東西	0.30	2.23	6.95	10YR3/3暗褐・L

カルシウム含量はリン酸含量より２～４倍近い値を示す。ここでも土坑底部の含量は概して同レベルの採取位置の比較で高い値を示す。とくに、リン酸含量も比較的高い試料番号３・４は著しく高い値を示す。

また、炭素含量とリン酸含量の相関は高く、リン酸含量の高い試料ほど炭素含量も高い。なお、炭素含量と比較してリン酸含量の高い試料は認められない。

５　考察

土壌に通常含有されるリン酸含量、いわゆる天然賦存量の調査例（Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか1991、天野ほか1991）では、天然賦与量の上限は約3.0P_2O_5mg/ｇ程度とされる。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.0P_2O_5mg/ｇ（黒ボク土の平均値、川崎ほか1991）という報告例もある。なお、各調査

例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5mg/ｇで統一した。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸の富化とみなすことができる。

第361図に示すように、土坑底部ではいずれも3.0P_2O_5mg/ｇ以上の値を示す。天然賦存量よりも高い点を考慮すれば、土坑底部でリン酸が富化されている状態が推定される。

また、炭素含量とリン酸含量の相関は高く、リン酸含量の高かった試料番号２～４では著しく高い試料は認められなかった。土坑底部の土壌は黒ボク土であり、地山のローム土と比較して植物遺体混入の影響が強く出ており、腐植含量が高い。したがって、土坑底部のリン酸含量の高さは炭素とリン酸を多く含む植物遺体の影響を受けている黒ボク土が埋積しているためともみられている。

しかし、西側に隣接する山の越遺跡で検出された縄文時代後期初頭の土坑では、土坑底部のリン酸含量が1.0P_2O_5mg/ｇ前後であった。この結果と比較すると、今回の土坑底部のリン酸含量は高い値である。

一方、土壌中のカルシウム含量は普通１～50CaOmg/ｇ（嶋貫1979）といわれ、天然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きいために土壌本来の含量と外的要因で富化された含量の区別は難しい。その中で、試料番号３・４は他の試料と相対比較すると含量が高い。

これらの点から、土坑底部の中央部には黒ボク土の影響を考慮してもリン酸およびカルシウムが濃集しているとみられる。覆土中・上部の含量分布をみる必要があるが、底部のみにこれらの成分が濃集しているとすれば、土坑中央部に遺体が埋納された可能性がある。また、土坑底部直下の地山でリン酸含量が高かった点は、遺体の分解に伴ってリン酸成分が下方に流亡し、その痕跡が地山に残留していたことを示すのかもしれない。

以上、今回の結果からは土坑への遺体埋納の可能性が指摘できた。今後は、人体に含まれ、遺体の分解・焼失後にも土壌中に残留しやすいと予想されるマンガンやストロンチウムなどの重金属元素の測定を試み、その偏在の状態を調べてみたい。

引用文献

大野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編p.28-36

Bowen,H.J.M.（浅見輝男・半野光男訳）1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』297p.博友社（原著H.J.M.Bowen1979『Enviromental Cemistry of Elements』）

Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.（岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳）1980『土壌の化学』309p.学会出版センター（原著H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert1976『SOIL CHEMISTRY』）p.235-236

土壌標準分析・測定法委員会編1986『土壌標準分析・測定法』354p.博友社

土壌養分測定法委員会編1981『土壌養分分析法』440p.養賢堂

藤貫　正1979「カルシウム」『地質調査所化学分析法』50地質調査所p.57-61

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久1991「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』149p.農林水産省農林水産技術会議事務局編p.23-27

京都大学農学部農芸化学教室編1957『農芸化学実験書』第１巻411p.産業図書

農林省農林水産技術会議事務局監修1967『新版標準土色帖』

ペトロジスト懇談会編1984『土壌調査ハンドブック』156p.博友社

竹迫　紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部　隆1980「神谷原遺跡への土壌学的アプローチ」『神谷原』Ⅰ八王子市椚田遺跡調査会p.412-416

辻本崇夫・小林　高1995「第４章第３節豊島馬場遺跡における周溝内堆積について―土壌分析結果を中心として―」『豊島馬場遺跡（本文編）北区埋蔵文化財調査報告16集』p.368-371東京都北区教育委員会

第6節　小結

以下森下遺跡を概観し、小結とする。

縄文時代

草創・早期：いずれも遺構外もしくは流路出土であるが、烏帽子岳西南麓の複合扇状地上には珍しい草創期や早期初頭の資料が散見される。草創期の資料はＳＤ101の多段構成の押圧縄文（第344図1）、早期初頭は遺構外出土の表裏撚糸文土器（第350図1～3）、ＳＤ104出土の撚糸文土器（第348図1～4）がある。

廣瀬昭弘（1995）によると中部高地の草創期末から早期初頭の状況は、依然として不明の部分が少なくなく、草創期の増野川子石遺跡や岐阜県椛の湖遺跡などの表裏縄文土器が小佐原遺跡、さらに三枚原遺跡の表裏縄文土器に変遷する点では、大方の同意が得られているが、関東地方をはじめ他地域の土器編年との並行関係がいまだ明らかにされてはいない。早期の開始を南関東地方撚糸文土器編年の井草式におくとすれば、井草式並行の資料をどうとらえるかが一つの課題である。このなかで、口唇外面に横位、外面は縦位、内面は横位1段の撚糸文施文の土器（第350図1）は、当該期の資料と位置づけられよう。

また、これら早期初頭の資料が出土したＳＤ104からはさらに拇指状エンドスクレイパー（第353図59～65）が出土。拇指状エンドスクレイパーが当該期の石器である可能性は高い。町田勝則・鶴田典昭（1995）によれば岐阜県椛の湖遺跡、長野県お宮の森遺跡といった表裏縄文土器出土遺跡でまとまって出土し、当該期を代表する石器と考えられるという。このことは前述のような撚糸文土器にこれらのエンドスクレーパーが伴うと仮定しての話であるが、中部高地ひいては烏帽子岳西南麓の早期初頭の石器群の様相は表裏縄文土器の石器群の特徴を受け継いでいると考えられよう。今後良好な資料の増加が望まれる。

前期：早期初頭以降の資料は検出されていない。前期初頭と考えられる資料がＳＤ104から出土。中道式（第348図5）および花積下層式（同7）。遺構として検出されるのが、前期後葉諸磯ａ式のＳＢ124・125・ＳＫ131である。いずれも極めて浅い掘り込みで、平面形もはっきりしない。炉もわずかに焼土集中部がみられるだけであり、明瞭ではない。諸磯ｂ式からｃ式の資料はＳＫ115・119などに散見されるが、極めて少ない。森下遺跡の西端を流れる大星川の対岸の山の越遺跡からは諸磯ｂ式期の遺構がまとまって出土しているので、あるいは対岸へ移動したものであろうか。

中期：中期初頭の資料が土坑（ＳＫ126）や遺構外から若干出土している。中葉はＳＢ119がある。ＳＢ119からは（第300図21）をはじめとする口縁部文様帯が胴部上半に退化し、沈線も密接にヘラ状工具によって施されている。これは「焼町土器」の最後の段階、御代田町川原田遺跡の資料にもとづく寺内隆夫の編年（1995）によれば、川原田中期Ⅵ段階（八ヶ岳編年井戸尻Ⅲ式・下総編年勝坂Ⅴ式）に並行する資料らしい[注1)]。人面付の深鉢形土器（第300図20）も当該期の資料として大変興味深い。後葉は神奈川編年加曽利Ｅ3式のＳＢ110およびほぼ同時期と思われるＳＢ122がある。ＳＢ110（第296図）は隔部無文部を喪失し、口縁部などの区画は沈線で、胴部は縦位の磨消縄文が発達する。ＳＢ122（第303図）も沈線縦位区画の磨消縄文胴部破片が出土。口縁部は眼鏡状に、胴部は垂下もしくは枝分かれ様に隆帯を貼付し、回転縄文を充填した土器（同1）があるが、単節縄文ＲＬと無節縄文Ｌを併用するという手法は珍しい。あるいは搬入品であろうか。

後・晩期：後期以降の遺構は検出されていないが、流路や遺構外に後期前葉の資料が散見される。また特筆すべきはＳＤ103から晩期前葉から中葉の資料（第347図33～37）が出土。これらの土器にともなう土偶、耳栓、男根状土製品なども烏帽子岳西南麓では極めて珍しい資料である。またＳＤ103からは千枚岩質粘板岩製有茎石鏃が出土しているが、晩期の所産と思われる。

古墳時代：弥生時代の資料は検出されていない。古墳時代の遺構としてはＳＢ116・117・123がある。いずれもカマドを持たない住居跡で、器台（ＳＢ116第308図２・ＳＢ117第309図12・ＳＢ123第310図２）や小型精製壺（ＳＢ117第309図４・７など）は散見されるが、高坏はなく、有段口縁の壺（ＳＢ116第308図３）があることから、これらの住居跡は前期後葉、宇賀神編年のⅡ期新段階に対応しよう。

古代：ＳＢ101～103・105～108・111・112・114・115・118・120計13軒が古代の竪穴住居跡で、平安時代に属すると考えられるが、さらに３段階に分けることができる。文中佐久編年とあるのは寺島俊郎(1991)の佐久地方の古代土器編年のことであり、本稿はこれに準拠している。

奈良時代末から平安時代初頭：坏は須恵器が黒色土器よりかなり多い。須恵器には高台がつくものや器高の深いものが見られる。須恵器蓋は器高が高いものが組成をなす。土師器甕は口縁部断面緩い「コ」字状を呈し、胴部ヘラケズリ調整が施される。当該期の住居跡はＳＢ108・115・118。佐久編年の４ないし５段階。同編年の実年代観に従えば８世紀末から９世紀初頭となる。

平安時代前期：坏は須恵器と黒色土器が半々。須恵器坏は黒色土器同様高台が付くものはない。須恵器蓋はあっても少なく、器高も低い。土師器甕は口縁部断面がはっきりと「コ」字状を呈し、胴部ヘラケズリが施される「武蔵型」。当該期の住居跡はＳＢ106・111・112・120。佐久編年の７段階前後。同編年の実年代観に従えば９世紀代。

平安時代中期：坏は須恵器は少なく、黒色土器が主体。黒色処理が施されず、また内面が磨かれない土師器坏が一定量ある。また黒色土器には高台がつく椀が少しある。土師器甕は回転ハケ目調整を口縁部内面に施すロクロ成形が主体。この甕は縦位にハケ目調整を施すものがある（ＳＢ105第318図12、ＳＢ107第322図８）。当該期の住居跡はＳＢ105・107。佐久編年の10段階前後。同編年の実年代観に従えば10世紀代。

中近世：平安時代後期以降の遺物は極めて少ない。遺構外から非ロクロ成形？の土師器皿や内耳鍋、灰釉の平碗、天聖元宝、至和元宝といった銭貨、石鉢が出土していて中世の遺物と考えられるが、当該期の遺構はなく、人間の定住的な空間としては利用されなくなったようである。近世も同様な様相と思われ、図化できるような遺物はほとんどなく、遺構外から寛永通宝が出土しているだけである。

森下遺跡は縄文時代の遺構・遺物が決して多いとは言えないが、烏帽子岳西南麓では空白であった資料が出土していて、土器編年上重要である。古代と中世の遺跡が連続しないが、これは大星川の対岸に隣接する山の越遺跡に中世の遺跡が展開することを考えるとそのまま移動したことも想定できる。こうした特徴が本遺跡だけのものか祢津地区全体の歴史的な背景に関わるものかは検討せねばならない課題である。

引用参考文献

宇賀神誠司1989「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２

臼居直之1998「古墳時代前期の土器群の分類」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―長野市内その３―石川条里遺跡第２分冊』財長野県埋蔵文化財センター

笹沢　浩1988「古墳時代の土器」『長野県史考古資料編全１巻（四）遺構・遺物』長野県史刊行会

新谷和孝ほか1995『お宮の森遺跡』上松町教育委員会

寺島俊郎1991「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２―佐久市内その２―』長野県埋蔵文化財センター

鶴田典昭1995「押型文土器及び撚糸文土器に伴う石器」『長野県考古学会誌』77・78

寺内隆夫1997「川原田遺跡縄文時代中葉の土器群について」『川原田遺跡　縄文編』御代田町教育委員会

町田勝則1995「中部高地における縄文時代石器文化の黎明」『長野県考古学会誌』77・78

唐沢昭弘1995「表裏縄文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』77・78

註１　寺内隆夫氏のご教示による。

第10章　山の越遺跡

第1節　遺跡の概要

本遺跡は、東部町祢津字町屋3089番地ほかに所在する。地理的には東信火山帯の烏帽子岳西南麓複合扇状地上に、大星川と三分川に挟まれた形で立地している（第2・362図）。上信越自動車道建設に伴う緊急発掘調査を行った地点の標高は約650～670mを測る。

遺跡の名称のもとになった地字名は今回の調査範囲には含まれないが、地籍図等によれば「山越」（やまこし）であり、地元研究者にも同様に呼称されていた（五十嵐幹雄1986『東部町の遺跡と文化』など）。『東部町文化財分布図』『長野県史遺跡地名表』では「山の越」と呼称されている。この遺跡名が地元の実在する地字名によるものとすれば、「山の越」遺跡という名称は適当ではないが、ここでは東部町文化財分布図および長野県史に従って「山の越」遺跡と呼称する。

過去に調査歴はないが、県埋蔵文化財センターの調査に並行して高速道路側道部分を東部町教育委員会が発掘し、縄文時代中期から後期の好資料が出土している。

第2節　調査の概要

1　調査範囲と経過

調査範囲を確認するために、平成4年12月7日～8日にかけて、東部町教育委員会作成の遺跡地図当該部分を中心に試掘調査448㎡を行い、調査範囲を確定した（第362図）。

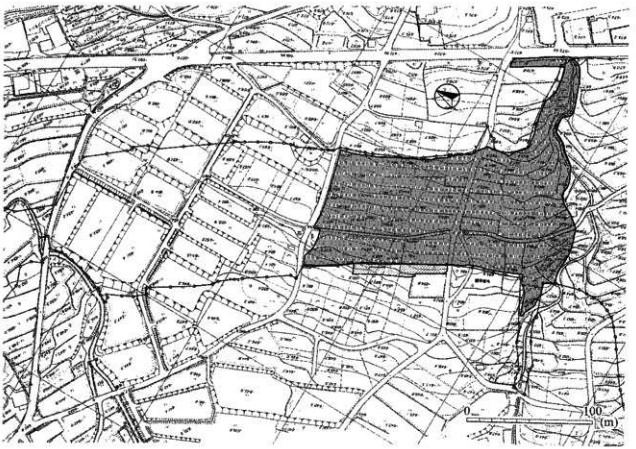
こうした試掘調査の所見に基づき、調査区を設定し（第363・364図）、面的な調査を行うこととした。平成5年4月5日～8月20日（第1次）、同年11月1日～12月21日（第2次）、平成6年4月6日～5月11日（第3次）の期間で発掘調査を行った。平成5年度の発掘調査面積（第1・2次）17500㎡、平成6年度の発掘調査面積（第3次）1700㎡で、のべ19200㎡。

平成5年4月5日　調査用駐車場、プレハブ造成。
4月6日　表土剥ぎ（第1次調査）開始。
4月12日　開始式。
4月13日　検出面精査開始。
4月22日　測量用杭打設開始。
5月25日　県文化課丸山敏一郎埋蔵文化財係長、小平指導主事現地指導。
①区東航空測量、航空撮影。
6月21日　県文化課野口安美主査、百瀬新治指導主事現地指導。日本道路公団上田建設事務所山本工事長視察。
7月2日　上小教育会岩佐今朝人氏見学。
7月14日　東部町教育委員会長岡克衛教育長ほか35名見学。
7月23日　祢津在住樽沢好夫氏見学。
8月3日　上小教育会岩佐今朝人氏、阿部勇氏見学。
8月4日　②区西航空測量、航空撮影。
8月20日　第1次調査終了。
11月1日　表土剥ぎ（第2次調査）開始。
11月10日　検出面精査開始。
12月17日　①区西、②区東航空測量、航空撮影。
12月21日　第2次調査終了。
平成6年4月6日　表土剥ぎ（第3次調査）開始。
4月11日　開始式、検出面精査開始。
4月20日　②区東航空測量、航空撮影。
5月11日　第3次調査終了、撤収。

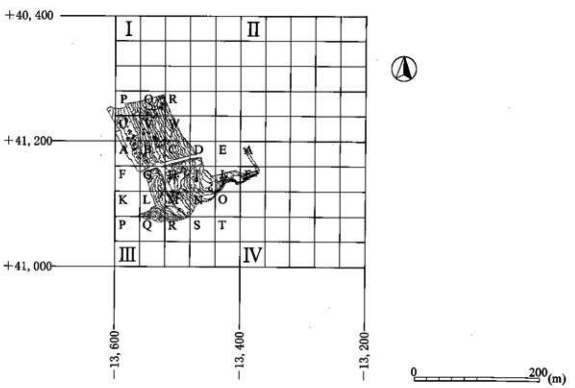
2　基本層序

本遺跡の基本層序は、試掘調査で上位からグライ化した粘土質シルトの現耕作土（水田土壌・Ⅰ層）、灰褐色～褐色の砂混～砂質シルト（Ⅱ層）、炭や土器を含む暗褐色～黒褐色粘土質シルト（遺物包含層・Ⅲ層）、径20～50cmの亜円礫を多く含む黒色粘土層（ガレキ層・Ⅳ層）、土壌化した火山灰層が径50～100cmの礫を含んで再堆積した黄褐色砂質～粘土質シルト層（ローム層・Ⅴ層）の存在が確認されている（第364図）。

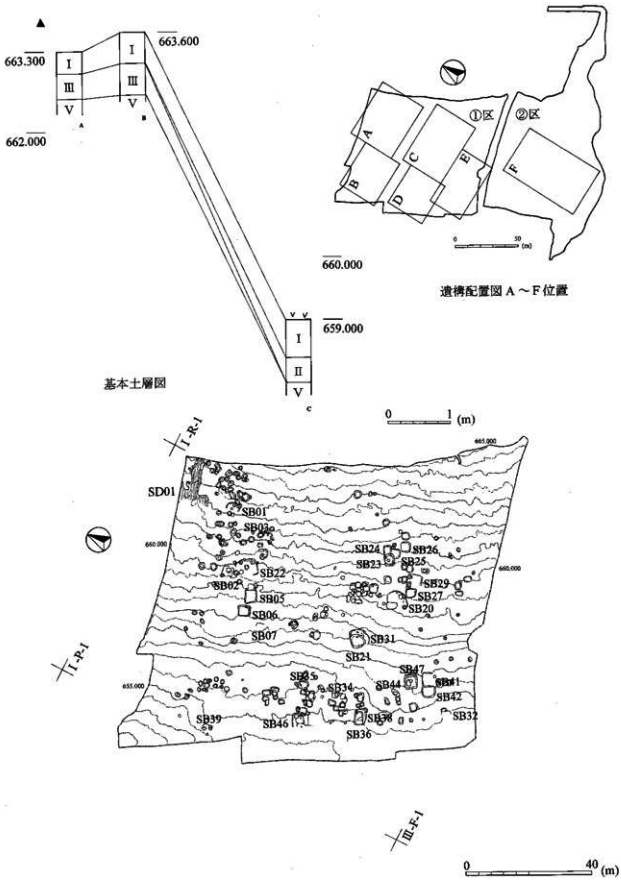
なお、調査区西端の旧祢津街道沿いのＳＤ01、中央部①・②区間境のＳＤ02、②区東端の大星川により調査範囲が区切られる（第364・365図）。



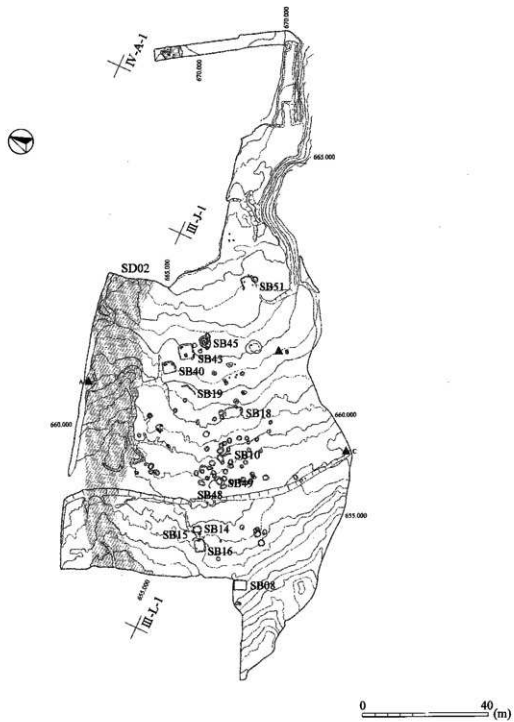
第362図　山の越遺跡調査範囲



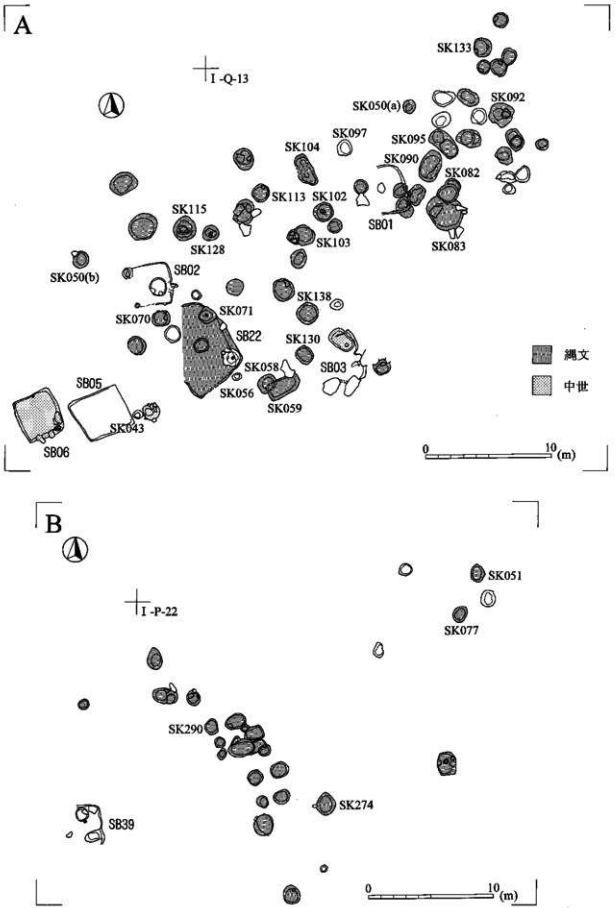
第363図　山の越遺跡グリッド



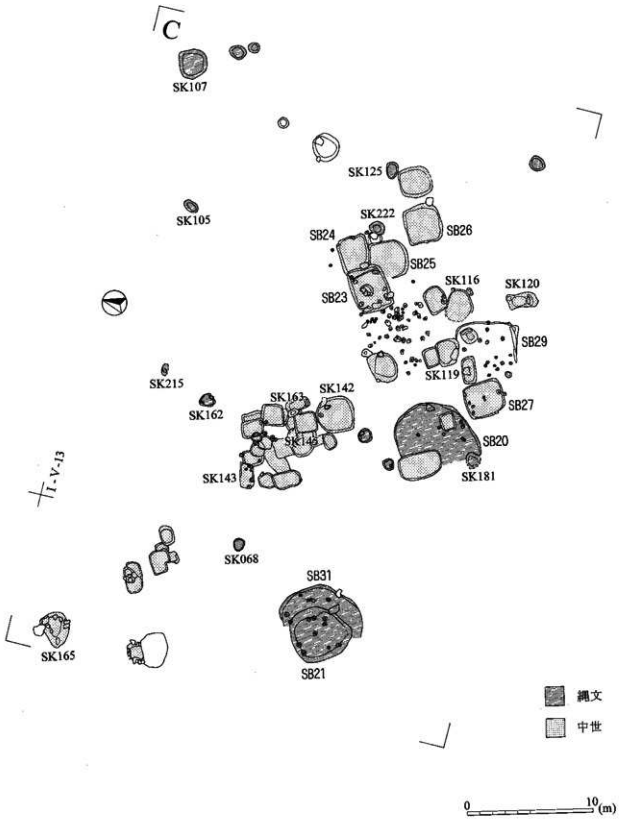
第364図　山の越遺跡基本土層・①区遺構配置



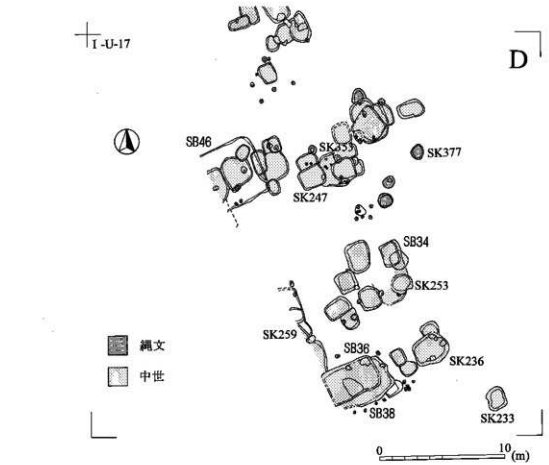
第365図　山の越遺跡・②区遺構配置

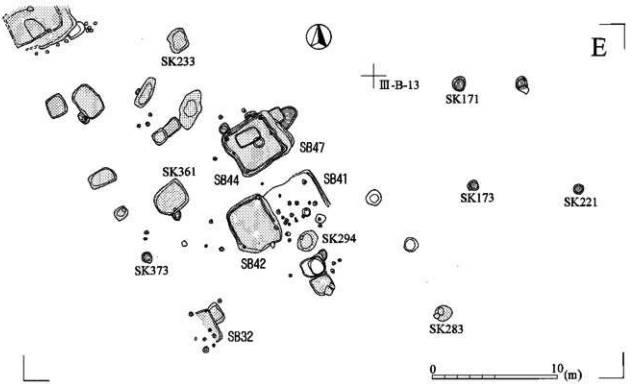


第366図　遺構配置図A・B

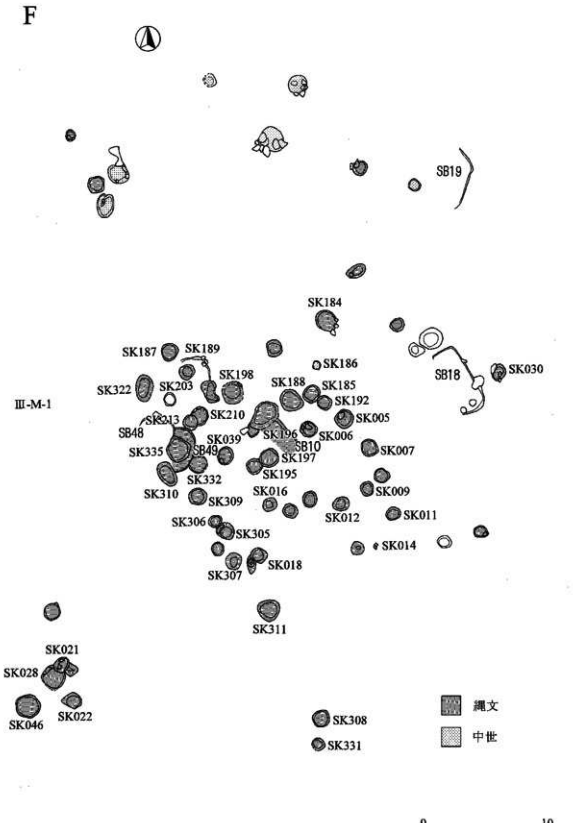


第367図　遺構配置図C





第368図　遺構配置図D・E



第369図　遺構配置図Ｆ

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡と土器・陶磁器

(1) 縄文時代

SB08（第370図）　　位置　②区Ⅲ－L－14・19

検　出　表土除去後、暗褐色土の落ち込みと土器片の集中が見られたので精査したところ、略長方形の平面形が認められ、軸に沿って土層観察用の先行トレンチを設定した。平坦面と立ち上がりを検出、規模などを勘案し竪穴住居跡と判断した。

構　造　北西一南東に長軸をもつ3.9×3.0mの略長方形。床面は住居跡南半にかすかに残る。

遺　物　1～10・12・14横位回転縄文RLないしLR。胎土にはいずれも繊維を含む。14尖底。11・13ナデ調整、繊維含む。石鏃（第468図48・58）、石錐（第469図71・第470図97）、スクレイパー（第472図125）、打製石斧（第472図128・第473図141）出土。

時　期　縄文時代前期初頭か

SB10（第371・372図）　　位置　②区Ⅲ－M－3

検　出　表土除去後、暗褐色土の落ち込みと土器片の集中が見られたので精査した。SK196・197との切り合いが想定されたので、これらの土坑を横切る形で土層観察用のトレンチを設定し、切り合いおよび本遺構の平坦面と立ち上がりを検出した。

構　造　削平が著しい上に縄文時代後期のSK196・197に切られていて、規模などは不明。北東辺は直線であったので、本来は略方形ないし、長方形か。

遺　物　1～16半截竹管状工具を束ねた櫛歯状工具による条線文を施すもの。1口縁部外面に円形浮文を貼付。15・16単節の回転縄文を地文とする。17～27無節ないし単節の回転縄文を地文とする。17回転縄文は浅く口縁部外面に円形浮文を貼付。28・29ミガキ調整を内外面施された有孔浅鉢。石鏃（第468図2・18・36・63）、石匙（第469図67・69）出土。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯b式

SB20（第373図）　　位置　①区Ⅲ－B－4

検　出　表土除去後、暗褐色土の落ち込み、焼土や土器片の集中が見られたので精査した。さらに土層観察用のトレンチを設定、床面と考えられる堅緻な平坦面、立ち上がり、焼土集中が認められた。

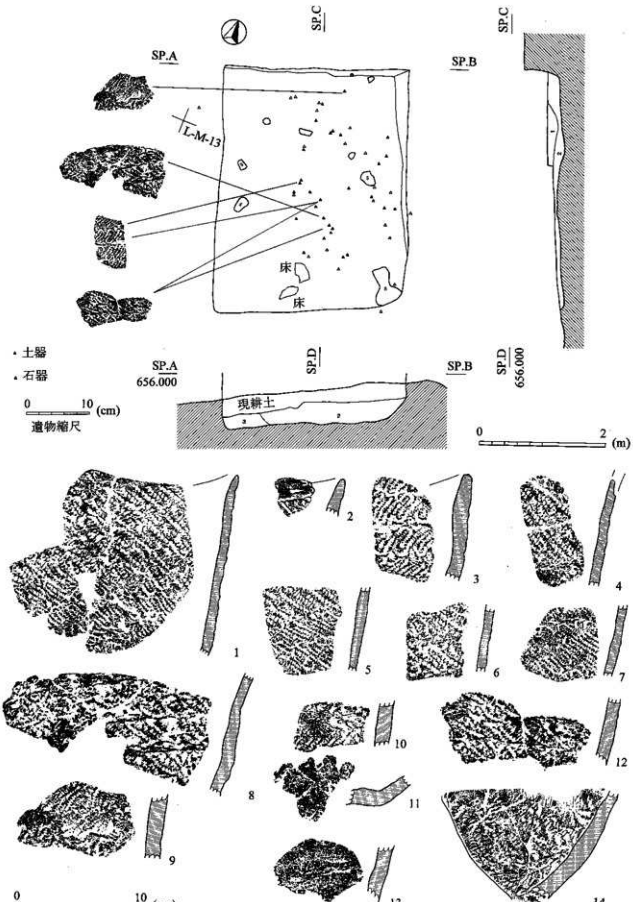
構　造　削平著しく、北東半分しか立ち上がりは残存していなかった。長軸の長さ約7.0mの略楕円形か。堅緻な床面は削平されていない部分にほぼ全面に広がる。また、住居跡中央に二つ焼土が集中する部分があり、地床炉と思われる。

遺　物　5・6・7半截竹管文状工具による並行沈線文ないし刺突文。6・8～10・12～15単節の回転縄文を地文とし、半截竹管状工具による並行沈線文、刺突文を施す。石鏃（第468図54）、石匙（第470図103）、連続した微細な剝離を有する剝片（第471図116～118）、磨製石斧片（第473図151）、凹石（第475図171）出土。

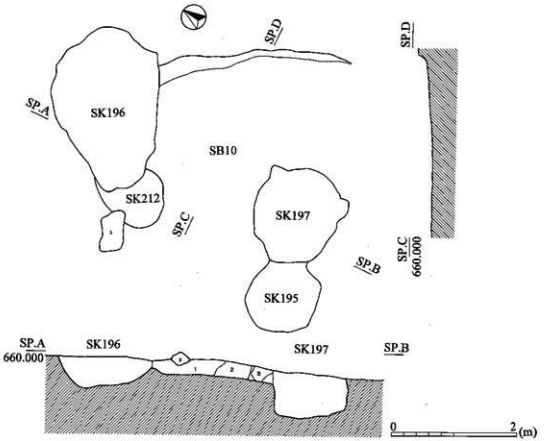
時　期　縄文時代中期初頭

SB21・31（第374・375図）　　位置　①区Ⅲ－B－2・V－22

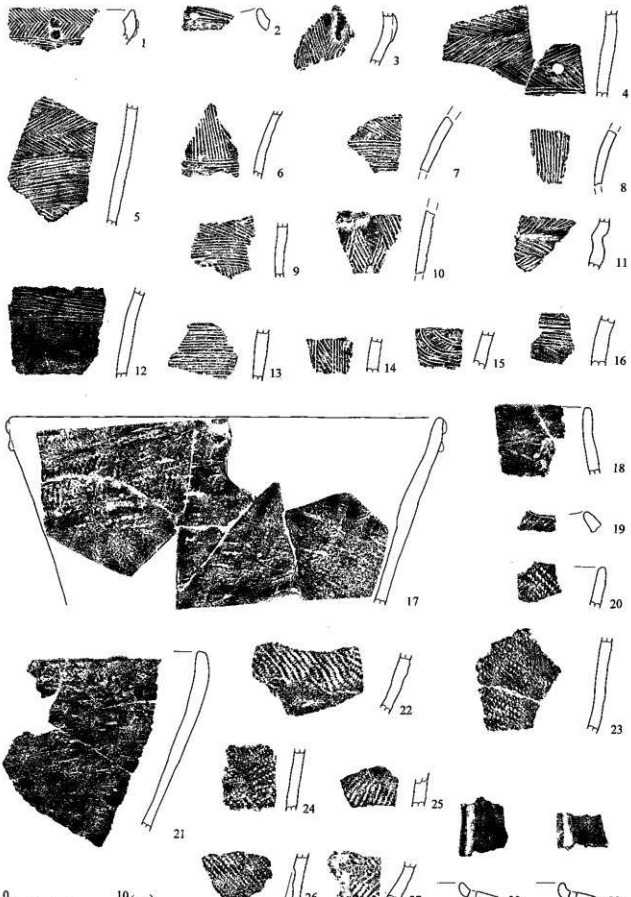
検　出　まず表土除去後、暗褐色土の落ち込みと焼土の集中が見られた。精査によりほぼ円形の平面形が



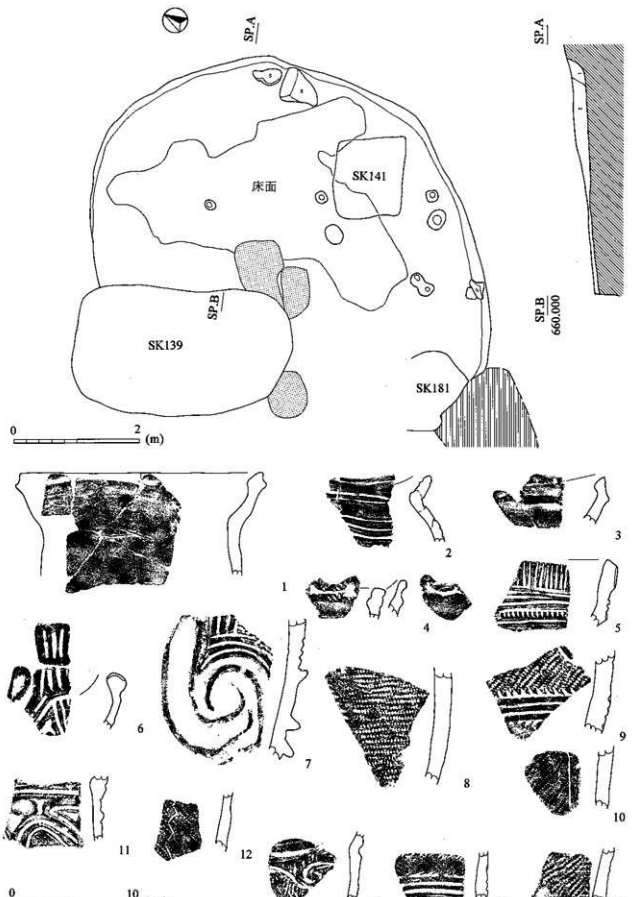
第370図　竪穴住居跡　SB08・出土土器



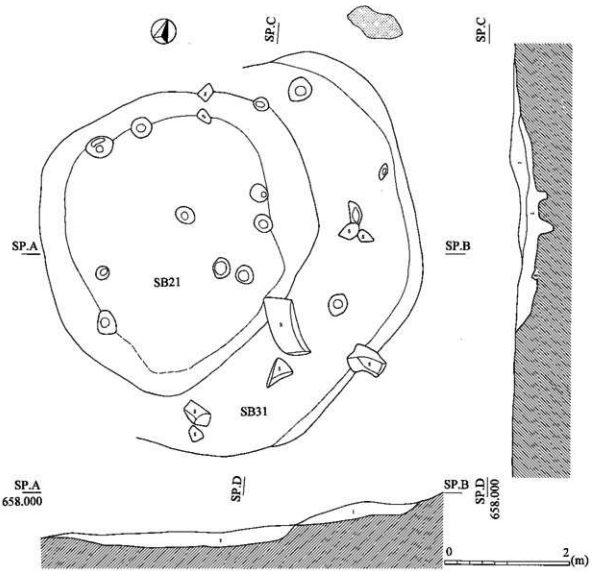
第371図　竪穴住居跡　ＳＢ10



第372図　竪穴住居跡　SB10出土土器



第373図　竪穴住居跡　ＳＢ20・出土土器



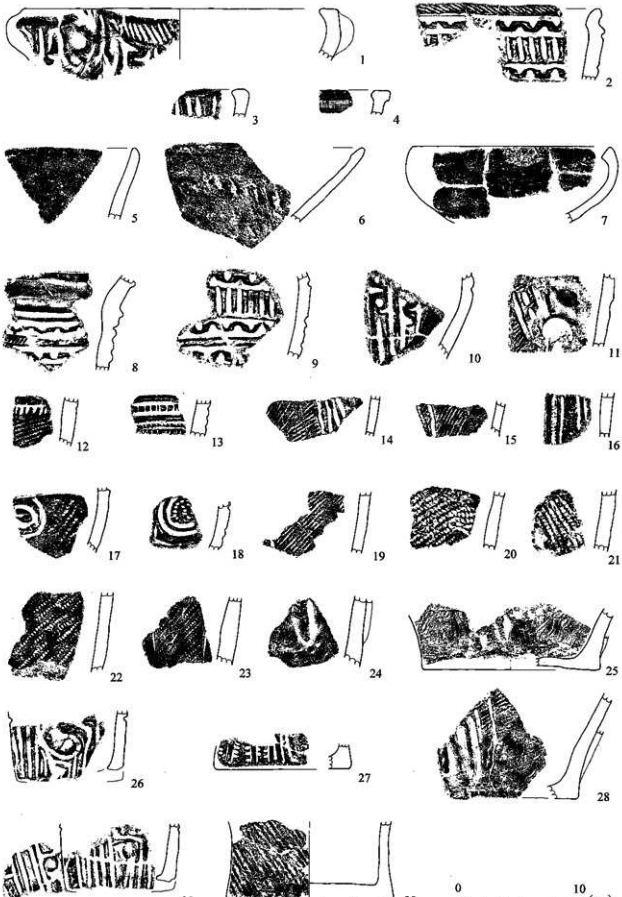
第374図　竪穴住居跡　SB21・31

検出されたので、土層観察用ベルトを残し掘り下げ、平坦面と立ち上がりを検出し、住居跡と判断した（SB31）。さらに、SB31の床面を精査したところ、床面下位に円形の落ち込みが見られた。よって、土層観察用トレンチを設定した。掘り下げたところ、平坦面と立ち上がりが検出された（SB21）。

構　造　SB31の西半分は削平著しく、立ち上がりは確認できなかった。現存で6.3×4.0m、楕円形か。柱穴が2基検出されている。SB21は長軸を北西にもつ4.8×4.4mのやや不整形な楕円形。柱穴と思われるPitが数基検出されている。SB31の床面が認められ、切り合い関係もはっきりしているので、おのおの別の住居跡として登録した。しかし、SB31とSB21それぞれを検出した時の遺物は、明確に区別できず、また規模は異なるものの長軸の向きや位置がほぼ一致することから、SB21を拡張したのがSB31と考えた。

遺　物　1・10・26・29幅広半裁竹管状工具の並行沈線を施す。2・9単節回転縄文RLを地文とし、半裁竹管状工具による鋸歯状の刺突と短沈線を充填する。14～23・28単節回転縄文を地文とする。13半裁竹管状工具による結節沈線文。16ヘラ状工具による押引文。石鏃（第468図26・32・37・59）、スクレイパー（第469図83・88、第472図115）、打製石斧（第473図149）出土。

時　期　縄文時代中期初頭か



第375図　竪穴住居跡　ＳＢ21出土土器

ＳＢ22（第376図）　　位置　①区Ｉ－Ｑ－22ほか

検　出　表土除去後、土坑群ＳＫ067ほかを精査検出時に、これらに切られている略長方形の落ち込みが見られた。

構　造　北西－南東に長軸をもつ6.7×5.0ｍの長方形。堅緻な床面が認められた。ＳＫ072を切り、ＳＫ067・070・071・074に切られる。

遺　物　１・２ともに単節回転縄文施文後に並行沈線を施す。石鏃（第468図43・47・60）、スクレイパー（第469図75・91・第472図122）、打製石斧（第472図137・第473図138・146）出土。

時　期　縄文時代中期初頭

ＳＢ45（第377～379図）　　位置　②区Ⅲ－Ｉ－12

検　出　表土除去後、略円形の黒褐色土の広がりが見られた。よって土層観察用のベルトを設定し、掘り下げたところ、ＳＫ340に切られていること、本遺構の立ち上がりと平坦面が認められた。また平坦面中央から焼土集中部分も検出された。

構　造　3.9×3.4ｍの不整形な五角形か。立ち上がりは西側が現水田耕作の影響で削平されていたが、ほぼ全周する。床面は中央部に地床炉があり、小礫が散在する。またこの床面の下位にＳＢ50が存在していた。Pit６が柱穴。

遺　物　１～42櫛歯状工具による並行沈線文。１口縁部外面に貝殻状突起貼付。２～６口唇部外面を半截竹管状工具によって刻む。11・22・39・41・42回転縄文を地文とし、さらに櫛歯状工具による並行沈線文を施す。諸磯ｃ式。43～45・47は横位回転縄文施文。46・48・49無文土器。いずれも諸磯ｃ式に伴うものだろう。石鏃（第468図８・14・29・31）、石匙（第469図70）、スクレイパー（第469図85・90）、石錐（第470図98）出土。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ｃ式

ＳＢ49（第380・381図）　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

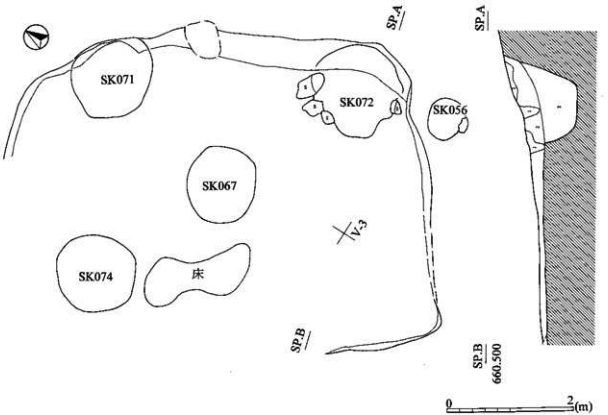
検　出　表土除去後、ローム層直上で精査していたところ、黄褐～褐色土の落ち込みが見られた。平面形から遺構がいくつか存在していると考え、切り合いを見るために土層観察用のトレンチを設定した。土層断面から、床面および立ち上がりを検出した。

構　造　現存3.6×2.2ｍの不整な楕円形。立ち上がりは緩やか。床面は土層断面では認められるが、面的調査では明確には分からなかった。床面中央に炭層（２層）、焼土層（３層）が検出される。地床炉。

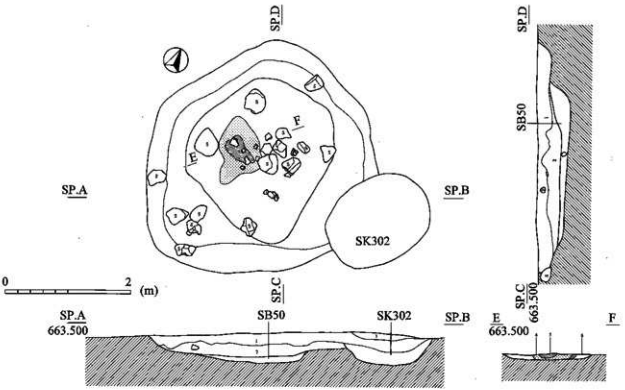
切り合い　古墳時代ＳＢ48、時期不詳ＳＫ333に切られ、縄文時代前期後葉ＳＫ332・335を切る。

遺　物　２～９半截竹管状工具による並行沈線ないし条線文。２～４斜格子状に並行沈線を、さらに縦位並行条線を施す。10無文土器。11～14・16～18回転縄文施文。

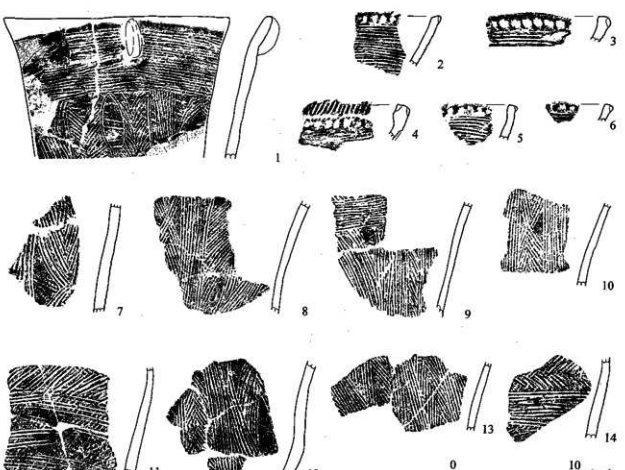
時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ｃ式



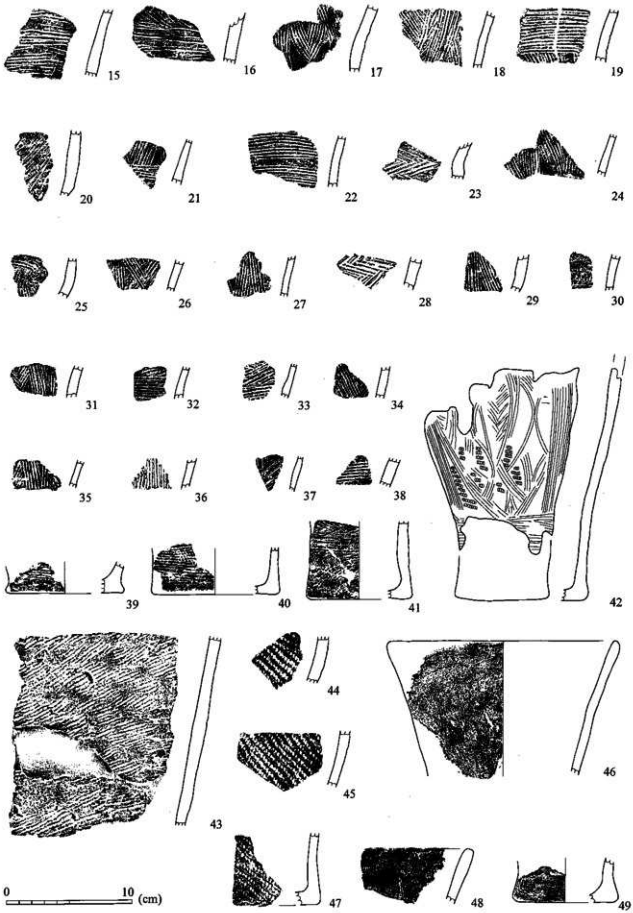
第376図　竪穴住居跡　ＳＢ22・出土土器



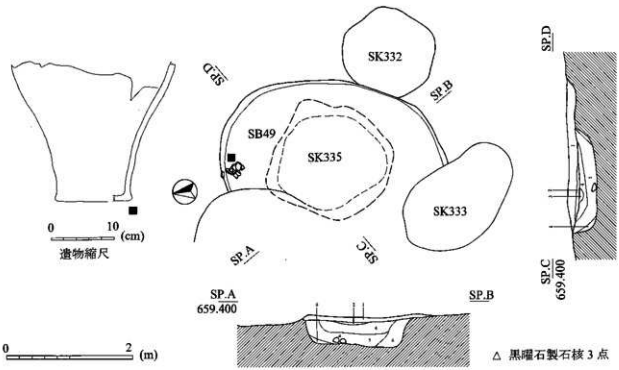
第377図　竪穴住居跡　ＳＢ45



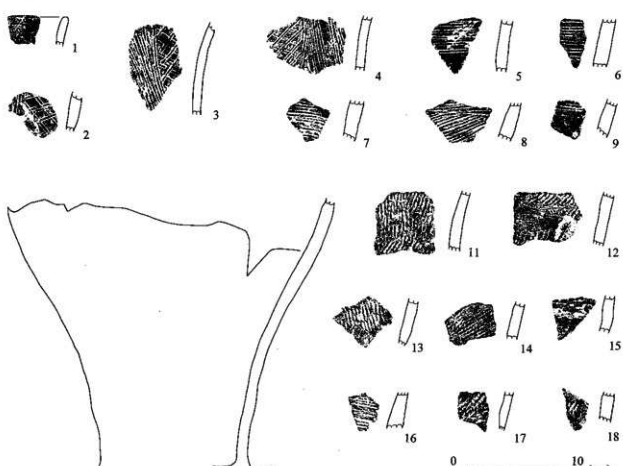
第378図　竪穴住居跡　ＳＢ45出土土器(1)



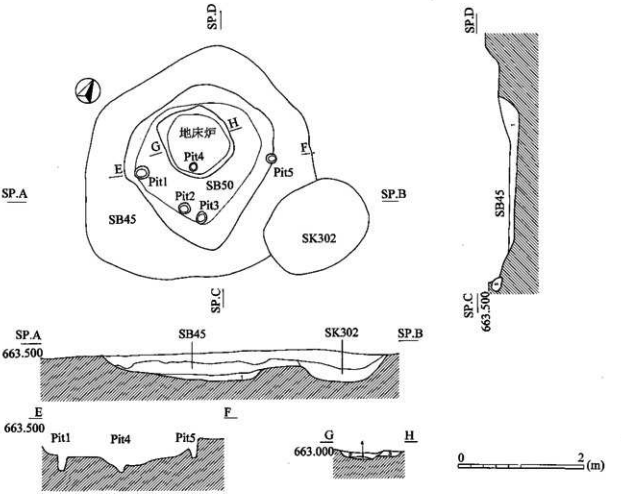
第379図　竪穴住居跡　ＳＢ45出土土器(2)



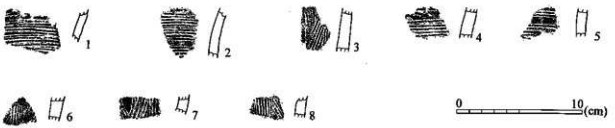
第380図　竪穴住居跡　ＳＢ49・土器出土状況



第381図　竪穴住居跡　ＳＢ49出土土器



第382図　竪穴住居跡　ＳＢ50



第383図　竪穴住居跡　ＳＢ50出土土器

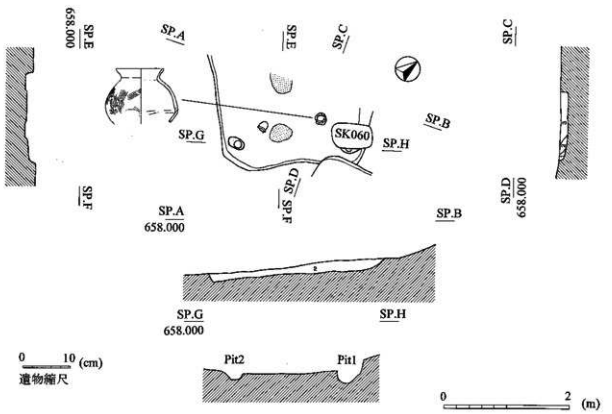
ＳＢ50（第382・383図）　　位置　②区Ⅲ－Ⅰ－12

検　出　ＳＢ45の床面を検出後、さらに床面下位に遺物包含層があることが土層観察用トレンチで見られたので、掘り下げたところ、平坦面と立ち上がりが認められた。

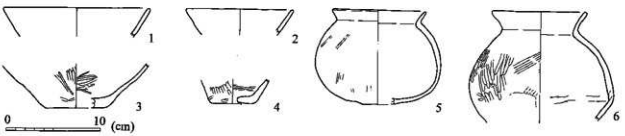
構　造　2.2×2.1ｍの歪んだ四角形。中央に焼土が集中する掘り込み、地床炉。Pit１～４は柱穴か。ＳＢ45に切られる。

遺　物　１～８櫛歯状工具による条線。ほとんどが半截竹管状工具を結束したものか。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ｃ式



第384図　竪穴住居跡　ＳＢ15・土器出土状況



第385図　竪穴住居跡　ＳＢ15出土土器

(2)　古墳時代

ＳＢ15（第384・385図）　　位置　②区Ⅲ－Ｌ－5

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ暗褐色土の略方形の落ち込みが見られた。軸にそって土層観察用のトレンチを設定したところ、立ち上がりと床面が検出された。

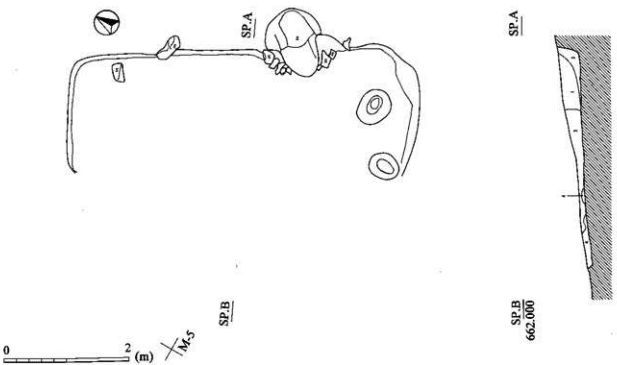
構　造　現存2.4×1.6ｍの長方形。北東半分は削平されて床面も残っていない。カマドはない。焼土の集中が2ヶ所検出された。地床炉か。中世ＳＢ14、時期不詳ＳＫ060に切られ、時期不詳ＳＫ061を切る。床面で検出された2基の土坑は柱穴。

遺　物　1～6非ロクロ成形土師器。1・2壺ないし甕口縁。3壺の底部か。4甑。5・6小型壺。

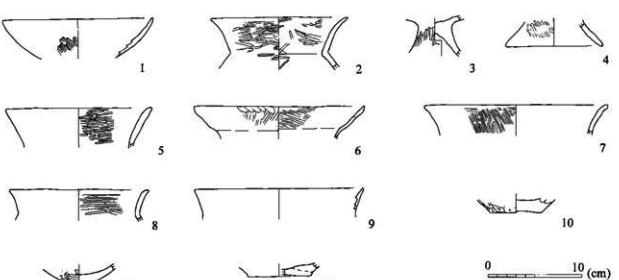
時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ18（第386・387図）　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－25・Ｍ－5

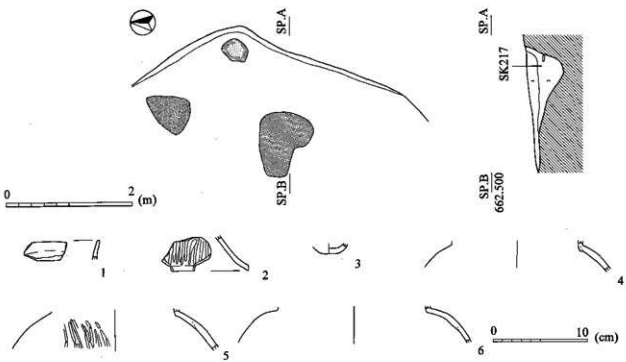
検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ黒褐色土の略長方形の落ち込みと土器の集中が見ら



第386図　竪穴住居跡　ＳＢ18



第387図　竪穴住居跡　ＳＢ18出土土器



第388図　竪穴住居跡　ＳＢ19・出土土器

れた。軸に沿って土層観察用のトレンチを設定したところ、立ち上がりと床面が検出された。

構　造　北東一南西に軸をもつ現存5.6×2.8ｍの長方形。北東辺の立ち上がりは明瞭であったが、南西半分は削平著しい。東隅の小土坑は柱穴か。

遺　物　1～12土師器。1坏。2壺。3器台の脚。4台付甕の脚。5～9甕ないし壺口縁。10～12同底部。

時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ19（第388図）　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－15・20

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ黒色土の落ち込みと焼土や炭の集中が見られた。土層観察用のトレンチを設定したところわずかに平坦面と立ち上がりが認められた。

構　造　立ち上がりと床面、焼土、炭の集中とが検出されたところから住居跡と判断した。全体に削平が著しい。時期不詳ＳＫ217を切る。

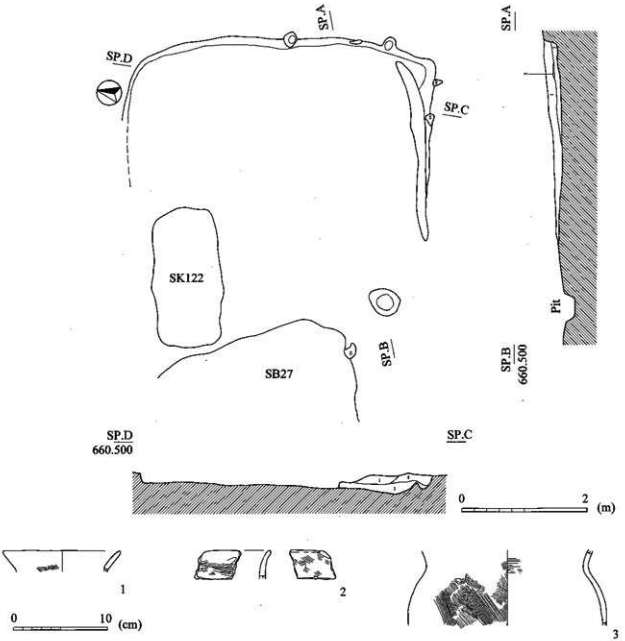
遺　物　1～6土師器。1甕か。2器台脚。3手捏土器。4～6壺の胴部上半。

時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ29（第389図）　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－5・10

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査中に方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿って土層観察用のトレンチを設定したところ平坦面と立ち上がりが認められた。

構　造　北西一南東に軸をもつ現存4.9×3.2ｍの方形。南西半分の削平が著しい。南隅の小土坑が本住居跡の柱穴と考えられるので、北西一南東方向が長い。また南辺には周溝が検出された。中世ＳＢ27・ＳＫ



第389図　竪穴住居跡　ＳＢ29・出土土器

122に切られる。

遺　物　１～３土師器。１・２外面ハケ目調整の甕か。３内外面ハケ目調整の甕。

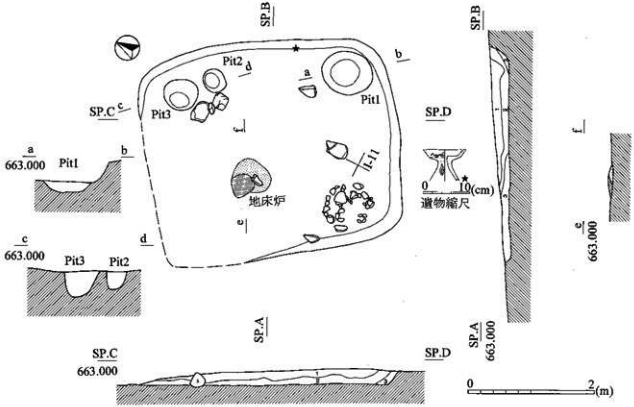
時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ40（第390・391図）　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－10・Ｉ－６

検　出　表土除去後、ローム層直上に方形の黒色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ、立ち上がり、平坦面と焼土集中が検出された。

構　造　北西―南東に長軸をもつ4.0×3.4ｍの長方形。東隅が削平される。北隅と東隅に柱穴が検出される。また住居跡中央に石を伴うややくぼんだ焼土集中部分がある。地床炉。

遺　物　１～４土師器。１坏。２器台。３小型精製壺。４甑。



第390図　竪穴住居跡　ＳＢ40・土器出土状況

第391図　竪穴住居跡　ＳＢ40出土土器

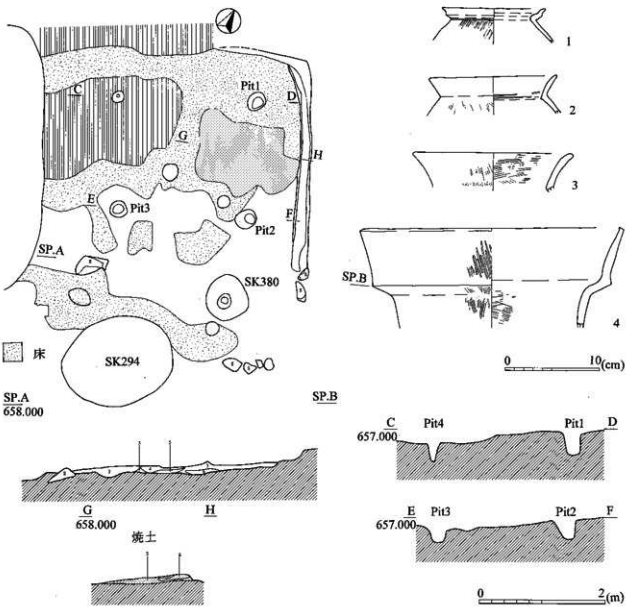
時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ41（第392図）　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－13・17

検　出　表土除去後、精査したところ方形の黒褐色土の落ち込みが見られ、さらに掘り下げたところ焼土の広がりと堅緻な平坦面が検出された。耕作などによる削平が著しく、床面が一部露出している状況と考えられた。さらに土層観察用のベルトを設定し、焼土と床面の範囲を検出した。

構　造　北西－南東に軸をもつ現存4.4×3.6ｍの方形。床面は削平が著しいが全体に堅緻な平坦面が広がっている。北東部分に焼土と灰が集中している。地床炉か。明確な柱穴はPit１～４。ＳＫ380内のPitも柱穴か。東辺に周溝が検出された。古墳時代ＳＫ393を切り、中世ＳＢ42・ＳＫ294ほか現代の人参小屋の柱穴に切られる。全体に耕作による撹乱、削平が著しい。

遺　物　１～４土師器。１「Ｓ」字状口縁の台付甕。２・３甕。４有段の壺。ウマの歯（上顎・左）が出



第392図　竪穴住居跡　ＳＢ41・出土土器

土。

時　期　古墳時代前期後業

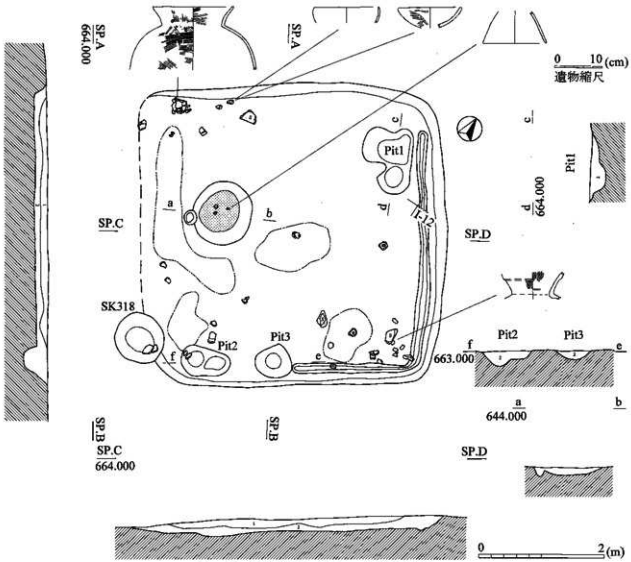
ＳＢ43（第393・394図）　　位置　②区Ⅲ－Ⅰ－11・12

検　出　表土除去後、ローム層直上に方形の黒色土の落ち込みが見られ、精査したところ土師器片が多く検出された。軸にそって土層観察用のトレンチを設定し、立ち上がりと平坦面が検出された。

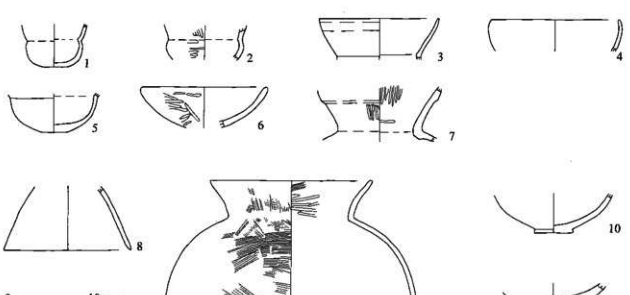
構　造　北西ー南東に軸をもつ4.8×4.8ｍの方形。床面は部分的に堅緻な部分がある。周溝が北東から南東辺に巡る。中央やや西側の径0.9ｍ深さ0.1ｍの浅い土坑が地床炉。南西辺が削平される。古墳時代ＳＫ318に切られる。

遺　物　1～11土師器。1・2・5小型精製壺。3壺。4坏か。6器台か。7壺。9外面ハケ目調整の球胴窪ないし壺。

時　期　古墳時代前期後業



第393図　竪穴住居跡　ＳＢ43・土器出土状況



第394図　竪穴住居跡　ＳＢ43出土土器

ＳＢ46（第395・396図）　　位置　①区Ｉ－Ｕ－23

検　出　表土除去後、ローム層直上を精査したところ略方形の暗褐色土の落ち込み、炭、焼土の散在が見られた。精査の段階で複数の遺構が切り合っていることが想定されたので、これらの遺構を切るように土層観察用のトレンチを設定して掘り下げ、遺構の切り合いを確認した上で、立ち上がりと平坦面を検出した。

構　造　北西－南東に軸をもつ現存5.0×4.2ｍの方形。床面は部分的に貼床が広がる。また床面直上に焼土の広がりと炭化材が検出されたことから、焼失家屋とも考えられる。炭化材はほぼ住居跡の各辺に直交する形に位置しており、垂木材だろう。なお本住居跡の炭化材の樹種同定を行っている（本章第５節参照）。時期不詳ＳＫ400を切り、中世ＳＫ242・243・245・246・359に切られる。

遺　物　１～３土師器。１高坏。２有段壺口縁部。３有段壺頸部から胴部。いずれも床面直上から出土。

時　期　古墳時代前期後葉

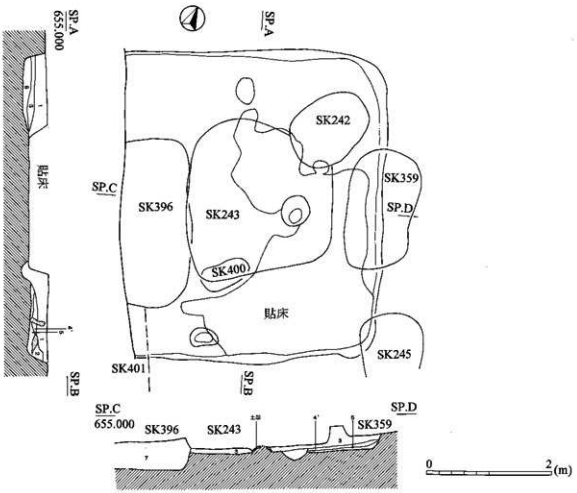
ＳＢ48（第397・398図）　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

検　出　表土除去後、ローム層直上を精査したところ方形の褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げ、立ち上がりと平坦面が検出された。

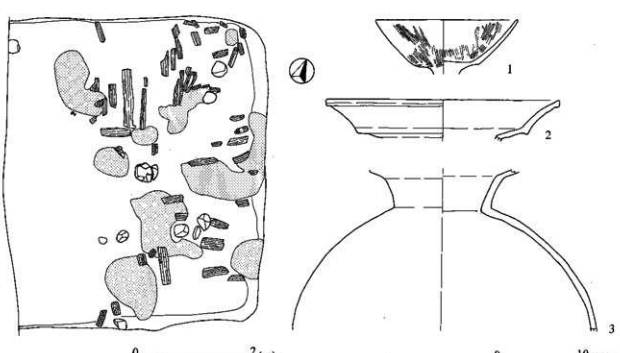
構　造　北東－南西に軸をもつ現存3.6×2.2ｍの方形。北辺の立ち上がりは明確だが、南半分は削平著しい。縄文時代ＳＢ49を切る。

遺　物　１～４土師器。１高坏か。２外面ハケ目調整、内面ミガキ調整の壺ないし甕。３甑。

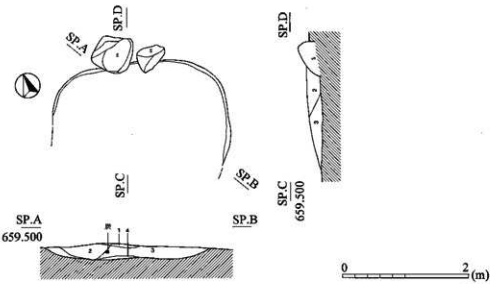
時　期　古墳時代前期か



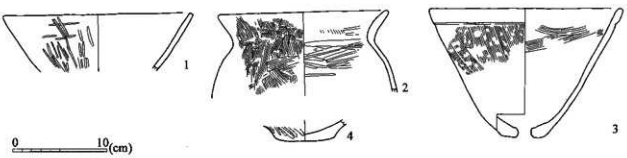
第395図　竪穴住居跡　ＳＢ46



第396図　竪穴住居跡　ＳＢ46焼土炭化材分布・出土土器



第397図　竪穴住居跡　ＳＢ48



第398図　竪穴住居跡　ＳＢ48出土土器

(3)　古代

ＳＢ01（第399・400図）　　位置　①区Ｉ－Ｑ－18

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ、土器片が散在する方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。軸にそって土層観察用のトレンチを設定し掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。

構　造　北東一南西に軸をもつ現存4.0×2.4ｍの方形。床面は比較的容易に検出できた。東辺の立ち上がりは明瞭だが、西半分は削平著しい。石を心材にしたカマドが東辺ほぼ中央に位置する。

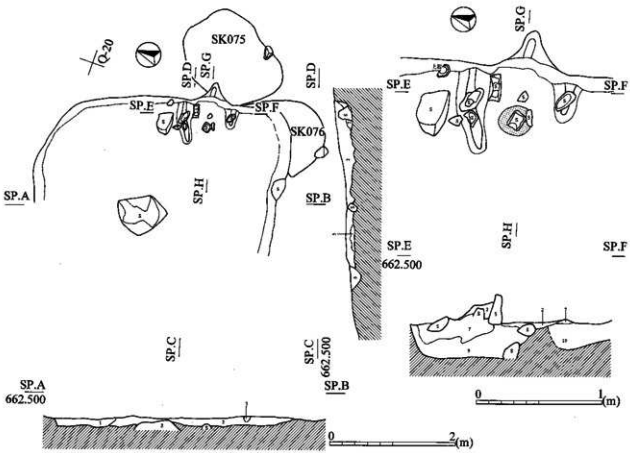
遺　物　１土師器坏。２黒色土器坏。３～５土師器甕。３底部ケズリ成形。４ロクロ成形。５外面並行タタキ調整。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後

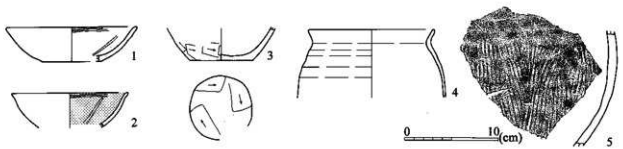
ＳＢ02（第401図）　　位置　①区Ｉ－Ｑ－17・22

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ、方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。軸にそって土層観察用のトレンチを設定し掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。

構　造　東一西に軸をもつ現存3.2×3.0ｍの方形。東辺の立ち上がりは明瞭だが、西半分は削平著しい。



第399図　竪穴住居跡　ＳＢ01・カマド



第400図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器

石組みのカマドが東辺中央に検出された。カマドの前方に散在する角礫群もこのカマドの構築材であったと考えられ、カマドは破壊された状況であるが、両袖や煙道は遺存している。時期不詳ＳＫ073と縄文時代ＳＫ087を切る。

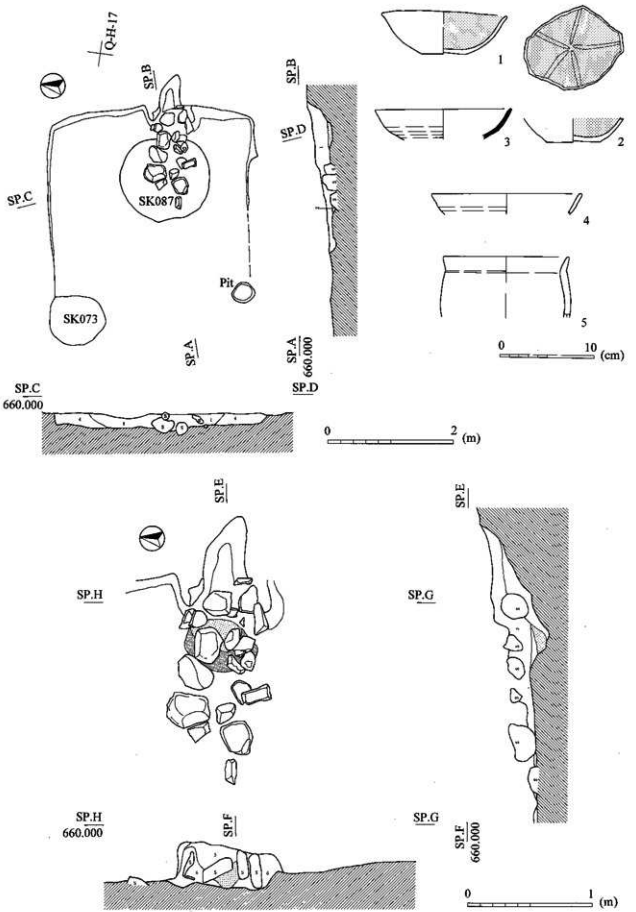
遺　物　1・2黒色土器坏。3須恵器坏。4土師器坏。5土師器甕。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後

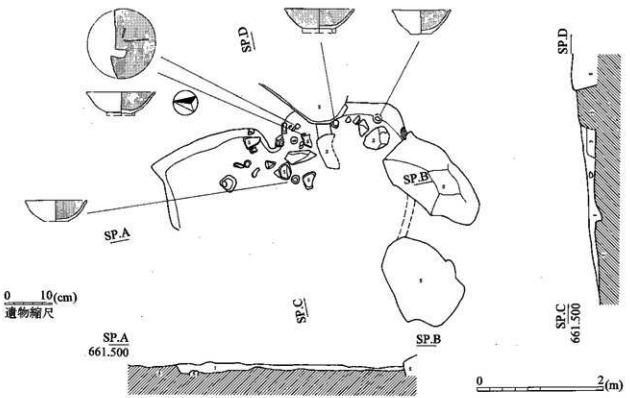
ＳＢ03（第402～404図）　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－24・Ⅴ－4

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ、方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。軸にそって土層観察用のトレンチを設定し掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。

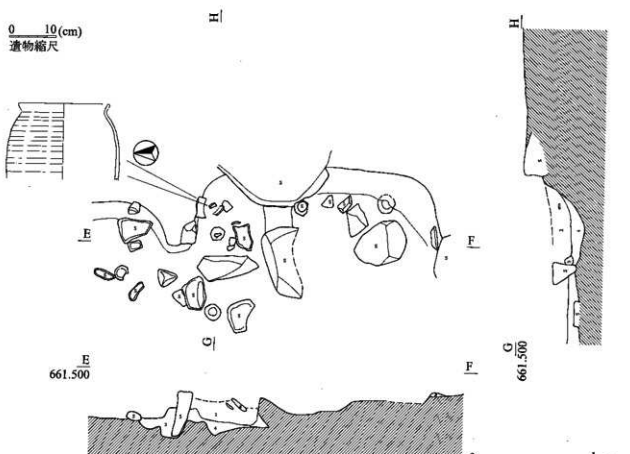
構　造　北西－南東に軸をもつ現存3.9×2.0ｍの方形。北東側の立ち上がりは明瞭だが、南西側は削平著



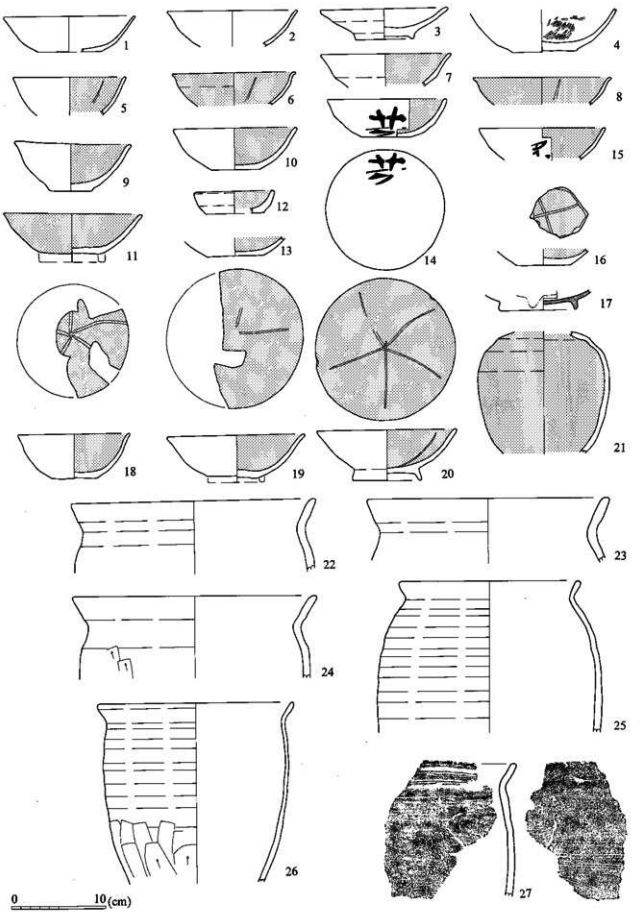
第401図　竪穴住居跡　ＳＢ02・カマド・出土土器



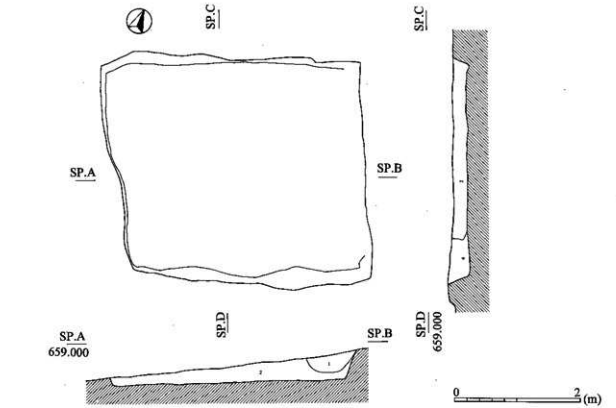
第402図　竪穴住居跡　ＳＢ03・土器出土状況



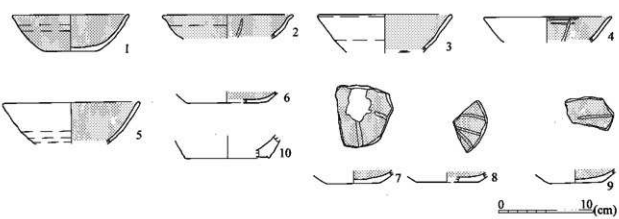
第403図　竪穴住居跡　ＳＢ03カマド・土器出土状況



第404図　竪穴住居跡　ＳＢ03出土土器



第405図　竪穴住居跡　ＳＢ05



第406図　竪穴住居跡　ＳＢ05出土土器

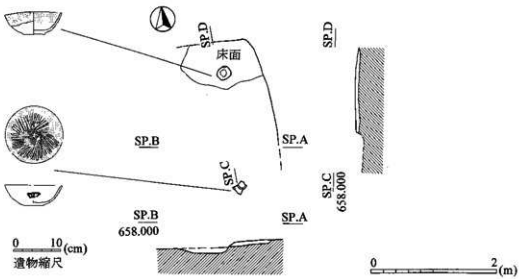
しい。住居跡北隅にある小土坑は柱穴か。カマドは北東辺中央に位置する。カマド周辺に散在する角礫はカマドの構築材と考えられる。

遺　物　1・2土師器坏。3土師器皿。5～16・18～21黒色土器。5～11・13～16・18～20坏ないし椀。14・15墨書土器。14「十十万」。15「遣」か。12皿。21壺。17灰釉陶器皿。22～27ロクロ成形の甕。26胴部下半に縦位ケズリ調整が見られる。

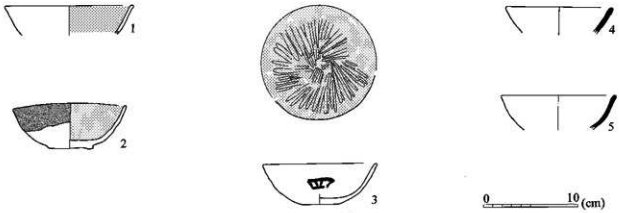
時　期　平安時代中期　佐久編年10段階

ＳＢ05（第405・406図）　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－1・2

検　出　表土除去後、ローム層直上で精査したところ、方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。軸にそっ



第407図　竪穴住居跡　ＳＢ07・土器出土状況



第408図　竪穴住居跡　ＳＢ07出土土器

て土層観察用のトレンチを設定して掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。

構　造　北東－南西に長軸をもつ3.9×3.5ｍの方形。立ち上がりも直で、明瞭であり、平坦面も比較的堅緻であった。しかし、柱穴、周溝やカマドが検出されず、住居跡かどうかは分からないが、規模から建物跡であると想定した。

遺　物　１～９黒色土器坏。10土師器坏か。

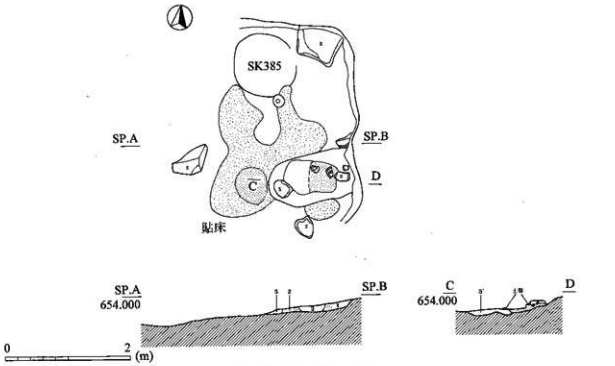
時　期　平安時代中期　佐久編年８～10段階

ＳＢ07（第407・408図）　　位置　①区Ｉ－Ｖ－６

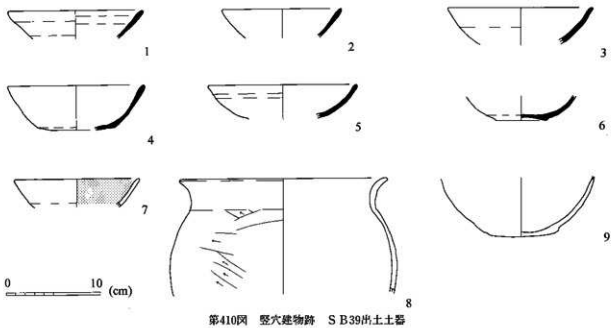
検　出　表土除去後、黒褐色土の落ち込みの中から略完形の土器が出土したため、精査したところ、わずかに平坦面と方形のコーナーが検出された。

構　造　ほぼ南－北に軸をもつと思われる現存2.2×1.5ｍ。削平著しく全体の平面形は不明だが、コーナーの形状から推測して方形を呈するか。

遺　物　１～３黒色土器坏。３墨書土器「四」。４・５須恵器坏。



第409図　竪穴建物跡　ＳＢ39



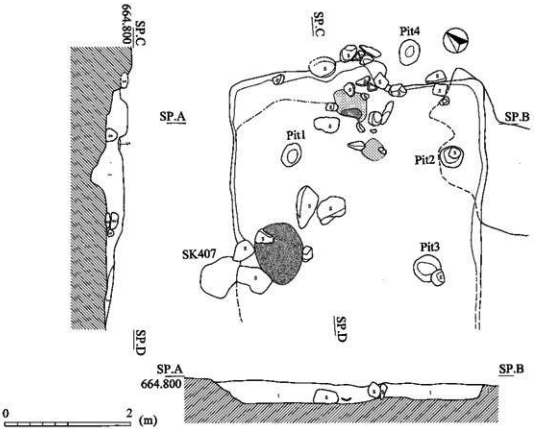
第410図　竪穴建物跡　ＳＢ39出土土器

時　期　平安時代中期　佐久編年８～10段階

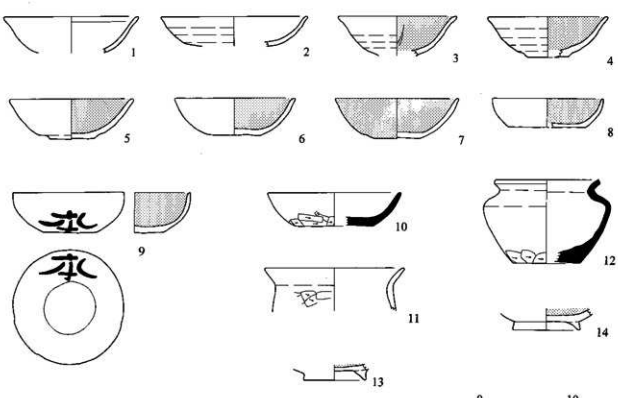
ＳＢ39（第409・410図）　　位置　①区Ｉ－Ｕ－６

検　出　表土除去後、暗褐色土の落ち込みが見られたので、土層観察用のベルトを設定して精査したところ、堅緻な平坦面が検出された。さらにこの平坦面を追っていくと、焼土集中部分が検出され、平坦面の形状も略方形になることが認められた。

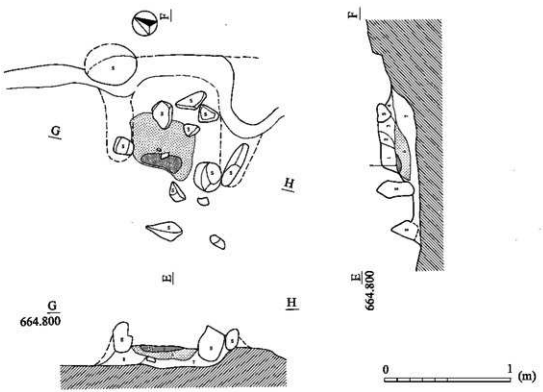
構　造　南一北に軸をもつ現存3.2×2.6ｍの方形。床面は貼床であるが、全体に削平著しく遺存状況は悪い。また東辺にカマドが存在しており、カマド内部およびその周辺に焼土集中がある。縄文時代ＳＫ385



第411図　竪穴住居跡　ＳＢ51



第412図　竪穴住居跡　ＳＢ51出土土器



第413図　竪穴住居跡　ＳＢ51カマド

を切る。

遺　物　1～6須恵器坏。7黒色土器坏。8・9土師器。8口縁断面が「コ」字状、胴部にヘラケズリ調整を施す甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年6段階前後

ＳＢ51（第411～413図）　　位置　②区Ⅲ－Ⅰ－15・20

検　出　表土除去後、方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。

構　造　北東一南西に長軸をもつ現存4.4×4.0mの長方形。北東辺の立ち上がりは明確だが、南西辺の削平が著しい。床面は部分的に焼土や炭が散在する部分は明確にとらえられるが、全体的に軟質で不明確。北東辺中央にカマドが位置し、焼土集中部（火床）や周辺に構築材と考えられる礫が散在する。Pit 1～3が柱穴。

遺　物　1・2土師器坏。3～9黒色土器坏。9墨書土器「本」。10須恵器坏。底部付近手持ちヘラケズリ調整。12同壺。底部付近手持ちヘラケズリ調整。11土師器甕。13・14黒色土器皿ないし椀。

時　期　平安時代前期から中期　佐久編年8・9段階

(4)　中世

ＳＢ06（第414・415図）　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－6

検　出　表土除去後、方形の黒褐色土の落ち込みが見られ、軸に沿って土層観察用のトレンチを設定し掘り下げた。立ち上がりと平坦面が認められた。また覆土中に上下2層の灰層の広がりが認められ、とくに上位の灰層は層厚も厚く、面的にも広がる。

構　造　北西－南東に長軸をもつ3.6×3.4ｍの方形。南西辺が若干削平されるが、立ち上がりは明瞭。床面も比較的堅い。柱穴は北西辺および南東辺のそれぞれ中央の小土坑。カマドや炉はないが、上屋の存在が想定できるので、竪穴建物跡とした。床面の上位に2面、灰の広がりが観察された。とくに上位灰層の下面は平坦かつ堅くしまっており、本建物跡の本来の床面ではないが、埋没過程で一旦生活面をなしていて、その段階で何らかの灰が堆積するような現象がおこったものと考えられる。

遺　物　1・3～6土師器。1・3皿か。4～6内耳鍋。2黒色土器皿か。欠損した銅銭が1枚出土。

時　期　中世後期

ＳＢ14（第416図）　　位置　②区Ⅲ－Ｌ－5

検　出　表土除去後、ローム上層で精査したところ、方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げた。遺構の切り合いを確認し、さらに立ち上がりと平坦面を検出した。

構　造　北西－南東に長軸をもつ2.3×2.0ｍの長方形。南西辺が削平著しいが、立ち上がりは直。床面は平坦であるが、堅くはない。ＳＫ045は本建物跡の柱穴と思われるが、これに対応する柱穴不明。古墳時代ＳＢ15を切る。

遺　物　1施釉陶器（古瀬戸）四耳壺。

時　期　中世後期　14世紀後半か

ＳＢ18（第417・418図）　　位置　②区Ⅲ－Ｌ－4ほか

検　出　表土除去後、ローム上層で精査したところ、方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げ、立ち上がりと平坦面を検出した。

構　造　北東－南西に長軸をもつ4.4×3.4ｍの長方形。南東側がやや削平される。床面は堅くはないが明瞭である。また北西、北東、南東辺に板状の石を壁状に配置している。柱穴は6基。

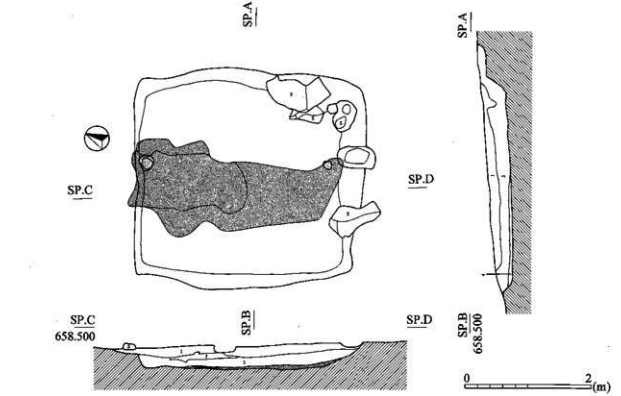
遺　物　1土師器内耳鍋。2施釉陶器（古瀬戸）卸皿。鉄製刀子（第477図2）、袋状鉄斧（同3・4）、銅製金具（同6）が出土。調度品の「引き手」「手掛け」か。銅銭紹聖元宝、皇宋通宝、政和通宝、景徳通宝、明道元宝、元祐通宝、至和元宝、元豊通宝（第478図1～8）計8枚出土。

時　期　中世後期　15世紀か

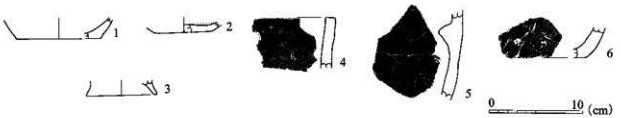
ＳＢ23（第419・420図）　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－25

検　出　表土除去後、ローム上層で精査したところ、黒褐色土の落ち込みが見られた。複数の遺構の切り合いが平面形より想定されたので、切り合い関係を判別するために土層観察用のトレンチを設定し掘り下げ、遺構の切り合いを確認し、立ち上がりと平坦面を検出した。

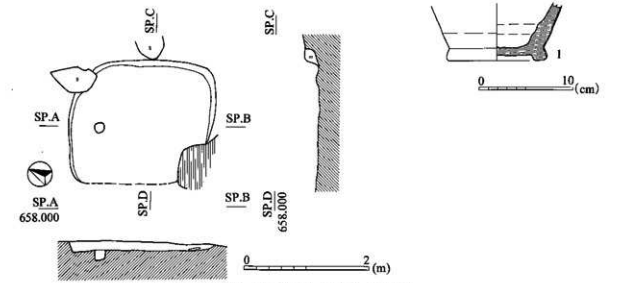
構　造　北東－南西に長軸をもつ3.6×3.0ｍの長方形。立ち上がり直。床面は平坦、北東および南西側に段がある。柱穴は8基。中央に円形の土坑と伴うように灰の広がりがある。地床炉か。ＳＢ24・25を切る。



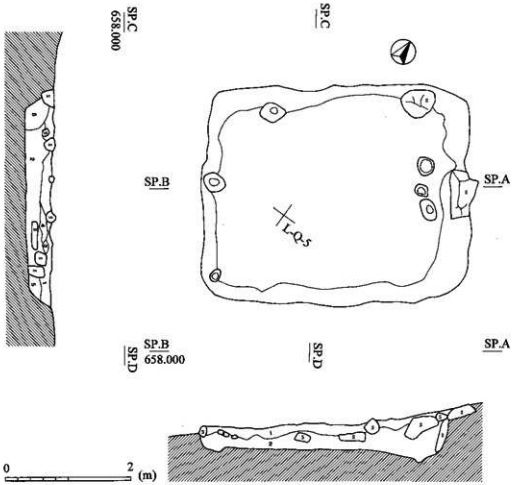
第414図　竪穴建物跡　ＳＢ06



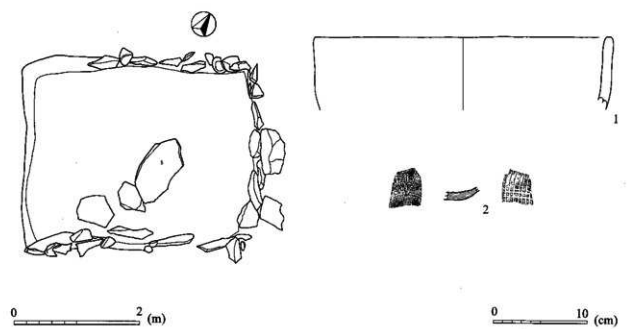
第415図　竪穴建物跡　ＳＢ06出土土器



第416図　竪穴建物跡　ＳＢ14・出土土器



第417図　竪穴建物跡　ＳＢ16



第418図　竪穴建物跡　ＳＢ16石組・出土土器

遺　物　1土師器内耳鍋。2土師器皿。3黒色土器。
時　期　中世後期

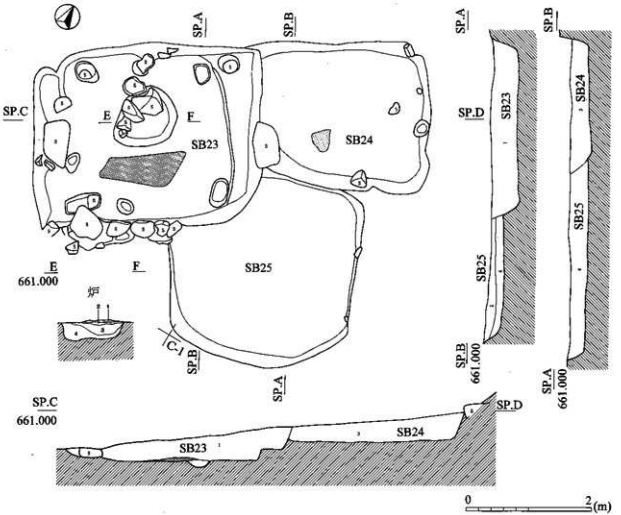
SB24（第419・421図）　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－25
検　出　SB23と同じ。
構　造　北東一南西に長軸をもつ現存2.9×2.4mの長方形。立ち上がり直。床面は平坦。明確な柱穴は検出されなかった。竪穴南側に焼土集中がある。地床炉か。中世SB25を切り、中世SB23に切られる。
遺　物　1・2土師器皿。
時　期　中世後期

SB25（第419図）　位置　①区Ⅰ－W－21
検　出　SB23と同じ。
構　造　北東一南西に軸をもつ現存3.1×3.0mの方形。立ち上がり直。床面は平坦。明確な柱穴は検出されなかった。中世SB23・24に切られる。遺構の年代を特定できる遺物は出土していないが、中世SB23・24と長軸の向きが一致、覆土の状況が酷似し、切り合っている。
時　期　中世後期か

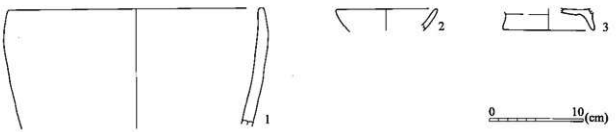
SB26（第422図）　位置　①区Ⅰ－W－21・Ⅲ－C－1
検　出　表土除去後、ローム層直上で方形の暗褐色土の落ち込みが見られ、軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定した。掘り下げたところ立ち上がりと平坦面が検出された。
構　造　北西一南東に軸をもつ3.1×2.9mの方形。床面は平坦。明確な柱穴は検出されない。遺構の年代を特定できる遺物は出土していないが、中世SB23などと平面形の軸の方向が一致することと覆土の状況が酷似する。
時　期　中世か

SB27（第422図）　位置　①区Ⅲ－B－4ほか
検　出　SB26と同じ。
構　造　北西一南東に軸をもつ3.2×2.7mの方形。立ち上がり直。床面は平坦。柱穴に想定できる小土坑は6基検出されたが、うち本建物跡の長軸に沿うように配置している小土坑3基が主柱穴と思われる。
遺　物　図化できるような遺物は出土していないが、土師器片が出土している。
時　期　中世か

SB32（第423図）　位置　①区Ⅲ－B－21
検　出　表土除去後、ローム層直上で方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ堅緻な平坦面、焼土集中部分が検出され、これらを追って本遺構の範囲を確認した。
構　造　北東一南西に軸をもつ現存2.7×1.1mの方形。立ち上がりは北東辺がかろうじて検出された。中央に堅緻な平坦面が広がる。さらに北側には焼土集中があり、緩やかに床面よりへこんでいる。地床炉。明確な本遺構に伴う柱穴は検出されなかった。中世SK231を切り、中世ST02に切られる。
遺　物　1土師器皿。
時　期　中世

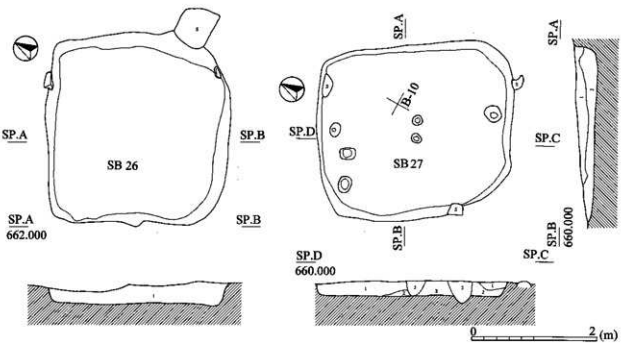


第419図　竪穴建物跡　ＳＢ23・24・25

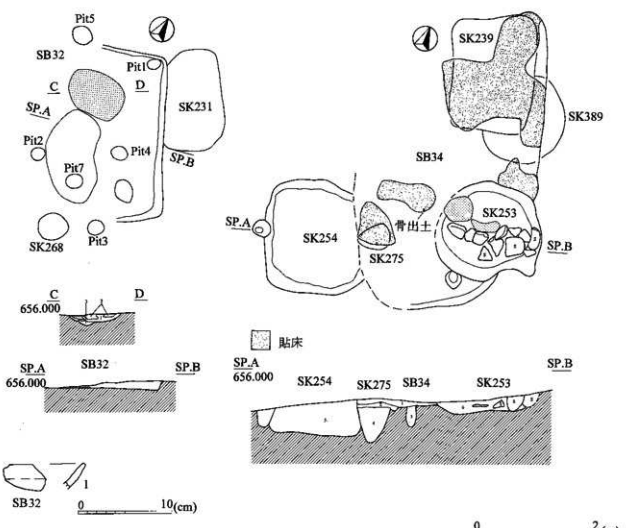


第420図　竪穴建物跡　ＳＢ23出土土器

第421図　竪穴建物跡　ＳＢ24出土土器



第422図　竪穴建物跡　SB26・27



第423図　竪穴建物跡　SB32・同出土土器・SB34

ＳＢ33（第425図）　　位置　①区Ⅲ－Ａ－９

検　出　表土除去後、ローム層直上で暗褐色土の落ち込みが見られた。平面形から複数の遺構の切り合いが想定されたので、土層観察用のトレンチを設定し掘り下げた。土層断面より平坦面、柱穴と思われる小土坑断面、立ち上がりが認められ、竪穴建物跡と判断した。しかし、ＳＢ33が切っていることになるＳＢ36とほぼ平面形が一致していると考えられ、面的に掘り下げた段階では厳密な平面形は分からなかった。

構　造　ＳＢ36と形態がほぼ一致するとすれば、北東―南西に軸をもつ4.3×2.9ｍ内外の長方形。少なくとも２基の柱穴がある。床面は土層断面で見られただけで、面的にはとらえられなかった。中世ＳＢ36・38を切る。

遺　物　１・２土師器皿。１灯明皿。３外面並行タタキの須恵質陶器。

時　期　中世

ＳＢ34（第423図）　　位置　①区Ⅲ－Ａ－４・５

検　出　ＳＢ32と同じ。

構　造　北西―南東に軸をもつ現存4.6×2.9ｍの方形。立ち上がりはかろうじて北東辺が検出された。また、部分的に堅緻な平坦面が広がる。中世ＳＫ239・389を切り、中世ＳＫ253・254に切られる。

遺　物　図化できるような遺物はないが、土師器内耳鍋、瓦質土器、施釉陶器（古瀬戸）平碗が出土。

時　期　中世後期

ＳＢ35（第424図）　　位置　①区Ⅰ－Ｕ－19ほか

検　出　表土除去後、ローム層直上で暗褐色土の落ち込みが見られた。精査したところ平面形よりいくつかの遺構が切り合っていることが想定されたので、土層観察用のトレンチを設定し掘り下げた。切り合いを確認した上で、立ち上がりと平坦面が検出され、さらに平坦面を追っている過程で柱穴も２基検出された。規模、形状、柱穴をもつことから本遺構を竪穴建物跡と判断した。

構　造　北西―南東に軸をもつ現存2.9×2.8ｍの隅丸方形。平坦面はＳＫ264に切られているため、東辺、南辺だけが残存している。しかし本遺構の軸にそって柱穴の底が残っていた。とくに南側の柱穴は１辺20㎝内外の方形。打ち込み式か。

切り合い　時期不詳ＳＫ260を切るが、中世ＳＫ264・265・411に切られる。また本遺構を切るＳＫ264からは土師器内耳鍋、陶器片が出土しており、覆土の状況も類似する。土坑としたＳＫ260・264・265・411も、立ち上がりはいずれも比較的直である。そして平面形もおおよそ一致し、覆土の状況も酷似するので、一連の建物の建て替えとも考えられる。しかし、柱穴を伴い、平坦面がある程度検出できたのは本遺構のみであり、よってこれのみを竪穴建物跡とした。

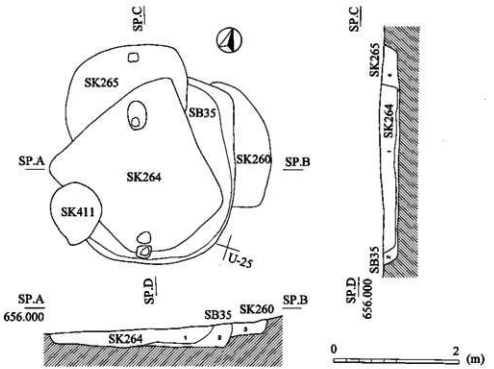
遺　物　図化できるような遺物はないが、ススが付着した板状の石が出土。

時　期　中世後期か

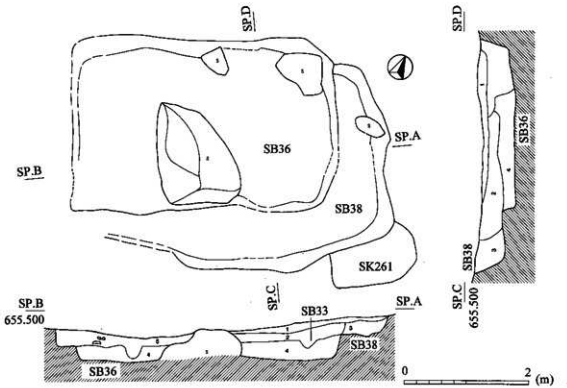
ＳＢ36（第425図）　　位置　①区Ⅲ－Ａ－９

検　出　ＳＢ33の床面を検出するために、土層観察用のトレンチを掘り下げたところ、ＳＢ33に切られる形でさらに下位に平坦面が検出された。ＳＢ33調査後、面的に掘り下げた。ＳＢ33と軸がそろっているが、土層断面の観察でＳＢ33の床面や柱穴が認められたこと、また南西辺の位置が明らかに異なることから、別の竪穴建物跡と判断すべきと考えた。

構　造　北東―南西に軸をもつ4.3×2.9ｍの長方形。中世ＳＢ38・ＳＫ261を切り、中世ＳＢ33に切られる。



第424図　竪穴建物跡　ＳＢ35



第425図　竪穴建物跡　ＳＢ33・36・38

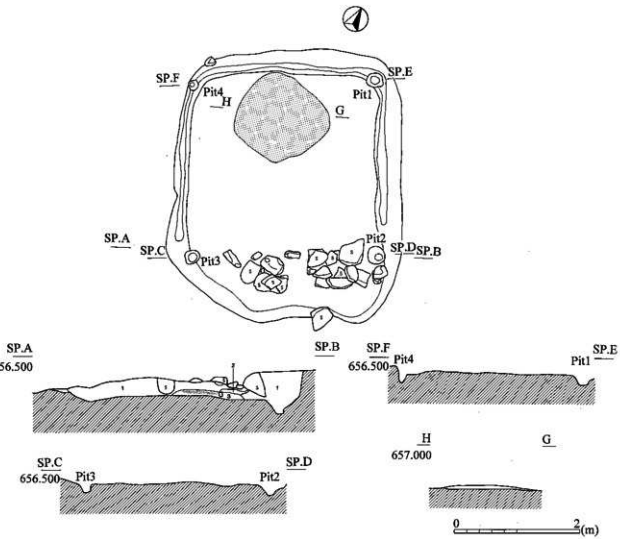
第426図　竪穴建物跡　ＳＢ33出土土器

遺　物　時期を特定できるような遺物の出土はない。
時　期　中世

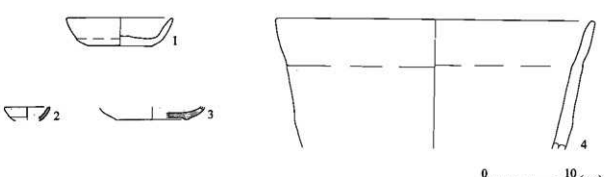
ＳＢ38（第425図）　　位置　①区Ⅲ－Ａ－９
検　出　ＳＢ33・36の切り合いを判断するための土層観察用トレンチの断面に、平坦面と立ち上がりが見られた。ＳＢ36床面調査後、土層観察用ベルトを残して面的に掘り下げた。
構　造　切り合いで南西や北西辺はほとんど分からないが現存4.0×2.9ｍの長方形。中世ＳＫ261を切り、中世ＳＢ33・36に切られる。長軸はＳＢ33・36とほぼ一致する。
遺　物　時期を特定できるような遺物の出土はない。
時　期　中世

ＳＢ42（第427・428図）　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－16・17
検　出　表土除去後、古墳時代ＳＢ41を検出する際に、方形の黒褐色土の落ち込みが切り合っている状況が見られた。土層観察用のトレンチを設定して、掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。よって、土層観察用のベルトを残して掘り下げた。
構　造　北西－南東に長軸をもつ4.3×3.7ｍの長方形。床面は堅緻ではないが、平坦で明確。立ち上がりは若干南東辺が削平されている。柱穴は各コーナーに１基ずつ計４基ある。南西、北西、北東辺に周溝が巡る。周溝の巡らない南西辺には角礫の石組みがある。北東辺中央に焼土集中があり、地床炉。古墳時代ＳＢ41を切る。内耳鍋の形態やカマドをもたない竪穴建物跡という状況から考えると、本遺構は近世に下るとはいえない。よって鉄釉の猪口、土瓶は混入とすべきか。
遺　物　１土師器皿。２施釉陶器（鉄釉）猪口。３同土瓶底。４土師器内耳鍋。口縁部は直立する。銅銭□永□宝（第478図９）出土。
時　期　中世後期か

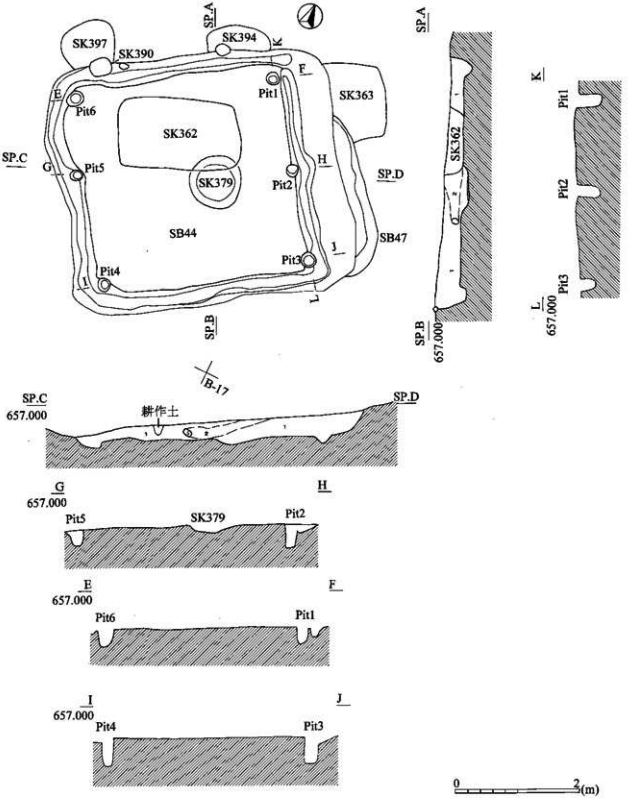
ＳＢ44（第429図）　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－11・12
検　出　表土除去後、ローム層直上で、方形の暗褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のトレンチを設定して掘り下げたところ、立ち上がりと平坦面が検出された。
構　造　北東－南西に長軸をもつ4.6×4.0ｍの長方形。周溝が全周し、Pit１～６は柱穴。中央のＳＫ379は本遺構に伴うもの。焼土などは検出されていないが、地床炉か。時期不詳ＳＫ363・394・397・中世ＳＢ47（土坑か）を切り、中世ＳＫ362に切られる。
遺　物　１土師器皿。
時　期　中世



第427図　竪穴建物跡　ＳＢ42



第428図　竪穴建物跡　ＳＢ42出土土器



第429図　竪穴建物跡　ＳＢ44・出土土器

2　土坑と土器・陶磁器

(1) 縄文時代前期（遺構図第430～432・441図、土器第433～440図）

ＳＫ005　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－4

1.5×1.4ｍ。11・13口唇外面に半截竹管状工具の連続刻み。無文の頸部、さらに胴部は横位回転縄文ＬＲ。12・19単節の回転縄文を地文とし、半截竹管状工具による並行沈線文。14～18・20・21半截竹管状工具の並行沈線文。22・23横位回転縄文ＲＬ施文。前期後葉諸磯ｂ式。黒曜石製石鏃（第468図46）出土。

ＳＫ006　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－3・4

北東一南西に長軸をもつ1.4×1.2ｍの楕円形。24・26・27・29半截竹管状工具の並行沈線文。26地文は横位回転縄文ＲＬ。28あげ底。30・31横位回転縄文。前期後葉諸磯ｂ式。千枚岩質粘板岩製石匙（第470図100）出土。

ＳＫ007　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－4

1.3～1.5ｍのやや歪んだ円形。32～35半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。千枚岩質粘板岩製打製石斧（第473図145）出土。

ＳＫ009　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－4・9

ほぼ南一北に長軸をもつやや歪んだ1.1×0.9ｍの長方形。36横位回転縄文ＬＲ。37～39半截竹管状工具の並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ011　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－9

東一西方向が最長、1.2×1.0ｍの台形。40横位回転縄文ＲＬ。41～43半截竹管状工具の並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ016　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－8

北東一南西が最長、1.2×1.1ｍ。44・45半截竹管状工具の並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ018　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－8

1.3×1.2ｍ。２基の土坑の切り合いか。遺物や土層断面では峻別できなかった。46外反した口唇部および口縁部と胴部の境界の屈曲に連続爪形刻みが施される。またこの２帯の連続爪形文を繋ぐように貝殻状突起が貼付される。47口縁端部が内反する横位回転縄文ＲＬ施文。49・52・54～56・58半截竹管状工具の並行沈線。52・59地文に単節横位回転縄文。54円形浮文貼付。50内外面ミガキ調整の有孔浅鉢。51・53・55・57・60単節横位回転縄文。前期後葉諸磯ｂ式。黒曜石製石鏃（第488図61）、同連続した微細な剝離を有する剝片（第471図114）出土。

ＳＫ022　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－11・16

ほぼ東一西が最長、1.6×1.2ｍ。61半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式か。

ＳＫ028　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－11

1.8～1.9ｍの略円形。62半截竹管状工具による並行沈線。63・64横位回転縄文ＲＬ。前期後葉諸磯ｂ

式。

ＳＫ030　　位置　①区Ⅰ－Ｈ－25

1.2ｍの歪んだ円形。65～69半截竹管状工具による並行沈線。70・71横位回転縄文。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ039　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－３

1.3～1.4ｍの略円形。72～74半截竹管状工具による並行沈線。72地文横位回転縄文ＲＬ。75横位回転縄文ＲＬ施文の浅鉢。

ＳＫ046　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－11・16

2.0×1.8ｍ。76・77横位回転縄文ＲＬ。前期後葉。

ＳＫ051　　位置　①区Ⅰ－Ｐ－20

南－北に長軸をもつ1.4×1.1ｍの略楕円形。78横位回転縄文ＬＲ。79縦位回転縄文ＬＲ。ともに胎土に繊維含。前期中葉か。

ＳＫ077　　位置　①区Ⅰ－Ｐ－25

北東－南西に長軸をもつ1.4×1.1ｍの卵形。１無文。２・３縦位回転縄文ＬＲ。１～３・６含繊維。４櫛歯状工具（４条）による斜格子並行沈線文。５指頭圧痕の残る薄手の無文。４・５木島式。前期前葉。

ＳＫ095　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－17

北西－南東に長軸をもつ2.7×1.4ｍの楕円形。81半截竹管状工具による並行沈線か。82半截竹管状工具による並行沈線。前期末か。

ＳＫ097　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－17

径1.2ｍの歪んだ円形。

ＳＫ128　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－17・18

径1.2～1.3ｍの略円形。80縦位回転縄文ＲＬ、胎土に繊維含。前期中葉か。

ＳＫ184　　位置　①区Ⅲ－Ｈ－24

径1.8ｍの略円形。84半截竹管状工具による並行沈線。

ＳＫ185　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－23ほか

径1.3～1.4ｍの略円形。85横位回転縄文ＬＲないしＲＬ、貝殻状突起貼付。86内外面ミガキ調整の有孔浅鉢。87・89・92・99単節回転縄文。88・90・91・93～98半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。黒曜石製石鏃（第468図49）出土。

ＳＫ187　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－22

径1.3～1.4ｍの略円形。100横位回転縄文ＲＬ。珪質頁岩製石匙（第470図107）出土。

ＳＫ188　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－23・Ｍ－３

1.9×1.7ｍ。101～105横位回転縄文。106・107半截竹管状工具による並行沈線。107地文に横位回転縄文ＲＬ。

ＳＫ189　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－22

南一北に軸をもつ現存2.8×2.7ｍの方形。西、東辺の削平著しい。108ナデ調整無文。109・116単節横位回転縄文。110～115半截竹管状工具による並行沈線。112地文に単節回転縄文。

ＳＫ191　　位置　②区Ⅲ－Ｉ－21・Ｎ－１

1.3×1.1ｍの不整形。117・121～123単節同転縄文。117・123横位回転結節縄文ＬＲ・ＲＬ。122縦位回転縄文羽状構成。118～120ナデ調整無文。124～127半截竹管状工具による並行沈線。

ＳＫ192　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－４

1.2×1.1ｍの略円形。128半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉。

ＳＫ195　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－３

1.2×1.1ｍの略円形。129外面、回転縄文か。130並行条線、かすかに指頭圧痕が残る。いずれも繊維を含まない。縄文時代前期ＳＫ197に切られる。

ＳＫ196　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－３

北東一南西が最長、2.6×1.8ｍ。131横位回転縄文ＬＲ・ＲＬ施文。132～138半截竹管状工具による並行沈線。132・138地文に単節回転縄文。133円形浮文貼付。139～141単節回転縄文。前期後葉諸磯ｂ式。黒曜石製スクレイパー（第469図80）出土。

ＳＫ197　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－３

1.6×1.4ｍの略楕円形。黒曜石製石鏃（第468図21・34）、同連続した調整のある剝片（第469図87）出土。図化できるような土器は出土していない。切っている縄文時代前期ＳＫ195の土層とも類似し、本遺構も縄文時代前期とした。

ＳＫ198　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－２

径1.8ｍの略円形。142～144半截竹管状工具による並行沈線。縄文時代前期後葉。

ＳＫ203　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－22

1.2～1.3ｍの略円形。145～148半截竹管状工具による並行沈線。146～148地文に横位回転縄文ＬＲ。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ210　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

北東一南西に長軸をもつ現存1.5×1.3ｍの楕円形。149・150半截竹管状工具による並行沈線。149地文回転縄文ＲＬ。151横位回転縄文ＬＲ。前期後葉諸磯ｂ式。黒曜石製石鏃（第468図６）、同石匙（第469図68）、千枚岩質硬砂岩製打製石斧（第473図142）出土。

ＳＫ213　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

1.1～1.2ｍの略円形。152～154半截竹管状工具による並行沈線。152・154地文に横位回転縄文ＲＬ。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ304　　位置　②区Ⅲ－Ⅰ－16

北東一南西に長軸をもつ1.5×1.4ｍの楕円形。155口縁部に爪形の連続刺突。胴部は横位ないし縦位回転縄文ＬＲ。156～159半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ305　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－８

北西一南東に長軸をもつ1.9×1.4ｍの楕円形。182～203半截竹管状工具による並行沈線。182～185「く」字状に屈曲する緩やかな波状口縁。196・200～203地文に単節横位回転縄文。202口縁は緩く屈曲し立ち上がる。波状口縁の波頂部には３個の突起がつく。頸部は横走する半截竹管状工具による並行沈線。胴部は同様の縦走する並行沈線文で区画された後、弧状並行沈線文が充填される。底部は粘土帯接合部分で破損している。前期後葉諸磯ｂ式。204～212単節横位回転縄文ＬＲ・ＲＬ。縦位ないし横位の羽状構成になるが、胎土にはいずれも繊維が含まれない。

ＳＫ306　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－７・８

径0.9～1.0ｍの略円形。160・161半截竹管状工具による並行沈線。162・163横位回転縄文ＲＬ・ＬＲ。いずれも胎土に繊維を含まない。前期後葉。

ＳＫ307　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－８

ほぼ南北に軸をもつ楕円形。164～167半截竹管状工具による並行沈線。165地文に横位回転縄文ＲＬ。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ308　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－19

径1.4～1.5ｍの略円形。168・170～173半截竹管状工具による並行沈線。169横位回転縄文ＲＬ。前期後葉諸磯ｂ式か。黒曜石製石匙（第470図104）出土。

ＳＫ309　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２・７

径1.3～1.4ｍの楕円形。174・175半截竹管状工具による並行沈線。174地文に横位回転縄文ＲＬ。前期後葉諸磯ｂ式。

ＳＫ310　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

北西一南東に軸をもつ2.1×1.3ｍの略楕円形。176横位ケズリ調整、無文。177・178単節回転縄文。

ＳＫ311　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－13

径1.9ｍの略円形。179・181半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉。

ＳＫ320　　位置　②区Ⅲ－Ⅰ－７

個別遺構図なし。0.2～0.3ｍの略円形。213半截竹管状工具による並行沈線。前期後葉。

ＳＫ322　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－22・Ｍ－２

北一南に軸をもつ2.1×1.4ｍの楕円形。214～218半裁竹管状工具による並行沈線。前期後葉。

ＳＫ331　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

北西一南東に長軸をもつ1.1×0.9ｍの略楕円形。219横位回転縄文ＲＬを施文後、並行沈線を施す。前期後葉諸磯ｂ式か。

ＳＫ332　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

径1.4～1.5ｍの略円形。220～222半裁竹管状工具の並行沈線。前期後葉。

ＳＫ335　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－２

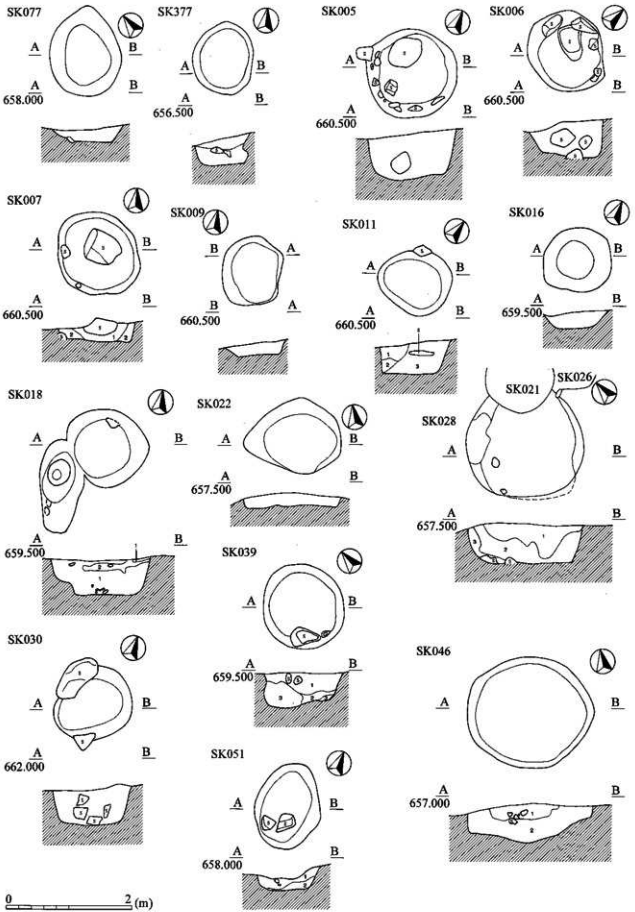
北東一南西が最長、1.9×1.8ｍ。223・225・226半裁竹管状工具の並行沈線。224横位回転縄文ＬＲ。黒曜石石核（第473図153）出土。

ＳＫ340　　位置　②区Ⅲ－Ｉ－12

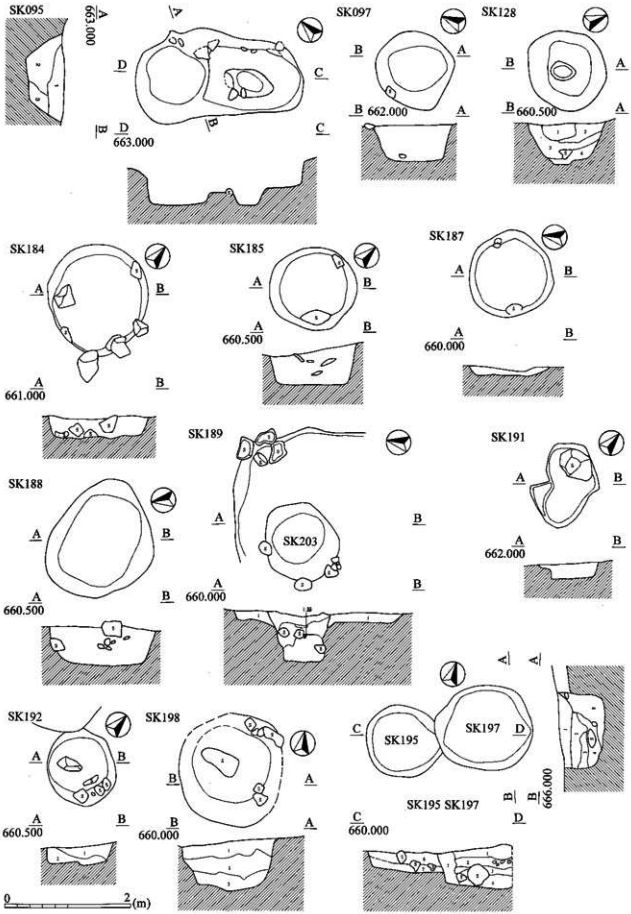
0.9～1.0ｍの略円形。227ナデ調整。無文。228・229横位回転縄文ＬＲを施文後、半裁竹管状工具の並行沈線。230横位回転縄文Ｌ。

ＳＫ377　　位置　①区Ｉ－Ｕ－25

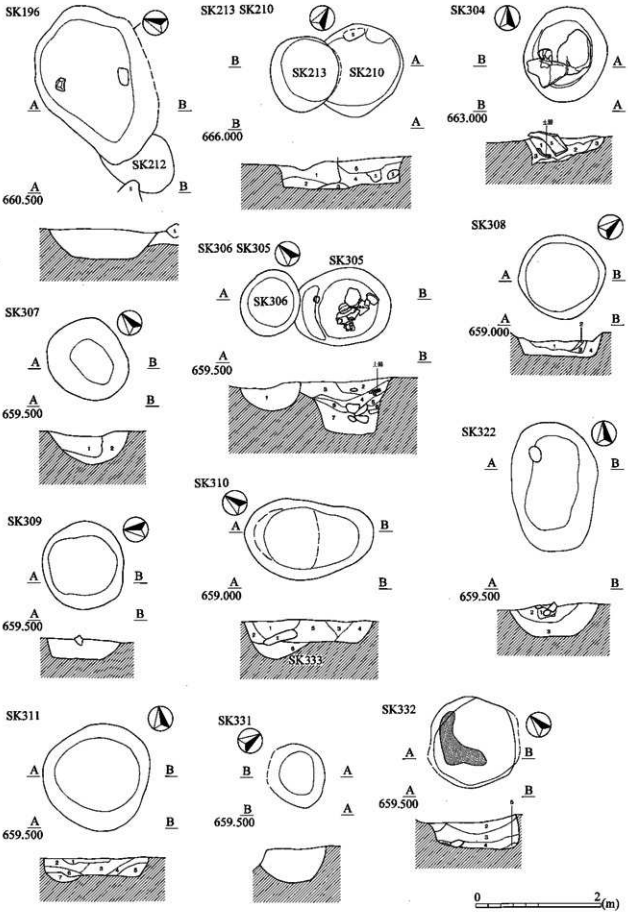
ほぼ南一北に長軸をもつ楕円形。７～10いずれも薄手で繊維を含まず内面に指頭圧痕を残す。比較的堅緻。７貼付隆帯を爪で刻む。８・９低隆帯貼付、櫛歯状工具の条線文。10無文。以上木島式。前期前葉。



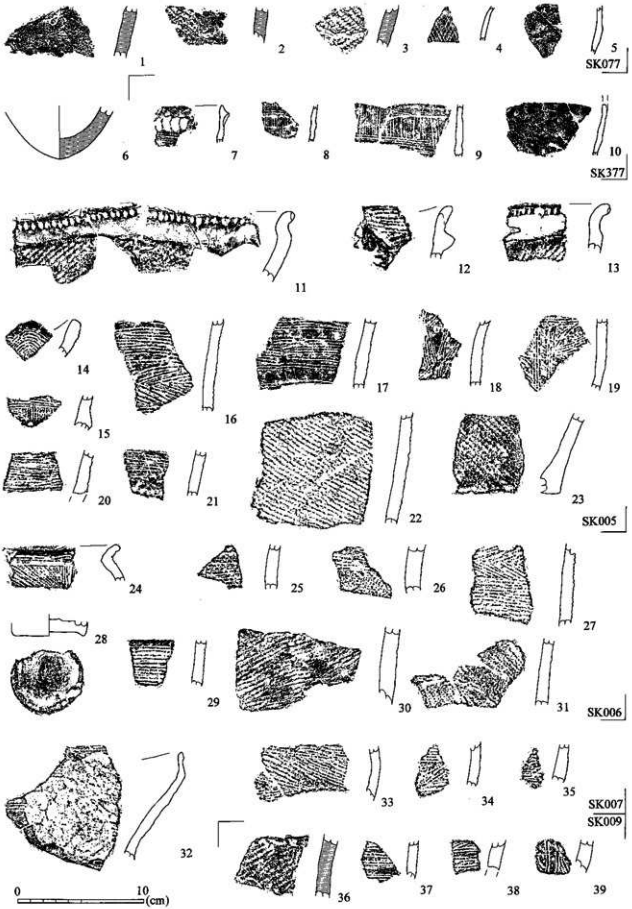
第430図　縄文時代前期の土坑(1)



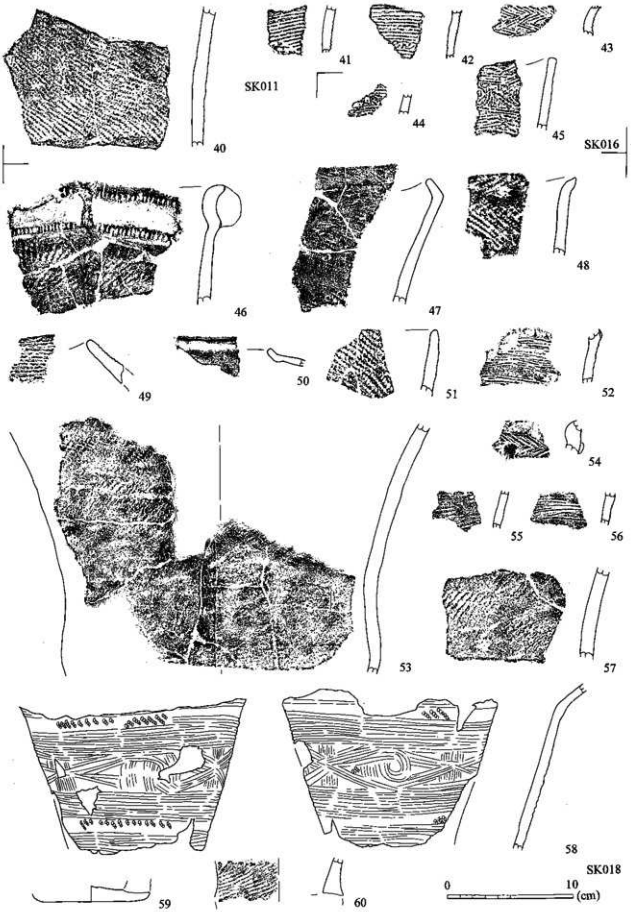
第431図　縄文時代前期の土坑(2)



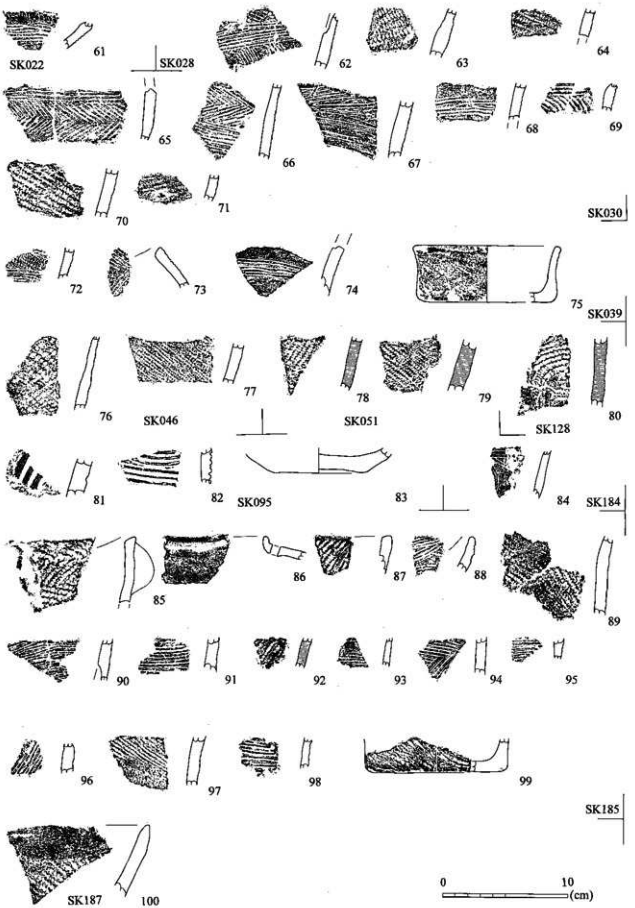
第432図　縄文時代前期の土坑(3)



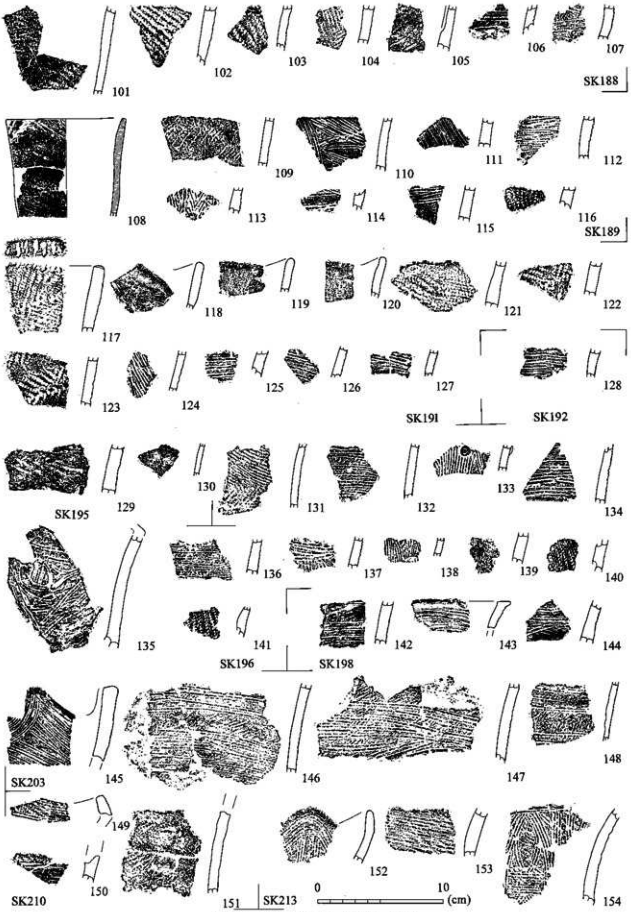
第433図　縄文時代前期の土坑出土土器(1)



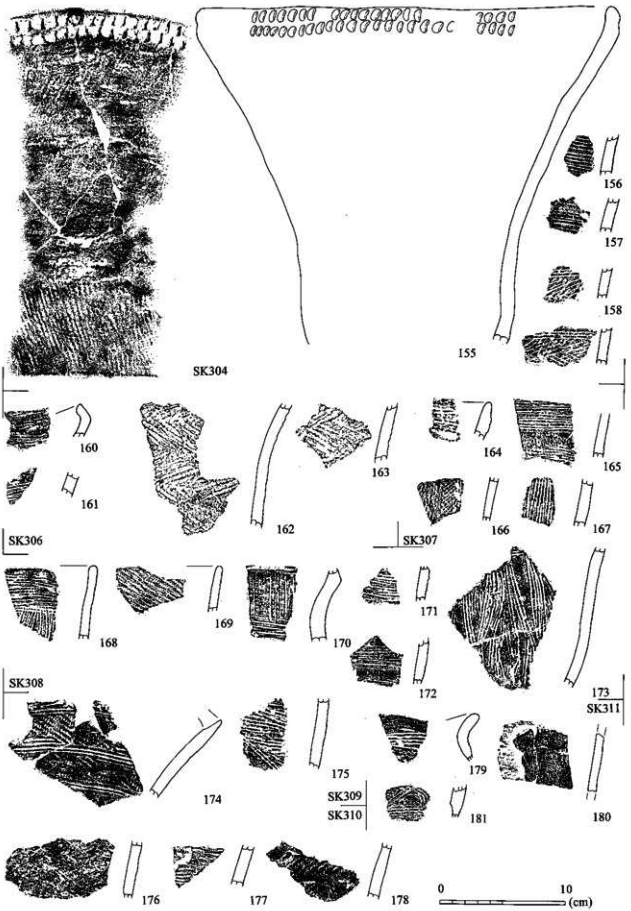
第434図　縄文時代前期の土坑出土土器(2)



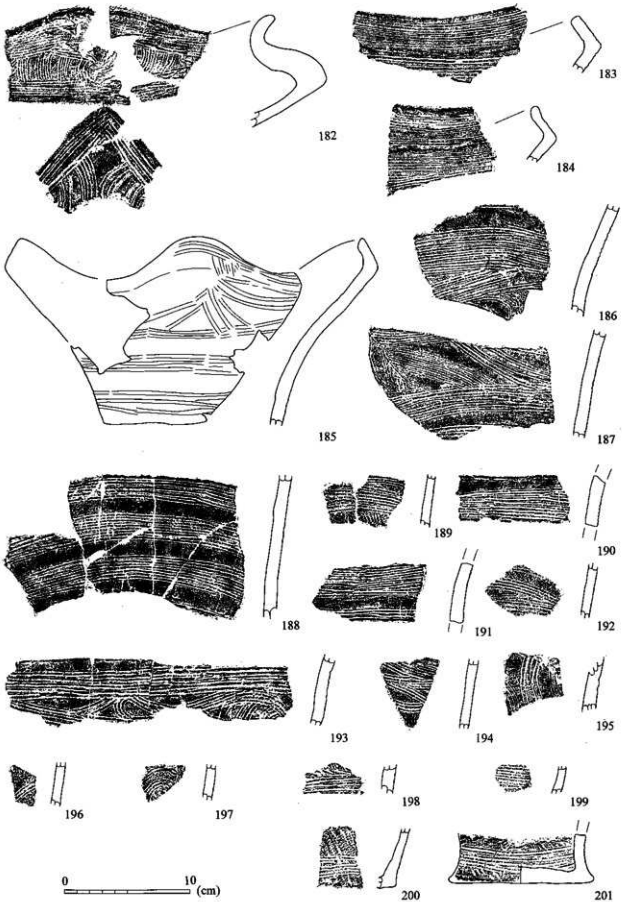
第435図　縄文時代前期の土坑出土土器(3)



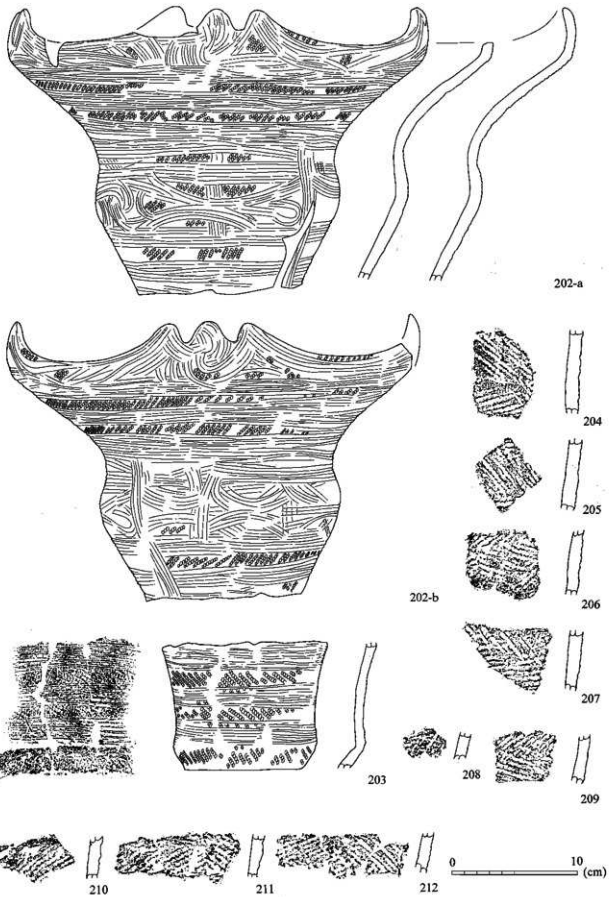
第436図　縄文時代前期の土坑出土土器(4)



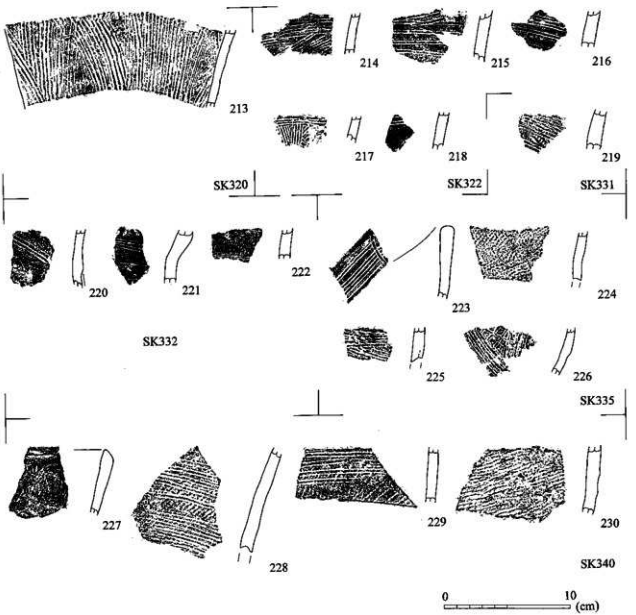
第437図　縄文時代前期の土坑出土土器(5)



第438図　縄文時代前期の土坑ＳＫ305出土土器(6)



第439図　縄文時代前期の土坑ＳＫ305出土土器(7)



第440図　縄文時代前期の土坑出土土器(8)

(2)　縄文時代中期（遺構図第442・443図、土器第444～449図）

ＳＫ012　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－９

東一西に軸をもつ1.7×1.1ｍの歪んだ楕円形。図化できるような遺物はないが、中期初頭か。

ＳＫ014　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－９

北西一南東が最長、0.5×0.3ｍ。１隆帯貼付、回転縄文ＬＲ施文後、隆帯脇を凹線で区画する。中期後葉か。

ＳＫ021　　位置　②区Ⅲ－Ｍ－９

北東一南西に軸をもつ1.4×1.1ｍの卵形。２～４隆帯貼付後、脇を連続角押文を施す。中期中葉。

ＳＫ058　　位置　①区Ⅰ－Ｖ－３

北東一南西に長軸をもつやや歪んだ1.6×1.3ｍの楕円形。５半截竹管状工具の刺突文、縦走沈線を横走沈線が切る。６ケズリの後、ナデ調整。中期初頭か。

ＳＫ059　　位置　①区Ⅰ－Ｖ－３

北東一南西に長軸をもつ2.8×1.4ｍの長方形。７口唇端部を面取りし、半截竹管状工具？連続刻み。８同様に口縁部外面を連続刻み。９斜位回転縄文ＲＬを施文し、半截竹管状工具による沈線文。７・９は胎土に雲母を含む。前期初頭か。千枚岩質粘板岩製打製石斧（第473図148）出土。

ＳＫ068　　位置　①区Ⅰ－Ｖ－17ほか

東一西に長軸をもつ1.0×0.8ｍの楕円形。10・12地文に横位回転縄文ＲＬ、竹管状工具による結節沈線文。11・13並行沈線。14竹管状工具による刺突。千枚岩質硬砂岩製打製石斧（第473図140）、輝石安山岩製磨石（第475図168）出土。

ＳＫ070　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－22

東一西に長軸をもつ1.4×1.2ｍの長方形。15～17斜位ないし縦位回転縄文ＲＬ。18縦位区画沈線内を斜行短沈線で充填。いずれも胎土に雲母含。中期初頭。

ＳＫ071　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－22・23

東一西が最長、1.5×1.3ｍ。20斜位回転縄文ＲＬ、胎土に雲母含。中期初頭か。

ＳＫ090　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－15・20

北一南に長軸をもつ3.0×2.3ｍの楕円形。21隆帯脇を半截竹管状工具による交互刻み。

ＳＫ094　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－15

ほぼ東一西に長軸をもつ1.9×1.3ｍの楕円形。22・23隆帯上ないし脇をヘラ状工具による連続刺突。中期中葉。

ＳＫ104　　位置　①区Ⅰ－Ｑ－13ほか

北西一南東に長軸をもつ2.7×1.4mの略楕円形。

ＳＫ105　　位置　①区Ⅰ－Ｗ－11

北東一南西に長軸をもつ略楕円形。25口縁端部外面を肥厚し、横位回転縄文ＲＬを施す。26横位ケズリ後、横位ナデ調整、縦位ミガキ調整を施す。無文。27斜位ないし縦位回転縄文ＲＬを施文後、並行沈線文。中期初頭。

ＳＫ106　　位置　①区Ⅰ－Ｗ－11

遺構図なし。35・36・38・40・41・45回転縄文ＬＲを地文とし、隆帯を垂下させ、あるいは沈線文を施す。37・39・42頸部の屈曲する部分。並行隆帯文が施される。43～45底部。中期初頭。

ＳＫ107　　位置　①区Ⅰ－Ｗ－12

北東一南西が最長の2.7×2.1mの歪んだ長方形。32垂下隆帯、横位回転縄文ＲＬを施文後、区画沈線。中期初頭。黒曜石製の連続した剝離をもつ剝片（第471図110）出土。

ＳＫ125　　位置　①区Ⅰ－Ｗ－21・22

東一西が最長の1.2×0.9mの歪んだ長方形。46口縁部外面を肥厚する無文土器。47～52並行沈線文。47・48地文に横位回転縄文ＲＬ。49・52隆帯貼付。53底部。中期初頭。

ＳＫ126　　位置　①区

遺構図なし。30縦位ミガキ調整。無文。31横位回転縄文ＲＬ、並行沈線文。中期初頭。

ＳＫ162　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－19

北西一南東が最長の1.4×1.0m。33口縁部は屈曲し、端部にヘラ状工具による連続刻み。胴部はヘラ状工具による縦走沈線。34斜行ヘラ状工具による沈線施文後、縦走沈線で区画する。中期初頭。

ＳＫ166　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－22

遺構図なし。縄文時代中期ＳＢ21を切る。54隆帯区画内をヘラ状工具による短沈線で充塡する。55隆帯貼付、斜位回転縄文ＬＲを施文し、半截竹管状工具による沈線文。いずれも胎土に雲母多く含。

ＳＫ170　　位置　①区

遺構図なし。67口縁端部に山形の隆帯貼付。71～73隆帯上、半截竹管状工具による連続押引文。

ＳＫ171　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－13

北東一南西に長軸をもつ1.1×1.0mの隅丸方形。79無文浅鉢。

ＳＫ173　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－19

東一西が最長の0.9×0.8m。80～82地文に単節回転縄文、81隆帯を山形に貼付する波状口縁。82縦走区画沈線文。中期初頭。

SK174　　位置　①区Ⅲ－B－14

北一南に長軸をもつ1.1×0.8mの長方形。86・87半截竹管状工具による交互刺突文。88・90・91隆帯貼付し、同上を回転縄文RLを施文。中期初頭。

SK177　　位置　①区

遺構図なし。92斜位回転縄文LRを施文。

SK181　　位置　①区Ⅲ－B－8

1.2×1.2m。縄文時代中期SB20に切られる。93・94いずれも胎土に雲母含。94横位回転縄文LRを施文後、沈線施文。中期初頭か。

SK215　　位置　①区Ⅰ－V－14

東一西に長軸をもつ0.9×0.6mの隅丸長方形。95～102回転縄文RLを地文とする。95～98半截竹管状工具による並行沈線文。95同工具による交互刺突文が施される。中期初頭。

SK221　　位置　①区Ⅲ－B－20

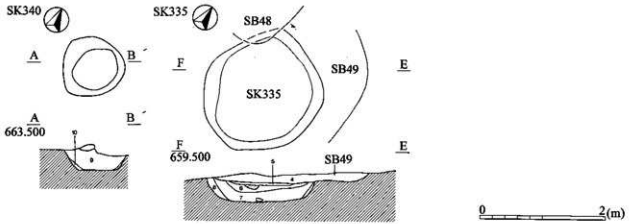
径0.8mの歪んだ円形。103縦位回転縄文RL、縦走沈線施文。中期初頭。千枚岩質粘板岩製打製石斧（第473図144）出土。

SK222　　位置　①区Ⅰ－W－21

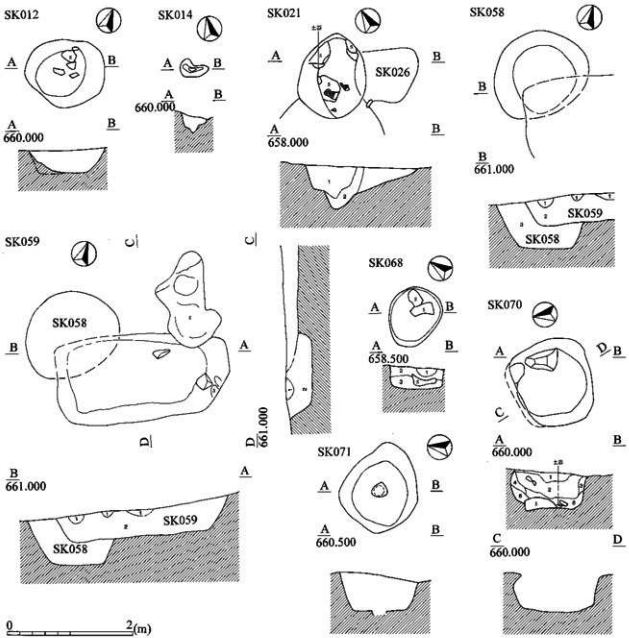
1.2×1.0m。中世SB25、時期不詳SK226に切られる。104～115地文に縦位ないし斜位回転縄文RLを施し、沈線で区画する。104～108口縁端部を面取りする。隆帯上にも回転縄文施文。中期初頭。

SK373　　位置　①区Ⅲ－A－20

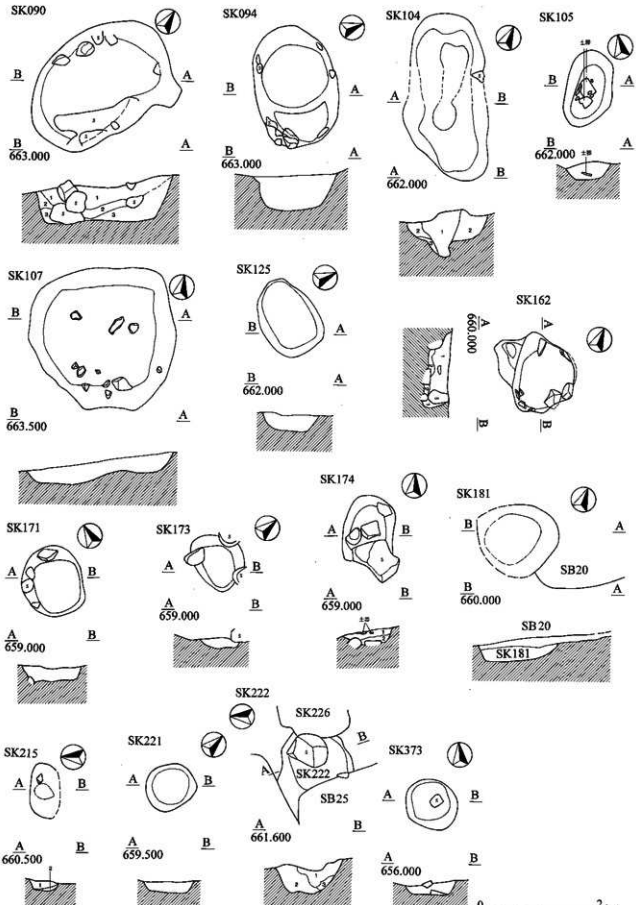
径0.8～0.9mの略円形。116横位回転縄文RLを施文し、さらに並行沈線文を施す波状口縁。中期初頭。



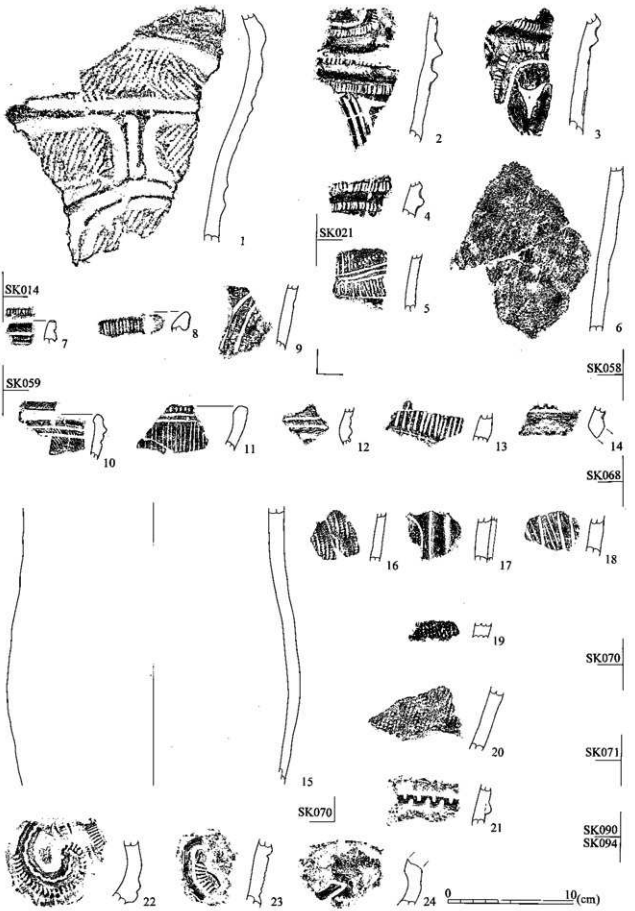
第441図　縄文時代前期の土坑(4)



第442図　縄文時代中期の土坑(1)

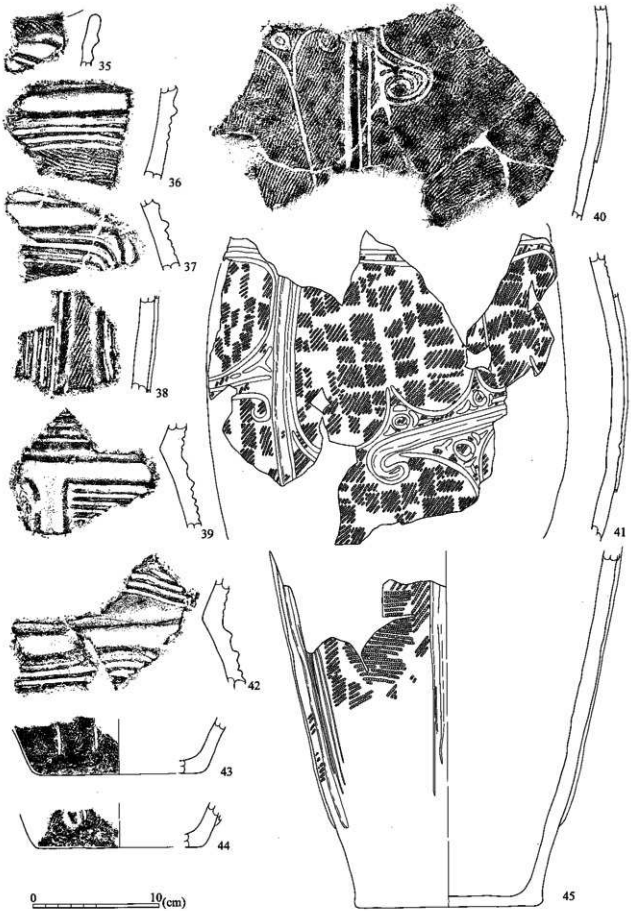


第443図　縄文時代中期の土坑(2)

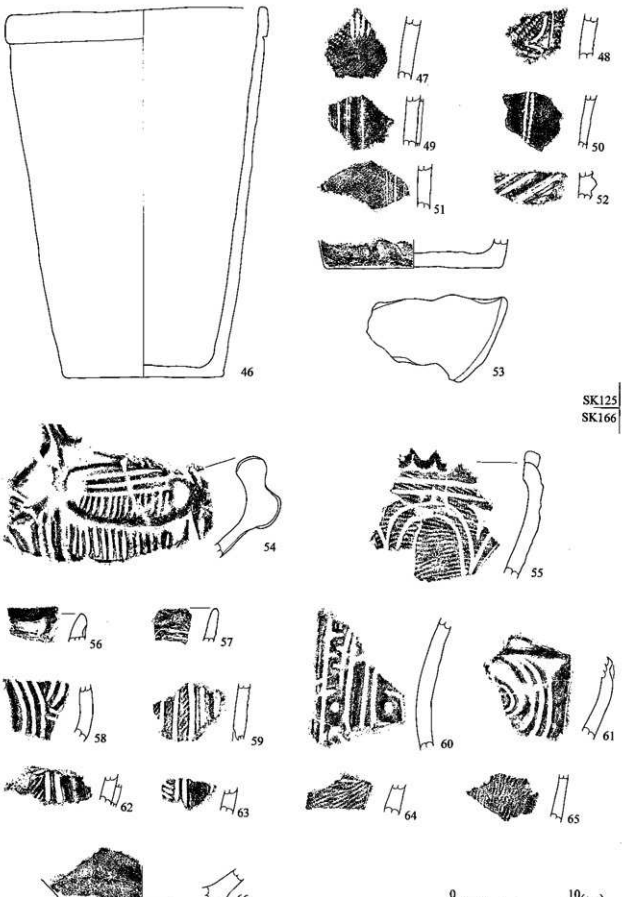


第444図　縄文時代中期の土坑出土土器(1)

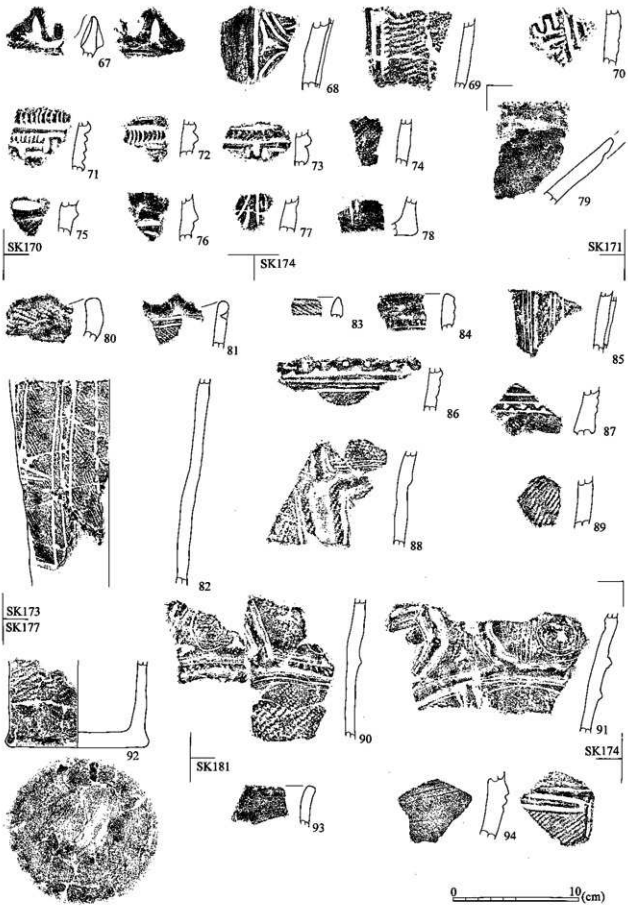
第445図　縄文時代中期の土坑出土土器(2)



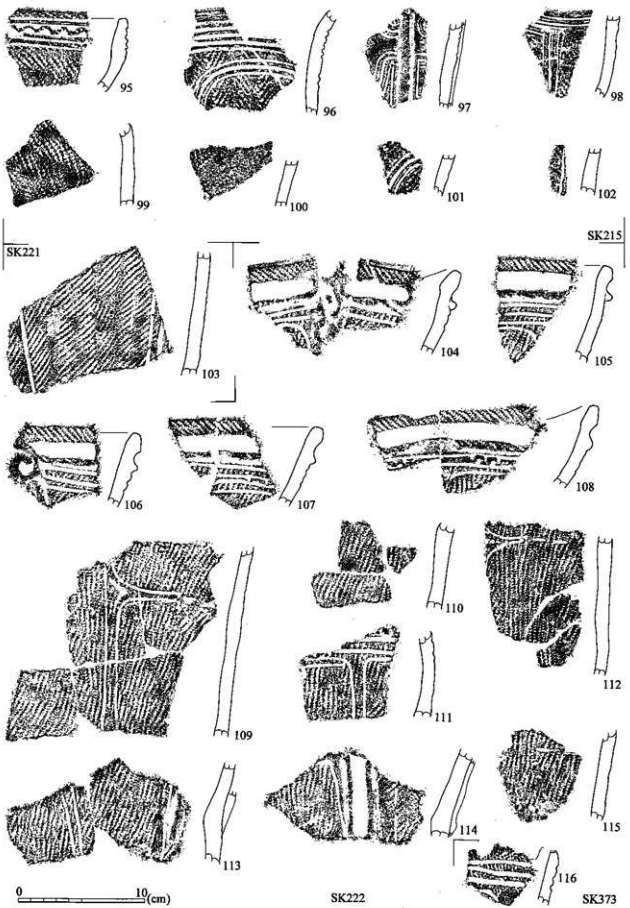
第446図　縄文時代中期の土坑ＳＫ106出土土器(3)



第447図　縄文時代中期の土坑出土土器(4)



第448図　縄文時代中期の土坑出土土器(5)



第449図　縄文時代中期の土坑出土土器(6)

(3)　縄文時代後期（遺構図第450図、土器第451～453図）

ＳＫ082　　位置　①区Ｉ－Ｑ－20

北東一南西に長軸をもつ2.0×1.5ｍの略楕円形。図化できるような遺物は出土していない。

ＳＫ083　　位置　①区Ｉ－Ｑ－20

北西一南東に長軸をもつ3.0×2.3ｍの楕円形。２・３指頭刻みが施された低隆帯が口縁に並行。４・５回転縄文ＬＲ、磨消縄文。５口縁端部に沈線を施す。いずれも頸部と胴部の分離が明確でない。称名寺式の新相。６縦走する５～７条の並行沈線。７～13ミガキ調整が施される無文土器。

ＳＫ092　　位置　①区Ｉ－Ｑ－15・Ｒ－11

個別遺構図なし。東一西に長軸をもつ1.8×1.6ｍの略楕円形。14指頭刻みが施された隆帯が口縁に並行、隆帯末尾が上向きに曲がる。後期初頭。

ＳＫ102　　位置　①区Ｉ－Ｑ－19

北東一南西に軸をもつ1.6×1.5ｍの歪んだ方形。15波状口縁の鉢。６単位の波頂には瓢状の突起が付けられる。波頂間には浅い沈線が充填され、口縁部下端、屈曲部の上には連続刺みが施される。頸部は横位ミガキ調整され、胴部との境界には波頂部に合って「８」字状貼付文が施される。胴部は回転縄文ＬＲの磨消縄文。後期前葉堀之内１式。

ＳＫ103　　位置　①区Ｉ－Ｑ－18・19

北一南が最長、1.7×1.5ｍ。縄文時代ＳＫ146を切る。16指頭刻みが施された隆帯が口縁に並行。後期初頭。

ＳＫ113　　位置　①区Ｉ－Ｑ－18

径1.4ｍの略円形。17・18回転縄文ＬＲの磨消縄文。鉢の胴部破片。19・20ミガキ調整。後期前葉堀之内１式。

ＳＫ115　　位置　①区Ｉ－Ｑ－17

北一南に軸をもつ1.9×1.8ｍの卵形。22・23指頭刻みが施された隆帯が口縁に並行。後期初頭。

ＳＫ130　　位置　①区Ｉ－Ｑ－23・24

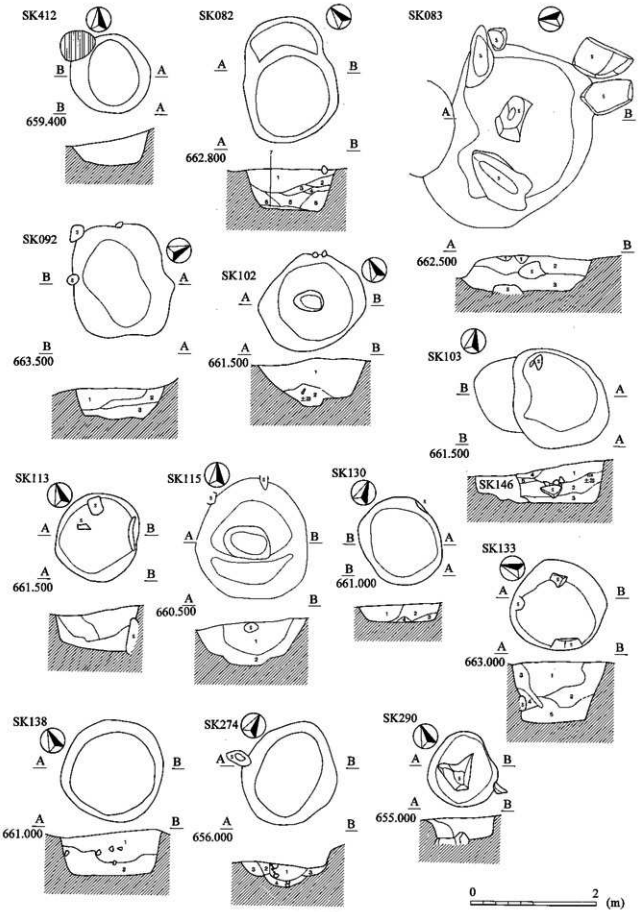
北西一南東に長軸をもつ1.4×1.2ｍの長方形。28・29指頭刻みが施された隆帯が口縁に並行。後期初頭。

ＳＫ133　　位置　①区Ｉ－Ｑ－10

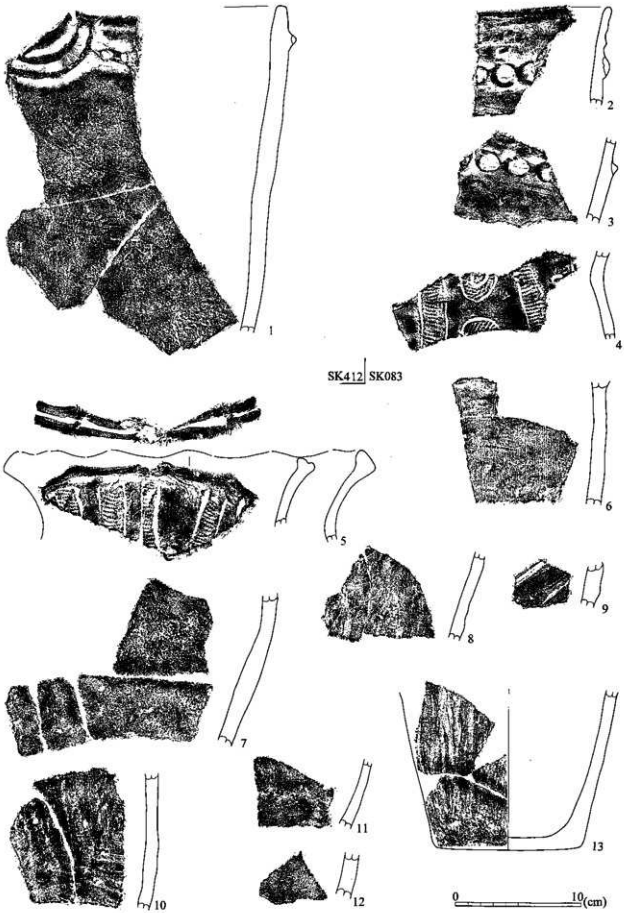
1.6×1.5ｍの歪んだ円形。26刻目隆帯。後期初頭か。

ＳＫ138　　位置　①区Ｉ－Ｑ－23・24

1.6～1.7ｍの略円形。30上縁を先端が尖る棒状工具で、連続刺突された断面三角形隆帯が口縁に並行して巡る。深鉢。31同様な隆帯が巡る浅鉢。内面に赤色顔料が残る。後期初頭。

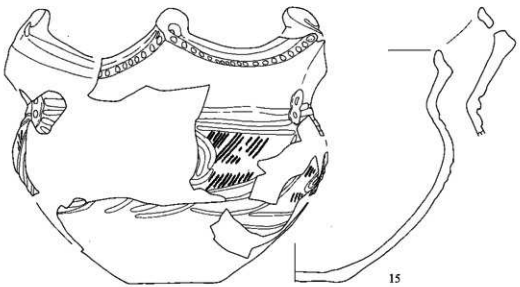


第450図　縄文時代後期の土坑

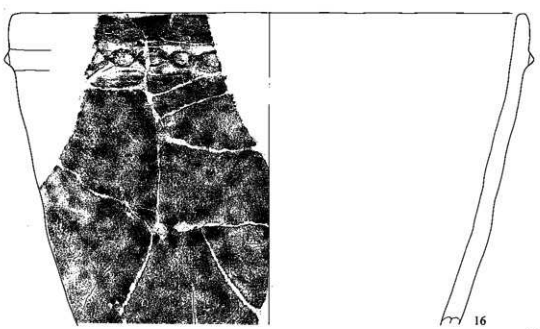


第451図　縄文時代後期の土坑出土土器(1)

SK092



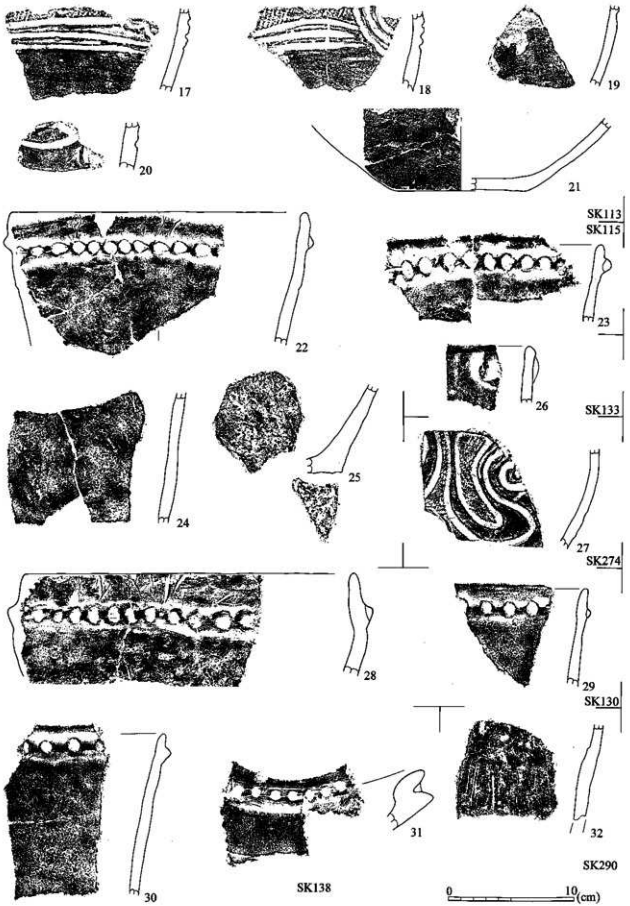
SK102



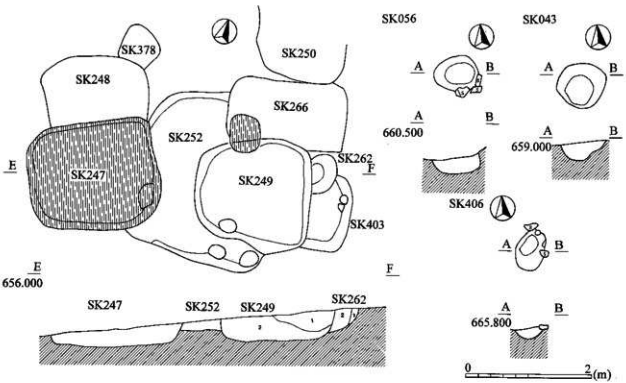
SK103

0　10(cm)

第452図　縄文時代後期の土坑出土土器(2)



第453図　縄文時代後期の土坑出土土器(3)



第454図　古代の土坑

ＳＫ274　　位置　①区Ｉ－Ｕ－３・８

北―南に長軸をもつ1.7×1.5ｍの楕円形。27回転縄文ＲＬの磨消縄文。後期前葉か。ガラス質安山岩製縦長の石匙（第470図92）出土。

ＳＫ280　　位置　①区Ｉ－Ｕ－２

北東―南西に軸をもつ、1.2×1.1ｍの卵形。32横位ケズリの後、縦位ミガキ調整。千枚岩質凝灰岩製打製石斧（第472図133）出土。

ＳＫ412　　位置　①区Ｉ－Ｑ－16

径1.3ｍの略円形。１浅く刻まれた貼付隆帯は口縁に並行し、中央がくぼめられた隆帯は弧状に貼付される。後期初頭。黒曜石製スクレイパー（第469図89）、千枚岩質粘板岩製スクレイパー（第473図152）出土。

(4)　古代（遺構図第454図、土器第455図）

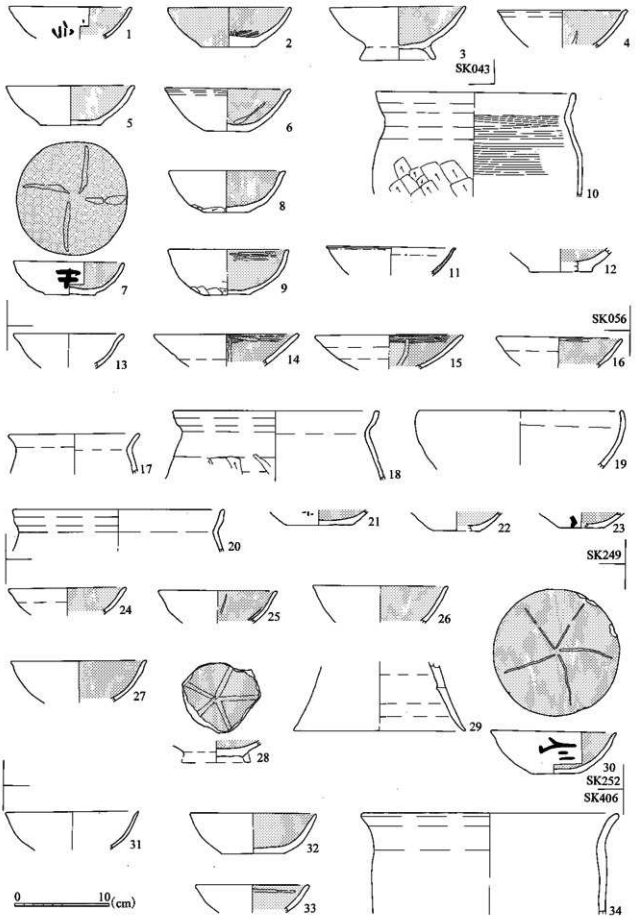
ＳＫ043　　位置　①区Ｉ－Ｖ－２

径0.8ｍの略円形。１～３黒色土器。坏ないし椀。１墨書土器。平安時代。

ＳＫ056　　位置　①区Ｉ－Ｖ－３

東―西に軸をもつ0.7×0.5ｍの卵形。４～９墨書土器坏。７墨書土器「十一」か。10・12土師器。12ロクロ成形、胴部に縦位ヘラケズリ、内面には回転ハケ目調整が残る甕。口縁端部を面取り、口縁部断面は「く」字形。11灰釉陶器坏。平安時代中期、佐久編年10段階。

ＳＫ249　　位置　①区Ｉ－Ｕ－24



第455図　古代の土坑出土土器

ほぼ東一西に長軸をもつ1.8×1.4mの長方形。古代ＳＫ262・266・252・403を切り、中世ＳＫ353に切られる。13土師器坏。14～16・21～23黒色土器坏ないし椀。17～20土師器。17・18・20ロクロ成形甕。18口縁端部を面取り、口縁部断面は「く」字形。胴部は縦位ヘラケズリ調整。平安時代中期、佐久編年10段階。

ＳＫ252　　位置　①区Ⅲ－Ｕ－24

北一南に長軸をもつ現存2.7×2.2mの長方形。古代ＳＫ249・266、中世ＳＫ247に切られる。24～28・30黒色土器坏ないし椀。30墨書土器「イ」(人偏)。「供」か。29土師器盤の脚。すかしあり。佐久編年10段階か。

ＳＫ406　　位置　②区Ⅲ－Ｊ－6

北西一南東に軸をもつ0.7×0.5mの楕円形。31土師器坏。32・33黒色土器坏。34土師器甕。平安時代中期。

(5)　中世（遺構図第456～458図、土器・陶磁器第459図）

ＳＫ116　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－6

東一西が最長、現存2.6×2.0mの五角形か。1・2土師器。1皿。2内耳鍋。鉄製刀子（第477図1）出土。中世後期。

ＳＫ119　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－5

北東一南西が最長、2.2×2.0m。3・4土師器皿。

ＳＫ120　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－10・Ｃ－6

北西一南東に長軸をもつ2.3×1.2mの長方形。5土師器内耳鍋。中世後期。

ＳＫ142　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－24

北西一南東に軸をもつ3.0×2.8mの方形。6・7土師器皿。図化できなかったが施釉陶器の香炉片出土。鉄製鋸（第477図5）。銅銭漢通元宝、熙寧元宝、開元通宝（第478図10～12）出土。中世前期か。

ＳＫ143　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－18

東一西に長軸をもつ1.9×1.1mの長方形。8土師器皿か。

ＳＫ145　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－24

北西一南東に長軸をもつ1.8×1.6mの長方形。中世ＳＫ152・180を切り、中世ＳＫ163に切られる。9・10土師器皿。11青磁碗。12・13非常に軟質でにぶい橙色の在地系須恵質擂鉢。珠洲系擂鉢に形状は似る。銅銭政和通宝（第478図13）出土。中世後期。

ＳＫ152　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－23

東一西に軸をもつ2.5×2.4mの卵形。中世ＳＫ145に切られ、中世ＳＫ180を切る。14・15土師器皿。図化できなかったが15世紀代の古瀬戸平碗出土。銅銭政和通宝、天聖元宝、景徳元宝、熙寧元宝、聖宋元

宝、嘉祐通宝、紹聖元宝、□聖元宝（第478図14～21）計８枚出土。

ＳＫ163　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－24

北西一南東に長軸をもつ0.9×0.6ｍの楕円形。16龍泉窯系青磁碗。中世後期、15世紀前半。

ＳＫ165　　位置　①区Ⅰ－Ⅴ－12

北東一南西に軸をもつ2.8×2.1ｍの倒卵形。17～19土師器皿。20青磁碗。21・22土師器内耳鍋。多孔質安山岩製石鉢４点（第476図177～180）出土。中世後期。

ＳＫ186　　位置　②区Ⅲ－Ｈ－24

0.6～0.7ｍの略円形。23土師器内耳鍋。中世後期。

ＳＫ232　　位置　①区Ⅲ－Ａ－10・14

北西一南東に長軸をもつ1.7×1.5ｍの長方形。

ＳＫ233　　位置　①区Ⅲ－Ａ－10・Ｂ－６

北西一南東に長軸をもつ1.7×1.5ｍの長方形。24・25土師器皿。

ＳＫ236　　位置　①区Ⅲ－Ａ－10

北東一南西が最長2.8×2.3ｍの歪んだ長方形。26土師器内耳鍋。銅銭開元通宝（第478図24）出土。中世後期。

ＳＫ247　　位置　①区Ⅰ－Ｕ－24

北東一南西に長軸をもつ2.1×2.0ｍの長方形。27在地系のにぶい黄褐色の土師質（軟質須恵質？）擂鉢片。破断面を研磨しているいわゆる土製円盤か。図化できなかったが14～15世紀代の古瀬戸緑釉小皿出土。中世後期か。

ＳＫ253　　位置　①区Ⅲ－Ａ－５

径1.7ｍの略円形。29土師器内耳鍋。中世後期。

ＳＫ254　　位置　①区Ⅲ－Ａ－４

北西一南東に軸をもつ1.8×1.7ｍの方形。28古瀬戸鉄釉天目茶碗。15世紀初頭。中世後期。

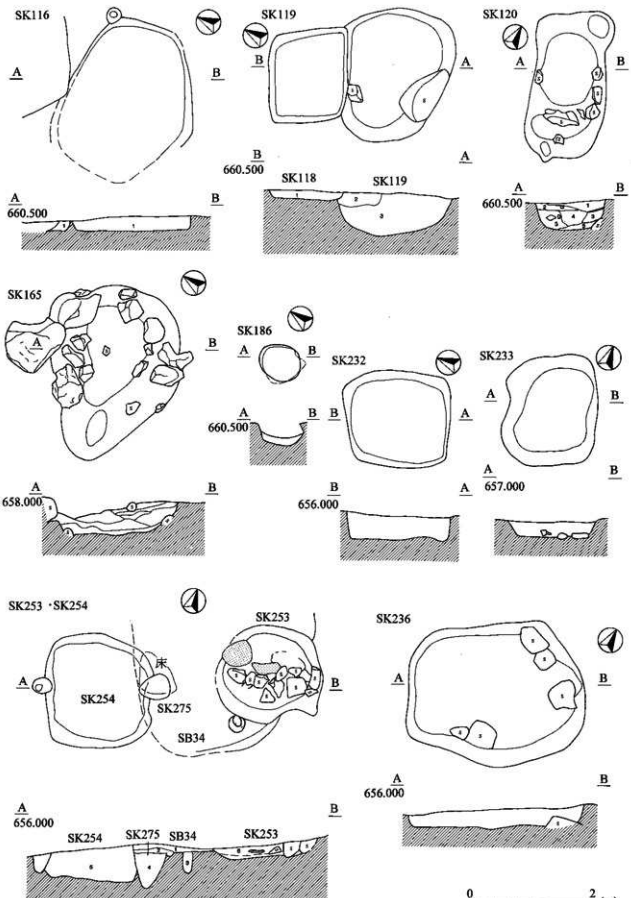
ＳＫ259　　位置　①区Ⅲ－Ａ－４

現存1.4×0.5ｍ。中世ＳＫ257・292を切る。30土師器内耳鍋。中世後期。

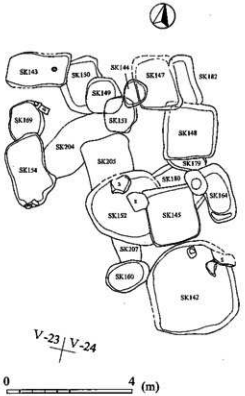
ＳＫ261　　位置　①区Ⅲ－Ａ－９

北東一南西に長軸をもつ略長方形。

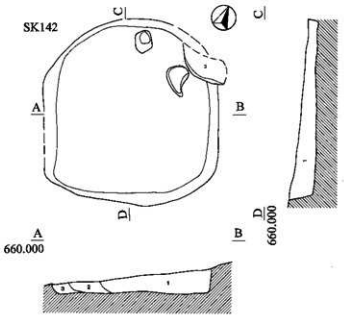
ＳＫ283　　位置　①区Ⅲ－Ｂ－23

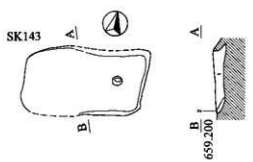


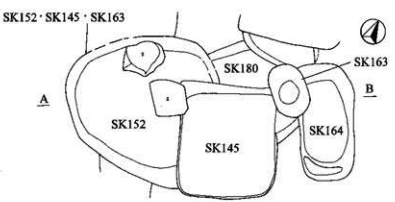
第456図　中世の土坑(1)

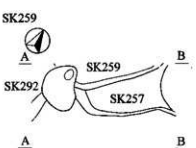


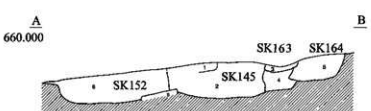
①区Vグリッド中世土坑群



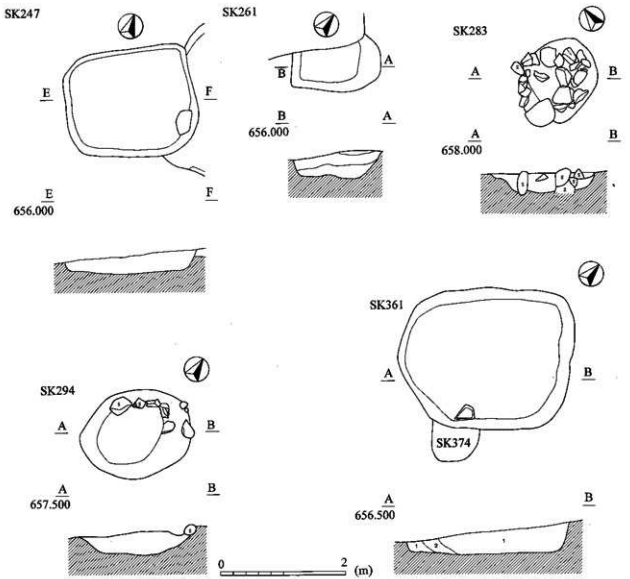








第457図　中世の土坑(2)



第458図　中世の土坑(3)

東一西に長軸をもつ1.4×1.2mの楕円形。31・32土師器内耳鍋。中世後期。

SK294　　位置　①区Ⅲ－B－17

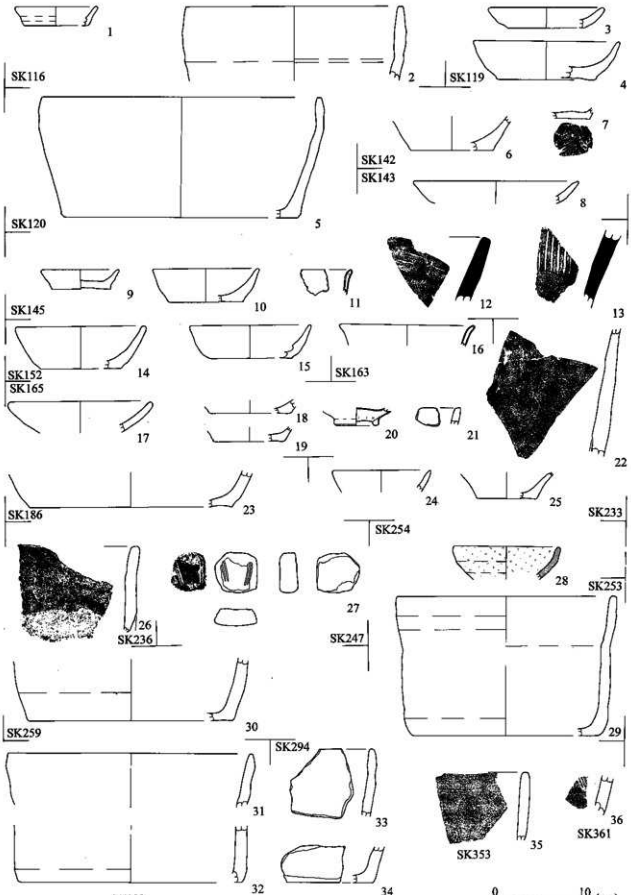
北東一南西に長軸をもつ1.8×1.4mの楕円形。33・34土師器内耳鍋。中世後期。

SK353　　位置　①区Ⅰ－U－24

遺構図なし。35土師器内耳鍋。中世後期。

SK361　　位置　①区Ⅲ－B－16・A－20

北東一南西に長軸をもつ2.8×2.3mの長方形。縄文時代SK374を切る。36在地系土師質（軟質須恵質？）擂鉢。中世後期。



第459図　中世の土坑出土土器・陶磁器

3　遺構に伴わない土器・陶磁器

(1)　縄文時代前期（第460・461図）

1～8前期前葉。1横位回転縄文RL、口縁がやや外反する。胎土に繊維含。補修孔あり。2～8薄手の櫛歯状工具による並行条線。内面に指頭圧痕が残り、胎土には繊維は含まれない。2・3口縁部の屈曲部に刻目隆帯が貼付される。木島式。

9～54前期後葉。9～33口縁部破片。9横位回転縄文Lを施し、円形浮文貼付。10～12口縁部に2列の半截竹管状工具による連続爪形刻み。胴部横位回転縄文LR。12貝殻状突起貼付。13口縁部断面が緩やかなS字形を呈す。横位回転縄文LR。14回転縄文Rを施文し、円形浮文貼付。15～25口縁端部に1列の連続爪形刻みを施す。15～17・19～23・25地文半截竹管状工具による並行沈線。18・24単節回転縄文施文。26～30半截竹管状工具による並行沈線文が施された緩い波状口縁。32口縁端部が外反する回転縄文施文土器。33横位ケズリ調整の無文。34～54胴部および底部。34～39単節回転縄文施文。40～53半截竹管状工具による並行沈線。48～50・52円形浮文貼付。54横位回転縄文LR・RL。以上諸磯b式ないしはc式期の土器。

(2)　縄文時代中期（第462～464図）

1～38中期初頭。1口縁端部に回転縄文RLを施文し、帯状隆帯貼付。口縁部文様帯は鋸歯状の刺突文と頸部の横走沈線で区画され、縦走短沈線で充填。2～6・8・9・15単節回転縄文を施し、半截竹管状工具による並行沈線文、同工具による鋸歯状の刺突文を施す。7単節回転縄文を地文とし、半截竹管状工具による並行沈線文、除刻三叉文が施される。11・12口縁端部に連続刺突、外面は口縁部下端を横走沈線で区画し、短縦位沈線で充填。13・14・17～23・25・32～35隆帯で区画した中に、単節回転縄文、半截竹管状工具による並行沈線を施す。32～35底部で末広がりになる器形。

39～42中期中葉。39垂下隆帯を貼付し、半截竹管状工具による並行沈線施文。40半截竹管状工具による並行沈線で浮き彫り状隆帯区画し、角押文、あるいは格子目沈線文で充填。

43～48中期後葉。43波頂部が受口状になる波状口縁。44・45口縁に並行する微隆帯を作り出す波状口縁。逆U字状の沈線区画内を回転縄文LRで充填する磨消縄文。46口縁に並行する沈線で区画し、胴部には縦位回転縄文LR。47横位の沈線区画内に横位ないし縦位回転縄文LRを施文。48ケズリ出した微隆帯が施される。隆帯脇を沈線が施される。

49・50土製品。49土偶の脚。50土製耳飾。

(3)　縄文時代後期（第465図）

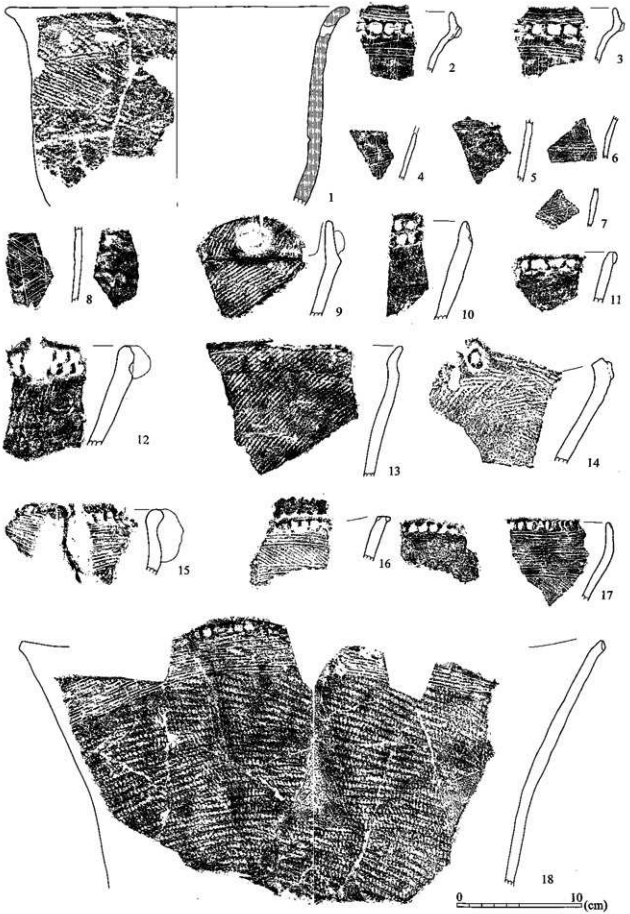
1～4後期初頭。1～3指頭刻目隆帯が口縁に並行する。4口縁部を肥厚し、端部は面取りする。内外面丁寧なミガキ調整を施す。5・6後期前葉。5外面を肥厚した口縁部に並行する沈線文が施される。6外面は垂下した刻目隆帯が貼付され、内面には波頂部に弧状沈線文が施される。7注口土器の蓋。8縦位区画の回転縄文RLの磨消縄文。9内外面ミガキ調整の底部。10網代底。

(4)　弥生時代・古墳時代・古代（第466図）

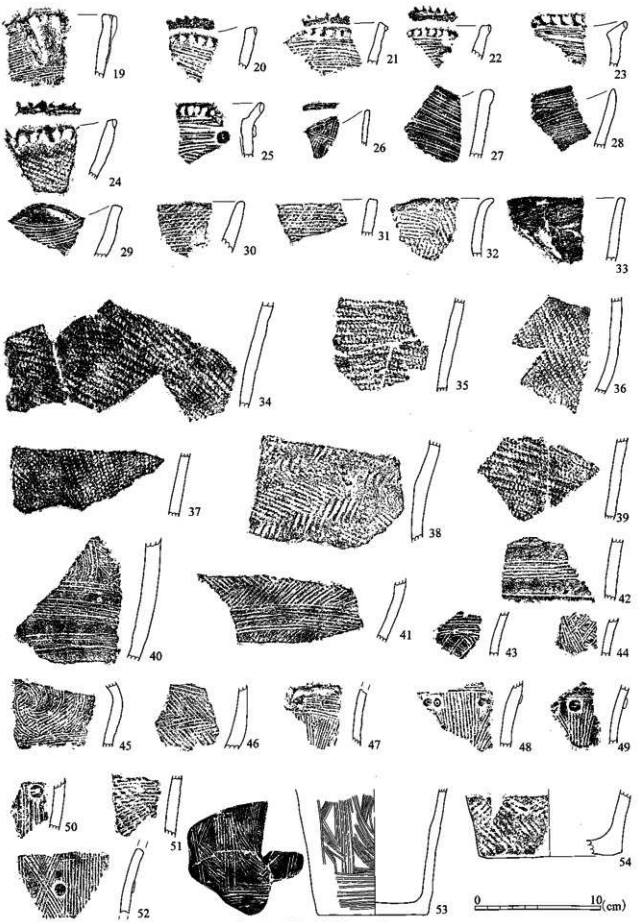
1弥生時代後期から古墳時代前期初頭。内外面赤彩、ミガキ調整の有段高坏。

2～8古墳時代前期後葉。2鉢。口縁内面にヘラケズリ。3壺か。4・5器台。6～8球胴甕ないし壺。7・8外面ハケ目調整。

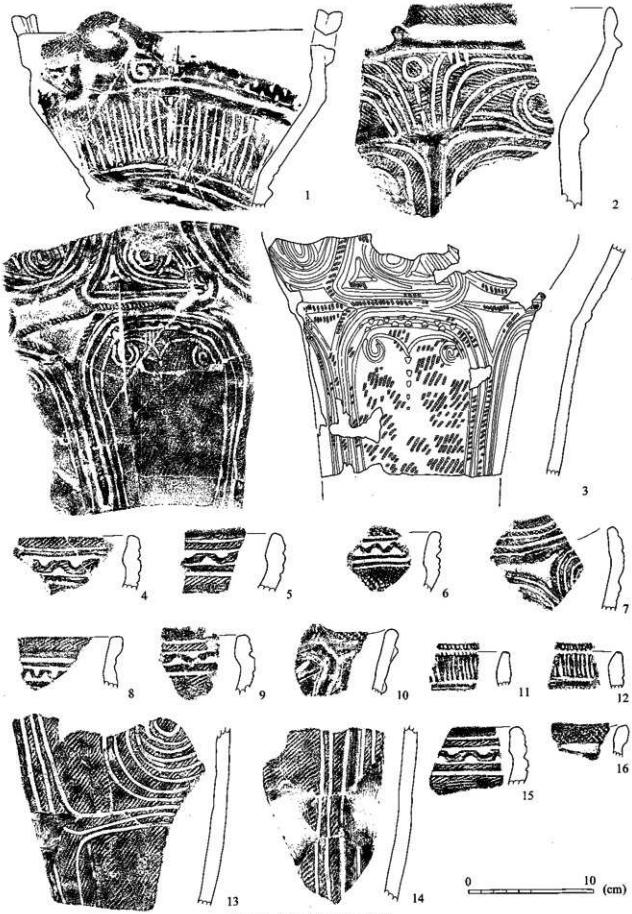
9～33古代。9・10・12土師器坏。11・14～19・21～23黒色土器。16皿ないし盤。それ以外は坏ないし椀。17内外面黒色処理。20須恵器坏。24～26灰釉陶器。24碗。25・26壺。27～30・32・33土師器甕。27・29・32口縁部断面「コ」字状。28・30・33口縁部断面「く」字状。33回転ハケ目調整。31外面並行タタキの須恵器甕。



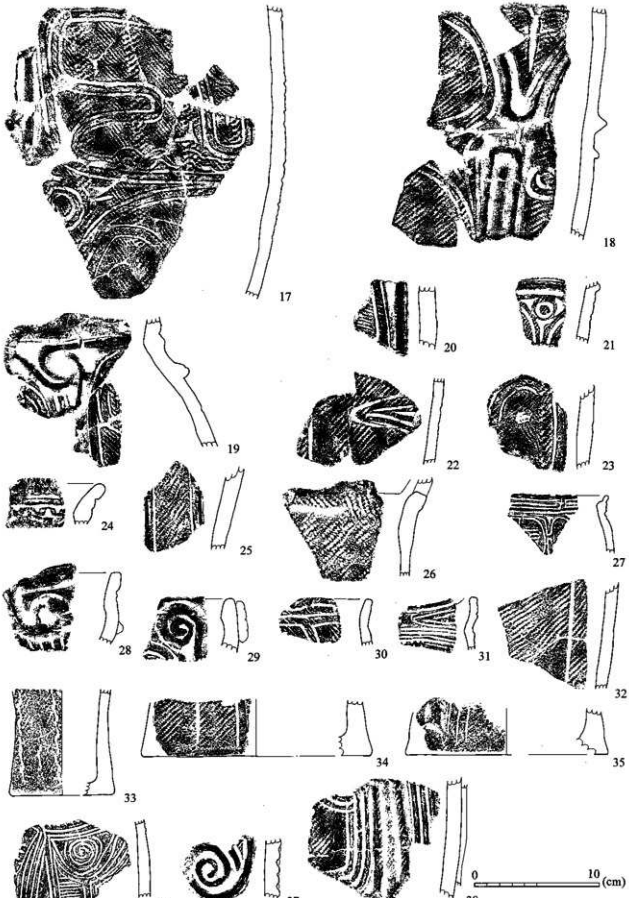
第460図　縄文時代前期の土器(1)



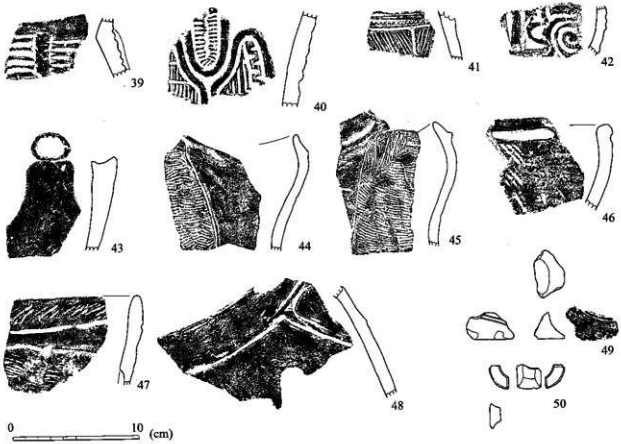
第461図　縄文時代前期の土器(2)



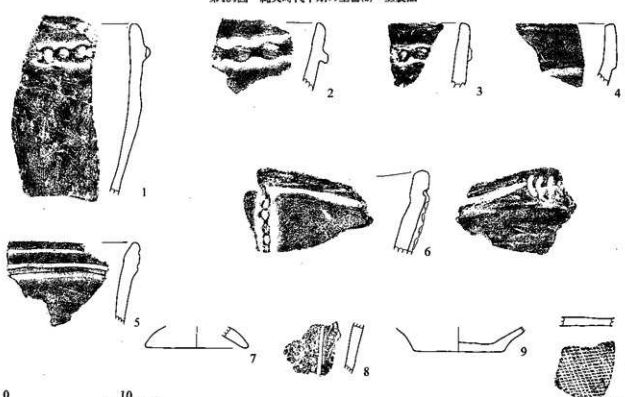
第462図　縄文時代中期の土器(1)



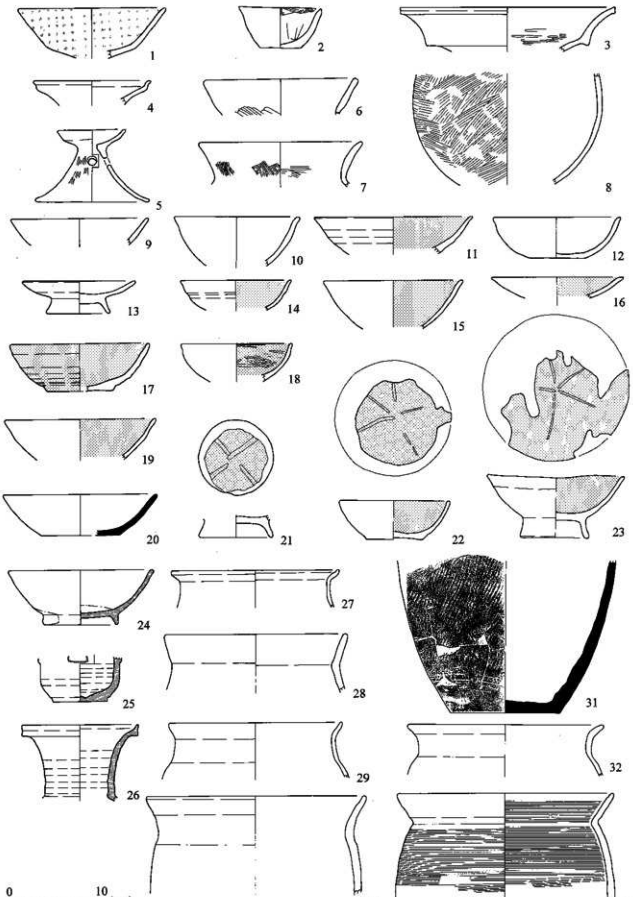
第463図　縄文時代中期の土器(2)



第464図　縄文時代中期の土器(3)・土製品



第465図　縄文時代後期の土器



第466図　弥生・古墳・古代の土器・須恵器

(5)　中近世（第467図）

1～10土師器皿。11～14擂鉢。10・11・13土師質。14瓦質。15～22土師器内耳鍋。23～27土師質。いずれも軟質で、古代の土師器とは質が異なるので、本項に含めたが、時期など不明。24・26・27火鉢か。28古瀬戸香炉。SK106付近出土。14世紀後半。29フイゴ羽口。30土製円盤か。土師質土器破片の破断面を研磨したもの。31用途不明。転用ではなく、完形品。32近世施釉陶器。「貧乏」徳利。釉薬の部分が釘などの鋭利なもので焼成後削られている。これは屋号などを使用の際いれたものらしい。「大（角大）」と読める。18世紀後半。

4　石器（第468～476図）

1～119小型の剥片石器。1～66石鏃。62～66有茎式。9珪質頁岩製。13・15・30・47・62・63チャート製。64千枚岩質粘板岩製。65ガラス質安山岩製。これ以外は黒曜石製。67～70小型の石匙。いずれも2cm以下と通常石匙としているものより小さいので区別した。いずれも黒曜石製。71石錐か。側辺に抉りが入っている。黒曜石製。72～93スクレイパー。72ガラス質安山岩製。77珪質頁岩製。あるいは石匙か。84珪質粘板岩製。これ以外は黒曜石製。92縦長石匙。ガラス質安山岩製。93珪質頁岩製。94～99石錐。97チャート製。これ以外は黒曜石製。100～107石匙。100・102・106千枚岩質粘板岩製。102チャート製。103・105・107珪質頁岩製。黒曜石製のものはなく、2cm以下の小型石匙とは対照的であるため区別した。108・109黒曜石製楔形石器。110・111連続した剥離を有する剥片。112～118連続した微細な剥離を有する剥片。いずれも黒曜石。

119～121小型の磨製石器。119粘板岩製磨製石鏃。弥生時代か。120管玉。変成岩か。縄文時代前期か。121滑石製石墨。近代以降。

122～150・152大型の剥片石器。122～125スクレイパー。122～124千枚岩質粘板岩製。125硬砂岩製。いずれも先第3系の石材。126～150・152打製石斧。126鱗化石を含む第3系別所層の黒色頁岩。135ガラス質安山岩。これ以外は片状構造の発達した千枚岩質粘板岩、凝灰岩、硬砂岩。いずれも先第3系の石材。151磨製石斧片。硬砂岩か。

153石核。黒曜石製。154～172小型の礫石器。154～161砥石。154溶結凝灰岩。160千枚岩質凝灰岩。161石材不明。これ以外は軟質の凝灰岩。162不明石製品。矢羽状の模様が彫り込まれている。何らかの型か。火成岩。163硯。粘板岩製。164石板。粘板岩製。いずれも近代以降。165～172磨石類。168両側面に平坦な敲打面をもつ敲石。171・172凹石。いずれも輝石安山岩。

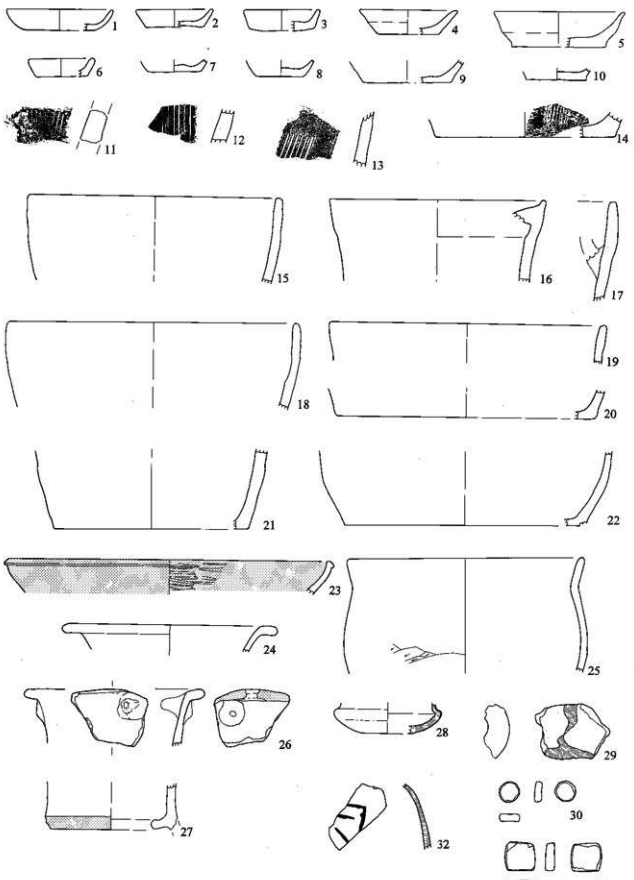
173～185大型の礫石器。173～175・185台石。いずれも輝石安山岩。176石皿破片。多孔質安山岩。177～180石鉢。多孔質輝石安山岩製。中世SK165出土。181～183石臼。多孔質安山岩製。181中世SK057出土。

5　金属製品（第477図）

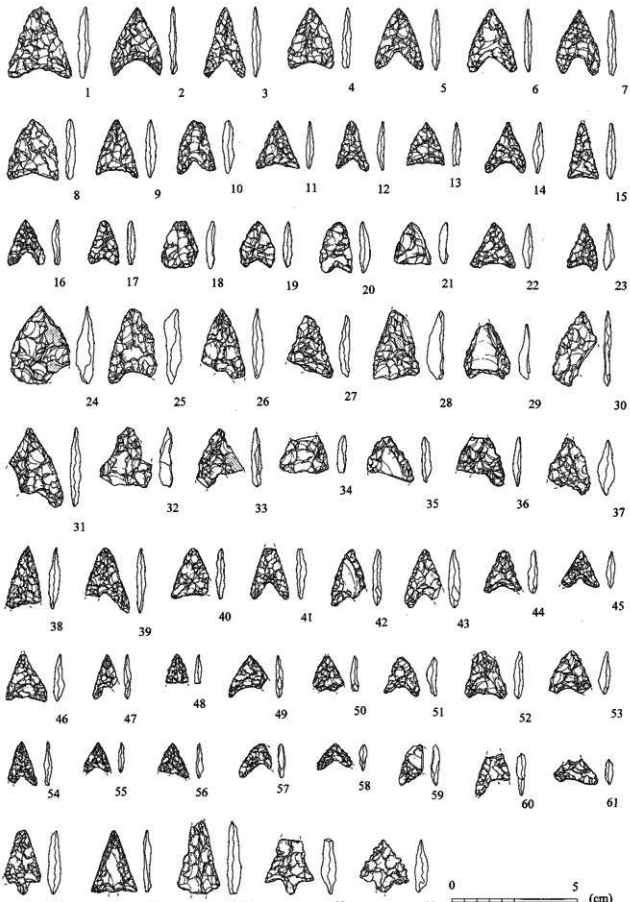
1～5鉄製品。1刀子。中世SK116出土。2刀子。3・4袋状鉄斧。中世SB16出土。5鋸。中世SK142出土。6銅製品。銅製金具には半楕円形の区画内を連続三角形文を充填する装飾が施されている。また下半に2個づつ3組小孔が空いている。調度品の「引き手」ないし「手掛け」か。中世SB16出土。

6　銭貨（第478・479図）

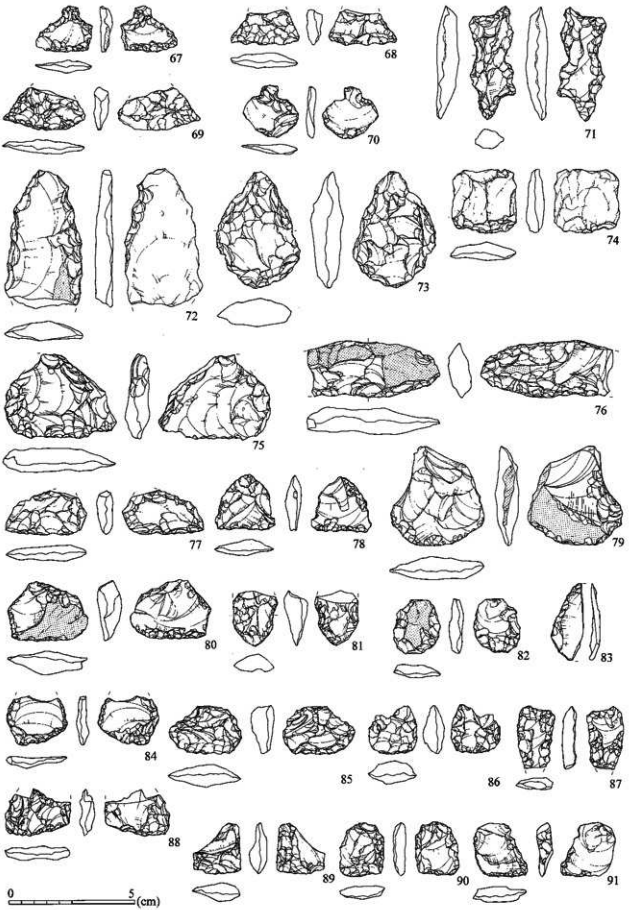
1～8中世SB16。9中世SB42。10～12中世SK142。13中世SK145。14～21中世SK152。22中世SK179。23中世SK235。24中世SK236。25中世SK244。26中世SK246。27中世SK248。28・29中世



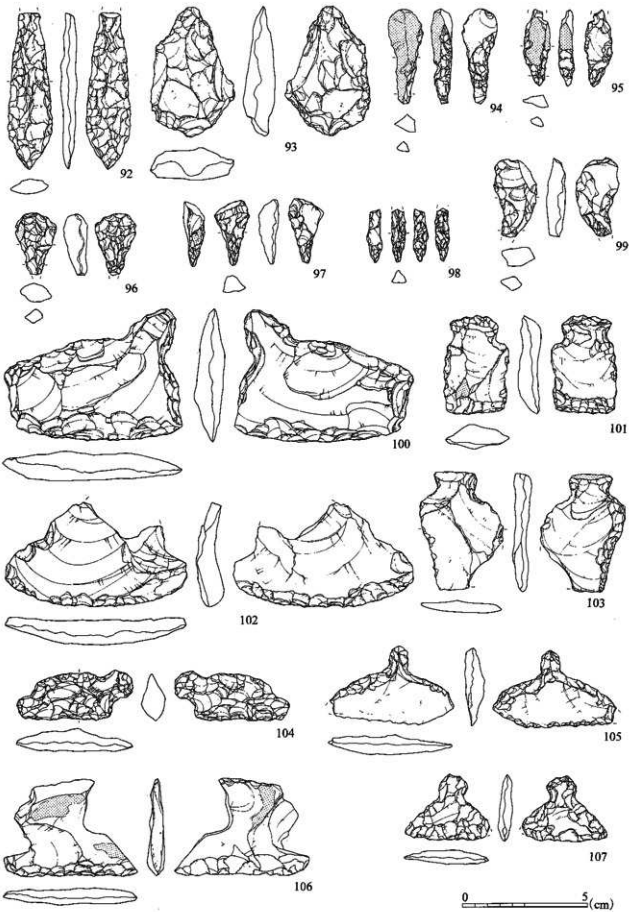
第467図　中近世の土器・陶器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
5
(cm)

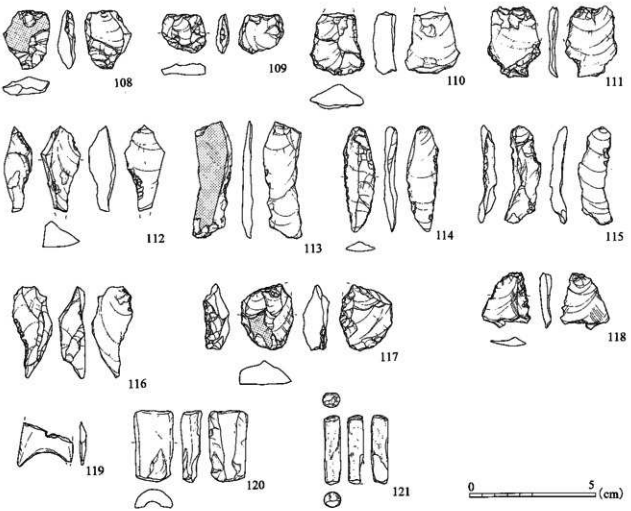
第468図　石器(1)（石鏃）



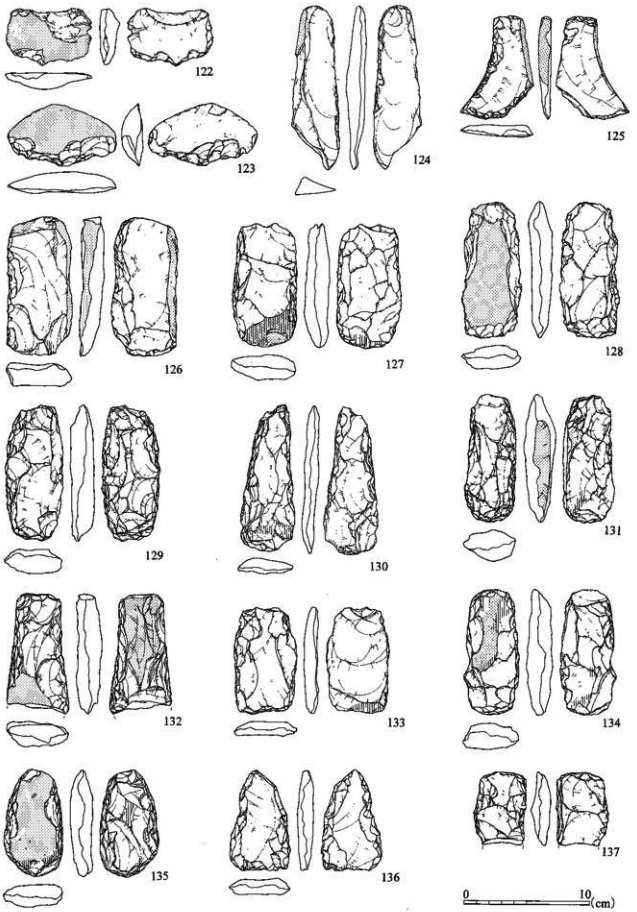
第469図　石器(2)（石匙・スクレイパー）



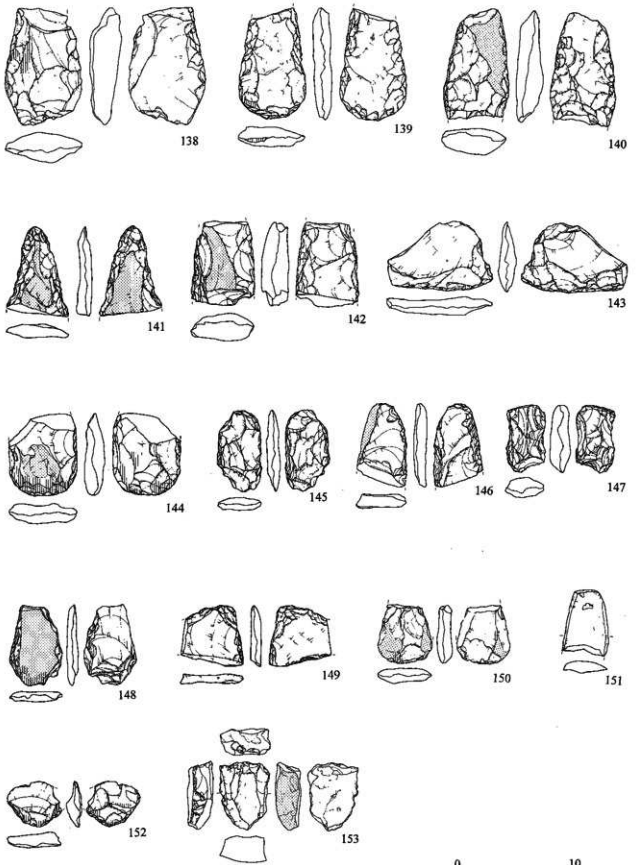
第470図　石器(3)（石錐・石匙）



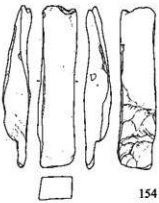
第471図　石器(4)（楔形石器・ＲＦ・ＵＦほか）

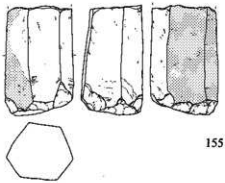


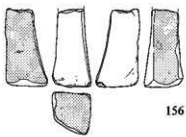
第472図　石器(5)（打製石斧）

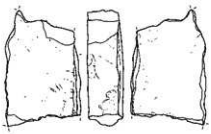


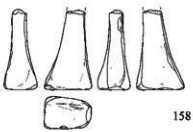
第473図　石器(6)（打製石斧・スクレイパー・石核）

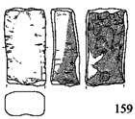

154

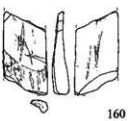

155


156

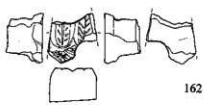

157

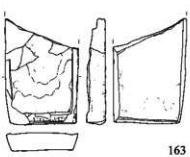

158

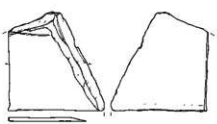

159


160

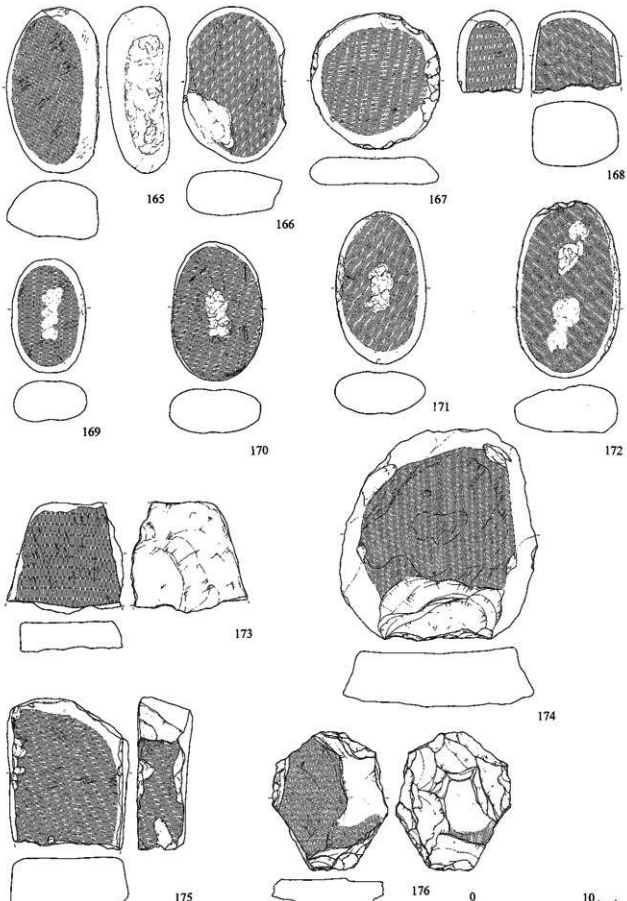
161


162

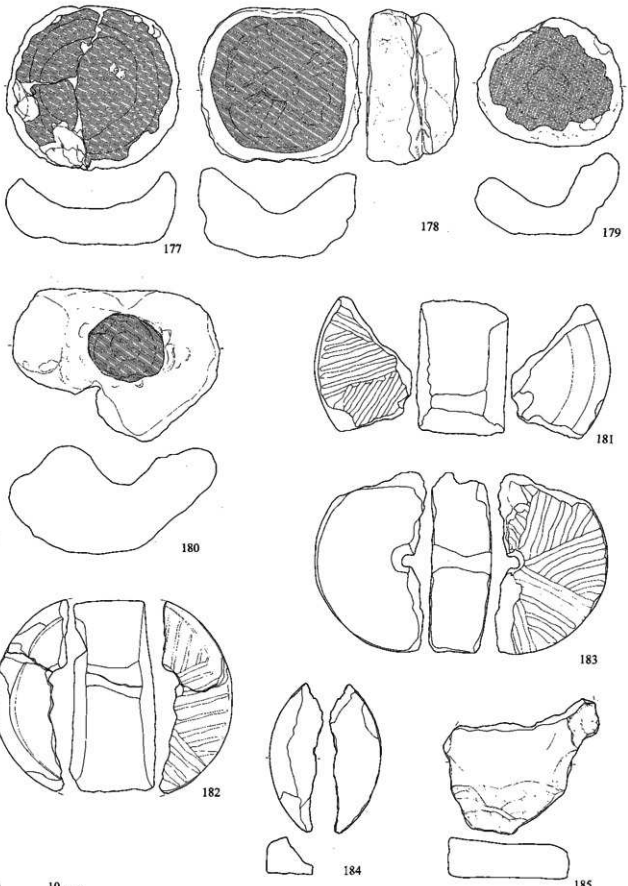

163


164

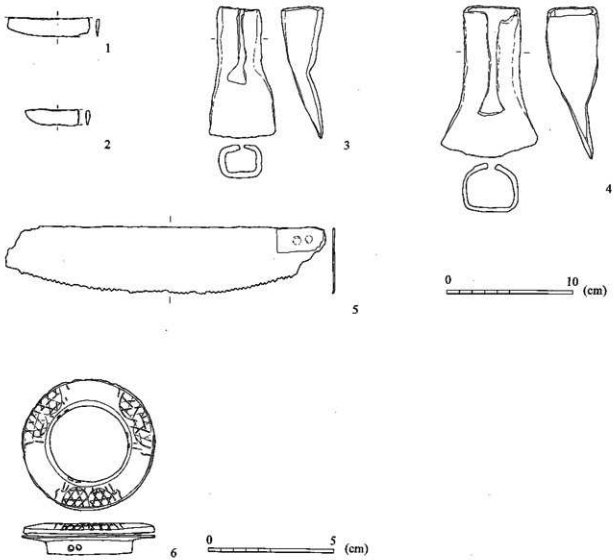
第474図　石器(7)（砥石・硯・石板）



第475図　石器(8)（磨石・凹石・台石）



第476図　石器(9)（石臼・石鉢・台石）



第477図　金属製品

ＳＫ249。30～41中世ＳＫ250。42～47中世ＳＫ264。48中世ＳＫ277。49～52中近世ＳＤ01出土。53～94遺構外出土。

1 SB16　2 SB16　3 SB16　4 SB16　5 SB16　6 SB16　7 SB16

8 SB16　9 SB42　10 SK142　11 SK142　12 SK142

13 SK145　14 SK152　15 SK152　16 SK152　17 SK152　18 SK152

19 SK152　20 SK152　21 SK152　22 SK179　23 SK235　24 SK236　25 SK244

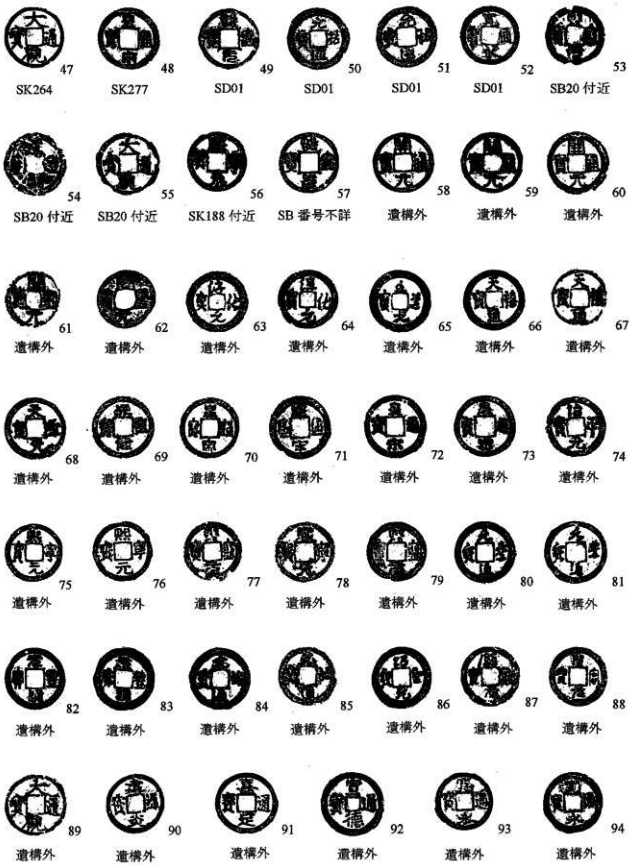
26 SK246　27 SK248　28 SK249　29 SK249　30 SK250　31 SK250　32 SK250

33 SK250　34 SK250　35 SK250　36 SK250　37 SK250　38 SK250　39 SK250

40 SK250　41 SK250　42 SK264　43 SK264　44 SK264　45 SK264　46 SK264

0　5 (cm)

第478図　銭貨(1)


47
SK264
48
SK277
49
SD01
50
SD01
51
SD01
52
SD01
53
SB20 付近
54
SB20 付近
55
SB20 付近
56
SK188 付近
57
SB 番号不詳
58
遺構外
59
遺構外
60
遺構外
61
遺構外
62
遺構外
63
遺構外
64
遺構外
65
遺構外
66
遺構外
67
遺構外
68
遺構外
69
遺構外
70
遺構外
71
遺構外
72
遺構外
73
遺構外
74
遺構外
75
遺構外
76
遺構外
77
遺構外
78
遺構外
79
遺構外
80
遺構外
81
遺構外
82
遺構外
83
遺構外
84
遺構外
85
遺構外
86
遺構外
87
遺構外
88
遺構外
89
遺構外
90
遺構外
91
遺構外
92
遺構外
93
遺構外
94
遺構外
0
5
(cm)

第479図　銭貨(2)

第4節　縄文時代土坑ＳＫ110・111リン・カルシウム分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

山の越遺跡では、縄文時代前期から後期までの住居跡や土坑が検出されている。今回は検出された縄文時代後期の土坑が墓壙であった可能性を、土壌分析により検証する。

わが国のように気候が温暖多湿で、土壌の排水性が良好かつ酸性が強いところでは、土壌中の有機物は分解されやすく、可溶性や水溶性の成分は土壌中下方へ流亡してしまう。したがって、発掘された遺構に遺体・人骨や排泄物などが存在していたとしても、長期間にわたってその性状を保つことは稀である。とくに火山灰を起源とする台地上の土壌ではこのような環境が多い。そこで、人骨や排泄物などの現認できない場合の自然科学的分析手法として、人を含む動物の骨から人体の痕跡を定性的に推定するリン分析（竹迫ほか1980）を用いることが多い。これまでに各地遺構土壌の調査例が多く、有効な方法である。今回はこの方法を実施し、また、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析し、より多角的な検証を行った。

なお、土壌中を流亡しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することは難しい。したがって、含量対比のために、調査地点付近の地山土壌を対照資料として、同様の分析を行った。

2　リン・カルシウム分析

(1)　試料

分析対象遺構は、ＳＫ100とＳＫ111の2基である。ＳＫ100で、土坑西縁部1点、土坑中央部断面の上、中、下層の各層1点づつ、土坑の北東―南西線に沿って試料が3点採取された。ＳＫ111では、土坑西側地山1点、土坑の中央部石下の上、中、下層の各層1点づつ、土坑の北東―南西線にそって試料9点が採取された。また対照試料としてＳＫ110・111付近の地山から各1点が採取された。したがって、分析点数は合計31点である。

(2)　分析方法

リン・カルシウム分析の方法については第6章第4節縄文時代土坑ＳＫ250の遺体埋納の可能性に詳しいので、参照されたい。

(3)　結果

リン酸・カルシウムの分析結果を第10表に示す。

対照試料としたＳＫ100・111付近の地山では、リン酸含量は1.25P_2O_5mg/ｇ、カルシウム含量は5.61 CaOmg/ｇを示す。

ＳＫ110のリン酸含量は、土坑西縁部の試料番号1で1.04P_2O_5mg/ｇ、中央部上層の試料番号2で1.41 P_2O_5mg/ｇ、中層の試料番号3で1.25P_2O_5mg/ｇ、下層の試料番号4で1.32P_2O_5mg/ｇであり、いずれも対照試料とほぼ同じ値を示す。土坑の北東―南西線に沿って採取した試料番号5～17では1.04～1.35P_2O_5mg/ｇであり、いずれも対照試料とほぼ同じ値を示す。

カルシウム含量は、土坑西縁部の試料番号1で4.94CaOmg/ｇ、中央部上層の試料番号2で5.22CaO mg/ｇ、中層の試料番号3で5.44CaOmg/ｇ、下層の試料番号4で4.72CaOmg/ｇであり、いずれも対照試料より低い値を示す。土坑の北東―南西線に沿って採取した試料のうち試料番号5は5.42、6は5.61 CaOmg/ｇであり、対照試料より低い値を示す。しかし、試料番号7～17は5.94～9.67CaOmg/ｇの値を

第11表　リン・カルシウム分析結果

試料名	リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性	備　考
SK110　No.1	1.04	4.94	10YR4/6褐・L	木片混じる
2	1.41	5.22	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
3	1.25	5.44	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
4	1.32	4.72	10YR3/4暗褐・L	
5	1.26	5.42	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
6	1.23	5.61	10YR3/4暗褐・L	
7	1.33	7.86	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
8	1.35	7.51	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
9	1.28	7.86	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
10	1.34	9.67	10YR2/3黒褐・L	
11	1.24	9.29	10YR2/3黒褐・L	
12	1.21	7.18	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
13	1.04	6.22	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
14	1.24	7.12	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
15	1.20	5.94	10YR2.5/3黒褐～暗褐・L	
16	1.33	6.38	10YR3/4暗褐・L	
17	1.13	6.31	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
SK111　No.1	1.06	3.42	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
2	1.12	4.88	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
3	1.05	7.48	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
4	0.98	7.92	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
5	0.91	7.16	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
6	1.25	6.55	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
7	0.95	5.49	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
8	0.95	5.79	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
9	0.98	6.74	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
10	0.98	7.63	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
12	0.98	8.56	10YR3.5/4暗褐～褐・L	
13	0.99	7.81	10YR4/6褐・L	
14	0.90	9.40	10YR4/6褐・L	
SK110・111付近地山	1.25	5.61	10YR3.5/4暗褐～褐・L	

註1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修1967）による。
註2）土性：土壌調査ハンドブック（ペトロジスト懇談会編1984）の野外土性の判定法による。L：壌土（砂と粘土を半々に感じる）

示し、対照試料よりやや高い値の試料が認められる。概して、石と石の間でやや高い傾向が見られる。

SK111のリン酸含量は、土坑西側地山の試料番号1で1.06P_2O_5mg/g、中央部石下の上層の試料番号2で1.12P_2O_5mg/g、中層の試料番号3で1.05P_2O_5mg/g、下層の試料番号4で0.98P_2O_5mg/gであり、いずれも対照試料とほぼ同量または低い値を示す。土坑の北東一南西線に沿って採取した試料番号5～14は0.90～1.25P_2O_5mg/gの値を示し、対照試料より高い値は認められない。

カルシウム含量は、土坑西側の地山の試料番号1で3.42CaOmg/g、中央部石下の上層の試料番号2で4.88CaOmg/gでともに対照試料より低い値を示す。しかし、石下の中層の試料番号3は7.48CaOmg/g、下層の試料番号4は7.92CaOmg/gであり、ともに対照試料よりやや高い値を示す。一方、土坑の北東一南西線に沿って採取した試料のうち試料番号5～14では、5.49～9.40CaOmg/gの値を示し、対照試料よりやや高い値を示す試料が認められる。中央部の石より西側でカルシウム含量がやや高い傾向である。

3　考察

土壌中に本来含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量についてはいくつかの報告事例がある（Bowen1983）（Bolt・Bruggenwert1980）（天野ほか1991）。これらの事例によれば天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg/g（黒ボク土の平均値：川崎ほか1991）という報告例がある。これまでの当社における分析調査では、6.0P_2O_5mg/g前後の値を越える場合には骨片が混在していることもあり、人骨によりリン酸富化であることが明らかに認められる。

一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1～50CaOmg/g（藤貫1979）とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を確実に指摘できるが、これはごく稀である。

今回の分析結果では、土坑SK110・111ともに天然賦存量を著しく越える試料は認められない。リン酸含量については、対照試料の含量を著しく越える試料もなく、特徴的なリン酸の濃集は認められない。そのため、人間を含む動物遺体の痕跡が残されている可能性は低い。

また、カルシウムについては、天然賦存量の範囲内であるが、対照試料よりやや高い濃集を示す箇所が複数認められた。SK110では土坑の北東～南西上の石と石の間、SK111では土坑中央部の石の下の中、下層と、土坑の北東一南西線上中央部の石よりの西側である。流亡しやすいカルシウムが残存していることは、カルシウムに富むものが埋納されていたことを反映するのかもしれない。ちなみに四訂食品成分表によれば、カルシウム含量が高い食品には種実・果実類や山菜の一部、藻類、淡水産貝類などの可食部がある。しかし、現段階では今回のカルシウムの起源となったものを特定することはできない。

文献

第6章真行寺遺跡群第4節縄文時代土坑SK250の遺体埋納の可能性参照。

第５節　古墳時代竪穴住居跡ＳＢ46出土炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ社

１　はじめに

長野県内では佐久盆地および山の越遺跡も含まれるその周辺地域では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材の用材選択に関する調査が行われてきた。その結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節やコナラ節の木材が多く使用されていたことが明らかになっている。

本報告では、古墳時代前期後葉の住居構築材の樹種を明らかにし、類例との比較を行う。

２　炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、古墳時代竪穴住居跡ＳＢ46から検出された炭化材４点（ＳＢ46Ｗ－１～Ｗ－４）である。炭化材は住居構築材（垂木？）と考えられている。

(2) 方法

試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する（第480図）。

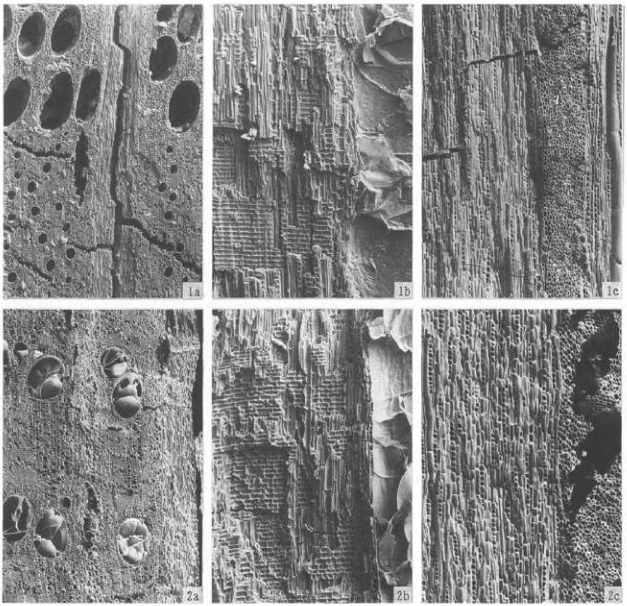
(3) 結果

炭化材はＷ－３がコナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）に、他の３点はコナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）に同定された。各種類の解剖学的な所見は第５章中田遺跡第５節炭化材・種実の種類参照。

３　考察

住居構築材と考えられる炭化材には、クヌギ節とコナラ節が認められ、少なくともこの２種が住居構築材として利用されていたことが明らかになった。本遺跡周辺地域では、佐久市・小諸市・御代田町で縄文時代から平安時代までの住居から検出された炭化材の樹種同定が多数行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社1988ａなど）。これらの結果では、古墳時代頃の住居構築材にはクヌギ節・コナラ節が多数見られ、今回の結果と調和的である。このことから、クヌギ節・コナラ節が古墳時代頃に住居構築材として広く利用されていたことが推定される。また、これまでの調査例では、クヌギ節・コナラ節以外にも多くの樹種が確認されており、本遺跡においても確認された以外に住居構築材として利用された種類があったと考えられる。

これらの住居構築材の用材選択には、遺跡周辺の植生が密接に関係していたと考えられている（高橋・植木1994）。このことを考慮すれば、本遺跡周辺にはクヌギ節・コナラ節を中心とした落葉広葉樹が生育していたと推定される。住居構築材は、その中から構築材として適当な大きさ（径・長さ）・形状・強度を有した木材を選択したものと考えられる。



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（W-4）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（W-3）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

第480図　炭化材

第6節　灯明皿の油脂について

パリノ・サーヴェイ社

1　はじめに

山の越遺跡より出土した土師器皿には、油脂状の黒色付着物が口縁部などに付着しており、灯明皿と考えられている。今回、これらの土師器皿のほか、真行寺遺跡群・国分寺周辺遺跡群より出土した同様な特徴をもつ土師器皿、坏を資料として脂質分析を行い、燃料として使用された油脂について検討することにした。

2　試料

分析試料は山の越遺跡などから出土した土師器皿や坏の計9点である（第12表）。全て遺跡から取り上げられた後に、洗浄、注記を経ている試料である。

第12表　脂質分析試料一覧[注1]

遺跡名	試料番号	試料名	器　種	図・番号	時　代	備　考
真行寺	1	ＳＫ127－1	土師器皿（完形）	第146図21	中世	
	2	ＳＫ171－1	土師器皿（完形）	第146図30	中世	
	3	Ｔグリッド－14	土師器皿（完形）	第153図5	中世	
	4	Ｔグリッド－15	土師器皿（破片）	第153図15	中世	
国分寺周辺	5	ＳＢ502－9	黒色土器坏（完形）	第257図9	古代	（柳沢ほか1998）
山の越	6	ＳＢ33－2	土師器皿（破片）	第426図2	中世	もとＳＢ37－2
	7	ＳＢ42－1	土師器皿（破片）	第428図1	中世	
	8	ＳＫ145－1	土師器皿（完形）	第459図9	中世	
	9	ＳＫ252－2	黒色土器坏（完形）	第455図30	古代	（墨書土器）

3　方法

定法（坂井ほか1996）に基づき、1）油脂の抽出、2）クロマトグラフィでの測定、3）測定データの解析を行った。なお参考のために、現在の動植物性油脂の脂肪酸組成を第481図に示す。

4　結果

各試料の脂肪酸組成およびステロール組成を第482図に示す。

5　考察

灯明皿で燃料として使用された油脂の種類を推定するには、以下のようなステロール組成と脂肪酸組成の認定基準を設定することができる（坂井ほか1996）。

①動物性ステロールが少なく、かつ菜種油に多く含まれるエルカ酸（C22：1E）が多いほど、菜種油の可能性が高い。

②動物性ステロールが多く、かつエルカ酸が少ないほど、菜種油の可能性は低く、動物性油脂の可能性が高い。

③動物性ステロールが少なく、かつエルカ酸が少ないほど、菜種油以外の植物性油脂の可能性が高い。

④動物性ステロールが多く、かつエルカ酸が多い場合には、

1)動物性油脂と植物性油脂の両者を併用した可能性がある。

2)土壌からの汚染や発掘後に人の指が接触したことなどの影響がある。

今回の結果を見ると、試料番号4・6は動物性ステロールのコレステロール、エルカ酸がともに少ないので、認定基準③に相当する。また、試料番号8・9はコレステロールが多く、エルカ酸が少ないので、認定基準②に相当する。したがって、上記の基準によれば、真行寺遺跡群の試料番号4や山の越遺跡の試料番号6は菜種油以外の植物性油脂、山の越遺跡の試料番号8・9は動物性油脂が燃料として使用されたことが示唆される。

その他の試料番号1～3・5・7も、油脂類に特徴的なオレイン酸（C18：1）やパルミチン酸（C16：0 図中ではC16）の比率が高く、また相対的に植物性ステロール（カンペステロール、スチグマステロール・シトステロール）の比率が高いため、これらの土器にも植物性油脂が存在した可能性がある。しかし、コレステロールの比率も少ないとは言い切れない。そのため、認定基準④の1)動植物性油脂の混用、あるいは2)土壌などによる汚染の可能性が考えられ、判然としない。

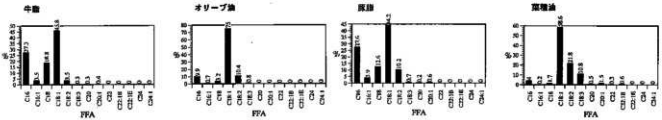
以上の推論は、あくまで今回得られた脂肪酸やステロールの組成が全て本来土器に存在した油脂類に由来していることを前提にしている。今回、分析試料とした土器類は既に取り上げられた後に人手によって洗浄、注記を施された履歴があり、しかも周辺土壌との比較を行っていないことに留意していただきたい。なお、周辺土壌の影響を見るために、土器出土地点付近の土壌も採取しておき、同様の分析を行うなどの対策を講じたい。

引用文献

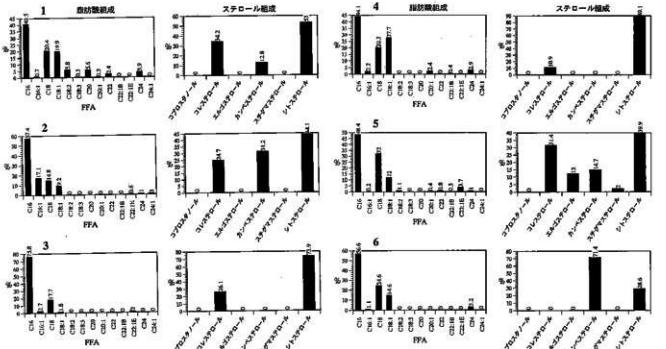
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄1996「灯明皿の脂質分析」『富山県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第7集　梅原胡摩遺遺跡発掘調査報告（遺物編）第2分冊』富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所

柳沢　亮ほか1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2―上出市内・坂城町内―国分寺周辺遺跡群ほか』長野県埋蔵文化財センター

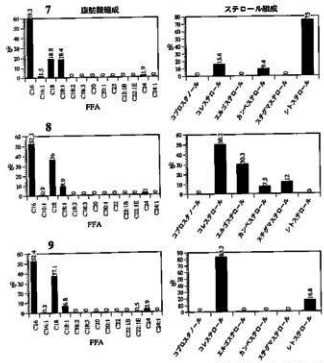
註1　国分寺周辺遺跡群以外は全て本報告書の図および遺物番号である。



第481図　現在の動植物性油脂の脂肪酸組成



1:真行寺遺跡SK127・No. 1
2:真行寺遺跡SK171・No. 1
3:真行寺遺跡ﾌﾟﾘｯﾄﾞ・No.14
4:真行寺遺跡ﾌﾟﾘｯﾄﾞ・No.15
5:国分寺周辺遺跡CKB⑤SB502・No.9
6:山の越遺跡SB037・No.2



7:山の越遺跡SB042・No.1
8:山の越遺跡SK145・No.1
9:山の越遺跡SK252・No.2

第482図　山の越遺跡ほか灯明皿脂質分析結果

第7節　小結

以下、山の遺跡を時期ごとに概観し小結とする。

縄文時代：東部町の烏帽子岳西南麓の縄文時代の集落遺跡は前期から発達すると見られるが、本遺跡もこうした例に漏れず、前期前葉尖底縄文土器の時期ＳＢ08が検出されている。土坑ＳＫ077や377もこれとほぼ同時期だろう。遺構外からは含繊維縄文土器（第460図1）や外面に細い半截竹管状工具による並行条線文を施し、内面に指頭圧痕を残す薄手の土器（2～8）の木島式が出土している。ＳＢ08の尖底縄文土器の口縁部は緩い波状を呈し、まったく肥厚しない（第370図1）。前期でも最初頭とは考えられず、塚田式はもとより中道式に後続する資料だろう。しかし、住居1軒と土坑数基しか検出されていないので、本格的に本遺跡に集落が展開していたかは分からない。

その点前期後葉諸磯ｂ式から ｃ式になると格段に資料が増加する。竪穴住居跡は建て替えの可能性もあるものも含めてであるが4軒（ＳＢ10・45・49・50）検出される。いずれも諸磯ｃ式。土坑はＳＫ018・305など前期後葉の土坑のほとんどが諸磯ｂ式である。住居跡と土坑の大半の年代は多少食い違う。諸磯ｂ式期の土坑群は、②区に集中している。ＳＫ305は底部が打ち抜かれた略完形の土器などが出土している。墓壙群の可能性が高いと思われるが、決め手に欠く。

中期初頭は竪穴住居跡4軒（ＳＢ20・21・22・31）、土坑もＳＫ105・106・107・215・222などが検出されている。いずれも縄文地に並行沈線文を施すものが主体である。

中期は中葉以降の住居跡はなく土坑も中葉（ＳＫ021・094）後葉（ＳＫ014）といった数基が検出されているだけである。

後期になると住居跡は検出されていないが、初頭から前葉の土坑（ＳＫ083・092・102・103・113・115・130・138・274・412など）が①区を中心に集中して検出されている。ＳＫ083は口縁端部を肥厚して沈線を施すが、頸部に縦位の磨消縄文を施し、称名寺式でも新相に並行する資料だろう。ＳＫ102は口縁部に屈曲を有し、明確に文様帯を作り出す。頸部は無文。堀之内1式。型式学的にはＳＫ083などがやや古くＳＫ102が新しく位置づけられるが、後述の第11章釜村田遺跡では、両者が住居跡覆土一括として出土していることから、さほど時間差があった訳ではないと思われる。後期前葉以降の資料は遺構外からも検出されていない。

なお、これら後期土坑群の性格を解明するためにリン・カルシウム分析を行ったが、人間を含む動物遺体の痕跡が残されていた可能性は低いとされた（本章第4節参照）。

弥生時代：遺構外から有段の高坏（第466図1）、磨製石鏃片（第471図119）が出土しているのみである。おそらく後期でも後葉に属するものか。森下遺跡や細田遺跡同様、この時期の詳細は不明。

古墳時代：竪穴住居跡は9軒（ＳＢ15・18・19・29・40・41・43・46・48）検出されている。遺構の遺存状況は悪く出土土器が非常に少ないものもあるが、以下の諸要素が共通する。

まず大枠として箱清水式の系統を引く赤彩の土器などがなく、須恵器は共伴しない時期の古墳時代の土師器（いわゆる古式土師器）に該当する。器種の認定については第6章真行寺遺跡群第8節小結に従い、以下本遺跡の古墳時代土師器の組成を考えてみる。

(1)いわゆる箱清水式の系統を引く櫛描波状文の甕や壺は含まれない。また須恵器も組成に含まれない。

(2)小型精製土器は、器台、壺が散見される。（ＳＢ40・43）

(3)高坏はほとんどない。

(4)坏はほとんどない。

形態的な特徴としては

(1)壺形土器　有段の壺（SB41・46）

(2)甕形土器　ハケ目調整の「く」字状口縁球胴甕（断片的な資料が多いので、球胴壺との峻別は困難だが）が主体的。口縁「S」字状の台付甕（SB41）も少数含まれる。

技法上の特徴としては

(1)小型精製土器、球胴壺形土器はミガキ調整が顕著である。

(2)球胴甕、台付甕、甑はハケ目調整が顕著である。

以上のような特徴から長野県史笹沢編年のII期に該当しよう。

次に住居跡の特徴であるが、いずれもカマドをもたず、地床炉が主体のようであるが、SB43のように明確な掘り込みをもつものは少なく、SB15・19・41などのように焼土などの痕跡が残るものである。

なお、焼失住居と考えられるSB46の炭化した住居構築材の樹種同定を行ったところクヌギ節とコナラ節が同定された（本章第5節参照）。中田遺跡、真行寺遺跡群などとの結果とともに整合している。

古代：住居跡はSB01・02・03・05・07・39・51の7軒が検出されいている。組成の面からは坏では須恵器主体の遺構から黒色土器主体のものまであり、土師器甕はロクロ成形のものや口縁「コ」字状胴部へラケズリ甕が見られる。時間幅が存在することが明らかではあるが、いずれも平安時代に収まるものと推測される。古代の遺構も古墳時代同様後世の削平が著しく遺存状況が悪く、資料的に偏っている可能性があるが、3時期に大別した。

1期SB39：坏は須恵器が主体。甕は口縁「コ」字状胴部へラケズリ土師器甕。佐久編年6段階。平安時代初頭。

2期SB07・51：坏は黒色土器が多いが、須恵器坏も一定量占める。土師器甕は「く」字状口縁胴部へラケズリ調整。須恵器小型甕も含む（SB51）。佐久編年8段階前後。平安時代前期。

3期SB01・02・03・05：坏は黒色土器が主体。土師器坏が含まれる。SB01・03の土師器甕はロクロ成形で、ケズリ調整はあっても底部付近に限られる（SB01・03）。佐久編年9・10段階。平安時代前期から中期

土坑資料（SK043・056・249・252・406）は坏・椀類は黒色土器が卓越し、須恵器は見られないが、土師器のものが散見される。甕の口縁部は胴部にケズリ調整を施すが、断面は「く」字形。といった特徴が共通していて、本段階に伴うものと考えた。SK242とSK252は切り合いをもつことから、新旧関係が判明しているが、土器の様相自体では区別できないので、土器様式の変化では大差ない時間幅でこれらの遺構の切り合いが発生したのだろう。

1期は出土資料自体も限られるためもあろうが、2～3期に「十十万」（SB03）「四」（SB07）「本」（SB51）「千」（千・土？）（SK056）「供」？（SK252）などの墨書土器が見られる

中世：大枠の時期であるが、真行寺遺跡群で大量に出土している13世紀代前後の龍泉窯系などの貿易陶磁、国産施釉陶器である古瀬戸、須恵質陶器である珠洲系の擂鉢は皆無に近く、明確な中世前期（鎌倉時代）の遺構はないと考えられる。左回転ロクロ成形の土師器皿、内耳鍋が本遺跡中世以降出土焼物の主な組成で、これらは中世後期の枠の中に属する。貿易陶磁は少なく、古瀬戸が散見されるが、年代は様々である。あえて遺構を大別すれば以下のとおり。

1期　直立口縁内耳鍋出現以前。14～15世紀代。古瀬戸壺14世紀代が出土するSB14。古瀬戸鉄釉天目茶碗SK254。軟質須恵質・土師質擂鉢はあるいはこの時期に属するか（SK145・247など）。

2期　土師器内耳鍋を組成する（SB06・16・23・42）。本遺跡の中世遺構の大半はこの時期に属すると思われる。中世後期後葉。16世紀代。

中世後期後葉（15世紀末から16世紀代、戦国時代から近世以前）に多くの土坑や竪穴建物が造られたことが分かる。中世前期が主体の真行寺遺跡群などではこうした竪穴建物跡には焼土の集中など住居と想定できるような痕跡は認められなかったが、本遺跡の中世竪穴建物跡には地床炉と考えられる焼土集中が見られるもの（ＳＢ23・42）や石組みが巡るもの（ＳＢ16・42）、周溝が巡り柱穴が6基も検出されたもの（ＳＢ44）などは、規模的にも中世以前の竪穴住居跡と匹敵し、ほぼ同一地点で何度も建て替えを行っていることなどから住居的な性格を考えてもよさそうである。これを裏付けるかのように、中世前期の竪穴建物跡には見られなかった煮沸具としての土師器内耳鍋が多く出土している。

では、中世後期の山の越遺跡の性格をどのように考えるべきであろうか。その前に中世後期の祢津の歴史的背景を考えると室町時代の宝徳元年（1449）に定津院が「城下」に開設されたという記述がある（桜井ほか1991）。この城は年代的に考えても祢津の山城のことと考えられる。さて祢津の山城といっても上の城と下の城の二つがある。発掘調査が行われている訳ではないので、厳密な時期比定は難しいが、形態的には下の城（いわゆる祢津城山）は、環状に巡る土塁が遺構としてのこっている。土塁が巡るような山城は河西克造によると善光寺平では16世紀代以降（河西1996）と考えられることから、上小でもほぼ同じような状況であったと仮定すれば上の城がこの定津院でいう城（15世紀代には造営されていた山城）であろう。その後何らかの理由で（軍事的緊張か）16世紀代に土塁も巡す山城（下の城）が造営されたのであろうか。確かに16世紀代は上小地方も信州の他地域同様、武田氏、村上氏などがたびたび侵攻し、天文10年（1541）には海野平の合戦で祢津元直が武田信虎らに破れ、降るという事態も発生しており、決して政治的、軍事的に安定していたとはいえない。

山の越遺跡の竪穴建物群の大半はこの下の城に対応する。まさに城山のふもとに山の越遺跡は位置しており、常時下の城（祢津城山）がよく見える位置にあった訳である。

しかしながら、考古学的に分析すると、まず遺構、竪穴建物自体は、比較的恒久的な居住も可能なものとして発達している（周溝が巡る、石組みといった構造だけでなく、同じ場所に何度も造営されている）。

出土遺物の特徴も食器と考えられるような土師器皿や陶磁器が少ないが、煮沸具は土師器内耳鍋が卓越し、石鉢、台石、石臼、砥石といった石器、刀子、鉄斧、鋸といった金属器も出土している。これらは日常生活用具ととらえられ、日常的な集落の様相を示している。とくに軍事的な緊張状況などをここからは短絡的には読みとれない。

よって鵜柄俊夫が長野県内の中世集落では掘立柱建物が一般化されておらず、竪穴建物が大きな位置を示していたと指摘（鵜柄1986）するように、本遺跡も中世の定住的な一般集落であり、特殊な遺跡ではないと考えたい。また、小山岳夫が指摘するような竪穴建物跡の柱穴のあり方が一般集落と城郭遺跡とでは異なるという指摘（小山1986）もあるが、こうした差異を本遺跡の竪穴建物跡で見いだすことはできなかった。ただ、市川隆之が指摘するように金井城跡の城郭内の竪穴建物跡や遺物といえども決して非居住的な様相ではなく、さらに特定の集団の居住区域ともいえない特徴をもっているという（市川1998）。堀を巡らせていて「城郭」としてとらえることが可能な金井城跡にしてそうならば、山の越遺跡の遺構・遺物の様相だけをもってして、その背景にまったく軍事的な緊張がなかったとまではいえない。いまだ当該期の集落遺跡は上小地方ではそれほど調査されておらず、今後の類例の増加をまって、本遺跡の性格を追求すべきだろう。

近世：明確な遺構はない。国産の施釉陶器としてはＳＫ021出土の貧乏徳利（第467図32）やＳＢ42出土鉄釉猪口（第428図２）土瓶底（３）。また、遺構外の土師質火鉢？（第467図24・26・27）も当該期か。

貧乏徳利は釘のような尖ったもので釉薬がケズリ取られていて「大（灸大）」と読める。貧乏徳利には使用時にこうした屋号を記すことは珍しくないという[注1]。現に祢津西宮には大海屋酒店が現存し、ここの屋

号は角大であるので、大海屋酒店の徳利である可能性は高い[註2]。

註1　市川隆之氏のご教示。

註2　大海屋酒店のお話では屋号のもととなった「大海」は、大海屋酒店創業年が納杏（なっちん・干支に五行を配当して種々の名称をつけたもの）の「大海水」にちなんだためという。「大海水」は干支では「壬戌・癸亥」に相当する。ちなみに「大海水」に該当する江戸時代の年代は1862・63（文久2・3）年、1802・03（享和2・3）年、1742・43（寛保2・3）年などである。

引用参考文献

市川隆之1998「金井城跡出土焼物のまとめ」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1―軽井沢町内・御代田町内・佐久市内・浅科村内―金井城跡ほか』長野県埋蔵文化財センター

河西克造1996「善光寺平（西南部）の中世城郭」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター

小山岳夫1986「竪穴遺構」『大井城跡』佐久市教育委員会

国立歴史民俗博物館1997『国立歴史民俗博物館研究報告第71集　中世食文化の基礎的研究』

鋤柄俊夫1986「長野県の中世集落遺跡について」『長野県考古学会誌』50

桜井松夫・竜野敬一郎・川上　元1991「中世」『東部町誌歴史編（上）』東部町誌刊行会

笹沢　浩1988「古墳時代の土器」『長野県史考古資料編全1巻（四）遺構・遺物』長野県史刊行会

寺島俊郷1991「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2―佐久市内その2―』長野県埋蔵文化財センター

第11章　釜村田遺跡

第1節　遺跡の概要

本遺跡は、東部町和字釜村田7050番地ほかに所在する。地理的には東信火山帯の烏帽子岳西南麓、大室山より流れ出る三分川によって形成された扇状地上に立地している（第2・483図）。上信越自動車道建設に伴う緊急発掘調査を行った地点の標高は約655～664mを測る。

正式な発掘調査ではないが、釜村田集落の民家宅地内の竹藪を掘り起こしたところ多数の勝坂式などの土器や石器が出土したという（五十嵐1959）。

本遺跡は圃場整備事業に伴い平成2年度に試掘調査、平成3年度に面的な調査を東部町教育委員会が行っている。とくに今回の調査範囲に隣接するA地区では中期の土坑や後期の土器が検出されている（西沢ほか1992）（西沢・坂井ほか1993）。

引用参考文献

五十嵐幹雄1959「石器文化時代の和村」『和村誌』

西沢　浩・塩入秀敏1992『東五町遺跡西五町遺跡清水田遺跡小中田遺跡沖田遺跡七ツ石遺跡釜村田遺跡』東部町教育委員会

西沢　浩・坂井美穂・塩入秀敏1993『釜村田遺跡下金山遺跡塚原古墳群剃り田遺跡』東部町教育委員会

第2節　調査の概要

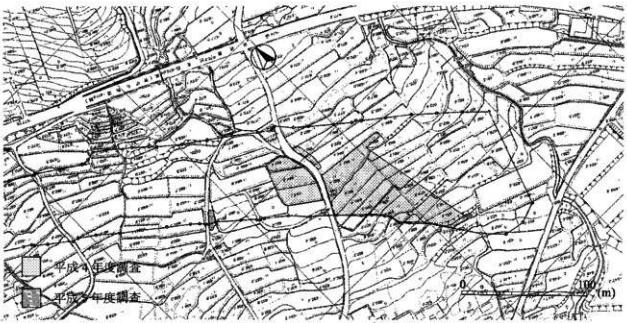
1　調査範囲と経過

まず調査範囲を確定するために、平成3年12月2日～14日に東部町教育委員会作成の遺跡地図当該部分を中心に1460㎡の試掘調査を行い、調査範囲を絞り込んだ。平成4年8月19日～31日に5000㎡、また平成5年4月21日～5月17日にも1000㎡の面的調査を行った（第483図）。

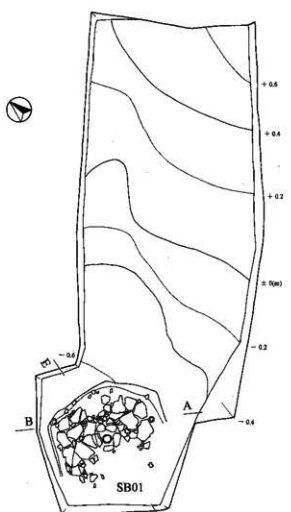
平成4年8月19日　重機表土剝ぎ開始。
8月31日　埋め戻し。
平成5年4月21日　2次調査開始。
4月26日　敷石住居跡（SB01）検出。
5月17日　石匿炉炉体土器取り上げ。
5月21日　調査終了。

2　基本層序

黒褐色砂混じりシルト層（表土）が礫混再堆積ローム層（地山）を覆う。この表土層と地山ローム層の間に部分的に暗褐色～黒褐色砂質シルト～粘土質シルト（遺物包含層・遺構覆土）が存在する（第485図）。



第483図　釜村田遺跡調査範囲



第484図　釜村田遺跡遺構配置

第3節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡と土器

(1) 縄文時代

SB01（第485～492図）

検　出　当初の調査区境に土層観察用のトレンチを設定し、掘り下げたところ、板状節理の発達した輝石安山岩が散かれた平坦面が検出され、敷石住居であることが想定された。よって周辺部分の表土を除去後、慎重に掘り下げたところローム層直上で略六角形の落ち込みが見られた。さらに土層観察用のベルトを残して掘り下げ、面的に広げた。北東半分は立ち上がりや敷石による平坦面は明瞭であったが、南西半分は耕作によって削平され、平面形は確認できなかった。

構　造　北東—南西に長軸をもつ現存3.8×3.2m、一辺1.8～2.2mの略六角形。平担面は板状安山岩の敷石があるところは明確だが、南側は敷石がなく、不明瞭。柱穴は3基Pit 1～3。中央の石囲炉は北東—南西に長軸をもつ0.9×0.8mの方形。石囲炉中央に炉体土器（第487図1）が埋設。

遺　物　1～22有文深鉢口縁部。1撚糸文Rを地文とし、2単位の「H」字形縦位区画並行沈線文の間を蕨手状並行沈線文が配される。口縁上端部には突起の痕跡あり。頸部は屈曲はするが文様帯としては、区分されず古い様相といえる。2～22口縁部文様帯が明瞭に作り出される。2～10頸部に文様を施すもの、12～22頸部無文のものに分かれる。前者を古い様相と見なすこともできるが、住居内の層位的な偏りは見いだせなかった。23～46有文深鉢胴部。23渦巻を繋ぐ4単位の並行沈線文。胴部から頸部に立ち上がる部分（胴部文様帯に対応して）の擬口縁で欠損している。炉体土器であったので、底部が欠損していることと合わせて人為的なものだろう。47～56刻目隆帯を口縁部に巡らせる深鉢形土器。指頭による刻みが大半だが、50・55明らかに指頭以外の刻み、56棒状工具による刺突も見られる。57・58浅鉢。59・60注口土器。61無文鉢。62～66底部。また、個別に図化はしていないが、敷石はいずれも床面側が非常に摩滅している。石材は板状節理の発達した輝石安山岩（いわゆる鉄平石に酷似する）。

時　期　縄文時代後期前葉　堀之内1式古段階

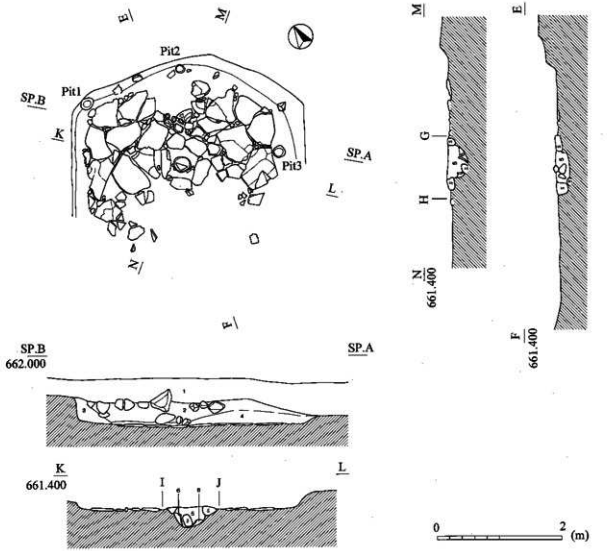
2　遺構に伴わない土器

(1) 縄文時代（第493図）

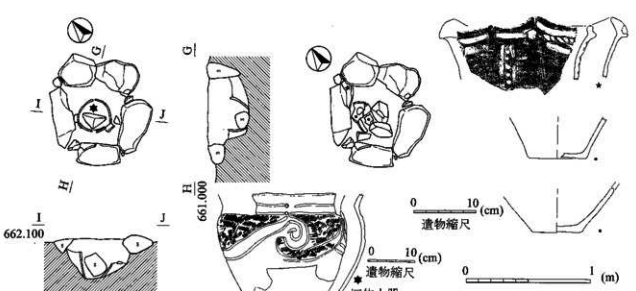
1～6中期後葉。1～3・5加曽利E式系。5土製円盤。4縦位並行沈線区画内を短斜行沈線で充塡。「鱗状短沈線文土器」。7～21後期前葉。7～15口縁部外面ないし内面に文様帯を作出する。16口縁部文様帯は上面を向く。17鉢。18～21胴部。

(2) 古墳時代以降（第494図）

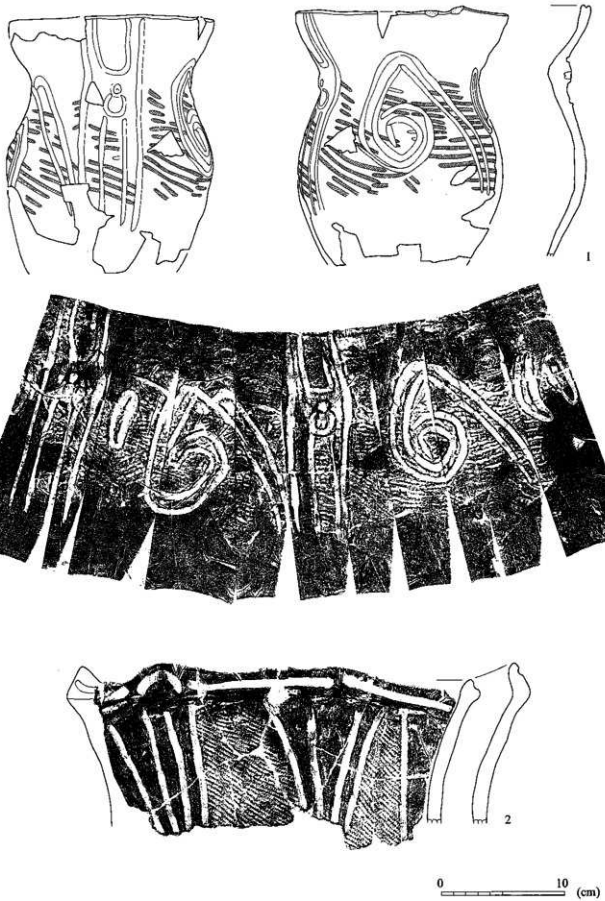
22土師器小型精製鉢。古墳時代前期。23土師器甕。古墳時代。24土師器土製円盤。25土師器内耳鍋。中世後期。



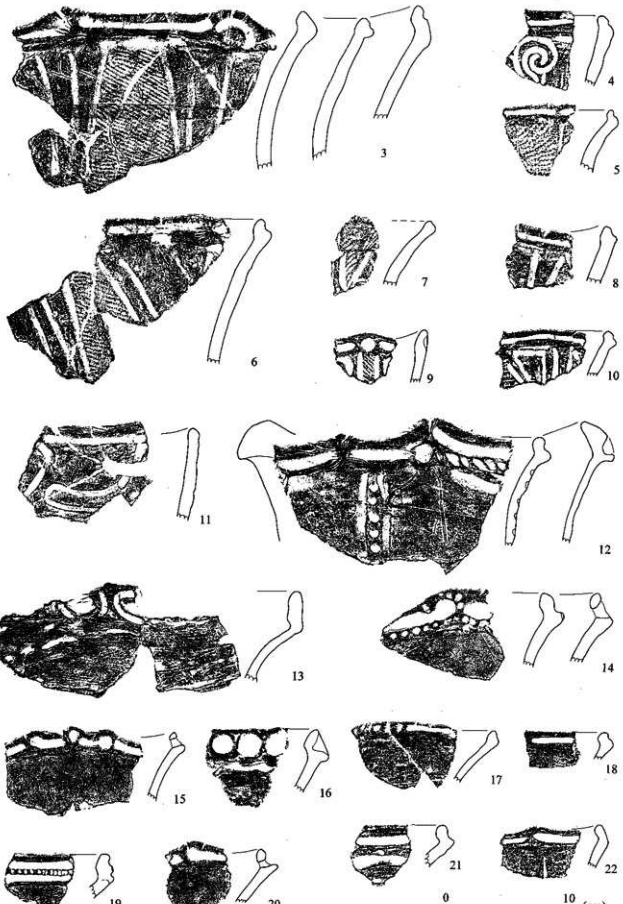
第485図　竪穴住居跡　ＳＢ01



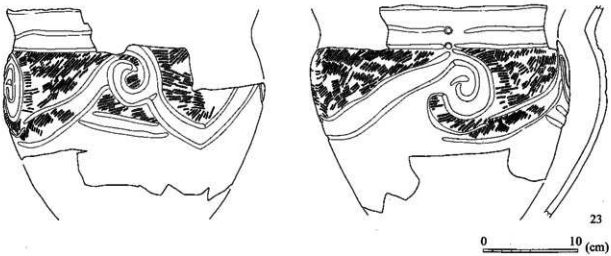
第486図　竪穴住居跡　ＳＢ01石囲炉・土器出土状況

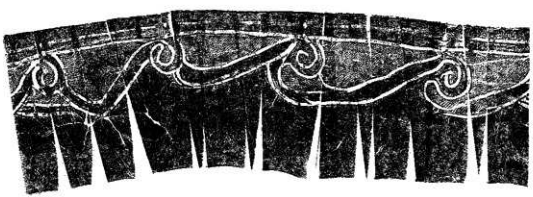


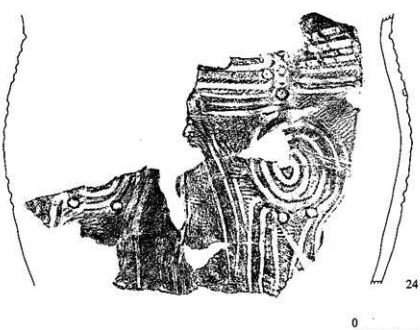
第487図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(1)



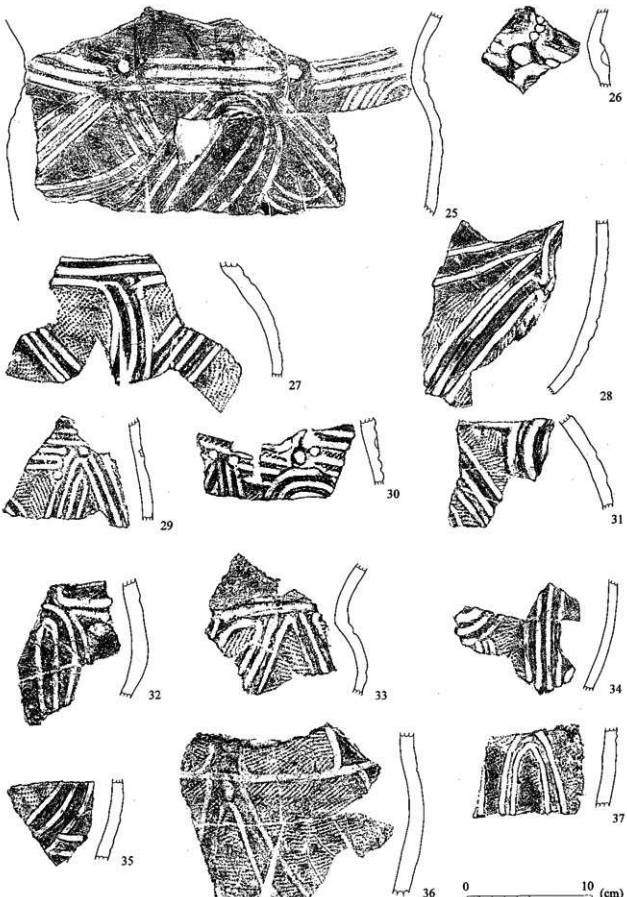
第488図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(2)



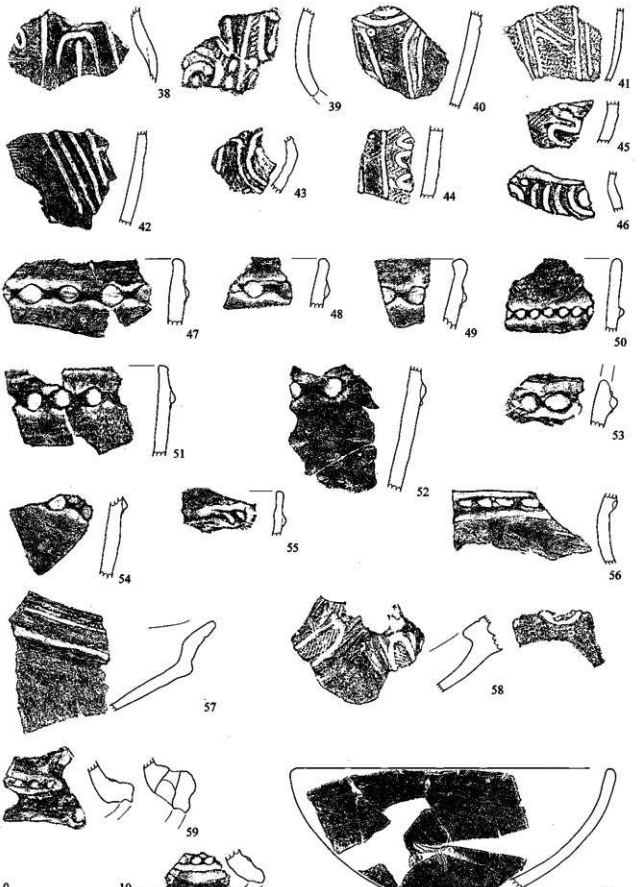




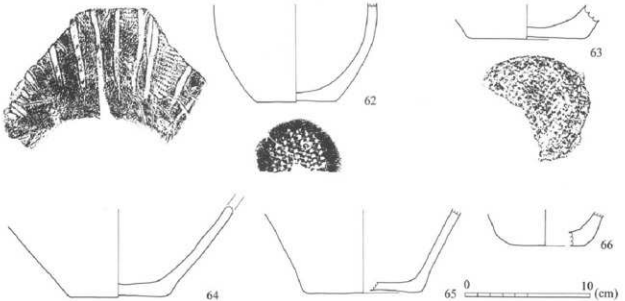
第489図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(3)



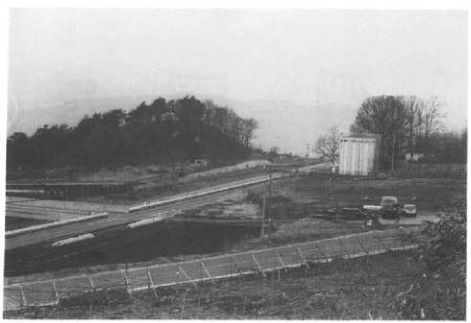
第490図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(4)

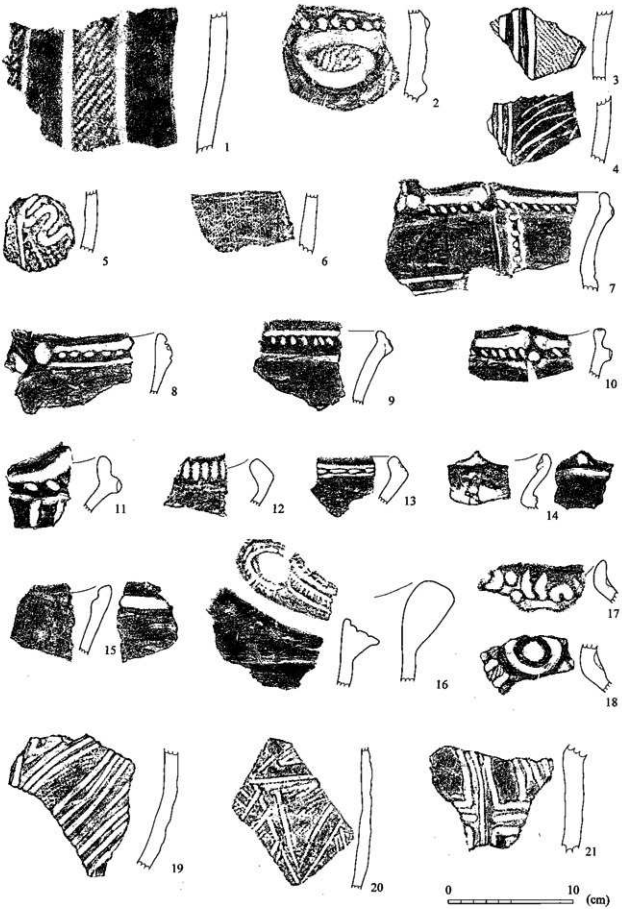


第491図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(5)

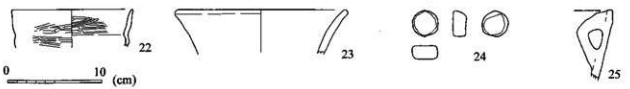


第492図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(6)





第493図　縄文土器



第494図　土師器

第4節　小結

SB01相対年代：SB01の南西半は畑の耕作により遺存状態が悪かったが、北西側は石垣が設けられていたこともあり耕作の影響はほとんど受けていない。覆土内遺物は量的にもまとまっていて比較的プライマリーな状況を保っていると判断される。

土器を概観すると略完形土器（第487図1）は器形的には屈曲していて頸部を作り出しているが文様は口縁端部から胴部にかけて縦位に施文されている。また口縁部を作出していても頸部に磨消縄文の文様が施されるもの（2～10）もある。これらは頸部、とくに無文部の確立を堀之内式の指標とすれば、やや古い称名寺式に近い様相を示しているとも考えられる。

これに対して、口縁部文様帯を屈曲させて作出し、頸部は無文の土器（13~22）がある。これらは、堀之内1式の範疇に入るものと考えられる。型式学的には両者には時間差があるとすることも可能かも知れない。

しかし、本遺構での出土状況は上層と下層で土層は明確に分離されたにもかかわらず、上層と下層で接合する土器が少なくなく、また層序とこうした型式学的な区分とにはなんら整合性は見られなかった。

また、2～10の頸部有文土器と同様に12は口縁部文様帯は確立していて、形態は明らかに堀之内式の範疇に入る土器である。これには垂下並行沈線文が施されている。これと頸部無文のものとの間に時間差を見いだすことは型式学的に難しい。

12の土器を介在させれば、13～22は現象としては頸部は無文であるが、この無文部も文様帯として見なすことができはしないか。つまり頸部無文ないし12のような垂下沈線文を施すだけのような土器と頸部有文土器は本質的な差異は認められないと考えられる。

1のような土器の位置づけは難しいが、全面施文という点では称名寺式的な様相とも言えるが、それ以外の文様の意匠は堀之内1式のものに近く、堀之内式の成立段階にはこうした称名寺式的な様相を残す器種もあるととらえるのが本遺構の出土状況からは妥当と思われる。また、遺構の周辺からは称名寺式に並行する土器も後続すると考えられる土器もまったく出土していないので、当該地域の堀之内1式の成立時の組成を示す良好な資料と言える。

第12章　野行田遺跡

第1節　遺跡の概要

本遺跡は、東部町和字野行田7951番地ほかに所在する。地理的には烏帽子岳南麓の扇状地上、金原川左岸に立地する（第2・495図）。今回調査をおこなった付近の標高は約677～682mを測る。

東部町教育委員会作成の『東部町遺跡分布図』によれば土師器、須恵器の散布地となっている。過去に発掘調査歴はない。

第2節　調査の概要

1　調査範囲と経過

平成3年12月12日～19日に対象面積7000m²に対してトレンチによる試掘調査を268m²を行い、調査面積を確定した。平成4年9月1日～9月11日にわたり面的調査を行った（第495図）。

2　基本層序

本遺跡の基本層序は上位から現耕作土（I層）と礫を含む再堆積ローム層（V層）からなり、金原川沿いには暗褐色砂質角礫層、黒褐色シルト質砂層といった河川堆積物が見られる。

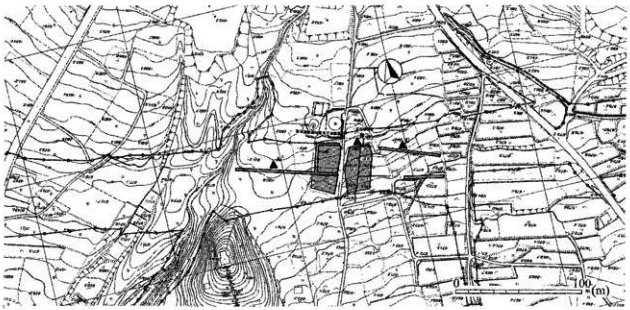
第3節　遺構と遺物

土坑が1基検出されたが、所属時期、性格など不明。近現代か。遺構外から縄文土器がいくつか検出されている。

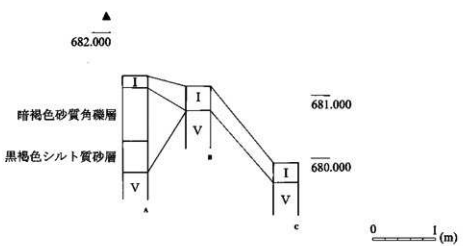
1中期初頭。2中期中葉。3中期後葉。

第4節　小結

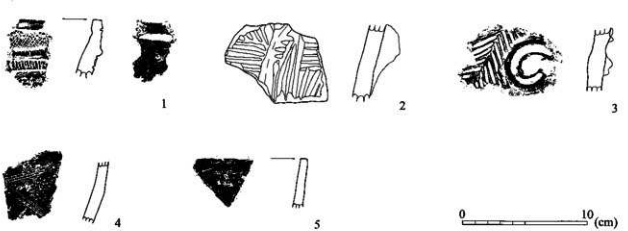
明確な遺構は検出されなかったとは言え、ほとんど摩滅しない土器片が表面から採取できることから今回の調査範囲付近に当該期の遺構が存在する可能性は高い。



第495図　野行田遺跡調査範囲



第496図　基本土層



第497図　出土土器

第13章　中原遺跡群

第1節　遺跡の概要

本遺跡は東部町和（かのう）字中原2758番地ほかに所在し、地理的には烏帽子岳西南麓の複合扇状地上、成沢川左岸、金原川右岸に立地する（第2・498図）。今回上信越自動車道建設に伴う緊急発掘調査を行った地点の標高は、およそ660～680mを測る。

本報告書でいう「中原遺跡群」は和の大川地区の遺跡である。似た名称で現在は「中原遺跡」という遺跡が同じく和の田沢地区にあるが、本報告書でいう「中原遺跡群」とは別の遺跡である。ただ、かつては「中原遺跡群」の一部分を「和の中原遺跡」と呼称していた（五十嵐1964・1986）。

本遺跡は過去に数回の調査が行われている。昭和27年大川地区で甘藷の貯蔵穴を掘った時に厚さ5cm内外の平滑な平石が出土した。よって五十嵐幹雄氏を中心に小県郡誌資料編纂会の発掘調査が行われ、縄文時代後期前葉堰之内式期の敷石住居跡が検出された。その後水道工事のために中原遺跡群内を掘削したところ、頭蓋骨の入った縄文時代の土器が出土した（五十嵐1964）。この人骨は信州大学医学部解剖学教室で鑑定され報告されている（鈴木1957）。この土器はその後綿田弘実氏によって実測紹介され、後期前葉堰之内1式成立段階に位置づけられる（綿田1985）。昭和41年には大川地区の民家の豚小屋改築の際にも、縄文時代中期後葉加曽利E式の人骨の入った深鉢が出土している（岩佐1967）。

平成2年には県営圃場整備に伴い、大川地区の中原遺跡群および隣接する大川遺跡、田沢地区中原遺跡で発掘調査が行われた。中原遺跡群では縄文時代後期の埋設土器2基、土坑群、遺物集中が、隣接する大川遺跡では中期中葉の竪穴住居跡が検出された（坂井ほか1992）。

引用参考文献

五十嵐幹雄1964「石器文化時代の和村」『和村誌』

五十嵐幹雄1986『東部町の遺跡と文化財』

岩佐今朝人1967「小県郡東部町中原遺跡出土の人骨を覆う土器」『信濃考古』21

岩佐今朝人1980「上小地方の古代文化縄文時代(7)」『上小考古』7

川上　元・堀田雄二・西沢　浩・保坂富男1990「原始」『東部町誌歴史編上』東部町誌刊行会

坂井美綱・塩入秀敏・塩沢むつき1992『大川遺跡中原遺跡群　下曽利遺跡上曽利遺跡山根遺跡王三田遺跡たたら堂遺跡中原遺跡一緊急発掘調査報告書―』東部町教育委員会

鈴木　誠1957「長野県大川発見の甕棺葬の一例」『人類学雑誌』42－2

綿田弘実1985「小県郡東部町和中原遺跡出土の後期縄文土器」『上小考古』18

第2節　調査の概要

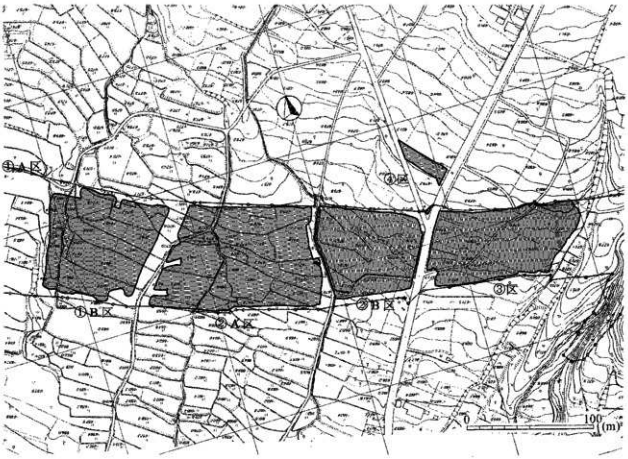
1　調査範囲と経過

調査範囲を確定するために、平成3年12月12日～19日にかけて、東部町教育委員会作成の遺跡地図当該部分を中心に試掘調査を行った。表面での遺物散布状況を勘案し、従来遺跡範囲外とされていた成沢川側にもトレンチを設定した。試掘面積は1102㎡。本調査では試掘結果を受け、成沢川から金原川に挟まれた部分を面的に調査することにした。地形および道路・水路などの構築物を考慮し、調査上の都合より①A、①B、②A、②B、③、④の各地区に便宜的に区分した。平成4年4月13日～11月6日の期間にのべ38000㎡の調査を実施した。

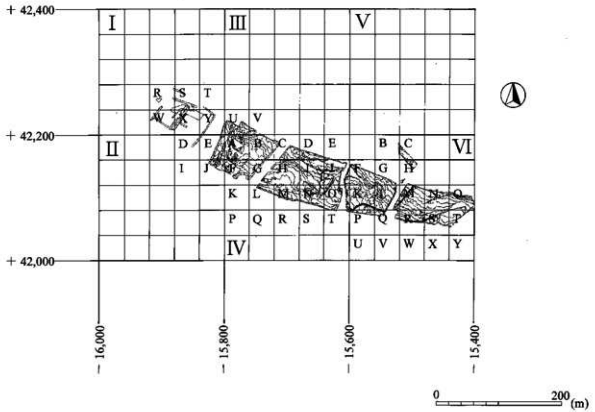
平成4年4月13日　発掘調査開始。①A区トレンチ設定。
4月24日　①B区調査開始。
5月11日　①A区航空撮影。
5月20日　SB05埋甕検出。SK011称名寺式完形土器出土。
5月26日　①B区北航空測量。
6月3日　②A区南航空測量。県文化課市沢英利指導主事現地指導。
7月7日　①B区航空測量・撮影。
7月21日　和小学校3年松組生徒・父兄見学。
7月24日　考古学者五十嵐幹雄氏ほか2名見学。
7月29日　②A区航空測量・撮影。
7月30日　JA東部町取材、見学。
8月2日　現地説明会午前・午後計110名参加。
8月5日　武石村武石小学校生徒見学。
8月20日　③地区航空測量・撮影。大阪文化財センター森本徹、宮地孝子氏見学。
8月24日　SD10から大量に縄文土器出土。
9月2日　三重県埋蔵文化財センター穂積裕昌氏見学。
9月8日　樋口昇一参事現地指導。
9月18日　東部町議会議員団見学。
9月22日　文化課百瀬新治指導主事現地指導。
9月25日　上田市城下小学校飯島校長ほか3名見学。
10月2日　上田市城下小学校生徒見学。
10月7日　②B区航空測量・撮影。
10月14日　②A区航空測量・撮影。
10月28日　④地区航空測量・撮影。
11月6日　調査終了。

2　基本層序

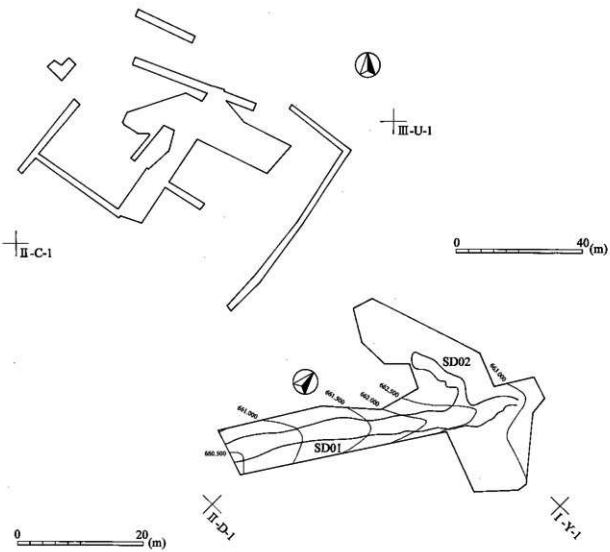
本遺跡は烏帽子岳西南麓の複合扇状地上に、小河川に挟まれる形で立地。本遺跡の基本層序は1層（現水田ないし畑耕作土）、II層（黒褐色粘土質シルト層）、III層（黒～褐色礫混シルト層）、IV層（遺物包含層）が、地山となるV層（砂礫混シルト、再堆積ローム層）の上位に堆積している（第509図）。



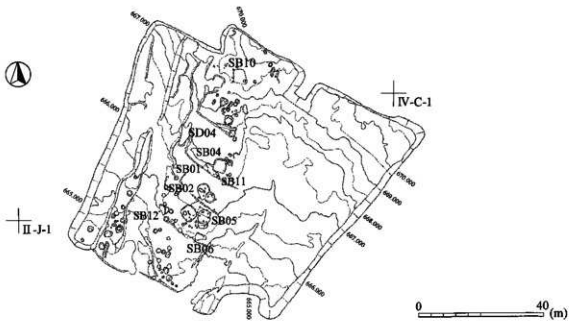
第498図　中原遺跡群調査範囲・調査区



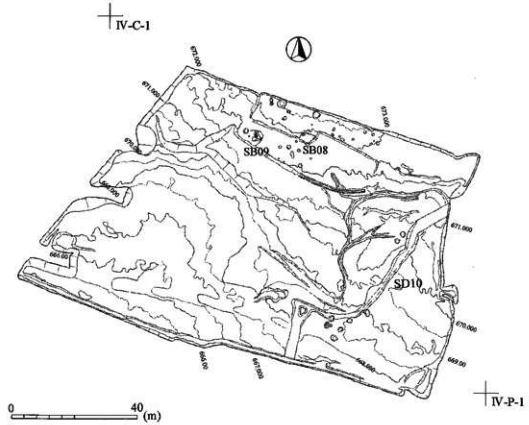
第499図　中原遺跡群グリッド



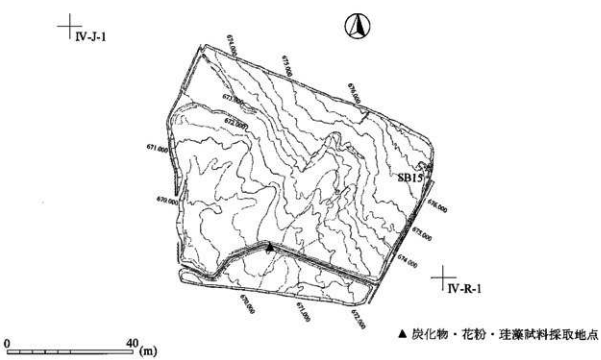
第500図　中原遺跡群　①A区トレンチ・ＳＤ01・02



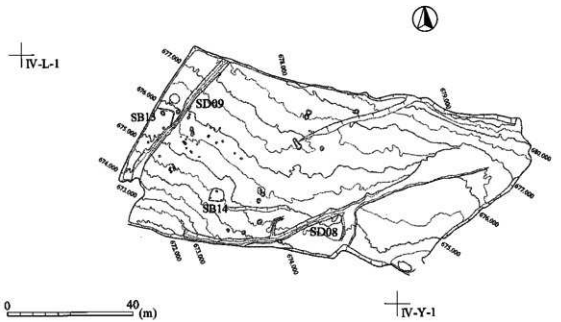
第501図　中原遺跡群　①Ｂ区遺構配置



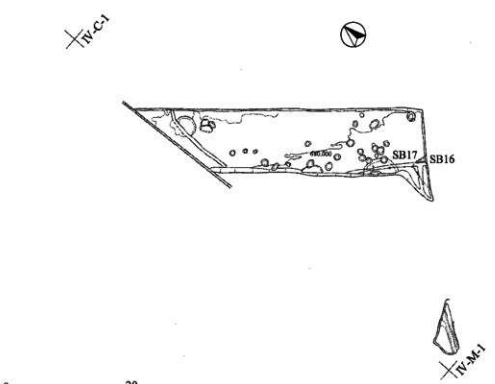
第502図　中原遺跡群　②A区遺構配置



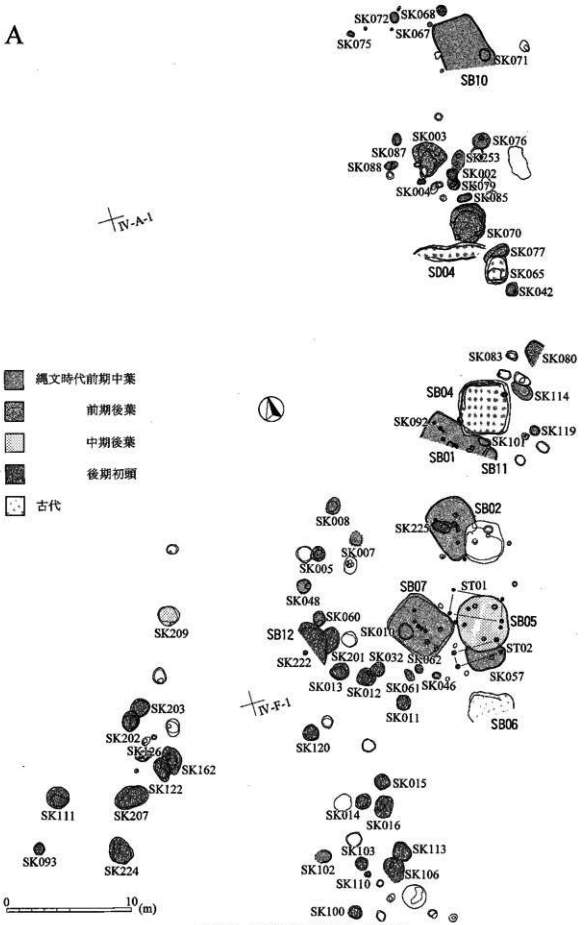
第503図　中原遺跡群　②B区遺構配置



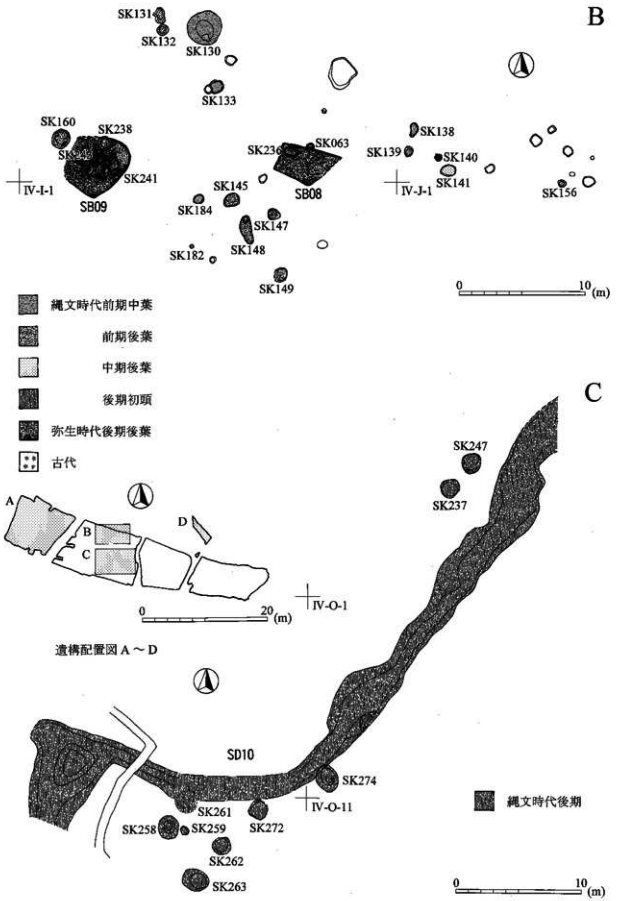
第504図　中原遺跡群　③区遺構配置



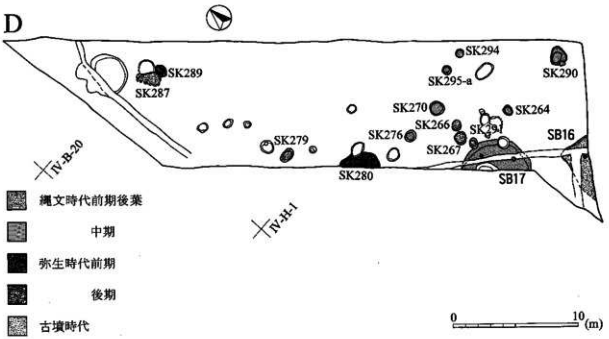
第505図　中原遺跡群　④区遺構配置



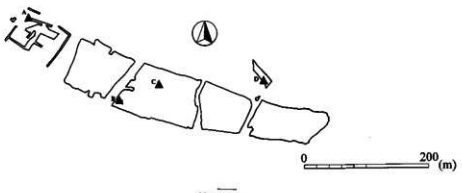
第506図　中原遺跡群遺構配置A（①B区）

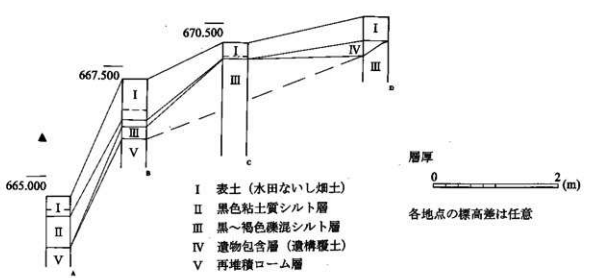


第507図　中原遺跡群遺構配置B・C（②A区）



第508図　中原遺跡群遺構配置D（④区）





第509図　中原遺跡群基本土層

第3節　遺構と遺物

本遺跡の遺構は、扇状地を形成する砂礫混シルト層を地山として、その直上で検出される。以下竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝の遺構順に共伴する土器とともに見ていく。

1　竪穴住居跡と土器

(1) 縄文時代

ＳＢ01（第510～513図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－13・18

検　出　表土除去後、ローム層直上で石垣によって南半分が削平されている方形の黒色土の落ち込みが見られた。軸に沿って設定された土層観察用のトレンチおよび石垣に切られた面から、平坦面と立ち上がりが認められた。

構　造　北西－南東に長軸をもつ現存5.3×2.4ｍの方形。床面はロームを叩き締めた貼床で、堅緻。立ち上がりも明確で直。柱穴Pit１・２。柱穴の径はいずれも15～30㎝と小さい。住居跡中央の楕円形の小土坑は地床炉か。古代ＳＢ04に切られ、縄文時代前期中葉ＳＢ11を切る。ＳＢ11は図化できるような遺物はないが、軸がＳＢ01と揃うことや覆土、床面、立ち上がりの状況が類似することから、ＳＢ01とそれほど時間差はないと考えた。

遺　物　１～８口縁部文様帯をもつ。１～５半截竹管状工具による並行沈線の間を連続刻み。意匠は直線的。並行沈線間に円形浮文を貼付。１・２口縁端部にも同工具による連続刻み。８多段構成のループ文。14直前段合撚の横位回転。15縄文Ｌの側面圧痕。16ナデ調整無文、やや厚手。17浅い爪形刻み、斜行するヘラ細沈線、赤彩痕跡あり。薄手。18～27回転縄文施文。27底部外面にループ文を十字に施す。ループ文とコンパス文が併用。５・17胎土に繊維を含まないが、それ以外は繊維含。16中越式の影響を受けた在地系の無文土器か。17中越式。それ以外は関山式の新相。石鏃（第592図15・19・30・41・43・48・55）石匙（第593図91・第594図95）、連続した剥離を有する剥片（第594図104・第595図111・112）、連続した微細な剥離を有する剥片（第595図122・129）、黒曜石石核（第595図132）、砂岩製磨石（第598図174）が出土。

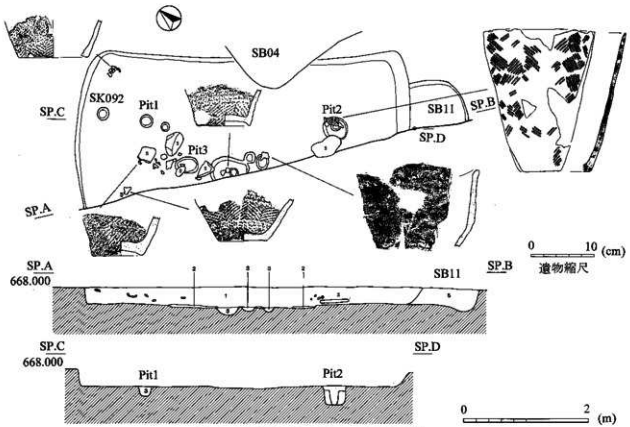
時　期　縄文時代前期中葉　関山式

ＳＢ02（第514～516図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－18・23

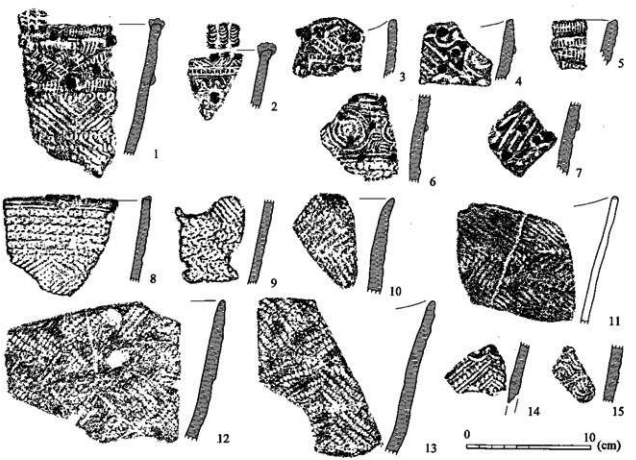
検　出　表土除去後、ローム層直上まで下げたところ、黒色土の落ち込みが見られた。軸に沿って土層観察用のトレンチを設定して掘り下げ、立ち上がり、平坦面および切り合いを確認した。

構　造　北西－南東に長軸をもつ現存4.8×3.9ｍの方形。床面は厚さ２～３㎝のロームを叩き締めた堅緻な貼床。立ち上がりも明確で直。柱穴Pit１・２。柱穴の径はいずれも15～30㎝と小さい。住居跡中央の不整形な土坑が、地床炉か。縄文時代前期後葉ＳＫ227、縄文時代後期ＳＫ225に切られる。

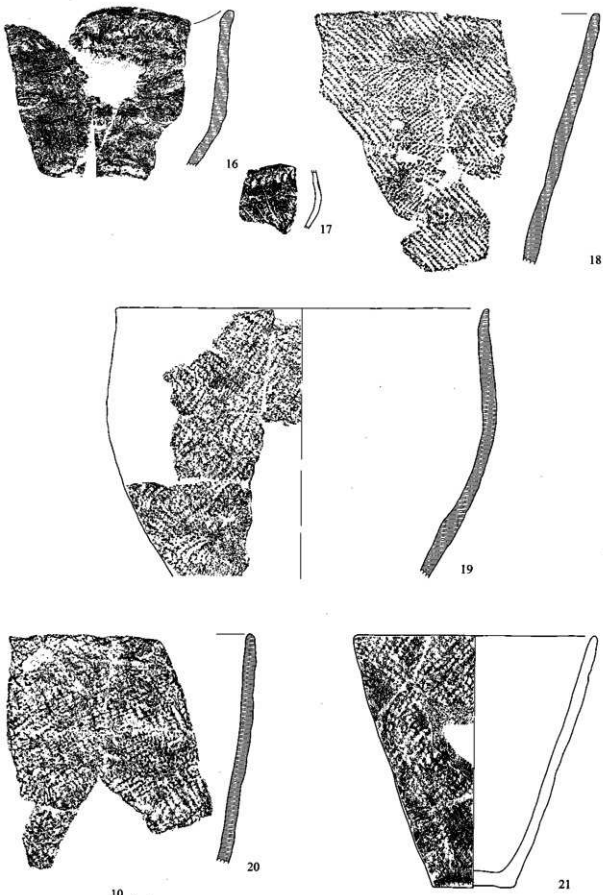
遺　物　１・２口唇端部を刻み、胴部にループ文を施す。３・４半截竹管状工具による並行沈線の間を連続刻み。意匠は直線的。４コンパス文を口縁部文様帯下端に施す。５縄文Ｌの側面圧痕。６撚糸文Ｌ斜位回転施文。７半截竹管状工具による並行沈線文。円形浮文を貼付。９～22回転縄文施文。14コンパス文。10・15ループ文。20～22直前段合撚の横位回転。23～29ナデ調整。23・25口唇ややや内面にヘラ刻み。26～28細隆帯貼付、下部に２段連続刺突文を施す。30・31半截竹管状工具による並行沈線文。23・25～31薄手で比較的堅緻、胎土に繊維を含まない。木島式。32～35繊維を含む回転縄文施文の底部。木島式以外は繊維を含む。関山式の新相。石鏃（第592図３・７・14・24・28・32・37・39・40・45・50・53・61・62・64）、



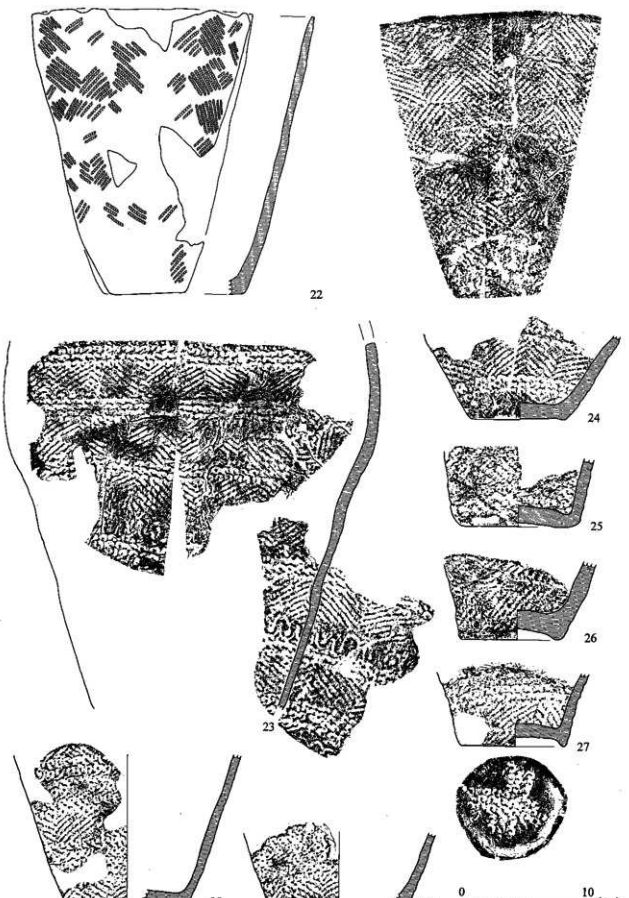
第510図　竪穴住居跡　ＳＢ01・土器出土状況



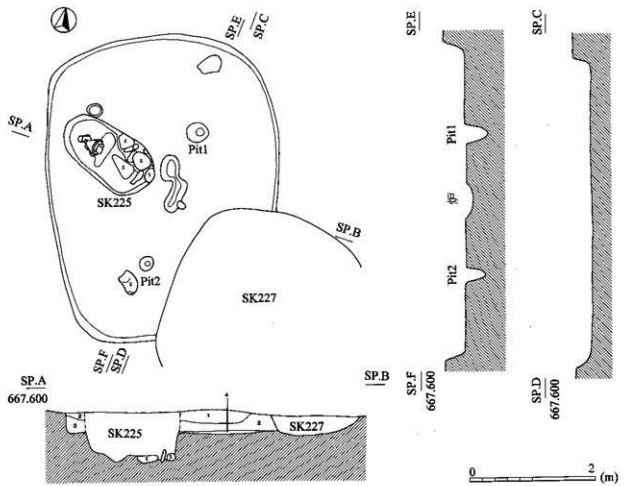
第511図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(1)



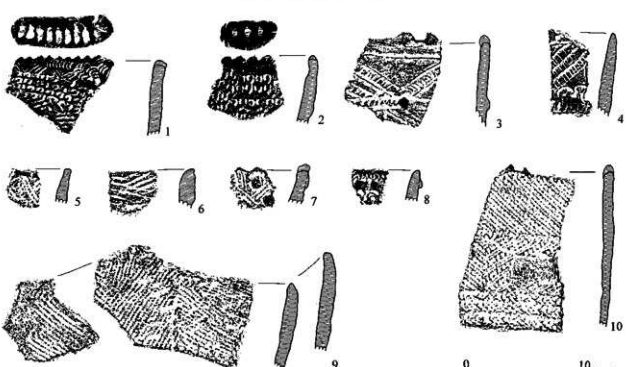
第512図　竪穴住居跡　SB01出土土器(2)



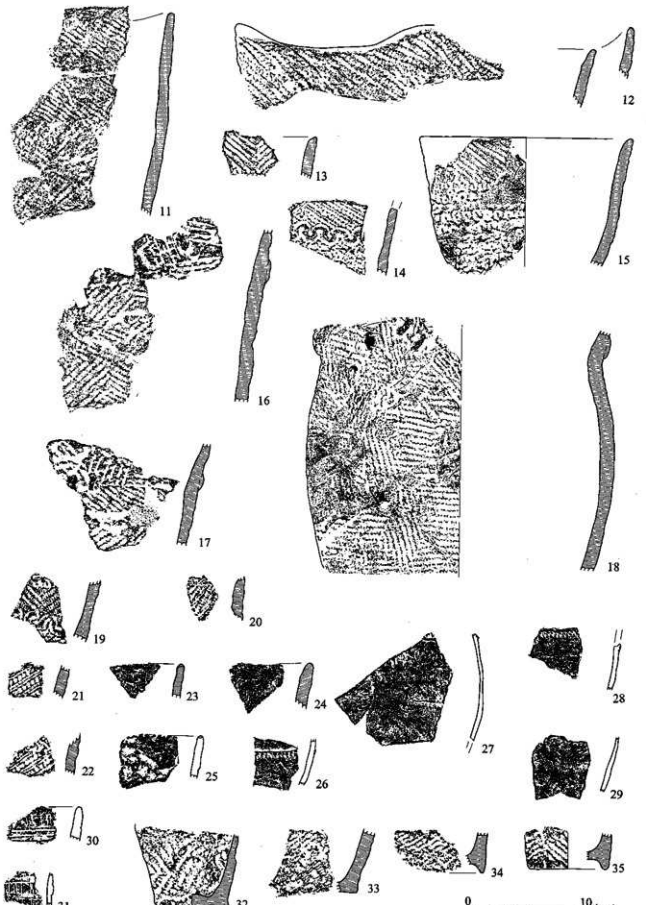
第513図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器(3)



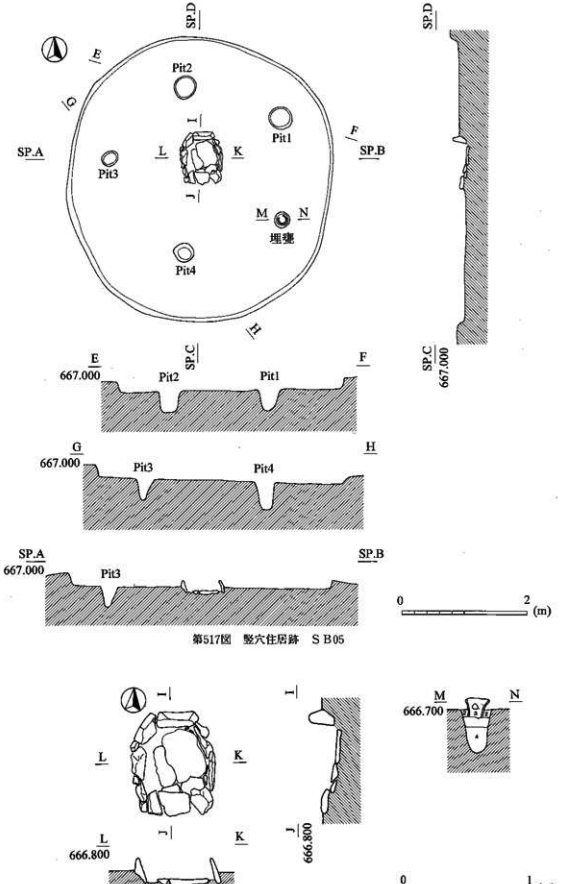
第514図　竪穴住居跡　ＳＢ02



第515図　竪穴住居跡　ＳＢ02出土土器(1)

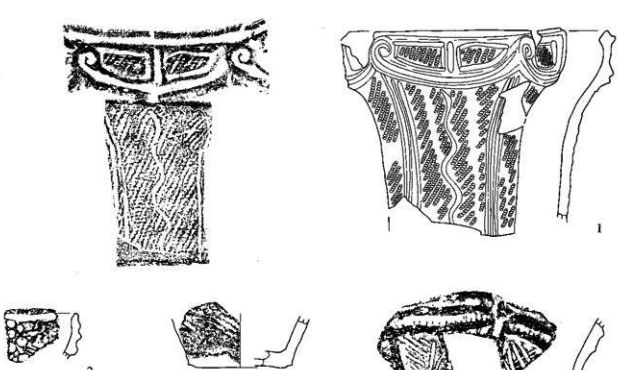


第516図　竪穴住居跡　ＳＢ02出土土器(2)



第517図　竪穴住居跡　ＳＢ05

第518図　竪穴住居跡　ＳＢ05石囲炉・埋甕



第519図　竪穴住居跡　ＳＢ05出土土器

石錐（第593図69・74）、石匙（第594図93・97）、スクレイパー（第594図100）、連続した剥離のある剥片（第594図106・107・第595図110・114）、連続した微細な剥離のある剥片（第595図115・118・119・124・126）、黒曜石製石核（第595図133）、凹石（第598図184・185・第599図186）、敲石（第599図188）、台石（第600図196・第601図199・201）出土。

時　期　縄文時代前期中葉　関山式

ＳＢ05（第517～519図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－23・Ｆ－３

検　出　表土除去後、ローム層直上で円形の黒色土の落ち込みが見られた。土層観察用のトレンチを設定して掘り下げたところ、平坦面、立ち上がりおよび石囲炉が検出された。

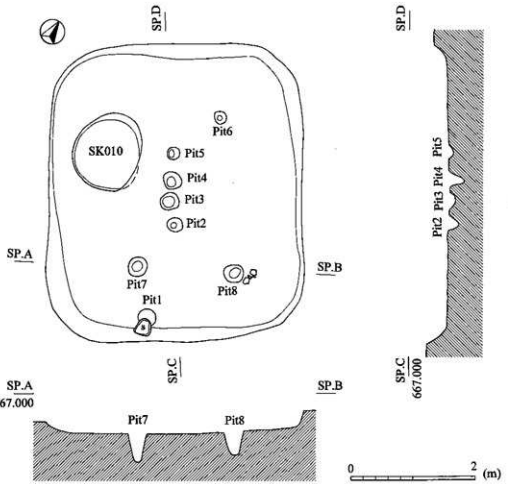
構　造　径4.2～4.5ｍの円形。床面は柔らかく、不明瞭。立ち上がりもゆるやか。柱穴は４基。中央に南一北に長軸をもつ0.9×0.7ｍの方形の石囲炉。南東隅に掘窪。

遺　物　１単位文様の渦巻文を連結し口縁部を隆帯で区画し、さらに区画内を沈線で窓枠状に区画する。渦巻文下位から並行沈線が垂下し、胴部を区画。区画中央には蛇行沈線が垂下。地文は回転縄文ＲＬ。加曽利Ｅ２式新相。掘窪。２竹管状工具による刺突。３縦位回転縄文ＬＲ。底部。４胴部隆帯で区画し、隆帯内を羽状沈線で充填。石鏃（第592図６・47）、石匙（第593図76・84）、磨石（第597図172・173）出土。

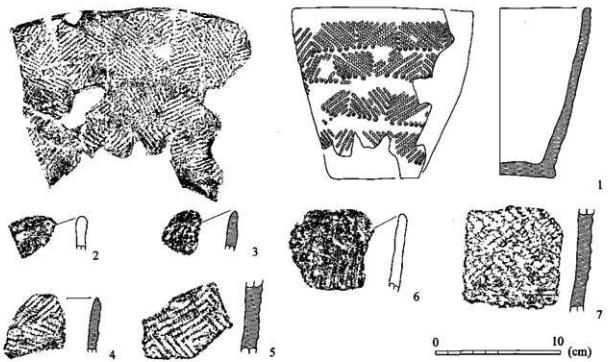
時　期　縄文時代中期後葉　加曽利Ｅ式

ＳＢ07（第520・521図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－22ほか

検　出　表土除去後、ローム層直上で方形の黒色土の落ち込みが見られた。軸に沿って土層観察用トレンチを設定して掘り下げたところ、平坦面および立ち上がりが検出された。



第520図　竪穴住居跡　ＳＢ07



第521図　竪穴住居跡　ＳＢ07出土土器

構　造　北西一南東に長軸をもつ4.8×4.0mの長方形。床面は厚さ2～3cmのロームを叩き締めた堅緻な貼床。立ち上がりは直。Pit6～8柱穴。柱穴の径はいずれも15～30cmと小さい。Pit2～5地床炉か。縄文時代後期ＳＫ010に切られる。

遺　物　1・4・5・7単節縄文。羽状構成。2・3・6ナデ調整、無文土器。2・6胎土に繊維を含まないが、それ以外は繊維含。石鏃（第592図44）、石錐（第593図70・75）、凹石（第598図180）、台石（第600図196・第601図200）出土。

時　期　縄文時代前期中葉　関山式か

ＳＢ09（第522～524図）　　位置　②Ａ区Ⅳ－Ｄ－21・Ｉ－1

検　出　表土除去後、大きな縄文土器片がまとまって出土。精査したところローム層直上で不整形な落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げていった結果、かろうじて堅緻な床面や、ゆるやかな立ち上がりも検出された。

構　造　5.1×4.6mの不整形。床面は堅緻な部分がある貼床。立ち上がりはほとんど削平されていてよくわからないが、ゆるやか。住居跡に伴う小土坑が4基（ＳＫ242・243・249・250）検出されている。柱穴か。縄文時代前期後葉ＳＫ238～241を切る。覆土を掘り下げた段階で箱清水式の櫛描波状文の甕が出土したが、住居跡に同時期の遺物は他にない。よって、住居跡の形態なども勘案して、混入ないしは当該期の掘り込みを検出できなかったものと考えた。

遺　物　1・2竹管状工具で中央を刺突された円形浮文、貝殻状突起を貼付。胴部に連続爪形刺突文。3・4・6～12・14～19半截竹管状工具による並行沈線文。4・10・12円形浮文を貼付。5口縁部に貝殻状突起貼付、胴部に連続爪形刺突文。13結節浮線文。20横位回転縄文ＲＬ。21～25有孔浅鉢。ミガキないしナデ調整。26～30底部。26並行沈線文。27～29単節縄文。30ナデ調整。13下島式。それ以外は諸磯ｃ式。石鏃（第593図71）、石匙（第593図90）、スクレイパー（第594図98）出土。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ｃ式

ＳＢ10（第525・526図）　　位置　①Ｂ区Ⅲ－Ｕ－24・25

検　出　表土除去後、黒曜石片や縄文土器片が大量に集中して出土。精査したところローム層直上でやや歪んだ長方形の黒褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ部分的に堅緻な平坦面が検出され、かろうじて立ち上がりが残存していた。

構　造　南一北方向が最長の4.2×4.0mの歪んだ長方形。部分的に堅緻な貼床が残存する。現在の耕作による削平によって立ち上がりはほとんど残っていなかった。縄文時代前期中葉ＳＫ071を切る。

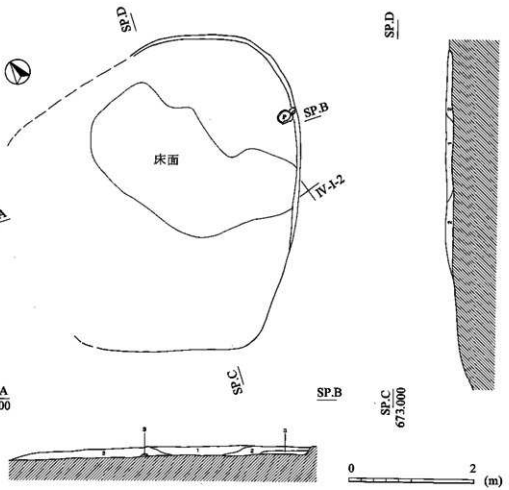
遺　物　1～5胎土に繊維を含む単節縄文。1横位の菱形構成。4口唇部に爪形刻み。石鏃（第592図16）、連続した微細な剥離のある剥片（第595図123・128）、スクレイパー（第596図135）出土。

時　期　縄文時代前期中葉　関山式か

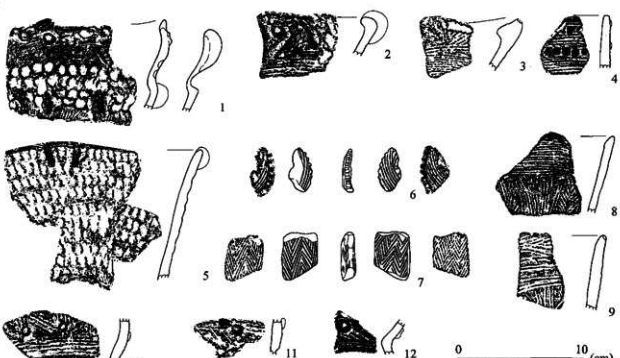
ＳＢ11　ＳＢ01の項目参照

ＳＢ12（第527図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－21

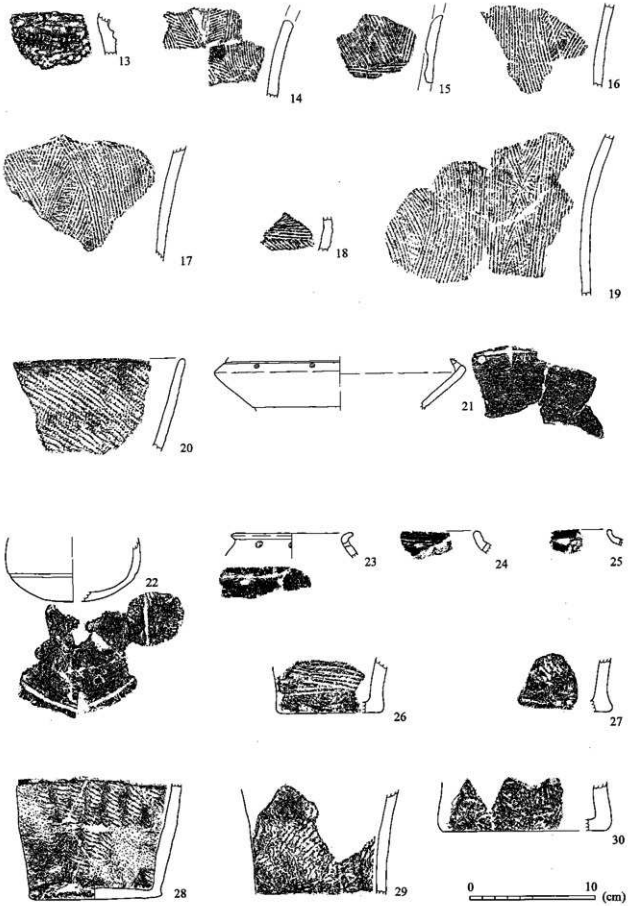
検　出　表土除去後、ローム層直上で略楕円形の黒褐色土の落ち込みが見られた。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ、平坦面と立ち上がりが検出された。また、周辺を精査したところ、水田造成のために平坦面は残存していなかったが、埋設土器が検出され、当初ＳＫ222と設定したが、住居跡覆土の



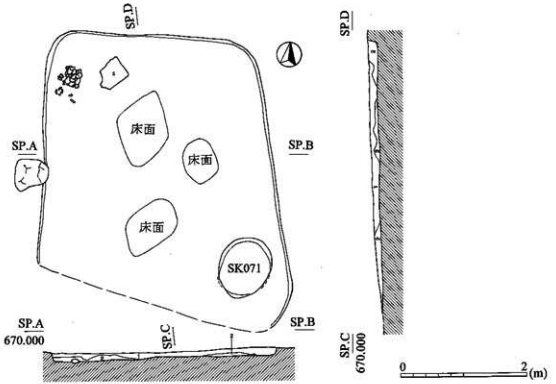
第522図　竪穴住居跡　ＳＢ09



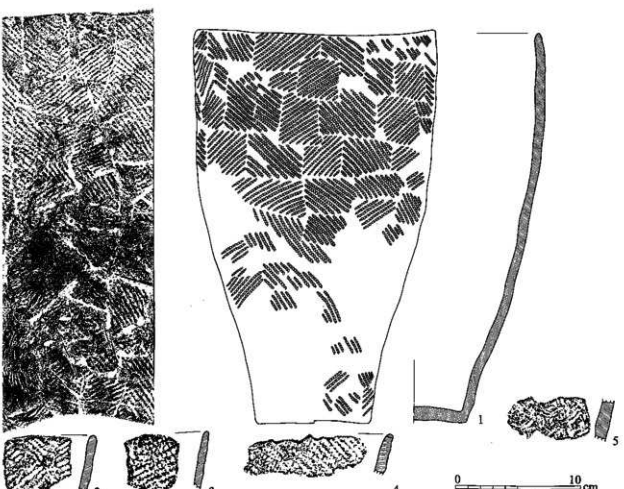
第523図　竪穴住居跡　ＳＢ09出土土器(1)



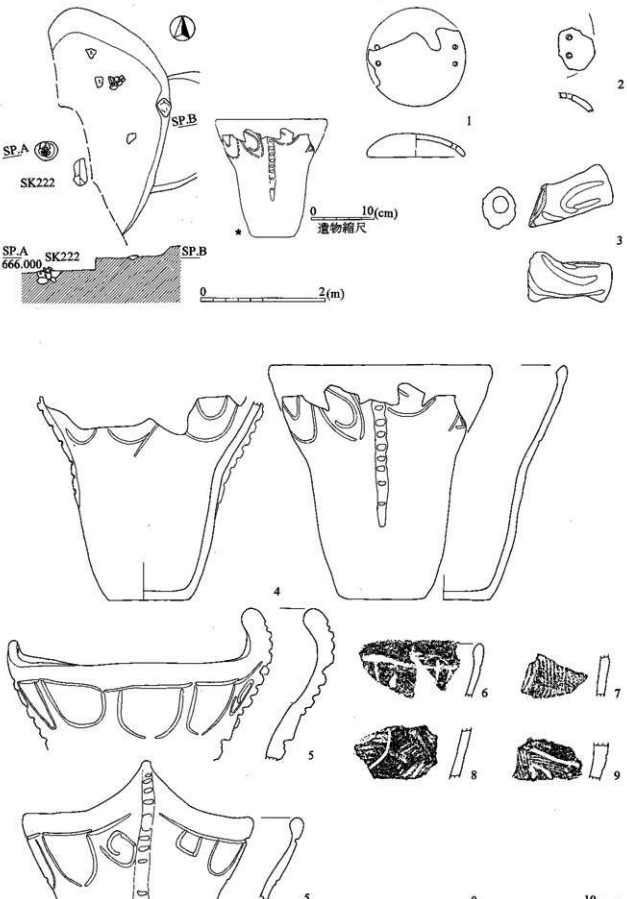
第524図　竪穴住居跡　SB09出土土器(2)



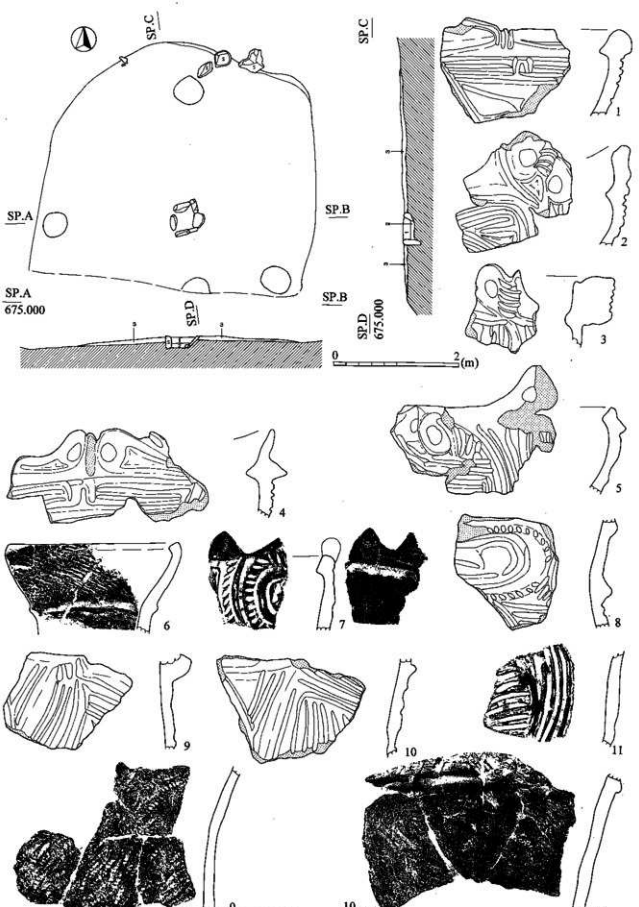
第525図　竪穴住居跡　ＳＢ10



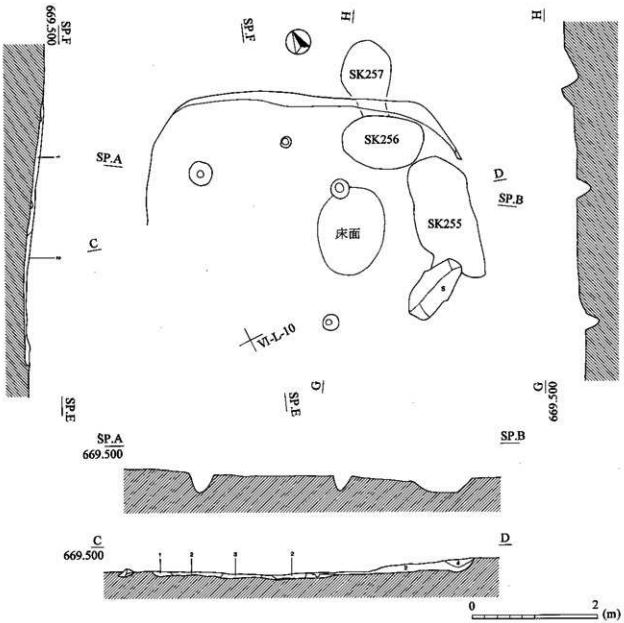
第526図　竪穴住居跡　ＳＢ10出土土器



第527図　竪穴住居跡　SB12・出土土器



第528図　竪穴住居跡　ＳＢ14・出土土器



第529図　竪穴住居跡　ＳＢ15

土器と同一接合したことから、本住居跡に伴うものと考えた。

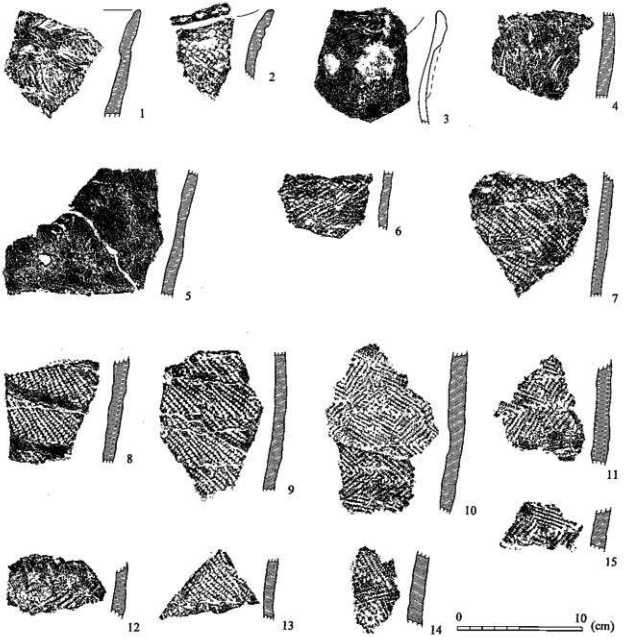
構　造　現存3.6×2.4ｍの略楕円形。南西半分は水田耕作により削平される。床面は平坦だが、明瞭ではない。立ち上がりはゆるやか。埋設土器は埋甕か。位置が中央よりで、かなり風化著しい。炉体土器かもしれない。

遺　物　1・2蓋。3注口土器注口部。沈線文施文。4・5口縁部を連続U字形に沈線で区画。波頂部から刻み目隆帯を垂下。頸部がゆるやかに屈曲。称名寺式の新相。6は4の口縁部破片か。7～9回転縄文ＬＲ施文の磨消縄文。石鏃（第592図4）、凹石（第598図182）出土。

時　期　縄文時代後期初頭　称名寺式並行

ＳＢ14（第528図）　　位置　③区Ⅵ－Ｒ－３・４

検　出　表土除去後、暗褐色土の広がりとその中央に石組みが露出。土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ、平坦面が検出され、さらに石組みが石囲炉であることがわかった。



第530図　竪穴住居跡　SB15出土土器

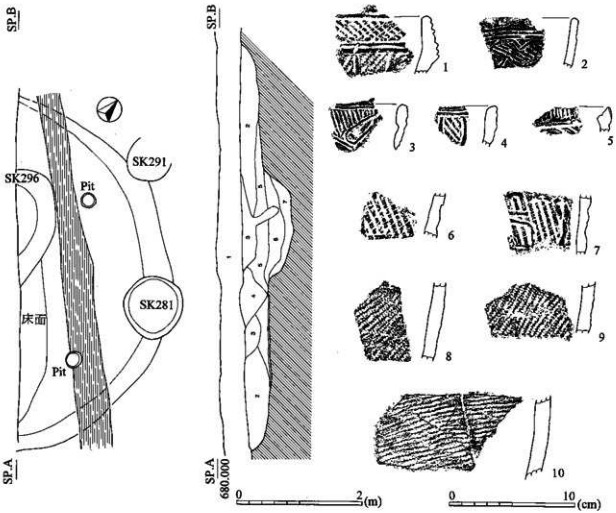
構　造　ほぼ南一北に長軸をもつ3.9×4.4mの略楕円形か。全体に削平が著しく立ち上がりはほとんどわからず、とくに南半分の削平が著しい。平坦面はかろうじて判明するが明確ではない。住居内の小土坑は深さが10cm前後と浅いが位置的には柱穴としてよいだろう。中央の石囲炉は南一北に長軸をもつ1辺0.5mの方形。

遺　物　1～5・7～11・13ヘラ状工具による沈線文。2～5連環状ないしコイル状突起。7・8隆帯上を連続ヘラ刻み。6無節Rを横位回転。頸部に断面三角形の隆帯貼付。12縦位回転縄文RL。13刻目隆帯貼付。6・12勝坂式か。それ以外は焼町土器の新相。石鏃（第592図54）、凹石（第599図187）出土。

時　期　縄文時代中期中葉　焼町土器

SB15（第529・530図）　　位置　②B区VI－L－4・5

検　出　表土除去後、ローム直上で土器の集中および炭化物、焼土が混在する褐色土の方形の落ち込みが



第531図　竪穴住居跡　SB17・出土土器

見られたので、軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げた。平坦面と北東側から立ち上がりが検出された。

構　造　北東一南西に軸をもつ現存5.2×4.2mの隅丸方形。床面は堅緻な部分が一部見られたが、南西半分、立ち上がりも北東側以外は削平が著しい。Pit1～3は径が0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る柱穴。縄文時代前期SK255に切られ、縄文時代前期SK256・257を切る。

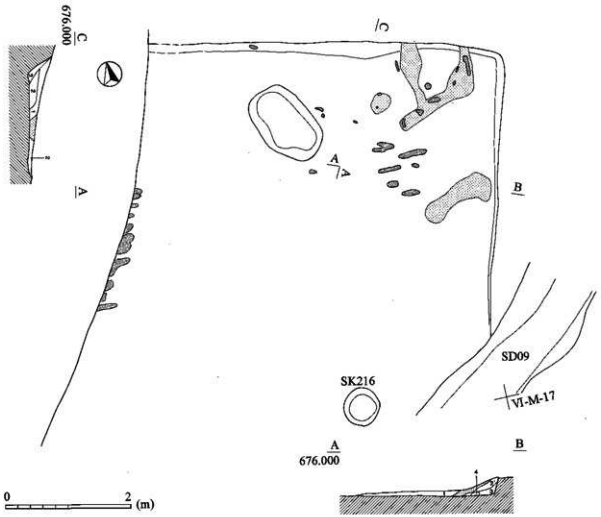
遺　物　1・2波状口縁で回転縄文施文。胎土に繊維含。2口唇端部刺突。3波頂部に隆帯貼付し肥厚させる。口唇に刻み。中越式。4・5ナデ調整、繊維含。6～15単節縄文施文。いずれも繊維含。石鏃（第592図21・38）出土。

時　期　縄文時代前期中葉

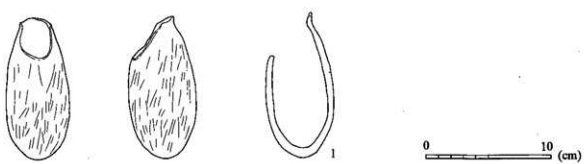
SB17（第531図）　　位置　④区Ⅵ－Ｈ－７・８

検　出　④区では表土除去前に、土層観察用トレンチを調査区北側と南側に設定し、縄文時代中期の土器がまとまって出土した。このトレンチおよび畑地灌漑用パイプを除去後の土層断面から平坦面と立ち上がりが認められた。

構　造　住居跡南西側は調査区外。北西一南東におそらく長軸がくる、現況5.7×2.4mの略楕円形。立ち



第532図　竪穴住居跡　ＳＢ13

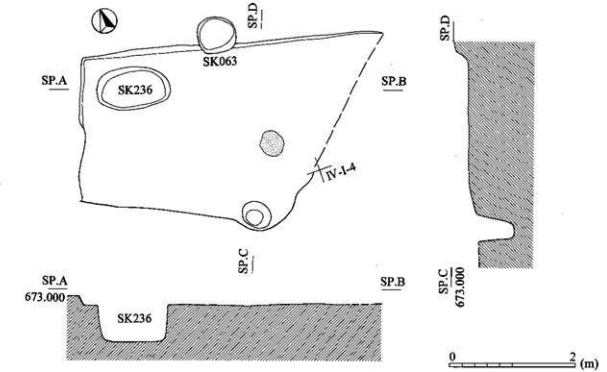


第533図　竪穴住居跡　ＳＢ13出土土器

上がりは明確だが、比較的ゆるやか。床面は中央部ほど堅緻。

切り合い　ＳＫ281・291に切られ、ＳＫ296を切る。これら土坑の詳細時期は不明だが、出土資料および土層から勘案して縄文時代か。

遺　物　１～７区画内を半截竹管状工具による並行沈線文で充塡。１胴部は横位回転縄文ＬＲ施文後、半截竹管状工具による並行沈線文で区画。８～10回転縄文ＬＲ施文。



第534図　竪穴住居跡　ＳＢ08

第535図　竪穴住居跡　ＳＢ08出土土器

時　期　縄文時代中期初頭　五領ヶ台式期

(2)　弥生時代

ＳＢ13（第532・533図）　　位置　③区Ⅵ－Ｍ－11・12

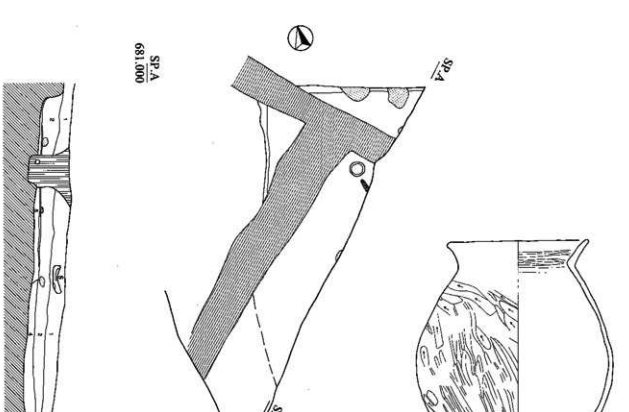
検　出　表土除去後、方形の褐色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し掘り下げ、平坦面と立ち上がりを検出。

構　造　北東－南西に軸をもつ現存6.0×6.0ｍの方形。立ち上がりは北東および南東辺は検出できたが、北西辺は道路に切られ、南西辺は削平著しく検出できなかった。床面は堅緻ではないが明瞭。南西辺は削平著しい。また、ＳＫ216からは赤彩高坏（第566図３）が出土。あるいはこの住居跡に伴うものかもしれない。炭化材が出土したが、いずれも土層は住居跡覆土上層（１層）で、床面から少し浮いており、この住居跡に伴うもの不明。

遺　物　１擦痕が残るミガキ調整の異形小型壺。

時　期　弥生時代後期か

(3)　古墳時代



第536図　竪穴住居跡　ＳＢ16・出土土器

ＳＢ08（第534・535図）　　位置　②Ａ区Ⅳ－Ｄ－23ほか

検　出　表土除去後、ローム層直上で黒色土の方形の落ち込みが見られた。南辺が石垣に切られていて、石垣を外したところ、土層断面から平坦面と立ち上がりが見られた。

構　造　立ち上がりは削平著しく、北辺しか検出できなかった。長軸を北西－南東にもつ１辺4.8ｍ以上の方形か。床面もそれほど明瞭ではない。土層観察による切り合い関係では、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑ＳＫ063に切られ、ほぼ同時期のＳＫ236を切る。

遺　物　１土師器小型の器台か。２土師器壺。いずれも内外面ミガキ調整の精製土器。古墳時代前期か。ただし本遺構を切るＳＫ063からは箱清水式系の櫛描波状文の甕が出土。

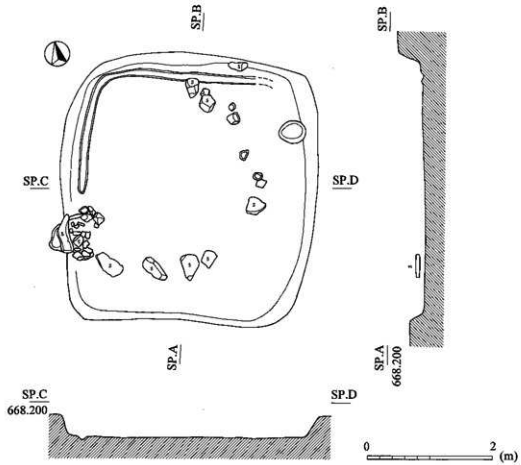
時　期　古墳時代前期前半

ＳＢ16（第536図）　　位置　④区Ⅵ－Ｈ－８・13

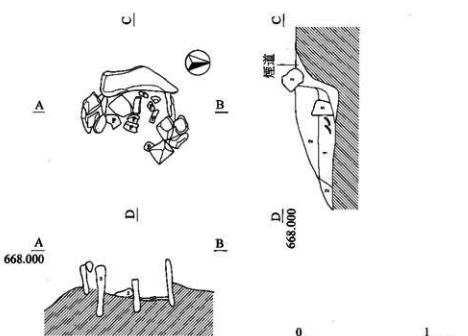
検　出　表土除去後、四角いコーナーをもつ暗褐色土の落ち込みが見られた。この落ち込みを切る畑地灌漑設備を取り除き、土層を観察したところ、平坦面と立ち上がりが認められた。

構　造　南－北に軸をもつ方形。床面はあまり明確ではない。カマドは検出されなかったが、北辺に焼土の集中が見られた。

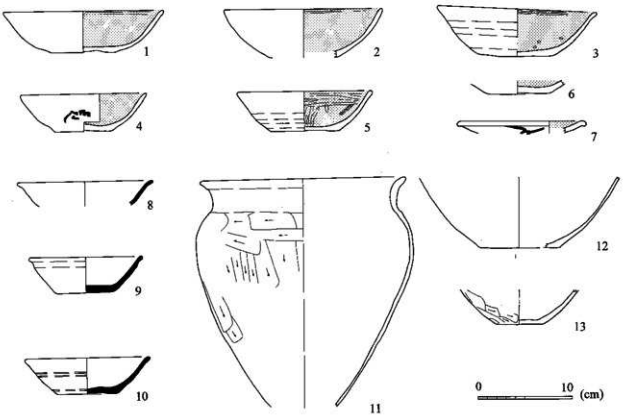
遺　物　１外面斜位ケズリ後、縦位ミガキ調整、内面横位ミガキ調整の土師器壺。



第537図　竪穴住居跡　ＳＢ04



第538図　竪穴住居跡　ＳＢ04カマド



第539図　竪穴住居跡　ＳＢ04出土土器

時　期　古墳時代後期か

(4)　古代

ＳＢ04（第537～539図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－13ほか

検　出　表土除去後、ローム層直上で方形の黒色土の落ち込みが見られた。軸に沿うように土層観察用のトレンチを設定し、掘り下げ、立ち上がりと平坦面を検出。

構　造　東一西に軸をもつ4.0ｍの方形。住居跡内の西辺と北辺を周溝が巡る。西辺中央やや南よりに石組みのカマド検出。カマド構築材の石材はむき出しになっていたと思われ、赤化ないしススけている。

遺　物　1～7黒色土器。1～5坏。7盤。4・7墨書土器。4「貞」。8～10須恵器坏。11～13土師器甕。11口縁「コ」字状胴部ヘラケズリ調整の「武蔵型」甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年7・8段階

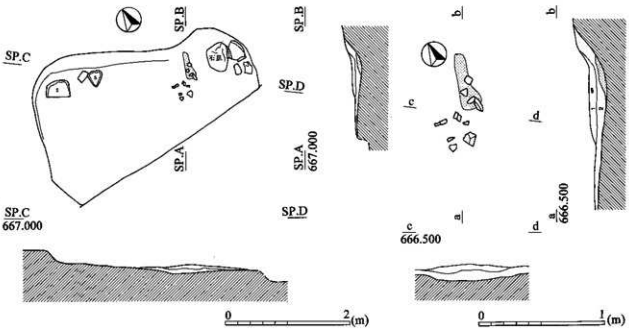
ＳＢ06（第540・541図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ｆ－3

検　出　表土除去後、焼土と炭化物の散在が見られた。さらに現水田石垣を除去したところ、土層断面から平坦面および立ち上がりが見られた。

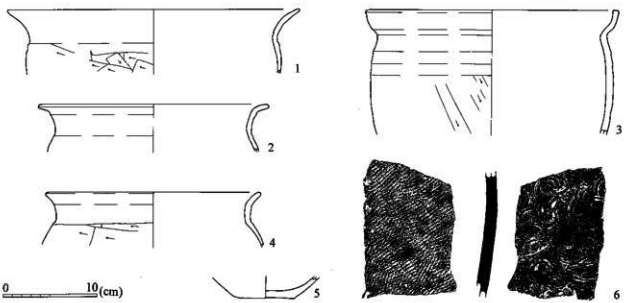
構　造　北東一南西に軸をもつ現存3.6×2.2ｍの方形。南側半分は水田造成にともない削平されている。床面は明瞭ではない。北東辺東隅に石組みのカマドの痕跡。縄文時代のものと考えられる石皿（第601図203）がカマド構築材に転用されていた。

遺　物　1～5土師器甕。2・4口縁「コ」字状の「武蔵型」甕。3ロクロ甕。6須恵器甕。

時　期　平安時代前期　佐久編年8・9段階



第540図　竪穴住居跡　ＳＢ06・カマド



第541図　竪穴住居跡　ＳＢ06出土土器

2　掘立柱建物跡

ＳＴ01（第542図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－23

検　出　表土除去後、ローム層直上で隅丸方形の小土坑が数基検出された。遺構として認識できたレベルは縄文時代の遺構よりやや高い位置であった。土層が共通し、組めるものを掘立柱建物跡とした。

構　造　北西―南東に長軸をもつ4.2×1.9ｍの１×１柱間。長軸は平安時代ＳＢ06に揃う。

遺　物　柱穴からは時期を決定できる遺物はない。周辺から土師器、須恵器、黒色土器が出土。

時　期　平安時代前期か

ＳＴ02（第543図）　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ｆ－３

検　出　ＳＴ01と同じ。

構　造　東一西に長軸をもつ3.6×1.1ｍの１×１柱間。北東隅の柱穴に方形の柱痕。長軸は平安時代ＳＢ04に揃う。

遺　物　ＳＴ01と同じ。

時　期　平安時代前期か

3　土坑と土器

(1)　縄文時代前期初頭から中葉（遺構図第544図、土器第545図）

ＳＫ001　　位置　①Ｂ区

個別遺構図なし。１～５単節縄文。繊維含。４・５コンパス文。

ＳＫ007　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－17

径1.0ｍの略円形。断面形は若干オーバーハング。含繊維の回転縄文。石鏃（第592図12）出土。

ＳＫ008　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－17

北東―南西に長軸をもつ1.3×1.0ｍの楕円形。６・７含繊維の回転縄文施文の口縁。

ＳＫ010　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－22

径1.1ｍの略円形。断面形は若干オーバーハング。８～11含繊維で回転縄文施文の口縁。８「Ｖ」字状の隆帯貼付。11ループ文。黒曜石石核（第595図131）出土。

ＳＫ048　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－16・21

径1.1ｍの略円形。断面形は若干オーバーハング。13ゆるやかな波状口縁口唇端部に回転縄文施文、胴部は羽状構成の単節縄文。

ＳＫ057　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ｆ－３

現存3.3×2.0ｍ。縄文時代中期後葉ＳＢ05に切られる。中央に焼土、炭集中あり。粘板岩？石核（第595図134）、敲石（第599図189）出土。

ＳＫ101　　位置　①Ｂ区Ⅳ－Ａ－18・19

北西―南東に長軸をもつ1.0×0.6ｍの楕円形。縄文時代前期中葉ＳＢ01を切る。14・15含繊維の回転縄